博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	金　恵珍（キム・ヘジン）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 343 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 8 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	動詞由来名詞を含む複合名詞に関する日韓対照研究 ―動作性と意味解釈を中心に―

Name	Kim, Hyejin
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 343
Date	March 8, 2023
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Contrastive Study of Deverbal Compound Nouns in Japanese and Korean: Focusing on the Activity and Semantic Interpretation

動詞由来名詞を含む複合名詞に関する
日韓対照研究
―動作性と意味解釈を中心に―

金　恵珍

（キム・ヘジン）

目次

表目次……iv

図目次……v

略語一覧……vi

Ⅰ 序論……1

第１章　はじめに……1

1．1　研究の目的……1

1．2　研究の対象と方法……3

1．3　研究の背景－ 動詞由来複合語の語形成……12

1．4　本論文の構成……16

第２章　動詞の名詞化と動作性……17

2．1　動詞の名詞化と動作性－ 動詞連用形名詞と動詞派生名詞……17

2．2　動作性の定義……21

2．2．1 語彙的な性質の側面から見た動作性……21

2．2．2 文法的な性質の側面から見た動作性……22

2．3　動作性名詞の判断基準……24

Ⅱ　本論……29

第３章　[V+N]型複合名詞の動作性……29

3．1　日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞に関する先行研究……31

3．2　日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞の動作性の有無……32

3．3　日本語[V+N]型複合名詞の意味……36

3．4　日本語[V+N]型複合名詞における文法的関係……41

3．5　日本語[V+N]型複合名詞の分類と動作性……44

3．6　3 章のまとめ……50

第４章　[N+V]型複合名詞の語構成と動作性……53

4．1　日本語[N+V]型複合名詞……54

4．1．1 日本語[N+V]型複合名詞に関する先行研究……54

4．1．2 日本語[N+V]型複合名詞の類型分類……59

4．2　文法的関係から見た日本語[N+V]型複合名詞の動作性……64

4．2．1 主述関係にある日本語[N+V]型複合名詞……64

4．2．2 目述関係にある日本語[N+V]型複合名詞……65

4．2．3 付述関係にある日本語[N+V]型複合名詞 ……66
4．3 韓国語[N+V]型複合名詞……68
4．3．1 韓国語[N+V]型複合名詞に関する先行研究 ……68
4．3．2 韓国語[N+V]型複合名詞の類型分類……70
4．4 文法的関係から見た韓国語[N+V]型複合名詞の動作性……76
4．4．1 目述関係にある韓国語[N+V]型複合名詞 ……76
4．4．2 付述関係にある韓国語[N+V]型複合名詞 ……80
4．5 日本語と韓国語[N+V]型複合名詞の語構成における対照……83
4．5．1 主述関係にある[N+V]型複合名詞……84
4．5．2 目述関係にある[N+V]型複合名詞……85
4．5．3 付述関係にある[N+V]型複合名詞……87
4．6 4章のまとめ……92

第5章 [N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム……94
5．1 動作性名詞の意味転移 ……95
5．1．1 日本語における動作性名詞の意味転移 ……95
5．1．2 韓国語における動作性名詞の意味転移 ……97
5．2 [N+V]型複合名詞の意味転移仮説……103
5．3 意味転移仮説の検証……111
5．3．1 全体意味転移仮説の検証 ……111
5．3．2 後項要素意味転移仮説の検証 ……115
5．3．3 日本語における意味転移仮説の適用可能性 ……122
5．4 日本語[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム ……124
5．4．1 日本語[N+V]型動作性名詞における意味転移……126
5．4．2 日本語[N+V]型非動作性名詞における意味解釈 ……130
5．5 韓国語[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム ……135
5．5．1 韓国語[N+V]型動作性名詞における意味転移……136
5．5．2 韓国語[N+V]型非動作性名詞における意味解釈 ……142
5．5．2．1 目述関係にある[N+V]型非動作性名詞における意味解釈……143
5．5．2．2 付述関係にある[N+V]型非動作性名詞における意味解釈……145
5．5．3 意味転移の傾向性と意味転移が不可能な複合名詞……150
5．6 [N+V]型複合名詞の意味解釈と語彙概念構造 ……155
5．7 5章のまとめ……165

第6章 その他[Pref+V][Ad+V][A+V]型複合名詞の動作性……169
6．1 日本語と韓国語の[Pref+V]型複合名詞……173
6．2 日本語と韓国語の[Ad+V]型複合名詞……176
6．3 日本語と韓国語の[A+V]型複合名詞……178
6．4 6章のまとめ……180

Ⅲ 結論……183

第7章 おわりに ……183
7．1 研究成果 ……183

7．1．1 日本語と韓国語における動詞由来複合名詞の動作性 ……183
7．1．2 意味転移仮説と[N+V]型複合名詞の分析 ……187
7．1．3 動詞由来複合名詞の動作性の条件 ……189
7．1．4 動詞由来複合名詞の意味解釈のメカニズム ……193
7．2 本論文の意義および今後の課題……199

参考文献 …… 202
〈日本語で書かれた文献〉 ……202
〈韓国語で書かれた文献〉 ……205
〈英語で書かれた文献〉 ……208
〈Web 資料〉 ……209

【付録】 …… 212

謝辞…… 219

表目次

表 1. 両言語における「文の成分」の分類 9
表 2. 名詞の意味分類 11
表 3. 語根複合語と動詞由来複合語の例 13
表 4. 動詞由来複合名詞「モノ」 38
表 5. [V+N]型複合名詞における動作性の判断基準表 47
表 6. 日本語[V+N]型複合名詞の分類結果 49
表 7. [V+N]型複合名詞の動作性の条件 51
表 8. 日本語の[N+V]型複合名詞の分類 62
表 9. 日本語の[N+V]型複合名詞の分類結果の集計 63
表 10. 韓国語の[N+V]型複合名詞の分類 73
表 11. 韓国語の[N+V]型複合名詞の分類結果の集計 75
表 12. 意味転移仮説の長所と短所 108
表 13. 日本語[N+V]型動作性名詞の多義的意味分類 126
表 14. 韓国語[N+V]型動作性名詞の多義的意味分類 138
表 15. 日本語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果 170
表 16. 日本語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果の集計 171
表 17. 韓国語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果 172
表 18. 韓国語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果の集計 172
表 19. [N+V]型複合名詞における意味転移仮説 188
表 20. [N+V]型複合名詞の意味分類と意味解釈のメカニズム 194

図目次

図 1. 動作性名詞の意味 22

図 2. 「着物」における意味の特殊化 39

図 3. 意味転移の可否の判断 40

図 4. 「手作り」の意味転移 95

図 5. 「잡이（capi）」を後項要素とする複合名詞の意味関係 147

略語一覧

ABL	ablative（奪格）
ACC	accusative（対格）
ADN	adnominal form（連体形）
ADV	adverbial form（連用形）
ALL	allative（方向格）
COND	conditional（条件）
COM	comitative（共同格）
COMP	complementizer（補文標識）
DAT	dative-locative（与位格）
DECL	declarative（叙述）
GEN	genitive（属格）
HAB	habitual（習慣）
HON	honorific（尊敬）
INST	instrumental（具格）
LOC	locative（位格）
NEG	negative（否定）
NMLZ	nominalizer（名詞化）
NOM	nominative（主格）
NPST	non-past（非過去）
OBLG	obligation（義務）
PN	proper noun（固有名詞）
PST	past（過去）
QUOT	quotative（引用）
SIM	simultaneous（同時）
TOP	topic（主題）
-	接辞・接語境界
:	形態素境界非表示
＊	不自然
？	やや不自然

Ⅰ　序論

第1章

はじめに

1．1　研究の目的

本稿では、語構成の観点から、日本語と韓国語[1]の複合名詞[2]が帯びる動作性について考察し、動作性を帯びることができる意味・文法的条件を明らかにすることを目的とする.

日本語と韓国語において、動詞に由来する名詞（動詞の名詞形）を含む複合名詞（以下「動詞由来名詞を含む複合名詞」または「動詞由来複合名詞」と呼ぶ）は、同じ構成である場合にも、動作性に相違が見られる. 例えば、韓国語では[V+N]〔動詞の名詞形＋名詞〕型[3]（例：디딤돌[titim-tol[4]；踏み-石]）の複合名詞は、機能動詞「하다（hata；す

1　本稿における「韓国語」は、韓国（大韓民国）で用いられている言語を指す. 本稿では基本的に北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）で用いられている言語（以下「北朝鮮語」と呼ぶ）は対象としないが. 必要に応じて、北朝鮮語の例を参照することもある.

2　本稿において「複合名詞（complex noun）」は、「派生名詞（derivative noun）」と「合成名詞（compound noun）」を含む上位概念として用いる. 合成名詞を上位概念とすることがより一般的ではあるが、学者によっては複合名詞を上位概念とすることもある. とりわけ韓国語学では複合名詞を上位概念とする場合が多い. 本稿で対象とする複合名詞の中には、派生名詞よりは合成名詞の例が遥かに多く、特に韓国語の場合は派生名詞であるか合成名詞であるかの判断が難しい例が多い. 派生名詞と合成名詞の区別は本稿の論旨と関係ないものの、合成名詞を上位概念とした場合は韓国語の例において誤解を招くおそれがある. そこで、本稿では韓国語学で一般的に派生名詞と合成名詞の上位概念として用いられる「複合名詞」という用語を使用する.

3　動詞由来複合名詞におけるタイプの分類については1.2で後述する.

4　韓国語のローマ字転写はイェール式（Yale romanization）を用いる. 転写は丸括弧あるいは角括弧の中に示し、日本語訳を付ける場合はセミコロンの右に示す. 直訳する必要がある場合は左に“lit. ”を付け、その意訳は矢印の右に示す. ただし、韓国語と日本語の意味と語構成が一致する場合は直訳は省略する.

る)」と共起することができない. それに対して、日本語における[V+N]〔動詞の連用形＋名詞〕型(例:忘れ物)の複合名詞の中には機能動詞「する」と共起する例が多数存在する. そもそも機能動詞は動詞本来の意味が薄く(村木 1985)[5]、機能動詞自体は格成分を取ることができない(Grimshaw & Mester 1988) [6]. その代わりに、機能動詞に先行する名詞が実質的な意味を持ち、格成分を取ることができるため、機能動詞とむすびつく名詞は「広い意味での動作性の名詞」(村木 1985:19)と考えられる. このように、名詞でありながら動詞的な性質を持つ名詞は「動作性名詞」と呼ばれる[7]. すなわち、両言語の[V+N]型複合名詞において機能動詞との共起の有無に相違が見られるのは、この動作性の観点から説明が可能である.

一方、韓国語の場合においても、[N+V]〔名詞＋動詞の名詞形〕型の複合名詞の中には「달맞이(tal-maci;lit. 月-迎え→月見)」「눈싸움(nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦)」「글짓기(kul-ciski;lit. 文-作り→作文)」のように動作性を持つと考えられる例が存在する. 同様に、日本語においても[N+V]〔名詞＋動詞の連用形〕型複合名詞の中には、「味付け」「子育て」「船積み」のように動作性を帯びる例が多数存在する. しかし、同様の形式の[N+V]型複合名詞でありながらも、動作性を持たないものも存在する. 例えば、韓国語の例としては「칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)」「통조림(thong-colim;lit. 缶-煮→缶詰め)」「겉보기(ket-poki;lit. 表-見→見かけ)」など、日本語の例としては「羊飼い」「手拭い」「手掛かり」などがある.

このように、日本語と韓国語では同じ形式の複合名詞である場合でも、動作性において相違が見られる. この動作性の相違は、語が形成されるプロセスの中で何らかの理由で保持されたり、喪失したりすることによって発生すると考えられる. なお、複合語の内部においても、文法的・意味的関係が存在するが、これは並列関係、修飾関係、項関係の3 つに分類することができる(影山 1993:193-194). この中でも、とりわけ項関係

---

5 村木(1985:19)では機能動詞を「実質的な意味が希薄であるため、実質的意味を名詞にあずけて、みずからはもっぱら文法的な機能をはたす動詞」と定義している.

6 Grimshaw & Mester(1988:210-211)では日本語の機能動詞「する」を軽動詞(light verb)とし、軽動詞は項構造を持たないが、軽動詞は対格を付与することができると主張している(The Verb suru is not a θ-assigner, but it does assign accusative case and it does carry inflection.)

7 「動作性名詞」よりは「動詞性名詞(verbal noun)」という用語が一般的であるが、「動詞性名詞」は、動詞から名詞に転じた転成名詞および動名詞までを含む広義の意味でも用いることから、混乱を避けるために、本稿では使用しない.

(argument relation)にある複合名詞に動作性名詞が多く見られる(味付け, 山登りなど). つまり、複合名詞における構成要素間の関係と動作性とは、深い関連性があることが予想される.

しかし、項関係にある複合名詞がすべて動作性名詞であるわけではなく、さらには、動作性名詞でありながら物や人を表す実体性名詞[8]にもなり得る例が存在する. 例えば、「風除け/바람막이(palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け)」は「風を除けること」という動作性名詞にも「風を除けるもの」という物名詞にもなり得る. このことから、動作性名詞から意味転移([+物]または[+人])により動作性が失われる可能性が考えられる.

以上の例から分かるように、複合名詞における構成要素間の文法的関係(文法的条件)ならびに意味転移(意味的条件)と動作性との関係を中心に調べることにより、日本語と韓国語の複合名詞が帯びる動作性の正体を明らかにすることができると思われる. したがって、本稿では両言語における動詞由来複合名詞を文法的関係および意味転移の観点から分析していくことにする.

1. 2 研究の対象と方法

本稿では、日本語と韓国語の複合名詞の中でも動詞の名詞形(つまり、日本語の場合は「動詞連用形」、韓国語の場合は「動詞語基[9]+名詞形接尾辞이(i), ロ/음(m/um), 기(ki)[10]」)を構成要素とする複合名詞を研究対象とする. この研究対象とする複合名詞は、基本的に日本語は松下(2011)の『日本語を読むための語彙データベース(VDRJ)

---

8 本稿では、物や人のような具体名詞、すなわち実体性(substantiality)を持つ名詞のことを「実体性名詞」と呼ぶ. ソ・ジョンス(1994:390)は名詞をその意味により、大きく「実体性名詞」(substantial noun)と「非実体性名詞」(insubstantial noun)に分けているが、本稿においてもこの意味分類に従う. 本稿における名詞の意味分類について詳しくは、この節(1. 2)の最後に後述する.

9 語基(base)は、形態論において、単語の中心部となる要素であり、一般的に語幹(stem)と語根(root)を併せて指す際に用いられる用語である(イ・イクソプ & チェ・ワン 1999:60-63). 語根は語尾と直接結合ができないが、語幹は語尾と直接結合できるため、語幹は語構成(word formation)で用いる用語ではない. 本稿では、語構成において、語根とは区別し、語根に派生接辞が付いたものまでも含めて指すため、語基という用語を用いる.

10 韓国語における名詞形接尾辞「이(i), ロ/음(m/um), 기(ki)」については、2.1 の「動詞の名詞化と動作性」で後述する. 語彙的に名詞化する接尾辞を研究者によっては、「名詞派生接尾辞(명사파생접미사)」ないし「名詞化接尾辞」とも呼ぶが、本稿では「名詞形接尾辞」という用語を用いる. そして、構文的に名詞化する語尾「ロ/음(m/um), 기(ki)」は、「名詞転成語尾(명사전성어미)」ないし「名詞化語尾」とも呼ばれるが、本稿では「名詞形語尾」と呼ぶことにする.

ver.1.1（研究用）重要度順語彙リスト 60894 語』、韓国語は国立国語院(編)（2012）の『韓国語基礎辞典（한국어기초사전）』[11]（約 5 万語）の見出し語から抽出する．基本的には、これらの資料から抽出した複合名詞を研究対象とするが、必要によっては他の資料（論文や辞典）も参考にする[12]．論文に関しては、研究対象を定める必要がある場合などに、そのタイプの複合名詞に関連する先行研究を参考にする（出典は各章で明記する）．辞典に関しては、そのタイプに該当する複合名詞の例が少なかったり関連する他の例を調べたりする必要がある場合に、例を確保するために利用する．日本語の場合は松村(編)（2006）の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕および小学館国語辞典編集部(編)（2012）の『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕を参考にし、韓国語の場合は国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』および国立国語院(編)（2016）の『ウリマルセム（우리말샘）』を参考とする．

動詞由来名詞（動詞の名詞形）を含む複合名詞は、大きく 5 つのタイプに分類できる[13]．

① V+N〔動詞の名詞形+名詞〕

日本語：回り道，韓国語：갈림길（kallim-kil；分かれ-道）

② N+V〔名詞+動詞の名詞形〕

日本語：宝探し，子連れ

---

11 『韓国語基礎辞典』は、外国人学習者のための学習者辞典であるが、韓国語母語話者の実際の言語生活の使用実態を反映した語彙を見出し語として選定しているため、研究対象として適切であると判断した．実際の言語生活であまり使わない語彙の場合は、構文的特徴による動作性名詞の判断が難しいためである．

12 松下（2011）の『日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）ver.1.1（研究用）重要度順語彙リスト 60894 語』や国立国語院(編)（2012）の『韓国語基礎辞典』以外の資料から複合名詞の例を収集する場合は、各章で別途示す．

13 呉（2012）では日本語の動詞連用形を構成素とする複合名詞を A~G 群（7 類型）に分類している．羅（2013）は日韓対照の観点から、日本語の動詞連用形を含む複合語を 9 類型に分類している．本稿においては、[V+V]〔動詞+動詞の名詞形〕型や動作性をそもそも帯びない類型は除外し、5 つのタイプに再分類した．[V+V]型（日本語の例：乗り換え，韓国語の例：즐겨찾기[culkyechacki；lit. 楽しんで探し→ブックマーク]）は、複合名詞というより複合動詞の問題と深く関わるため、本稿では対象外とし、今後の課題としない．一方、「食べっぷり」「박음질（pak um-cil；lit. 縫い-こと→返し縫い）」のような「[V+Suf]〔動詞の名詞形＋接尾辞〕」型は、特定の接尾辞が付く場合に動作性を帯びるが、これは単に接尾辞による動作性であるため、本稿では対象外とする．ただし、動詞由来名詞が接尾辞化した例（日本語：子連れ，韓国語：감옥살이[kamok-sali；監獄-暮らし]）は、[N+V]型として扱う．

韓国語：보물찾기（pomwul-chacki；宝-探し），감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし）

③　Pref+V〔接頭辞+動詞の名詞形〕

日本語：初売り，韓国語：헛걸음（hes-kelum；lit. 無駄-歩き→無駄足）

④　Ad+V〔副詞+動詞の名詞形〕

日本語：ちょっと見，韓国語：빨리감기（ppalli-kamki；lit. 早く-巻き→早送り）

⑤　A+V〔形容詞+動詞の名詞形〕

日本語：早食い，韓国語：어슷썰기（esus-sselki；lit. 斜めぎみ-切り→斜めに切ること）

本稿は動作性を中心に動詞由来複合名詞を考察するため、動作性を帯びない類型ならびに複合動詞に由来する[V+V]〔動詞+動詞の名詞形〕型は除外し、研究対象を以上の 5 つのタイプに限定する．そしてこの 5 つのタイプを基に、日本語と韓国語の動詞由来複合名詞を、動作性を帯びるもの（動作性名詞）と動作性をそもそも帯びないもの（非動作性名詞[14]）に大別してから、複合名詞の内部における意味・文法的関係を考慮し、さらに類型分類する．類型分類の際は、一定の基準（派生語と合成語の判断ならびに項関係にあるか否かの判断など）を設けるため、各言語の辞書を参考とする．

まず、派生語と合成語の判断のため、日本語の場合は松村(編)（2006）の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕および小学館国語辞典編集部(編)（2012）の『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕を参考にし、韓国語の場合は国立国語院(編)（1999）『標準国語大辞典（표준국어대사전）』を参考とする．例えば派生語と合成語の判断に困る例として、日本語「子連れ」や韓国語「감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし）」が挙げられる．日本語「子連れ」の後項要素である「連れ」は、日本語辞典（『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』）で「接尾辞」として登録されている．したがって、本稿では「子連れ」を派生語と見なす．韓国語の代表的な辞典である国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』では合成語と派生語をハイフンで示しており、韓国語「감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし）」は「감옥-살이（kamok-sali）」で表記している．そして、後項要素の「-살이（sali；暮

14　本稿では「非動作性名詞」を動作性名詞の対義語として用いられる．つまり、そもそも動作性を帯びることができない名詞を指すため、主に「有生名詞（人名詞）」や「無生名詞（物名詞）」などがここに属する．しかし、動作性名詞の中には、動作性名詞でありながら、「有生名詞（人名詞）」や「無生名詞（物名詞）」としても用いられる例（5 章で詳細に述べる）が存在するが、このような例は本稿では非動作性名詞として扱わない．つまり、本稿においては、「非動作性名詞」を単なる具体物を指す実体性名詞とは区別し、動作性名詞とは共存しない実体性名詞、つまり実体性のみを表す名詞に限定する．

らし)」は、韓国語辞典(『標準国語大辞典』)で接尾辞として登録されているため、本稿では「감옥살이(kamok-sali;監獄-暮らし)」を派生語と見なす.

次に、複合名詞が項関係にあるか否かの判断のため、前項要素と後項要素の意味関係を考慮した上で、日本語は小泉他(編)(1989)『日本語基本動詞用法辞典』の動詞の格フレームを参考にし、韓国語は国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典(표준국어대사전)』および国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』の動詞の格フレームを参考とする. 例えば、日本語の「田植え」「秋植え」の場合、小泉他(編)(1989:53)『日本語基本動詞用法辞典』によると後項動詞の「植える」の格フレーム(文型)は、①「[人]{が/は}[所]に[植物]を植える」②「[人]{が/は}[物]を植える」③「[人]{が/は}[人・身体・生き物・所]に[物]を植える」である. 「田植え」の意味(水田に稲の苗を植えること)から前項要素(田)は「所」という意味に解釈できるため、この時の格フレームは①「[人]{が/は}[所]に[植物]を植える」に該当する. したがって、本稿では「田植え」を項関係にあると見なす. しかし、「秋植え」はその意味(秋に植えること)から以上の「植える」の格フレームが適用できないため、項関係でないと見なす. そして、韓国語の「감옥살이(kamok-sali;監獄-暮らし)」や「종살이(cong-sali;lit. 召し使い-暮らし→召し使いとして暮らすこと)」の場合、韓国語辞典(『標準国語大辞典』および『韓国語基礎辞典』)によると後項動詞の「살다(salta;暮らす・住む・生きる)」の格フレームは、①「N(생물)이 살다(N(生き物)ガ生きる)」②「N이 N(장소)에/에서 살다(N ガ N(場所)ニ/デ住む・暮らす)」③「N 이 N(직분・신분/삶)을 살다(N ガ N(職分・身分/生活)ヲ暮らす・生きる)」④「N이 N(사람)과 살다(N ガ N(人)ト暮らす・住む)」である. 「감옥살이(kamok-sali;監獄-暮らし)」の意味(監獄で暮らすこと)から前項要素(감옥[kamok;監獄])は「場所」として解釈されるため、この時の格フレームは②「N 이 N(장소)에/에서 살다(N ガ N(場所)ニ/デ住む・暮らす)」に該当する. したがって、本稿で「감옥살이(kamok-sali;監獄-暮らし)」は項関係にあると見なす. 一方、「종살이(cong-sali;lit. 召し使い-暮らし→召し使いとして暮らすこと)」は「종을 살다(lit. 召し使いを暮らす)」とは言えず、③「N이 N(직분・신분/삶)을 살다(N ガ N(職分・身分/生活)ヲ暮らす・生きる)」という格フレームが適用できないため、項関係でないと見なす.

しかし、ウェブ版の辞典は更新や修正も随時行われる. まして、辞典は派生語と合成語の区分や項関係の判断の絶対的な基準にはならない. このような分類はあくまでも、統一された基準により、動詞由来複合名詞を考察するためである.

一方、影山（1993：193-194）は、複合語の内部に見られる文法的・意味的関係を並列関係、修飾関係、項関係の 3 つに分類している．並列関係は「対等ないし対照の関係にある表現を列挙するもの」であり、修飾関係は「名詞+名詞」ないし「形容詞+名詞」型の一次複合語（もしくは語根複合語）と呼ばれる複合名詞に典型的に見られる．項関係は「名詞が述語（動詞，動名詞，形容詞，形容名詞）に対して主語や目的語の文法的関係を結ぶ」ものであり、この関係にある複合語は二次複合語（もしくは動詞由来複合語）と呼ばれる．

動詞由来名詞を含む複合名詞の内部における文法的・意味的関係は、おおよそ修飾関係および項関係のみが見られる．そのため、本稿では修飾関係および項関係にある複合名詞を中心に、動作性名詞と非動作性名詞の例を考察する．

しかし、日本語文法と韓国語文法において、文の成分の分類は異なる．日本語文法（学校文法）では、文の成分をおおよそ「主語，述語，修飾語（連体修飾語・連用修飾語），独立語，接続語」の 5 つに分類している[15]．一方、韓国語文法では、文の成分をおおよそ「主語（주어），述語（서술어），目的語（목적어），冠形語（관형어；連体修飾語），副詞語（부사어；付加語；adjunct/adverbial）[16]，補語（보어）[17]，独立語（독립어）」の 7 つに分類している．そこで、両言語を対照するためには、文の成分の分類を統一する必要がある．

両言語において一致しない文の成分は、日本語の「修飾語（連体修飾語・連用修飾語），接続語」と韓国語の「目的語，冠形語，副詞語，補語」である．まず、日本語の「修飾語」は「目的語」と「連体修飾語」および「連用修飾語」をすべて含む概念であり、分類がやや粗い．そのため、本稿では、日本語の「修飾語（連体修飾語・連用修飾語）」を韓国語の分類に従い「目的語，副詞語，冠形語」に細分化する．「目的語」は一般的な言語学の用語であり、日本語学においてもよく用いられる用語であるため、本稿でもそのま

15 日本の国語教育で使用されている学校文法は、橋本文法をベースとしている．中学校国語教科書によって多少差異はあるが、すべての教科書に共通して文の成分を主に「主語，述語，修飾語，独立語，接続語」に分類している（中学校教科書は、光村図書『国語』、東京書籍『新編新しい国語』、学校図書『中学校国語』、三省堂『現代の国語』を参照）．

16 韓国語学では、述語を修飾する機能を果たす文の成分を「副詞語（부사어）」と言い、通常述語が随意的に要求するものを指す．一方、述語が必須要素として要求するものは、「必須的副詞語（필수적 부사어）」と称する（ナム・ギシム & コ・ヨングン 1993：271-279）．

17 韓国語学で「補語」は「N 가 되다（N になる）」および「N 가 아니다（N ではない）」の N に位置する文の成分を言う．

ま「目的語」という用語を用いる. しかしながら、「副詞語」と「冠形語」は一般的な言語学とは異なる韓国語学で用いられる用語であるため、混乱を避けるため、本稿では「副詞語」を「付加語」と命名し、「冠形語」を「連体修飾語」と命名する. つまり、日本語の「連用修飾語」のうち、「目的語」を除外した成分が「付加語」となるわけである. 次に、日本語の「接続語」は複合名詞の内部においては殆ど見られない成分であり、韓国語文法では「副詞語」と分類されるため、「付加語」に入れる. なお、韓国語の「補語」は複合名詞の内部においては見られない成分であり、日本語の「連用修飾語」に属する概念であるため、便宜上「付加語」とする[18]. したがって、本稿においては、両言語の文の成分を統一して「主語, 述語, 目的語, 付加語, 連体修飾語, 独立語」の 6 つに分類する. これらをまとめたものが次の表 1 である.

18 韓国語学での「補語」は、日本語学で言う「補語」とは全く異なる概念であるため、本稿では使用しない. その代わり、本稿では「付加語」を韓国語学での「補語」および「副詞語(부사어)」、そして日本語学での「(目的語を除外した)連用修飾語」を含む概念として用いる. したがって、本稿で言う「付加語」は、英語学で言う「付加詞(adjunct)」とは異なるものであり、連用修飾語のうち、目的語を除外した必須成分(必須補語)をも含むより広い概念となる. ただし、通常「付加語」は随意成分(副次補語)を指すため、本稿ではこれと区別し、必須成分である場合は「必須的付加語」と呼ぶ. なお、混同を避けるため、英語学で言う随意成分の「付加語/付加詞」を指す場合は「付加語」ではなく「付加詞」を用いて、「付加詞(adjunct)」のように英語の表記を併記する.

表 1. 両言語における「文の成分」の分類

<table>
<tr><th>日本語文法の「文の成分」</th><th>韓国語文法の「文の成分」</th><th>本稿の「文の成分」</th></tr>
<tr><td>主語</td><td>主語(주어)</td><td>主語</td></tr>
<tr><td>述語</td><td>述語(서술어)</td><td>述語</td></tr>
<tr><td>修飾語 – 連体修飾語</td><td>冠形語(관형어)</td><td>連体修飾語</td></tr>
<tr><td>– 連用修飾語</td><td>目的語(목적어)</td><td>目的語</td></tr>
<tr><td rowspan="3"></td><td>補語(보어)</td><td rowspan="3">付加語</td></tr>
<tr><td rowspan="2">副詞語(부사어)</td></tr>
<tr><td>接続語</td></tr>
<tr><td>独立語</td><td>独立語(독립어)</td><td>独立語</td></tr>
</table>

さらに、両言語における複合名詞の意味を考察するために、同一の意味分類を設定する必要がある. そこで、本稿ではソ・ジョンス(1994)の名詞の意味分類を参考にし、「有生名詞」「無生名詞」「時間名詞」「場所名詞」「抽象名詞」「デキゴト名詞」に分類する. ソ・ジョンス(1994:390)は名詞の意味分類を以下のようにしている.

(1) a. 実体性名詞

①時間名詞: 열 시(10 時), 아침(朝), 낮(昼), 삼월(三月), 다음달(来月), 일요일(日曜日), 설날(お正月), 생일(誕生日)

②場所名詞: 운동장(運動場), 마당(庭), 길(道), 들(野原), 직장(職場), 농토(農地), 산(山), 바다(海), 앞(前), 뒤(後ろ)

③その他の人物・物

<人物> 여자(女子), 남자(男子), 아이(子供), 어른(大人), 사장(社長), 학생(学生), 선생(先生), 제자(弟子)

<動物> 개(犬), 소(牛), 돼지(豚), 말(馬), 고양이(猫), 원숭이(猿), 호랑이(虎), 사자(獅子)

<植物> 풀(草), 소나무(松の木), 꽃(花), 강냉이(トウモロコシ), 벼(稲), 밤(栗), 채소(野菜), 미역(ワカメ), 김(海苔)

<物体/物質> 책상(机), 자동차(自動車), 집(家), 기계(機械), 물(水), 공기(空気), 돌(石), 흙(土)

<一部の抽象名詞> 자유(自由), 도덕(道徳), 정신(精神), 심리(心理), 주관(主観), 관념(観念)

b. 非実体性名詞

①行動性:동작(動作), 경주(競走), 씨름(相撲), 뜀뛰기(跳躍), 절(お辞儀), 굿(お祓い), 노래(歌), 노름(ばくち), 다짐(誓い), 칼부림(刃傷沙汰), 손질(手入れ), 현대화(現代化), 기계화(機械化), 산업화(産業化)

②過程性:변화(変化), 사망(死亡), 부패(腐敗), 부상(負傷), 유출(流出), 연소(燃焼), 성장(成長), 발달(発達), 진보(進歩), 진화(進化)

③精神作用:생각(考え), 신앙(信仰), 사랑(愛), 존경(尊敬), 감각(感覚), 기억(記憶), 연구(研究)

④状態性:평온(平穏), 소란(騒乱), 평탄(平坦), 건강(健康), 가난(貧乏), 얌전(おとなしいふり), 점잔(気取り), 정직(正直), 온순(温順), 건실(堅実), 성실(誠実), 미안(恐縮), 다정(多情), 열심(一生懸命)

以上の名詞の意味分類を参考にし、実体性名詞の<人物><動物><植物>を「有生名詞(または人名詞)」、<物体/物質>を「無生名詞(または物名詞)」とし、<一部の抽象名詞>に該当する名詞を「抽象名詞」とする. そして、「状態, 行為, 過程, 精神作用」などを表す非実体性名詞を通称する用語として「デキゴト名詞」(影山 1999)[19]という用語を用いる[20].

本稿における名詞の意味分類を以下の表 2 に示す. これは、ソ・ジョンス(1994:390)の名詞の意味分類を参考にし、本稿において再分類したものである.

19 影山(1999)は、「デキゴト名詞」と「モノ名詞」を上位概念として想定し、カタカナで表記している. つまり、「出来事名詞」は「デキゴト名詞」の下位分類となり、「物名詞」は「モノ名詞」の下位分類となる. 本稿においても、主にこの表記に従うが、混同を避けるため「デキゴト名詞(非実体性名詞), モノ名詞(実体性名詞)」あるいは「無生名詞(物名詞), 有生名詞(人名詞)」のように本稿における概念を併記する.

20 影山(1999)の「デキゴト名詞」は、行為や出来事以外に状態を表す場合も含むものである点でソ・ジョンス(1994)の「非実体性名詞」に非常に類似した概念であると言える. 状態を表し、形容詞的な働きをする動詞由来複合語の例として、「親譲り(の頑固), 血まみれ(の身体, 黒焦げ(の死体))」などが挙げられる(影山 1999:138). 影山(1999:99)によると、「モノ名詞」は「ある場所に X がある/いる」のように存在を叙述する一方、「デキゴト名詞」は「ある場所で/時間に X がある/起こる/行われる」と表現できる. このように、影山(1999)の「デキゴト名詞」は、単に意味だけではなく、構文的な特徴まで考慮に入れるという点で、本稿における「動作性名詞」と見る判断基準(2.3 で後述する)の観点と一致しているため、この用語(すなわちデキゴト名詞)を用いることとする.

表 2. 名詞の意味分類

区分	意味	例
実体性名詞	有生名詞	男性/남자, 女性/여자, 大人/어른, 子供/아이, 母/어머니, 父/아버지, 先生/선생, 学生/학생, 猫/고양이, 犬/개, 馬/말, 木/나무, 草/풀, 花/꽃 …
	無生名詞	車/자동차, 船/배, 机/책상, 鉛筆/연필, 紙/종이, 機械/기계, 空気/공기, 水/물, 石/돌, 土/흙 …
	時間名詞	昨日/어제, 今日/오늘, 明日/내일, 朝/아침, 夜/밤, 今年/올해, 来年/내년, 六月/유월, 今月/이번달, 月曜日/월요일, 誕生日/생일, 正月/설날 …
	場所名詞	職場/직장, 都市/도시, 町/마을, 庭/마당, 山/산, 海/바다, 野原/들, 道/길, 前/앞, 後ろ/뒤, 隣/옆 …
	抽象名詞	心/마음, 天気/날씨, 雰囲気/분위기, 環境/환경, 性格/성격, 概念/개념, 事実/사실, 嘘/거짓, 法/법, 文学/문학, 理由/이유, 原因/원인, 結果/결과…
非実体性名詞 (デキゴト名詞)	行為名詞	行動/행동, 会話/대화, 競走/경주, 競争/경쟁, 作業/작업, 食事/식사, 洗濯/세탁…
	過程名詞	変化/변화, 腐敗/부패, 成長/성장, 発展/발전 …
	精神作用名詞	考え/생각, 期待/기대, 尊敬/존경, 記憶/기억, 理解/이해, 研究/연구, 愛/사랑, 後悔/후회…
	状態名詞	平安/평안, 健康/건강, 貧乏/가난, 正直/정직, 誠実/성실, 不便/불편, 柔軟/유연 …

本稿で動作性名詞として検討するものは、非実体性名詞(デキゴト名詞)のうち、「状態名詞」を除外した「行為名詞」「過程名詞」「精神作用名詞」である. 以上の分類から、両言語における 5 つのタイプの複合名詞を大きく動作性名詞と非動作性名詞の 2 つに分け、内部における意味・文法的関係により類型分類した上で、動詞由来複合名詞が帯びる動作性について考察する.

1．3　研究の背景－ 動詞由来複合語の語形成

本稿における動詞由来複合名詞とは、動詞由来名詞（deverbal noun；動詞派生名詞）を含む複合名詞を指し、一般的に言う「動詞由来複合語（verbal compound, deverbal compound）」とは異なるものである．しかし、本稿で研究対象とする動詞由来複合名詞の中には、動詞由来複合語も多数存在し、動詞由来複合名詞の語形成においても、動詞由来複合語の語形成規則が深く関わっている．したがって、本題に入る前に、本節では動詞由来複合語とその語形成について概観する．

英語学では複合語をその構造から大きく「語根複合語（root compound）」と「動詞由来複合語（verbal compound）」の 2 つに分類する．前者は「主要複合語」や「一次複合語」（primary compound）とも呼ばれ、後者は「総合的複合語（synthetic compound）」ないし「二次複合語（secondary compound）」とも呼ばれる．

語根複合語とは、動詞から派生したものではない単純語（simple word）を右側要素、すなわち主要部（head）とする複合語である．それに対して動詞由来複合語とは、動詞からの派生語を主要部とする複合語である[21]．そして、語根複合語は前項要素と後項要素との相互関係が様々であるため、語構成要素から全体の意味を予測することが難しい反面（例：truck-man[22]）、動詞由来複合語はその意味が透明であり、かつ語構成要素間の意味関係が文法によって規定されるため、全体の意味を予測しやすいという特徴がある（例：truck driver）[23]．

---

21 Roeper & Siegel（1978），Lieber（1983），Fabb（1984）では、形態的な側面に焦点を合わせ、主要部の動詞に「-er, -ing, -ed」の接辞が付いたものはすべて動詞由来複合語としている．それに対して、Allen（1978），Selkrik（1982），Sproat（1985），Di Sciullo & Williams（1987），Grimshaw（1990）では、意味的な側面に焦点を合わせ、語構成要素間の意味関係が項関係にあると見られるものだけを動詞由来複合語としている．つまり、動詞からの派生語を主要部とする場合のすべてが動詞由来複合語を形成するのではなく、動詞からの派生語を含めていても項構造を持たない複合名詞は、語根複合語を形成すると見なした．一方、Allen（1978），Selkrik（1982），Di Sciullo & Williams（1987），Grimshaw（1990）では、主要部の動詞に対して、非主要部が必須項である場合に限定し、動詞由来複合語を形成するとしているが、Roeper & Siegel（1978），Lieber（1983）では、非主要部が主要部の動詞に対して付加詞（adjunct）である場合も動詞由来複合語を形成するとしている．

22 Allen（1978）は一次複合語（語根複合語）の例として「truck-man」を挙げ、「man who drives/mends/sells/buys/…trucks」のように、多様な意味で解釈され得ると述べている．

23 Kageyama（1985：2）では、次のような語根複合語と動詞由来複合語の例を挙げている．より多くの例は Kageyama（1985）を参照されたい．

a. Root compounds:
truck-man = man who drives/mends/sells/buys/… trucks

表 3. 語根複合語と動詞由来複合語の例

	例	意味
語根複合語	truck-man	トラックを運転する/ 修理する/売る/買う人など
動詞由来複合語	truck driver	トラック運転手

語根複合語は、前項と後項の意味関係が様々であるため、その語形成において制約を殆ど受けないのに対して、動詞由来複合語は前項と後項の関係が文法関係にあるため、その語形成において制約を受ける.

Roeper & Siegel(1978:208)は、すべての動詞由来複合語は動詞の第一姉妹の位置にある語を編入(incorporaiton)することで形成されるという「第一姉妹の原則(First Sister Principle)」[24]を提案している. つまり、動詞句で動詞から一番近い位置のものが動詞由来複合語の非主要部として選ばれるということである. この原則によると、動詞由来複合語の非主要部に主語を除外し、目的語が優先的に選ばれる理由が説明できる. しかし、現代英語の動詞由来複合語において、非対格動詞(unaccusative verb)[25]の

fire truck = truck designed for extinguishing fires, turck made of fire, truck for providing homes with fire, …

b. Verbal compounds:
pot smoking = the act of smoking pot
lawbreaking = the act of breaking laws

24 All verbal compounds are formed by incorporation of a word in first sister position of the verb(Roeper & Siegel:208).

25 Perlmutter(1978)の非対格仮説(Unaccusative Hypothesis)によると、一部の自動詞は、深層構造(Deep Structure; D-構造)の目的語「対象(Theme)ないし被動者(Patient)」(内項)のみ持ち、深層構造の主語「動作主(Agent)ないし経験者(Experiencer)」(外項)を持たないと主張している. 反対に、深層構造の主語「動作主/経験者」(外項)のみ持ち、深層構造の目的語「対象/被動者」(内項)は持たない自動詞を非能格動詞(unergative verb)と呼んで区別している. Perlmutter(1978)は、具体例を挙げて意味に基づく分類も行っているが、詳しくは Perlmutter(1978:162-163)を参照されたい. この仮説を日本語に適用した研究としては影山(1993)がある.

主語（内項）[26]が非主要部に現れないことや、主要部に三項動詞が現れにくいことについては説明ができない.

そこで、Selkirk（1982）は、動詞由来複合語を非主要部（non-head）が動詞の項である場合に制限し、「第一姉妹の原則」を修正した「第一投射の条件（First Order Projection Condition）」を提案した. つまり、主要部の動詞の主語以外の項は、複合語の内部においてすべて満たされなければならないとしているわけである[27]. したがって、主語は複合語の構造内で満たされないとし、主語を複合語の形成から除外している[28].

Grimshaw（1990）においても、英語の動詞由来複合語の主要部は、いつも不飽和（unsaturated）にならないといけないという条件を立て、外項のみを持つ非能格動詞および 1 つの内項のみを持つ非対格動詞は不飽和の条件を破るため、動詞由来複合語を形成できないと述べた. これは、Selkirk（1982：37）により提案された「第一投射の条件」にも繋がる.

しかし、Selkirk（1982）や Grimshaw（1990）は、英語学における動詞由来複合語の語形成についての研究であり、日本語学や韓国語学には適用されないように思われる. なぜなら、日本語と韓国語における動詞由来複合語においては、Selkirk（1982）の「第一投射の条件」に違反する主語と結合する例（日本語：耳鳴り，水溜り，夜明け，韓国語：해돋이[hay-toti；lit. 日-昇り→日の出]，물굽이[mwul-kwupi；lit. 水-曲がり→海・川などの湾曲部]など）が存在するためである.

それに対して、Kageyama（1985）は、古英語・中英語や日本語において、非対格動詞を主要部とする場合には、主語との結合が言語普遍的に容認されることを指摘し、Selkirk（1982）の「第一投射の条件」について「主語以外の項」ではなく、「外項以外の項」として修正するべきであると主張した. Di Sciullo & Williams（1987：31-32）も、外項は動詞由来複合語の内に現れないが、内項は現れると述べ、非対格動詞の主語（対象）が複合語の非主要部に現れる可能性は残している.

---

26 Williams（1981）は、「外項（external argument）」と「内項（internal argument）」という区別を提案し、他動詞および非能格動詞の主語は「外項」であり、他動詞の目的語と非対格動詞の主語は「内項」であると説明している.

27 All non-SUBJ arguments of a lexical category X_i must be satisfied within the first order projection of X_i（Selkirk 1982：37）.

28 The SUBJ argument of a lexical item may not be satisfied in compound structure（Selkirk 1982：34）.

日本語の研究である伊藤 & 杉岡(2002)においても、日本語の動詞由来複合語は英語と異なって、文レベルでは主語として現れる非対格動詞の内項は複合語を作ることができると説明している. そして、韓国語の研究であるアン・サンチョル(1998)の「動作主不可制約(No Agent Constranint)」によると、非対格動詞が主要部である場合は主語、すなわち対象の項は複合語の非主要部になり得る一方、非能格動詞が主要部である場合は主語、すなわち動作主の項は複合名詞の非主要部にならないと説明している. したがって、日本語と韓国語において、動詞由来複合語の非主要部に現れないのは、非能格動詞の主語、すなわち「動作主」のみである.

Selkirk(1982)が唱える「第一投射の条件」によると、外項以外の項[29]は複合語内ですべて満たされなければならないが、日本語と韓国語の動詞由来複合語においては、その反例と見られる付加詞(adjunct)を非主要部とする例(日本語:手作り, 早食い, 韓国語:가을걷이[kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ], 마주잡이[macwu-capi;lit. 向かい合って-とり→前後二人で担ぐこと, 前後二人で担ぐ輿や担架])ないし三項動詞を主要部とする例(日本語:味付け, 韓国語:옷걸이[os-keli;洋服-掛け])が散見される. これらの付加詞(adjunct)を非主要部とする場合や三項動詞を主要部とする場合は、外項以外のすべての項を複合語内で満たすことができないにも関わらず、両言語において動詞由来複合語を形成することができると思われる. したがって、この動詞由来複合語における語形成規則が、両言語においても適用できるかを検討する必要がある.

一方、影山(1999:119)で動詞由来複合語として扱うものは、出来事や行為を表す「デキゴト名詞」のみであり、「結果・産物, 人間, 道具, 場所」などを表す「モノ名詞」は「名詞+名詞」の一次複合語(語根複合語)と見なし、動詞由来複合語として認めない. しかし、「デキゴト名詞(非実体性名詞)」でありながらも「モノ名詞(実体性名詞)」として使われる例(舵取り, 鼠捕りなど)も存在する(詳しくは 5 章で述べる). したがって、動詞由来複合語を考察するためには、「デキゴト名詞(非実体性名詞)」のみならず、「モノ名詞(実体性名詞)」までも対象にし、動詞由来複合語として検討する必要があるだろう.

29 最初に「第一投射の条件」を提案した Selkirk(1982)は「主語以外の項」と述べたが、Kageyama(1985)および Di Sciullo & Williams(1987)により「外項以外の項」に修正された.

1．4　本論文の構成

本論文は7つの章から構成される．第 1 章では、以上の通り、研究の目的ならびに研究の対象と研究の方法を明らかにし、先行研究における動詞由来複合語の語形成について概観した．

第 2 章では、日本語と韓国語における動詞の名詞化（日本語の動詞連用形名詞と韓国語の動詞派生名詞）とその動詞由来名詞が帯びる動作性について概観する．そして、本稿における動作性という概念を語彙的・文法的な性質の側面から定義し、その定義による動作性名詞の判断基準を提示する．

第 3 章では、[V+N]型複合名詞に関する先行研究を概観してから、日本語を中心に[V+N]型複合名詞の動作性とその動作性の条件を複合名詞の内部における意味・文法的関係ならびに意味転移の観点から考察する．

第 4 章では、[N+V]型複合名詞に関する先行研究を概観してから、日本語と韓国語における[N+V]型複合名詞の動作性とその動作性名詞となる条件を複合名詞の内部における構成要素間の文法的関係と関連づけて考察する．

第 5 章では、意味転移の観点から、動詞由来複合語名詞に意味転移が起きるとその動作性は消え、実体性の意味を表すようになるという「意味転移仮説」を立て、その仮説の有効性を検証する．そして、動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できる[N+V]型複合名詞の例を中心に、両言語の動作性名詞に意味転移が起きて実体性名詞として解釈されるメカニズムを考察する．なお、同一の意味解釈のメカニズムを実体性の意味のみを表す非動作性名詞においても適用することを試みる．

第 6 章では、[V+N]型と[N+V]型以外の動詞由来複合名詞のタイプである[Pref+V]型, [Ad+V]型, [A+V]型の動作性について考察し、語形成の観点からその動作性名詞となる条件を探る．

第 7 章では、本論文の研究成果をまとめ、本論文の意義ならびに今後の課題について述べる．

第2章

動詞の名詞化と動作性

2．1　動詞の名詞化と動作性－ 動詞連用形名詞と動詞派生名詞

両言語における動詞由来複合名詞が帯びる動作性を考察するに先立って、両言語において動詞由来名詞はどのようにして形成されるか、かつその動詞由来名詞が帯びる動作性はどのように実現されるかを確認しておく必要がある．そこで、ここでは両言語における動詞の名詞化とその動詞由来名詞が帯びる動作性について概観する．

日本語では動詞の名詞化は、一段動詞（母音語幹動詞）の場合は語幹のそのままの形（例：染みる[shimi-[30]]→染み[shimi]，疲れる[tsukare-]→疲れ[tsukare]）で、五段動詞（子音語幹動詞）の場合は語幹に「i」を付け（例：遊ぶ[asob-]→遊び[asob-+i]，帰る[kaer-]→帰り[kaer-+i]）、連用形に変えることで名詞化がなされる．このようにして形成された名詞を「動詞連用形名詞」と言い、動詞の連用形にゼロ接尾辞が結合して名詞化したものとも考えられている（阪倉 1957）[31]．

一方、韓国語での動詞の名詞化は主に名詞形接尾辞「-이（i），-ㅁ/음（m/um），-기（ki）」によってなされる[32]．

---

30 日本語のローマ字転写はヘボン式（Hepburn romanization）を用いる．

31 日本語の動詞の名詞化は「動詞の諸活用形中の一形である連用形が、そのままの形で名詞に転化するという、簡単な方式（西尾 1961：61）」により形成されるので、語構成論という観点からは、ゼロ接辞の結合による一種の派生語として古くから受け入れられている（山橋 2009：98）．一方、大野（1978：203）は「（動詞の）連用形から名詞形が転生したのではない．連用形とは本来名詞形で、それは名詞語尾 i がついて成立したもの」であると述べている．このように、日本語における動詞の名詞化は、ゼロ接辞によるものなのか否かについては意見が分かれる．日本語の動詞の名詞化がゼロ接辞によるものなのか、名詞化語尾「i」によるものなのかを述べるのは本稿の論旨から外れるため、これ以上論じない．

32 韓国語における動詞の名詞化は、動詞の冠形形（連体形）に形式名詞「것（kek；もの・こと）」を用いて名詞化することもできるが、主に文レベルにおいて現れ、本節の論旨とは関係がないため、ここでは「-이（i），-ㅁ/음（m/um），-기（ki）」を中心に概観する．一方、動詞の冠形形（連体形）に形式名詞「것（kek；もの・こと）」を用いて名詞化したものは、一般的に名詞句になるが、稀に複合名詞として定着する場合もある（例：탈-것[thal-kes；乗り物]，들-것[tul-kes；lit. 持ち上げ物→担架]）．

(2) a. 놀다(遊ぶ) → 놀＋이(遊び)
nol-ta nol-+i
b. 자다(眠る) → 잠(眠り)
ca-ta ca-+m
c. 웃다(笑う) → 웃＋ 음(笑い)
wus-ta wus-+um
d. 달리다(走る) → 달리＋기(走り)
talli-ta talli-+ki

(2a)「-이(i)」は子音で終わる用言(例:놀다[nol-ta;遊ぶ])に付き(例:놀이[nol-i;遊び])、母音で終わる用言には付かないという音韻論的制約がある(ソン・チョルイ 1992: 11, 116;キム・チャンソプ 1996:147).「-ㅁ/음(m/um)」のうち、(2b)「-ㅁ(m)」は母音で終わる用言(例:자다[ca-ta;眠る])に付き(例:잠[ca-m;眠り])、(2c)「-음(um)」は子音で終わる用言(例:웃다[wus-ta;笑う])に付く(例:웃음[wus-um;笑い])異形態として存在する(以下、本稿では代表形として「-음(um)」を用いる).「-기(ki)」は音韻的制約があるわけではないが、母音で終わる用言に付く場合が多い.

以上の「-이(i), -음(um), -기(ki)」は名詞形接尾辞(名詞化接尾辞)として、動詞を語彙的に名詞化することができる[33]. このうち、「음(um), 기(ki)」は名詞形語尾(名詞

33 名詞形接尾辞についての研究は主に「-음(um)」と「-기(ki)」を中心になされてきた. 共持的に「-음(um)」と「-기(ki)」は、非常に生産性の高い接尾辞であり、名詞形語尾としても共存しているからである. 一般的に「-음(um)」は主に状態名詞や抽象名詞を形成し、「-기(ki)」は主に動作名詞(行為名詞)を形成するとされる. シム・ジェギ(1980)は「-기(ki)」より「-음(um)」による実体性の意味を持つ転成名詞の数が多い点や、「-음(um)」だけが状態動詞と結合して名詞化することができる点を挙げ、「-음(um)」は名詞が持つ特性(名詞性特性)である「実体性」を持っていると述べている. そのため、「-음(um)」には[＋実体性]、「-기(ki)」には[－実体性]という意味特性を付与している. 同様に、名詞形語尾についての研究であるイム・ホンビン(1974)においても、感覚を通して知覚できるものを名詞化する「-음(um)」に[＋対象化(存在)]、感覚を通して知覚できないものを名詞化する「-기(ki)」に[－対象化(存在)]という意味特性を付与している. 要するに、動作動詞より状態動詞を感覚で認識できるものと見るため、動作動詞を主に名詞化する「-기(ki)」より、状態動詞を主に名詞化する「-음(um)」の方が「実体性(あるいは対象化)」の意味を持っているとしている. このように、「-음(um)」と「-기(ki)」における名詞形接尾辞と名詞形語尾としての意味機能には「実体性(あるいは対象化)」という面で共通点が見られるのである. 一方、キム・チャンソプ(1996)は動詞に「-음(um)」が付いて名詞化したもの(すなわち、動詞派生名詞)は比較的語彙化が進んでないため、「하다(hata;する)」と共起できない(例:가르치다[kaluchita;教える]=*가르침하다[kaluchim-hata;lit. 教え-する])と述べている. そして、「-음(um)」は語彙的な意味は加えず単に名詞に転換する接尾辞であるため、状態動詞から状態名詞化(例:기쁨[kippum;喜び], 슬픔[sulphum;悲しみ])が「-음(um)」だけに可能であると主張している.「-음(um)」とは対照的に、「-기(ki)」の動詞派生名詞(例:달리기[talliki;走り], 읽기[ilkki;lit. 読み→読解])は意味論的に語彙化して

化語尾）としても共存し、動詞を構文的に名詞化する．共時的に「-이（i）」はもはや生産性がない接辞である．しかし、通時的には「-이（i）」も名詞形語尾としても共存し、「-이（i）」は子音で終わる用言に付き、「기（ki）」は母音で終わる用言に付く異形態であるとしている（キム・ワンジン 1976）．そのため、「-기（ki）」は母音で終わる用言に付く例が多い結果となったのであろう．

通常の名詞なら格成分を取ることはできないが、動詞から転成した名詞の中には、元の動詞の項と共起することができるものもある．以下の（3）は筆者による作例である[34]．

（3） a. 人生-は　自分-と-の　戦い.
인생-은　자신-과-의　싸움.
insayng-un　casin-kwa-uy　ssawu-m.
人生-TOP　自分-COM-GEN　戦う-NMLZ

a'. 人生-は　自分-と　戦う　こと.
인생-은　자신-과　싸우는　것.
insayng-un　casin-kwa　ssawu-nun kes.
人生-TOP　自分-COM　戦う-ADN　こと

b. 日本人　選手-の　走り-に　注目.
일본인　선수-의　달리기-에　주목.
ilponin　senswu-uy　talli-ki-ey　cwumok.
日本人　選手-GEN　走る-NMLZ-DAT　注目

b'. 日本人　選手-が　走る　こと-に　注目.
일본인　선수-가　달리는　것-에　주목.
ilponin　senswu-ka　talli-nun kes-ey　cwumok.
日本人　選手-NOM　走る-ADN こと-DAT　注目

c. 田舎-で-の　暮らし-は　不便だ-と　思う.
시골-에서-의　살림-은　불편하-다-고　생각해.
sikol-eyse-uy　salli-m-un　pulphyenha-ta-ko　sayngkakhay.
田舎-LOC-GEN　生かす-NMLZ-TOP　不便だ-DECL.QUOT-COMP　思う:DECL.NPST

c'. 田舎-で　暮らすこと-は　不便だ-と　思う.

いるため、多くの場合「하다（hata；する）」と共起が可能であり、「-기（ki）」は「＋規式性」（すなわち、「過程と方法」ないし「行為の技」）という意味特性を持っていると述べている．しかし、「-이（i）」は具体名詞のみならず抽象名詞や行為名詞も形成し、「-이（i）」により派生された名詞は一定の意味を持たないため、その意味特性が明らかにされていない．そして、何より「-이（i）」は共持的に生産性がなく、共持的な研究が難しいという限界があるため、「-음（um）」と「-기（ki）」が注目されてきたのであろう．

34 本稿の例文は出典を示さない限り、筆者の作例である．韓国語の表記は、ハングル表記とローマ字転写（イェール式）を併記する．グロス（略語一覧を参照）は韓国語のローマ字転写の下に示すことにする．

시골-에서	사는 것-은	불편하다-고	생각해.
sikol-eyse	sa-nun kes-un	pulphyenha-ta-ko	sayngkakhay.
田舎-LOC	暮らす-ADN こと-TOP	不便だ-DECL.QUOT-COMP	思う:DECL.NPST

上記から分かるように、語彙的に名詞化している(3a)(3b)(3c)が、構文的に名詞化している(3a')(3b')(3c')にそれぞれ対応している. 語彙的名詞化の「戦い/싸움(ssawum), 走り/달리기(talliki), 暮らし/살림(sallim;lit. 生かし→生活)」は名詞であるにもかかわらず、連体修飾の「ノ格/의 (uy)」を通して、それぞれ対応する文(構文的に名詞化したもの)の(3a')「ト格/과(kwa)」《相手》の「自分/자신(casin)」、(3b')「ガ格/가(ka)」《動作主》の「日本人選手/일본인 선수(ilponin senswu)」、(3c')「デ格/에서(eyse)」《場所》の「田舎/시골(sikol)」という項を取っていることから[35]、これらの名詞が元の動詞の属性を継承していることが分かる.

なお、動詞由来名詞は、元の動詞の項を属格「의(uy;の)」以外にも「~에 대한(~ey tayhan;〜に対する, 〜についての)」などにより継承することができる. 以下の例(4)で、動詞由来名詞「읽기(ilkki;読み・読解)」は、元の動詞「읽다(ilkta;読む)」の項である対象(Object)「문학(munhak;文学)」を取ることができる.

(4)	[문학]-을 읽다	→	[문학]-에	대한	읽기
	[munhak]-ul ilk-ta		[munhak]-ey	tayha-n	ilk-ki
	文学-ACC 読む		文学-DAT	対する-ADN	読む-NMLZ
	「文学を読む」	→	「文学についての読解」		

このように名詞でありながら格成分を取るなど動詞的な性質、つまり動作性を表す名詞のことを「動作性名詞」と呼ぶ. 動詞由来名詞の中に、この動作性を帯びる動作性名詞が多く見られる.

35 大塚(2011)では「スル」他動詞構文「N ガ N ト N ヲスル」を「動作主格(Agent) ガ 相手格(Patient)ト 対象格(Object)ヲ」、「N ガ N ヲスル」を「動作主格(Agent)ガ 対象格(Object)ヲ」、「N ガ N デ N ヲスル」を「動作主格(Agent)ガ 場所格(Location)デ 対象格(Object)ヲ」という意味格・形式格で説明している.

2．2　動作性の定義

本稿における動作性とは、早津（2009）における名詞のカテゴリカルな意味《意志動作》と《出来事》を合わせた概念である．早津（2009）では、単語は語彙的な性質と文法的な性質を持っていると述べ、ある単語における語彙的な性質と文法的な性質の間の関係を示すカテゴリカルな意味が存在するとしている．そして、カテゴリカルな意味を「単語の語彙的な意味のうち、その単語のある文法的な性質（形態論的な性質と構文論的な性質）を規定するものとしてとりだすことのできる側面である」（早津 2009:6）と定義している．

このようなカテゴリカルな意味の観点から考えると、動作性とは、「語彙的な性質としては行為や変化・過程の意味を表し、文法的な性質としては機能動詞ならびにアスペクト的名詞（aspectual noun）・アスペクト的動詞（aspectual verb）と共起する名詞のカテゴリカルな意味」と定義できる．この定義を基に、以下では本稿における動作性について、語彙的な性質と文法的な性質に分けて詳しく述べる．

2．2．1 語彙的な性質の側面から見た動作性

語彙的な性質の側面から見た動作性は、出来事（event）に属する意味を表し、状態（state）の意味は含まない[36]．これに関連して参考になるのが、影山（1999）の「デキゴト名詞」である．影山（1999：98-113，118-120）では、動詞が名詞化する際に2種類の意味が生じると述べ、「モノ名詞」（結果・産物，人間，道具，場所を表す名詞）と「デキゴト名詞」（出来事，行為，状態を表す名詞）の 2 つに分けている．本稿において、動作性名詞として検討するものは、この「デキゴト名詞」である．本稿では、動作性名詞を「デキゴト名詞」の下位概念として設定し、「デキゴト名詞」の中でも「結果・状態」を含まない名詞を動作性名詞とする．

影山（1999：101）は、語彙概念構造と特質構造を用いて、「デキゴト名詞」の成り立ちを説明しようと試みた．そして、「デキゴト名詞」は本来の動詞が持つ概念構造の意味成分（ACT，BECOME，BE）のいずれかに焦点を当てることにより、派生されたものと想定し、次のように図式化している．（動作性名詞に該当する意味には、筆者が丸で囲んだ）

36　出来事（event）と状態（state）を含む意味としては「事態性名詞」あるいは「述語名詞（predicate noun）/叙述性名詞（서술성명사）」という用語もあるが、「事態性名詞」と「述語名詞/叙述性名詞」は動詞的な性質はもちろん、形容詞的な性質を持つ名詞をも含め、動詞と形容詞以外に事態を表すことができる名詞を指すため、本稿における「動作性名詞」とは区別する．

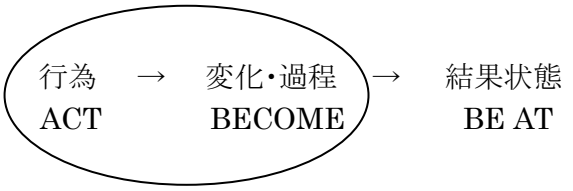


図 1. 動作性名詞の意味（影山 1999：101 より改変）

つまり、「ACT」に焦点を当てることにより「行為」を表す「行為名詞」が、「BECOME」に焦点を当てることにより「変化・過程」を表す「出来事名詞」が、「BE」に焦点を当てることにより「結果状態」を表す「状態名詞」や「モノ名詞」が派生されると考えられる. したがって、本稿において動作性名詞と見るものは、「結果状態（BE AT）」を含まない、丸の中に囲まれている「行為（ACT）」や「変化・過程（BECOME）」の意味に焦点を当て形成される「行為名詞」および「出来事名詞」である.

2. 2. 2 文法的な性質の側面から見た動作性

文法的な性質の側面から見た動作性は、早津（2009）でいう名詞におけるカテゴリカルな意味《意志動作》および《出来事》に関わっている.

まず《意志動作》とは、機能動詞「する」をつけて意志的動詞となるヲ格名詞（例：早起き，居眠り，手続きなど）のカテゴリカルな意味を指す（早津 2009：38）. 同様に、動作性名詞の場合にもヲ格を通して機能動詞「する」と共起できる. 村木（1985, 1991）は、機能動詞と共起する名詞は、典型的に行為を表すため（村木 1991：214）、広義の動作性名詞であると説明している[37]. すなわち、動作性名詞は機能動詞と共起できると言えよう[38].

37 村木（1985：19）は「行為・過程・状態・現象」などを表す名詞のことを広い意味での動作性の名詞とし、動詞の意味は動作性名詞により表れ、機能動詞は述語形式をつくるための文法的な機能を果たしていると説明している.

38 村木（1991：214-219）は動作性名詞とは「なんらかの動的な運動を名づけられている名詞」と定義し、動作名詞や現象名詞と結びつく動詞は実質的な意味を失っていて、名詞によりかかっているため、機能動詞的に用いられると述べている. そして、動作性名詞の例としてサ変動詞（決定、影響）の語幹や動詞連用形名詞（さそい、ぬすみ）を挙げている. これは韓国語でも同様であり、漢字語名詞「결정（kyelceng；決定），영향（yenghyang；影響）」や動詞派生名詞「싸움（ssawum；戦い），달리기（talliki；走り）」などに機能動詞が結合する現象とかなり似ている. つまり、日本語学と韓国語学で言う動作性名詞と機能動詞は類似した概念で用いていると言える.

同様に、韓国語では典型的な機能動詞として「하다(hata;する)」が挙げられる(ホン・ジェソン 1999). 機能動詞「하다(hata;する)」は、実質的な意味を持たないため形式動詞(dummy verb;ソ・ジョンス 1975)、または項構造が先行名詞により決定され、自らは項構造を持たないため軽動詞(light verb;チェ・ヒラク 1996)とも呼ばれる. 本稿において、「機能動詞」に関しては、ソ・ジョンス(1975, 1994)の研究の立場を積極的に取り入れる. なぜなら、ソ・ジョンス(1975, 1994)は意味と構文論の観点から、「하다(hata;する)」を考察していることから、本稿でいう動作性のカテゴリカルな意味とも関係付けられるためである.

次に《出来事》とは、「公園で N がある」(例:盆踊り, コンサート, 火事)という文の「ある」が《実施・発生》である場合、または「N が始まる/続く/終わる」「N を始める/続ける/きりあげる」「N に遅れる/間に合う/遅刻する」の N になれる名詞(例:運動会, 試験, お見合い)のカテゴリカルな意味を指す(早津 2009:39-40). 動作性名詞(戦い, 花見, 仕事など)も同様に、「N を始める/続ける/きりあげる」の N の位置に来ることができる. その理由としては、その名詞(N)が語彙的アスペクトを持っているためであると考えられる. 動詞が「起動」「進行」「完了」のようなアスペクトを表すことができるように、名詞の中にもアスペクト的な意味を持つ名詞が存在する.

韓国語の述語名詞[39]についての研究であるイ・ビョンギュ(2001)では、述語名詞と非述語名詞の区分のため、「状態述語名詞:속(sok;中)」「瞬間述語名詞:순간(swunkan;瞬間)」「持続述語名詞:도중/중(tocwung/cwung;途中/中)」「完成述語名詞:완료(wanlyo;完了)」などのアスペクト的名詞を用い、「叙述性」という概念を統語的に検証しようと試みた. このようなアスペクト的名詞を用いることにより、非実体性名詞(述語名詞)と実体性名詞(非述語名詞)を区分することができる. さらに、状態述語名詞と共起する「속(sok;中)」を用いると、状態性名詞を排除することもできる. イ・ビョンギュ(2001)の述語名詞は動作性名詞より広い意味であり、「状態性」までを含む概念であるが、本稿において動作性名詞は、「状態性」を含まない概念として用いるため、状態述語名詞は動作性名詞から除外される. つまり、本稿で動作性名詞と見るものは、アスペクト

39 イ・ビョンギュ(2001:534)は用言的な特性(叙述性)を持つ名詞を述語名詞とし、述語名詞が持つ叙述性というのは「ある言語の単位が語彙アスペクト的な意味特性を持ち、それが統語的に実現するために項を要求し、その項に対して意味役割を割り当てる属性」と定義する.

的名詞「순간(swunkan;瞬間), 도중/중(tocwung/cwung;途中/中), 완료(wanlyo;完了)」のいずれかと共起する名詞である.

2. 3 動作性名詞の判断基準

以上(2. 2. 2)で述べた動作性名詞の文法的な性質により、動作性名詞であるか否かの判断ができる. つまり、機能動詞およびアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起する動作性名詞の構文的な特徴を用いると、動作性の判断が容易になる. しかし、アスペクト的名詞とアスペクト的動詞の数が多く、その中には瞬間・持続・完成のアスペクト性をすべて併せ持つものが存在しないため、動作性名詞の判断基準としてはやや使いにくい. 膨大な例を一々調べることは時間が掛かり、効率が悪いためである. 一般的に動作動詞(dynamic verb;動態動詞)(例:食べる, 座る, 死ぬなど)と状態動詞(stative verb)(例:知る, 似る, 違うなど)を区別する方法として、「～ている」形にした際に動作の「進行」や「結果」を表すならば動作動詞、単に「状態」を表すならば状態動詞と見るというものがある. 同様に、本稿では動作の局面を示すような名詞「際/시(si;時)」を用いて動作性名詞の判断が容易にできると考えられる.

以上から動作性名詞は、機能動詞と共起するヲ格名詞であり、名詞でありながらも、アスペクト性を持っているため、アスペクト的名詞(際, 瞬間, 途中, 中, 完了/시[si], 순간[swunkan], 도중[tocwung], 중[cwung], 완료[wanlyo])およびアスペクト的動詞(始める, 続ける, きりあげる/시작하다[sicakhata], 계속하다[kyeysokhata], 끝내다[kkuthnayta])と共起できるという構文的な特徴を持つ名詞であるとまとめることができる. したがって、本稿において動作性名詞の判断は、動作性の定義に基づいて、語彙的な意味は「行為」や「変化・過程」を表しながら、構文的には機能動詞やアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起できるか否かを基準とする.

一方、前節(2. 1)では動詞由来名詞の中には、元の動詞の格成分を取ることができることを確認したが、この特徴も動作性名詞の文法的な性質であると言える. しかし、動詞由来複合名詞は、複合名詞内で内項が満たされる場合が多いため([花]を見る→[花]見、

[物]を忘れる→忘れ[物])、一項動詞あるいは二項動詞の場合、他の項と共起するのを確認することが難しい[40].

そこで、両言語において典型的な機能動詞である「する/하다(hata)」と共起するか否かを調べることが最も有効な方法である. 機能動詞は、文法的な機能だけを果たすため、「N(を)する」という時に、機能動詞が格成分を取っているように見えても、実際には先行する名詞の方が格成分を取っており、動詞的な属性を帯びているのは先行する名詞であると考えられる(Grimshaw & Mester 1988). したがって、本稿では動作性名詞の判断基準として、主に「N-をする/N-를 하다(N-lul hata)」あるいは「N-する/N-하다(N-hata)」が成立するか否かという基準で調べ[41]、補助的に語彙的アスペクトを持つか否かをアスペクト的名詞やアスペクト的動詞を用いて調べることとする.

以上のように、本稿では語彙的な性質および構文的性質(カテゴリカルな意味)により「動作性名詞」を判定するので、従来の先行研究における「動作性名詞」の範囲とは異なる場合がある. 例えば、本稿において「花見」は、機能動詞「する」と共起し(例:花見をする)、アスペクト的名詞やアスペクト的動詞と共起する(例:花見中, 花見を始める)ことから動作性名詞と見る. しかし、伊藤 & 杉岡(2002)では、これらの内項を含む動詞由来複合語は「動作の名づけ」であり、動作性名詞ではないとしている. もちろん、先行研究においても本稿においても、付加詞(adjunct)を含む動詞由来複合語のうち、「手作り, 一人歩き, 船酔い」のような例を動作性名詞と見ることには異議はない. 先行研究において、内項を含む動詞由来複合語を動作性名詞として認めない理由は、「する」が直接結合する「動名詞」だけを動作性名詞と見るためである. 本稿における「動作性名詞」とは、「動名詞」を含む上位概念であり、「する」と直接結合する名詞のみならず、「をする」のように助詞を介して「する」と共起するものまで「動作性名詞」と見るため、より広い概念となる.

---

40 一項動詞を含む複合名詞の場合は「雪解け」のように主語(対象)「雪」が複合名詞内で満たされているため、さらに項を取ることが難しい. また、二項動詞を含む複合名詞に先行するノ格を取る名詞の場合、「お客さんの忘れ物」のようにノ格名詞「お客さん」が主格名詞(動作主)であるか、それとも所有格名詞(所有者)であるかの判断が難しい. 一方、「頂く」のような三項動詞を含む複合名詞「頂き物」は「知人からの頂き物」のように複合名詞内で動詞の内項(目的語=対象)「物」が満たされても、さらにカラ格名詞(起点)を取ることができる.

41 日本語と同様に、韓国語においても動作性名詞「싸움(ssawum;戦い), 달리기(talliki;走り)」などは「N-를 하다(N-lul hata;N-をする)」のように対格を介して、機能動詞と共起することもできるが、「N-하다(N-hata;N-する)」のように直接結合することもできる.

一方、日本語では機能動詞「する」と共起できる名詞の中には「匂い，音」など「N をする」構文ではなく「N がする」構文を取り、動作を表すというより、状態や現象を表すものも存在する．このように、機能動詞「する」は動作名詞（動作性名詞）のみならず、状態名詞や現象名詞とも結合する（村木 1991：214）．本稿では、状態を表す名詞は動作性名詞ではないものと見なし[42]、基本的に「N をする」という構文を取る例や直接「する」と結合できる例を動作性名詞であると見なすため、自然と状態名詞や現象名詞はおおむね排除できる．

そして、動作性を持たない「モノ名詞（実体性名詞）」の中には、「お茶，ネクタイ」など、「する」と共起する例が存在する．中川（2003）では動作性を持たない「道具名詞」（例：蓋，マスクなど）を直接目的語として取る用法の「する」は機能動詞としてではなく、実質的な意味を持つ動詞として扱っている．韓国語学においては、ソ・ジョンス（1975）の研究は、「하다（hata；する）」の先行要素をその意味的特質によって、大きく「非実体性[－Substantial]」と「実体性[＋Substantial]」に分け、さらに「非実体性」を「非状態性〔－Stative〕（動作性〔＋Action〕，過程性〔＋Process〕）」と「状態性〔＋Stative〕」に区分した．そして、非実体性名詞に付く動詞を形式動詞（すなわち機能動詞）とし、実体性名詞「밥（pap；ご飯），나무（namu；木），한잔（hancan；一杯）」などに付く動詞を代動詞（実質動詞）と見なしている．この観点から考えると、機能動詞と共起し、状態性は帯びない非状態性名詞が動作性名詞に該当するものであり、代動詞（実質動詞）と共起する実体性名詞は動作性名詞から外される．

しかし、実体性名詞と非実体性名詞の区分が明確ではない場合、動作性名詞の判断が困難である．その場合、連体修飾あるいは副詞の修飾の可否を補助的に用いて調べることができる．機能動詞に先行する動作性名詞は連体修飾に制約がある（ユン・ハンジン 2009）反面、副詞の修飾は受ける（パク・ソヨン 2012）ため、連体修飾あるいは副詞の修飾の可否を調べると動作性名詞（実体性名詞と非実体性名詞）の判断はもちろん、機能動詞であるか実質動詞であるかの判断が可能になる．例えば、「한국어를 가르치는 선생님을 하다（韓国語を教える先生をする）」「유창한 영어를 하다（流暢な英語をする）」のように連体修飾を受ける名詞の場合、これらと共起する「하다（hata；する）」は実

42 村木（1991：214）では、動作性名詞を上位概念として想定し、さらに「動作名詞，状態名詞，現象名詞」に下位分類している．しかし、この中で、本稿において動作性名詞として見るものは、主に「動作名詞」に該当するものであり、一部の「現象名詞」（例：耳鳴り，雪解け）も含まれる．

質動詞であるため、「선생님(先生), 영어(英語)」は動作性名詞とは考えられない. ユン・ハンジン(2009)でも重動詞(実質動詞)「하다(hata;する)」に先行する目的語は自由に修飾を受けられるが、軽動詞(機能動詞)「하다(hata;する)」に先行する目的語は修飾に制約があると述べ、以下の(5)のような例を挙げている.

(5)a. 돌이는 매일 똑같은 밥을 한다.
toli-nun mayil ttokkath-un pa-ul ha-nta.
PN-TOP 毎日 同じだ-ADN ご飯-ACC する-DECL.NPST
「ドリは毎日同じご飯を作る.」
b. 돌이가 순이를 강하게/*강한 비판을 하였다.
toli-ka swuni-lul kangha-key/*kangha-n piphan-ul ha-yess-ta.
PN-NOM PN-ACC 強い-ADV/ 強い-ADN 批判-ACC する-PST-DECL
「ドリがスニを強く /*強い批判をした.」
(ユン・ハンジン 2009:110)

しかし、(5b)の「순이를(スニを)」を「순이에게(スニに)」に直すと、「돌이가 순이에게 강한 비판을 하였다(ドリがスニに強い批判をした)」という文は成立するため、必ずしも動作性名詞が連体修飾を受けないとは言い切れない. このように機能動詞に先行する動作性名詞が連体修飾を受ける場合もある. その場合には、元の文(6a)と(6b)を新聞記事および広告などの見出し文のように(6a')と(6b')に書き換えると、連体修飾の可否が明確になる.

(6)a. 사장이 직원에게 크게/큰 화풀이를 하였다.
sacang-i cikwen-eykey khu-key/ khu-n hwaphwuli-lul ha-yess-ta.
社長-NOM 職員-DAT 大きい-ADV/大きい-ADN 八つ当たり-ACC する-PST-DECL
「社長が職員に大きく/大きい八つ当たりをした.」
a'. 사장이 직원에게 크게/*큰 화풀이.
sacang-i cikwen-eykey khu-key/*khu-n hwaphwuli.
社長-NOM 職員-DAT 大きい-ADV/大きい-ADN 八つ当たり
「社長が職員に大きく/*大きい八つ当たり.」
b. 선생님께서 알아듣기 쉽게/쉬운 풀이를 해 주셨다.
sensayngnim-kkeyse alatut-ki swip-key/swiw-un phwul-i-lul hay
先生-NOM.HON 分かる-NMLZ 易い-ADV/易い-ADN 解く-NMLZ-ACC する:ADV
cwu-sye-ss-ta.
くれる-HON-PST-DECL.
「先生が分かりやすく/やすい解釈をしてくださった.」
b'. 선생님께서 알아듣기 쉽게/*쉬운 풀이.

sensayngnim-kkeyse alatut-ki swip-key/*swiwu-n phwul-i.
先生-NOM.HON 分かる-NMLZ 易い-ADV/易い-ADN 解く-NMLZ
「先生が分かりやすく/*やすい解釈．」

名詞が連体修飾を受けることは当然のことであるが、通常副詞の修飾を受けることはできない．つまり、副詞の修飾を受けるということは、動作性名詞の動詞的な性質（動作性）によるものであると言えよう[43].

以上から、動作性名詞の判断基準をまとめると、まず「N-をする/N-를 하다（N-lul hata）」あるいは「N-する/N-하다（N-hata）」が成立するか否かを中心に調べ、次にアスペクト的名詞（際，瞬間，途中，中，完了/시[si]，순간[swunkan]，도중[tocwung]，중[cwung]，완료[wanlyo]）やアスペクト的動詞（始める，続ける，きりあげる/시작하다[sicakhata]，계속하다[kyeysokhata]，끝내다[kkuthnayta]）を用いて語彙的アスペクトを持っているかを調べるということである．そして、それでも動作性名詞の判断が難しい場合は、補助的に副詞の修飾を受けるか否かを調べることによって、動作性名詞を判断する．

43 ソ・ジョンス（1975:21）においても、名詞が副詞の修飾を受けることは、動作性の叙述的機能を語彙的特質として持っていると仮定する根拠になると述べている．

Ⅱ　本論

第3章

[V+N]型複合名詞の動作性

日本語と韓国語の動詞由来名詞の中には機能動詞「する/하다（hata）」と共起できるものがある．例えば、以下の（7）の動詞「戦う/싸우다（ssawuta；戦う・喧嘩する）」から名詞化された「戦い/싸움（ssawum；戦い・喧嘩）」がその一例である．しかし、動詞由来名詞がすべて機能動詞「する/하다（hata）」と共起できるわけではない．例えば、動詞由来名詞「儲け/벌이（peli；儲け・稼ぎ）」は、以下の（8）のように機能動詞との共起が難しい．

（7）日本語：?[44]戦い-を　する[45]
　　韓国語：　싸움-을　하다
　　ssawu-m-ul　hata
　　戦う-NMLZ-ACC　する

（8）日本語：　*儲け-を　する
　　韓国語：??벌이-를　하다[46]

---

44 本稿の例文で「?」は、その文の容認度を表す．「?」の数が多いほど、その文の容認度は落ちる．つまり、より不自然であることを表す．

45 日本語で「戦い」は、「孤独な戦い」「激しい戦い」「最後の戦い」のようにいつも修飾語が必要であり、修飾語がないと不自然である意見もあった．しかし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の検索で以下の例のように、修飾語なしで用いられる例も見られる．たとえ、修飾語がある方が日本語としてより自然だとしても、「戦い」は単独で使えることには違いない．
　例）エスカレートすれば、工業用爆薬や釘打ち機を使ってでも戦いをするでしょう．〈OC14_12045〉

46 韓国語の「벌이（peli；儲け・稼ぎ）」の場合は、機能動詞「하다（hata）」と共起ができないわけではないが、適切な文脈を与えないと使いにくい．例えば、「혼자 벌이를 해서 먹고 살기는 힘들다(lit. 一人で儲けをして食べて生きるのは難しい→一人で稼いで生活することは難しい）」は言えるが、「??그 일로 많이 벌이를 했다（lit. その仕事でたくさん儲けをした）」ある

pel-i-lul　　hata
儲ける-NMLZ-ACC する

一方、動詞由来の名詞を含む複合名詞は、両言語において機能動詞との共起が比較的容易になる.

(9) 日本語:　金　儲け-を　　する
韓国語:　돈　벌이-를　　하다
ton　pel -i-lul　　hata
金　儲ける-NMLZ-ACC する

このように考えると、日本語と韓国語の複合名詞の仕組みはかなり類似しているように見える[47]. しかし、日本語の「動詞連用形+名詞」(以下[V+N]または[VN]と呼ぶ)型複合名詞と、韓国語の「動詞の名詞形+名詞」(以下[V+N]または[VN]と呼ぶ)型複合名詞を比べてみると、かなりの相違点が見られる. 日本語の[V+N]型複合名詞「寄り道, 回り道」は機能動詞「する」と共起することができるが、韓国語の[V+N]型複合名詞「갈림길(kallim-kil;分かれ-道), 지름길(cilum-kil;lit. 突っ切り-道→近-道)」は機能動詞「하다(hata;する)」と共起することができない. 両言語の[V+N]型複合名詞において機能動詞と共起の可否に相違が見られるのは、動作性によるものであると予想される[48].

そこで、本章では日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞が同じ構成であるにもかかわらず、動作性において相違が見られることに着目し、日本語[V+N]型複合名詞が動作性を持つことができる意味・文法的条件を明らかにすることを目的とする.

いは「??그 일로 많은 벌이를 했다(lit. その仕事で多くの儲けをした)」のような文は韓国語として不自然である.

47 実際に両言語の動詞由来名詞の全体像を照らし合わせると、相違点の方が多いかも知れないが、ここでは両言語において、動詞由来名詞よりは、動詞由来複合名詞の方が一層動作性を帯びやすい点に注目したい.

48 本稿では動作性名詞の判断のため、機能動詞と共起できるか否かを中心に調べるが、2. 3 で述べたように、補助的にアスペクト的名詞やアスペクト的動詞と共起できるか、そして副詞の修飾を受けられるかを補助的に用いる. 日本語の「寄り道, 回り道」は、アスペクト的名詞やアスペクト動詞と共起でき(寄り道を始める, 回り道の途中)、副詞の修飾も受けられるため(大きく回り道をする)、動作性名詞と見ることができる.

3．1　日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞に関する先行研究

現代日本語における[V+N]型複合名詞についての研究はその殆どが複合名詞の様々な類型の中の１つのタイプとしての[V+N]型複合名詞として言及することに留まっている（阪倉 1966，斎賀 1957，玉村 1975，沖 1983，森田 2008 など）．[V+N]型複合名詞の研究は、「他動詞連用形+名詞」型の複合名詞の構成要素間の意味的な関係の多様性を分析した野田（2011）の研究以外には、主に「買い物，調べ物」などの後項要素が「モノ」であるタイプの複合名詞のみを対象としたものであり（佐々 & 堀江 1998；澤田 1999；影山 2009 など）、様々なタイプを考慮していない．

そして、[V+N]型が持つ動作性について考察した研究はさらに数が少なく、佐々 & 堀江（1988：138）と影山（1993：186）は具体物（物質）が動作を連想させ、動作過程へと意味が拡張する場合があると指摘しているのみであり、充分に考察が行われていない．高橋（2011）では動詞連用形名詞（[N+V]型複合名詞なども含む）と動詞「する」との関係を考察しているが、[V+N]型複合名詞には「する」が付加されないとし、そもそも研究対象から排除している．しかし、[V+N]型複合名詞の中には「する」と共起できる例が確実に存在する．[N+V]型より[V+N]型複合名詞の方が「する」と共起し得る例が非常に限られてはいるものの、研究の最初の段階から考察もせず、除外するのは問題であるように思われる．

一方、韓国語における[V+N]型複合名詞についての研究は、おおよそ[N+N]〔名詞+名詞〕型複合名詞の中で扱っているだけである．その理由は、韓国語の[V+N]型複合名詞に「動詞の冠形形（連体形）+名詞：건널목（kennel-mok；lit. 渡る-所→踏み切り），굳은살（kwutun-sal；lit. 固まった-肉→たこ），앉은키（ancun-khi；lit. 座った-背→座高）など」という形式が非常に少ないためだと思われる．本稿で対象とする韓国語の「動詞の名詞形+名詞」型複合名詞については、前項要素に非自立的なものが来る場合があることに注目し、その語形成については論じている研究（ソン・チョルイ 1992；シ・ジョンゴン 1994b；キム・チャンソプ 1996；チェ・ヒョンシク 2003 など）はあるが、[V+N]型複合名詞の全体像については充分に考察が行われていない．

韓国語の[V+N]（動詞の名詞形+名詞）型複合名詞には「V-이（i）+N」「V-음（um）+N」「V-기（ki）+N」の 3 つのタイプが存在するが、どれも生産性に乏しく、その数も少ない．この中で比較的多く見られるタイプとして「V-음（um）+N」型があるが、これも生産性

に乏しい．このように韓国語で[V+N]型複合名詞は、生産性に欠けるため、先行研究でもあまり注目されていないと考えられる．

以上のように日本語[V+N]型複合名詞および韓国語[V+N]型複合名詞のいずれについても研究が充分に行われていない状況にある．そして、日本語と韓国語の複合名詞を対照した研究（チェ・テオク & アン・ビョンゴン 2001，羅 2013 など）においては、[N+V]型と[V+V]型複合名詞について触れているが、両言語の[V+N]型複合名詞を対照した研究は見当たらない．本稿では、これまであまり注目されてこなかった日本語[V+N]型複合名詞と韓国語[V+N]型複合名詞を対照することにより、日本語[V+N]型複合名詞が帯びる動作性の正体を明らかにいていきたい．

3．2　日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞の動作性の有無

本節では日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞が動作性を持つか否かを考察する．本章の冒頭で述べたように、日本語[V+N]型複合名詞は機能動詞「する」と共起できるものがあるのに対して、韓国語[V+N]型複合名詞は機能動詞「하다（hata；する）」と共起できないことが観察される．ここでは、これらの相違が本当に動作性の有無によるものなのかを明らかにしたい．

そのため、2．3 で提示した動作性名詞の判断基準を用いて、日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞の動作性の有無を調べる．つまり、機能動詞「する」およびアスペクト的名詞「際/시（si；時）」との共起の可否を調べることにより、動作性を持つか否かを判断する．対象となる例としては、両言語で同じ構成を持つ複合名詞の代表例として、日本語は「動詞連用形+道」型、韓国語は「動詞の名詞形+길（kil；道）」型を挙げ、考察する．

先ず、日本語「動詞連用形+道」型複合名詞の「寄り道，回り道」を見てみよう．「寄り道」と「回り道」は機能動詞「する」と共起することができ、さらにアスペクト的名詞「際」と共起する．

「寄り道をする」として用いられる際の「寄り道」の意味は、「寄る道」のように「寄る」が「道」を修飾するわけではなく、下の（10）のように「道」はニ格を取る補語として現れ、「寄る」は述語の機能を有していることが分かる．

(10) 日本語: **寄り** V' **道** N (を)する[49]
《意味》(目的地へ行く途中で、別の) 道(=場所)ニ 寄る[50]
《文法的関係》 補語 – 述語

下の(10')の「寄り道の際」として用いられる際の「寄り道」の意味も、(10)と同様に、前項(V)と後項(N)の関係が「*寄る道の際」という修飾語と被修飾語の関係ではなく、「道(場所)ニ寄る際」という補語と述語の関係にある.

(10') 日本語: **寄り** V' **道** N の際
《意味》(目的地へ行く途中で、別の) 道(=場所)ニ寄る 際
《文法的関係》 補語 – 述語

同様に、「回り道をする」として用いられる際の「回り道」の意味は、「回る」が「道」を修飾する「回る道」という意味ではなく[51]、下の(11)のように「道」はヲ格を取る目的語として現れ、「回る」は述語として機能していることが分かる.

(11) 日本語: **回り** V' **道** N (を)する
《意味》(もっと早く行けるのに) 道ヲ 回る
《文法的関係》 目的語 – 述語

下の「回り道の際」と用いられる際の「回り道」の意味も同様に、前項(V)と後項(N)の関係が「*回る道の際」という修飾語と被修飾語の関係ではなく、「道ヲ回る際」という目的語と述語の関係にあると解釈できる.

(11') 日本語: **回り** V' **道** N の際
《意味》(もっと早く行けるのに) 道ヲ 回る 際
《文法的関係》 目的語 – 述語

49 動詞と動詞の名詞化を区分するため、動詞は「V」に、動詞の名詞化は「V'」と表記する. 以下も同様である.
50 「寄り道をする」と用いられる際の意味は、「目的地へ行く途中で、別の場所に寄る」という意味であり、「道」を「場所」に置き換えた方が日本語としてより自然である. ここでは「道」を「場所」として捉え、その意味を考える.
51 「回り道」は、「修飾語-被修飾語」の関係にある「(遠回りしていく)回る道」という意味としても解釈できるが、ここでは動作性名詞として用いられる際の意味を考察する.

以上のように、日本語「寄り道，回り道」のような複合名詞の構成は「修飾-被修飾語」の関係にあるが、その内部構造は「補語-述語」あるいは「目的語-述語」の関係を持ち、複合名詞の前項の動詞連用形（寄り，回り）がそれぞれニ格（場所）およびヲ格（対象）を取ることができる.

次に、韓国語「動詞の名詞形+길（kil；道）」型の「지름길（cilum-kil；lit. 突っ切り-道→近道），갈림길（kallim-kil；分かれ-道）」を見てみよう.「지름길（cilum-kil；lit. 突っ切り-道→近道），갈림길（kallim-kil；分かれ-道）」は、機能動詞「하다（hata；する）」と共起できない上、アスペクト的名詞「시（si；時）」とも共起できない.

「지름길（cilum-kil；lit. 突っ切り-道→近道）」は、機能動詞「하다（hata；する）」とは共起できず、「近道デ行く」という意味を表すためには、方向格「로（lo；へ）」と実質動詞「가다（kata；いく）」が必要となる. もちろん、「*지름길 시（*cilum-kil si；lit. 突っ切り-道時→近道の時）」も成立しない[52].

(12) 韓国語：　**지름** $_{V'}$　**길** $_{N}$　로　가다 /
cilum $_{V'}$　kil$_{N}$ －　lo　kata /
*을　하다
－ *ul　hata
日本語訳：　近 $_{A}$　道 $_{N}$　で　行く /
を　する
《意味》　突っ切る $_{V}$ 道 $_{N}$
*道 $_{N}$ ヲ　突っ切る $_{V}$
《文法的関係》　修飾語 － 被修飾語
*目的語 － 述語

(12') 韓国語：　**지름** $_{V'}$　**길** $_{N}$　*시
cilum $_{V'}$　kil$_{N}$ －　*si
日本語訳：　近 $_{A}$　道 $_{N}$　の時
《意味》　突っ切る $_{V}$ 道 $_{N}$

52　韓国語「지름길（cilumkil；lit. 突っ切り-道→近道）」に対応する日本語「近道」の場合は、韓国語とは違って機能動詞「する」と共起することができる.「近道」は、前項「近」が後項「道」を修飾している「（早く着くことができる）近い道」という意味もあるが、「近道をする」と用いられる際の意味は「道が近い」という意味ではなく、「（早く着くことができる）近い道を行く」という意味であるため、「近道」の全体に動作性が付与されたと説明するよりほかはない. 影山（1993：185）では「近道」を主要部が左側か右側かという語構成の問題ではなく、「近い道」から「近い道を通ること」という意味に転移したものであって、これは概念構造の問題であると述べられている.

《文法的関係》 修飾語 - 被修飾語

(12)のように、韓国語「지름길(cilum-kil;lit. 突っ切り-道→近道)」での前項「지름(cilum;突っ切り)」が後項「길(kil;道)」と「길 N을 지르다 v(kil-ul ciluta;道 Nを突っ切る v)」という項関係を持つと想定してみることは可能であるが、実際の意味的関係は「지르는 v 길 N(cilunun kil;突っ切る v道 N)」という修飾関係にあり、機能動詞およびアスペクト的名詞とは共起できない.

「갈림길(kallim-kil;分かれ-道)」の場合、前項「갈림(kallim;分かれ)」は後項「길(kil;道)」を修飾し、「길(kil;道)」の属性、つまり「갈라진 길(kallacin kil;分かれた道)」を表す. 韓国語「갈림길(kallim-kil;分かれ-道)」とそれに対応する日本語「分かれ道」は修飾関係だけを持ち、名詞的属性を示すため、韓国語でも日本語でも機能動詞「하다(hata)/する」とアスペクト的名詞「시(si;時)/際」と共起するのは難しい.

(13)韓国語: **갈림** V' **길** N 로 가다 /
kallim V' kil N - lo kata /
*을 하다
- *ul hata
日本語: 分かれ V' 道 N へ 行く /
*を する
《意味》 分かれた V 道 N
《文法的関係》修飾語 - 被修飾語

(13')韓国語: **갈림** V' **길** N *시
kallim V' kil N - *si
日本語: 分かれ V' 道 N *の際
《意味》 分かれた V 道 N
《文法的関係》修飾語 - 被修飾語

以上のように、両言語に共通して[V+N]型複合名詞は、意味・文法的関係が修飾関係にある際、動作性を帯びることができない. すなわち、韓国語[V+N]型複合名詞が動作性を持たないのは、複合語内部の意味・文法的関係が常に修飾関係にあるためであると考えられる. 実際に韓国の国立国語院(編) (2012) の『韓国語基礎辞典』の見出し語

から[V+N]型複合名詞（89 例）を抽出し（【付録1】を参照）[53]、動作性の判断基準により調べた結果、韓国語の[V+N]型複合名詞内部の意味・文法的関係は、すべて修飾関係のみ現れ、動作性は帯びていなかった[54].

以上より、日本語[V+N]型複合名詞の中には、動作性を帯びる例も存在するが、韓国語の[V+N]型複合名詞は全く動作性を帯びることができないことが分かる. 特に、日本語[V+N]型の複合名詞は、内部における動詞（動詞連用形）が必須項（特に目的語）を充足している場合、動作性を帯びやすくなると考えられる. すなわち、前項要素（V）が元の動詞の対象の項を後項要素（N）として取らない場合は、元の動詞が必須的に要求する補部（complement）、すなわち必須的付加語を後項要素（N）として取っているということである. それに対して、韓国語[V+N]型複合名詞の内部構造は、項関係には現れず、修飾関係にのみ現れるため、動作性を帯びにくいと考えられる. 言い換えると、日本語における[V+N]型複合名詞は、語内部の意味・文法的関係が項関係にある例が存在するが、韓国語における[V+N]型複合名詞は、語内部の意味・文法的関係が通常修飾関係にあるため、両言語の語形成のプロセスから、動作性において相違が起こるものと推測できる.

3. 3　日本語[V+N]型複合名詞の意味

前節の考察から、日本語[V+N]型複合名詞の中には動作性を帯びるものがあるが、韓国語[V+N]型複合名詞は動作性を帯びないことが考察から分かった. その理由として、複合名詞内部における意味・文法的関係が関連していることが挙げられる. 本節では、

---

53 韓国語[V+N]型複合名詞には、[V-기(ki)+N]型は見られず、[V-이(i)+N]型および[V-음(um)+N]型のみ見られた. とりわけ、[V-이(i)+N]型は前項要素[V-이(i)]が自立的な名詞として現れる[[V-이(i)]$_N$+N]型（9 例）のみが見られた. なお、[V-음(um)+N]型においても、前項要素が自立的な名詞である[[V-음(um)]$_N$+N]型（58 例）が大半を占め、前項要素が自立的な名詞でない[V-음(um)+N]基本型は、22 例が現れた. この 22 例が、典型的な韓国語[V+N]型複合名詞であると言える. 前項要素に自立的な名詞が現れる例は、単なる「名詞（N）+名詞（N）」という構成であるため、厳密に言うと「動詞（V）+名詞（N）」型と見られないためである. つまり、韓国語において典型的な[V+N]型複合名詞は、[V-음(um)+N]型としてのみ現れると考えられる.

54 ただ、中には後項要素が既に動作性を持っている動作性名詞であるため、動作性を帯びるものがある. 本稿で選定した研究対象の例の中では「낮춤말（nacchwum-mal；lit. 低め-言葉→目下の人に用いる言葉），돌림노래（tollim-nolay；lit. 回し-歌→輪唱），잠투정（cam-thwuceng；lit. 寝-ねだり→寝むずかり）」の 3 つのみが見られたが、これらは、複合語内部の意味・文法的関係とは全く関係がなく、動作性を帯びるものなので、論外としておく.

複合名詞の意味と動作性がいかに関連しているかという点に焦点を当て、考察を行なっていきたい.

特に、日本語[V+N]型複合名詞のタイプの中で、最も多くを占める「動詞連用形+物」型複合名詞の場合、「忘れ物, 贈り物」のように「デキゴト名詞(非実体性名詞)」でありながら「モノ名詞(実体性名詞)」である例が散見される(忘れ物, 贈り物, 編み物, 洗い物など). ここでは、日本語の「動詞連用形+物」型を中心に、複合名詞の意味と動作性との関係を調べる.

日本語が「買い物, 忘れ物, 書き物, 落し物, 贈り物」のような「動詞連用形+物」型複合名詞において非常に生産性に富む一方で、これらに対応する韓国語の「動詞の名詞形＋것(kes;もの)」型複合名詞は存在しない. 韓国語の複合名詞の例として国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』で「動詞の冠形形(連体形)+것(kes;もの)」型は現れるが、生産性に非常に乏しく、「탈것(thal-kes;lit. 乗る-物→乗り物), 들것(tul-kes;lit. 持ち上げる-物→担架)」以外は殆ど見当たらない. そして、韓国語では、「가리-개(kali-kay;lit. 隠す-モノ→目隠し), 지우-개(ciwu-kay;lit. 消す-モノ→消しゴム), 덮-개(teph-kay;lit. 蓋う-モノ→蓋), 깔-개(kkal-kay;lit. 敷く-モノ→敷き物)」などの「動詞の語基＋-개(kay)」型派生名詞が存在する. しかし、韓国語において動詞の語基と派生接尾辞「-개(kay)」の結合は非常に制約がある上、そもそも派生名詞であるため、日本語において生産的な「動詞連用形＋物」型複合名詞と対等なレベルで比べることはできない. なお、韓国語「動詞語基＋-개(kay)」の派生名詞はすべて機能動詞と共起することはできず、動作性を全く帯びない「モノ名詞(実体性名詞)」、すなわち非動作性名詞として現れる.

さらに、日本語「動詞連用形+物」型複合名詞が機能動詞「する」と共起する場合、対応する韓国語の単語が見つからず、句あるいはコロケーション(買い物をする:장을 보다[cang-ul pota;lit. 市場-を見る])など単語以上のもの(分析的表現)に対応することが多い. このように、日本語「動詞連用形+物」型の複合名詞は、その語形成においてだけでなく、統語的な構造も韓国語の複合名詞にはない特殊な構造を示している.

田中(1990:64-65)では「動詞連用形+物」型複合名詞を「動作の結果、対象として、ある特定の名づけをあらわす」と説明し、これに該当する例を 3 つの類型に分けている. これに従い、1グループ(対象:「Vする N」構成)、2グループ(動作の結果: 「VしたN」

構成)、3グループ(「する」と結合できるもの)に分類した例を下記の表4に示す. 括弧の中は筆者が付け加えた例である.

表 4. 動詞由来複合名詞「モノ」(田中 1990 より改変)

類型	例
1グループ	食べ物, 飲み物, 読み物, 乗り物, 売り物, 履き物, (着物, 巻き物, 食い物, 食み物)
2グループ	塗り物, 織り物, 仕立て物, 揚げ物, 焼き物, (建物, 和え物, 漬け物, 煮物, 炒め物, 冷やし物, 残り物)
3グループ	書き物, 縫い物, 編み物, 調べ物, 炊き物, 片付け物, 忘れ物, (買い物, 贈り物, 頂き物, もらい物, 落し物, 探し物, 拾い物, 洗い物)

表 4 で、1 グループの名詞はすべて動作性を持たない「モノ名詞(実体性名詞)」であるため、機能動詞「する」とアスペクト的名詞「際」との共起が難しく、動作性は全く帯びない非動作性名詞である. 一方、2 グループの名詞の中には、「建物」のように「モノ名詞(実体性名詞)」であるため、機能動詞「する」とアスペクト的名詞「際」との共起が難しいものもあるが、「揚げ物」のように機能動詞「する」とアスペクト的名詞「際」との共起ができるものもある[55]. したがって、2 グループの名詞のすべてが動作性を帯びないとは言い難い. それに対して、3 グループの名詞はすべて機能動詞「する」と共起するもので、アスペクト的名詞「際」とも比較的容易に共起できるため[56]、動作性名詞であると考えられる.

このように日本語「動詞連用形+物」型の複合名詞は同じ構成であるにも関わらず、動作性においては相違が見られる. それでは、3 グループの「買い物」は動作性を持つのに対して、1 グループの「着物」は動作性を持たないのは一体なぜだろうか. 本稿では「意味転移」という概念をもってその答えを探りたい. 本稿での「意味転移(semantic shift)」とは、「意味変化(sense-change:Stern 1931; semantic change:Ullmann 1957, 1962)」と類義の概念として用いる. なぜ「意味変化」という用語を用いないかという

55『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の検索結果、「揚げ物」は機能動詞「する」と共起する例が 17 例、「〜の際/時」と結合する例は 2 例が現れた.

56 2. 3 で述べたように、状態名詞・現象名詞「匂い, 音」やモノ名詞(実体性名詞)「お茶, ネクタイ」なども「する」と共起することができるため、機能動詞「する」との共起だけを用いて動作性名詞を判断することは難しい. そこで、補助的にアスペクト的名詞やアスペクト的動詞との共起を調べる必要がある.

と、「意味変化」というのは通時的に起きるものであるため、この用語を使うならば、通時的変化まで論じざるを得なくなるからである．したがって、ここでは意味変化の結果として「意味転移」という用語を用いることとする．「意味変化」の結果は、意味範囲の変化に焦点を当てると大きく「一般化（generalisation），特殊化（specialization），意味の移動（transfer）」に分けることができる（Paul 1880/1891）．狭い意味での「意味転移」は「意味の移動（transfer）」のみを指すが、本稿においては「一般化」「特殊化」「意味の移動」を含む広い意味で「意味転移」を用いる．

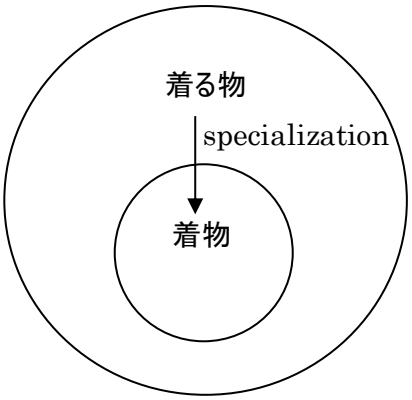


図 2. 「着物」における意味の特殊化

例えば、「買い物類」（例：贈り物，調べ物，忘れ物など）に比べ「着物類」（例：巻き物，建物，乗り物など）に意味転移がより活発に起きている．上の図 2 で示しているように、「着物」は「着る物」という修飾関係から生じたものであると推測されるが、意味の縮小（narrowing）、すなわち特殊化（specialization）が起きており、意味転移の前と同一の意味を表していない（着物<和服>≠着る物）．

一方、湯本（1977）は複合語には、要素の意味とその関係から組み立てられる「くみあわせ性」と、要素の意味とその関係性から全体の意味をひきだすことのできない「ひとまとまり性」があると指摘した[57]．このような「くみあわせ性」と「ひとまとまり性」を[V+N]型複合名詞に適用して考えてみることができる．

57 湯本（1977）の「くみあわせ性」および「ひとまとまり性」は、ソシュール（1910/2017）の「相対的な恣意性（arbitraire relatif）」および「絶対的な恣意性（arbitraire absolu）」と類似した概念であると言える．ソシュール（1910/2017）では、「相対的な恣意性」の例として複合語「dix-neuf（19）」は、語構成要素である「dix（10）」と「neuf（9）」を喚起するため、シニフィアン（signifiant；記号表現・能記）とシニフィエ（signifié；記号内容・所記）の関係が有縁的（motivé）であ

例えば、「買い物」の場合は「物を買う」という行為だけを表すため、前項要素の動詞である「買う」をもう一度使った「*買い物を買う」という表現は成立しない．つまり、前項要素の「買い」を動詞として認識し、「買い物」をくみあわせ的な意味として認識していると言えよう．反面、意味転移が起きてひとまとまり性を持つ「着物」の場合、「モノ名詞（実体性名詞）」であるため、「物を着る」という行為を表すことはできない．そして、前項要素の動詞である「着る」をもう一度使い「着物を着る」（VN を V）のように表現することができる．このことから、前項要素の「着」は動詞として認識できず、「着物」というひとまとまり的な意味として認識されることが分かる．このように、「ひとまとまり性」が強い名詞は名詞的な属性（実体性）だけを持つことが予想される．それに対して、くみあわせ的な意味を持つ「買い物」に機能動詞が結合した場合は、「買い物する→物を買う」のように語構成要素の本来の意味から大きく離れていない．

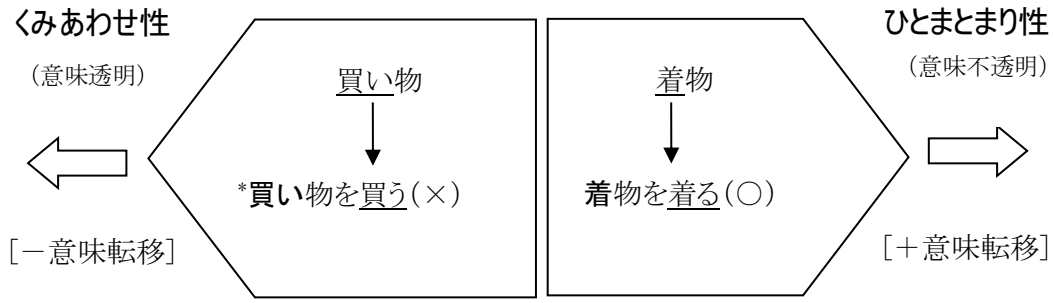


図 3.　意味転移の可否の判断

要するに、「買い物」と「着物」は意味的透明性（semantic transparency）において相違が見られる．以上の図 3 は、左側に行くほど「くみあわせ性[－意味転移]」に近く、意味が透明（語構成要素から意味が予測できる）であるが、右側に行くほど「ひとまとまり性[＋意味転移]」に近く、意味が不透明（語構成要素から意味が予測できない）であることを表している．つまり、意味転移が起きて、広い意味で用いられていた意味が狭くなること（特殊化）により、意味が不透明になる際には動作性を有することは難しいが、意味が透明で

るとしている．これは、複合語の構成要素から、その意味が類推できるという点で、「くみあわせ性」に類似している．それに対して、「絶対的な恣意性」の例として単純語「vingt（20）」は、シニフィアンとシニフィエの関係が無縁的（immotivé）であるとしている．これは、語構成要素からその意味が類推できないという点で、「ひとまとまり性」に類似していると言えよう．

ある場合は、複合名詞の内部の動詞連用形における本来の動詞の属性が（例えば、機能動詞によって）よみがえってくるということである.

3. 4　日本語[V+N]型複合名詞における文法的関係

3. 2 では韓国語との対照を通して、日本語[V+N]型が帯びる動作性は、複合名詞の内部構造（前項と後項との関係）が項関係にあることと関連があることが確認できた. さらに、3. 3 では日本語[V+N]（動詞連用形+名詞）型には動作性名詞も存在するが、意味転移（特に特殊化）により、動作性をそもそも帯びず「モノ名詞（実体性名詞）」としてのみ用いられる非動作性名詞も存在することが分かった. このように、日本語と韓国語の間のみならず、日本語内にも[V+N]型複合名詞に動作性の相違が見られる.

さて、日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞における動作性の相違が、複合語内部の意味・文法的関係によるものであれば、同様に日本語内でも適用できるだろう. そこで、本節では日本語[V+N]型の動作性名詞と非動作性名詞を意味・文法的関係により説明することで、複合名詞の内部構造と動作性との関連性を調べる.

複合語の内部に見られる文法的・意味的関係（影山 1993：193-194）である並列関係、修飾関係、項関係の 3 つのうち、[V+N]型複合名詞の内部では、修飾関係および項関係のみが見られる. そのため、修飾関係および項関係にある日本語[V+N]型複合名詞を中心に、動作性名詞とそもそも動作性を帯びない非動作性名詞の例を挙げ、考察を行なう.

先ず、動作性名詞の「買い物, 洗い物」の例を見てみると[58]、前項（V）と後項（N）は両者とも「目的語-述語」という項関係にあることが想定できる. 一方、「買い物」は一般的に「買う物」あるいは「買った物」という「モノ名詞（実体性名詞）」として用いられないのに対

58 「買い物」と「洗い物」は機能動詞「する」とアスペクト的名詞「際」と共起する例が比較的多く見られる.『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』の検索結果、「買い物」は機能動詞「する」と共起する例が 814 例、「～の際/時」と結合する例は 45 例が現れた. そして、「洗い物」は機能動詞「する」と共起する例が 37 例、「～の際/時」と結合する例は 1 例が現れた. さらに、日本語辞典である松村(編)（2006）の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕と小学館国語辞典編集部(編)（2012）の『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕においても「買い物」と「洗い物」は「～すること；買うこと, 洗うこと」という「デキゴト名詞（非実体性名詞）」として記述している.

して[59]、「洗い物」は、内部構造が「修飾語-被修飾語：洗う（べき）物」という修飾関係にもあるため、「モノ名詞（実体性名詞）」としても用いられる.

(14) 日本語:　　**買い** $_{V'}$　**物** $_{N}$
《意味》　　物を　　買う
?? 買う物 / 買った物
《文法的関係》　目的語 － 述語
?? 修飾語 － 被修飾語

(15) 日本語:　　**洗い** $_{V'}$　**物** $_{N}$
《意味》　（食器などの）物を　　洗う
（食器など）　洗う（べき）物
《文法的関係》　目的語 － 述語
修飾語 － 被修飾語

以上のように「買い物」は「目的語-述語」という項関係のみを持つが、「洗い物」は項関係と修飾関係のいずれをも持つことができる.

次に、「モノ名詞（実体性名詞）」のみに用いられる非動作性名詞の「着物，逃げ道」の場合、前項（V）と後項（N）は「修飾語-被修飾語」という修飾関係にある.「逃げ道」は「*道が逃げる」という項関係は意味的制約により想定できない[60]. 一方で、「着物」は「物を着る」という項関係を想定できるように見える. しかしながら複合名詞の内部における意味・文法的関係を見ると、「着物」と「逃げ道」のどちらも項関係にないと解釈できる.

59 日本語母語話者の中には、「買い物がある」と言えることから、「買い物」を「買う（べき）物」という意味の「モノ名詞（実体性名詞）」としても使えるという意見もあった. しかし、「買い物」を「買う（べき）物」という意味で用いるのは日本語として不自然という意見もあり、日本語母語話者の意見が分かれた.「デパートで買い物がある」と言えることから、「会議室で会議がある」のように、「デキゴト名詞（非実体性名詞）」として「買い物がある」という文が成立する可能性も否定できない. 日本語辞典（『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』）では、「買い物」を「～すること」という「デキゴト名詞（非実体性名詞）」としても記述しているが、「～するもの」「～したもの」という「モノ名詞（実体性名詞）」としても記述している. しかし、日常会話で「買い物」は、「デキゴト名詞（非実体性名詞）」として用いられるのが一般的であり、「モノ名詞（実体性名詞）」として用いられるのは、一般的な使い方ではないと考えられる.

60 動詞「逃げる」は通常、人や動物などの有情名詞を主語として取る意味的制約があるため、無情名詞「道」を主語とする「*道が逃げる」は非文である.

(16) 日本語:　　**着** V'　　**物** N
《意味》　　*物を　　着る
　　着る　　物
《文法的関係》　　*目的語 – 述語
　　修飾語 – 被修飾語

(17) 日本語:　　**逃げ** V'　　**道** N
《意味》　　*道が　　逃げる[61]
　　逃げる　　道
《文法的関係》　　*主語 – 述語
　　修飾語 – 被修飾語

動作性名詞は内部構造が(修飾関係にありながらも)項関係にあるが、「モノ名詞(実体性名詞)」のみに用いられる非動作性名詞の場合、内部構造が常に修飾関係にあることが分かる. しかし、「逃げ道」のように修飾関係にあると明確に分類できるものがある反面、「着物」のように、一見文法的関係としては項関係にあると想定できるが、内部の意味的関係を考慮に入れると、修飾関係のみに現れると見るべき例が存在する. つまり、項関係にあると想定できる複合名詞であるとしても、常に動作性を帯びるとは断言できない. 複合名詞の内部構造が項関係にあることと動作性とは深い関連を示しているが、意味から離れて項関係と動作性の関係を論じることはできないと言える.

さらに、実際の複合名詞の例を見てみると、動作性名詞と非動作性名詞に明確に区別できない場合がある. 例えば、「炒め物, 織物」などは日本語辞典(『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』)では「モノ名詞」、すなわち「実体性名詞」としてのみ記述しているにも関わらず[62]、動詞「する」およびアスペクト的名詞「中, 途中」などとも共起する例が見受けられる.

(18) a. 今朝は、ルンルン織物して<u>て</u>…(中略)はなちゃんのお布団にするの…
〈BCCWJ/OY14_31196〉

61 「(その)道を逃げる」や「道に(沿って)逃げる」のように項関係にあるとも想定できるが、複合名詞の構成要素だけで項関係を成すことができない場合は、修飾関係のみに現れると見なした.
62 以下は松村(編)(2006)の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕での記述である.
「炒め物:油で炒めた料理の総称.
織物:①たて糸とよこ糸を組み合わせて, 機で織った布. 原料により綿織物・絹織物・毛織物など.
②種々の地紋・浮き紋を織り出した絹織物. また, それで仕立てた衣服. 」

b. 織物の途中に分からない所や難しい所が出てきた時には、即対応できます.
〈Yahoo!検索/チイコミ!〉

(19) a. 以前は、揚げ物や炒め物をしても、からりとした料理に仕上がっていたはずなのに、近頃はどうもベトついた料理に仕上がってしまうことが多いと感じて …
〈google 検索/はてなブログ〉
b. 先日炒め物中の不注意からレミパン(フライパン)を焦げ付かせてしまいました. 〈Yahoo!検索/Yahoo!知恵袋〉

以上のように、動作性名詞と非動作性名詞の区分が難しい例が存在するため、動作性の線引きは非常に難しいと言える.

3. 5 日本語[V+N]型複合名詞の分類と動作性

これまで日本語の[V+N]型複合名詞が動作性を帯びるためには、意味転移が起きていないこと(意味的条件)と、複合名詞の内部構造が項関係にあること(文法的条件)が必要であることを考察してきた. それでは、このような条件が、以上で考察してきた例だけでなく、すべての日本語の[V+N]型複合名詞において適用できるかを検証する必要がある.

そこで本節では、日本語[V+N]型動作性名詞における意味転移の可否ならびに、項関係が、動作性といかに関連しているかを調べる. そのため、まず、動作性名詞か非動作性名詞かを判断する段階で、意味転移の可否を調べる. 意味転移は動作性と直接関わる要素であるためである[63]. そして、複合名詞内部の文法的関係により、修飾関係と項関係にさらに分類し、その結果が動作性の判断結果(動作性名詞か非動作性名詞)とどのような関連性を持つかを検討する. これにより、[V+N]型複合名詞の内部における意味・文法的関係と動作性との関連性が明確に見えてくることが期待される.

日本語[V+N]型複合名詞の例を選定するため、まず松下(2011)の『日本語を読むための語彙データベース(VDRJ)ver.1.1(研究用)重要度順語彙リスト 60894 語』の見出し語から日本語の[V+N]型複合名詞(991 語)を抽出した. 日本語[V+N]型複合名詞の

63 「デキゴト名詞(非実体性名詞)」の中には動作性を帯びるものが多いことに対して、「モノ名詞(実体性名詞)」の場合は動作性を帯びない.

数があまりにも多いため、これらの複合名詞すべてを対象に動作性名詞の判断基準を適用するのは困難である．そこで、金（2008：70-74）より抜粋した 62 例と文化庁（1990）の『外国人のための基本語用例辞典第三版』より抽出した 46 例、そして田中（1990：64-65）で提示する「動詞連用形+物」の例 18 例、そして筆者が付け加えた 19 例[64]をベースに（【付録 2】を参照）、[V+N]型複合名詞の例を合計 110 例に絞った[65]．動作性の判断は 2．3 で提示した判断基準と 3．3 の図 3 で示した意味転移の可否を調べる方法を用い、（ⅰ）機能動詞「する」との共起の可否（「VN をする」と「VN する」）、（ⅱ）意味転移可否（VN を V）、（ⅲ）アスペクト的名詞との共起の可否（VN の際）を調べる．

まず、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Comtemporary Written Japanese： BCCWJ）の検索ツールである「中納言」を用いて検索した結果、[V+N]型複合名詞の動作性の判断基準に適う複合名詞は「別れ話，買い物，考え事，揚げ物，洗い物」の 5 例しか見られなかった．全般的に（ⅰ）「VN をする」という構文を取ることができる場合に「VN する」も成立する傾向が見られた．そして、（ⅱ）「VN を V」という構文が成立する複合名詞の中にはおおよそ「着物，建物，履き物」のような「モノ名詞（実体性名詞）」が多いことが確認されたが、「贈り物，掛け声，言い訳」のような辞書で「デキゴト名詞（非実体性名詞）」として記述されている例も見られた．なお、「贈り物，掛け声，言い訳」などは、機能動詞「する」ならびにアスペクト的名詞「際」と共起できることから、動作性名詞であると考えられる．つまり、動作性名詞でありながらも（ⅱ）「VN を V」構文が成立する可能性もあるということである．そして、（ⅲ）「VN の際」の用例の中には「着物，建物」のような「モノ名詞（実体性名詞）」もあったが、これらの実体性名詞は動作性名詞にならないため、さらに検討が必要である．

以上から、動作性名詞は（ⅰ）「VN をする」構文を取ることができるなら、「VN する」も成り立つ可能性が高く、（ⅱ）「VN を V」と（ⅲ）「VN の際」は意味と文脈により成立する場合と成立しない場合があることが確認できた．したがって、本稿では動作性の判断基

64 3．4 の表 4 で括弧の中に示した「動詞連用形+名詞」の例として、以下のようなものがある．

着物，巻き物，食い物，食み物，建物，和え物，漬け物，煮物，炒め物，冷やし物，残り物，買い物，贈り物，頂き物，もらい物，落し物，探し物，拾い物，洗い物

65 研究対象を絞るため、本稿と関連した資料と照らし合わせ、共通して現れる[V+N]型複合名詞を中心に抽出した．ただし、参考の資料から動作性名詞であると考えられる複合名詞は、筆者の判断により追加した．

準に以下のような優先順位をつけることとする．括弧のなかの○は成立するという意味であり、×は成立しないという意味である．

(20) A. 動作性名詞：VN をする(○)>VN する(○)>VN を V(×)>VN の際(○)
B. 非動作性名詞：VN をする(×)>VN する(×)>VN を V(○)>VN の際(×)

以上の基準 A に適う場合は動作性名詞であると判断できるが、逆に基準Bに適う場合は非動作性名詞であると判断される．

しかし、「買い物」以外は用例も少なく、コーパスの用例だけでは動作性名詞の判断が難しかった．そこで、日本語母語話者の内省による動作性の判断が必要となった．日本語母語話者の判断においても揺れが生じるため、10～30 代の日本語母語話者の 30 名[66]を対象にアンケート調査を実施することにした．便宜上、アンケート調査は以上で選定した[V+N]型複合名詞(110 例)から実体性名詞(40 例)を除外した 70 例を対象とする(アンケート調査票は【付録 3】を参照)．日本語辞典である松村(編)(2006)の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕と小学館国語辞典編集部(編)(2012)の『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕での記述を参考とし、「～すること」と記述しているものは「デキゴト名詞(非実体性名詞)」であり、動作性名詞として見なせる可能性が高いものであるためアンケート調査の対象とする．しかし、辞書で「～するもの」という「モノ名詞(実体性名詞)」として記述しているものは実体性名詞であるため、動作性名詞として見ることは難しいと判断し、対象から除外した．ただし、「動詞連用形+物」型複合名詞は、3．4 で考察したように辞書では「モノ名詞(実体性名詞)」として記述していても、機能動詞「する」とアスペクト的名詞と共起し得る場合が存在するため(織物、炒め物など)、「動詞連用形+物」型複合名詞はすべてアンケート調査の対象とする．なお、本稿は項関係にあることと動作性との関係性を調べるため、日本語辞典(『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』)で「～するもの」という「モノ名詞(実体性名詞)」として記述していても、項関係にあると想定できる例(飼い犬，切り餅，尋ね人，つり棚，連れ子，持ち味，掛け声など)は、筆者の判断でアンケート調査の対象に含めた．

66 日本語母語話者 30 名を対象に 2015 年 7 月に実施した．日本語母語話者 30 名のうち、男性は 17 名、女性は 13 名であり、当時 10 代が 2 名、 20 代が 18 名、30 代が 10 名であった．出身は東京都が 12 名、神奈川県が 4 名、群馬県が 3 名、大阪府が 2 名、宮城県が 2 名、千葉県・静岡県・栃木県・新潟県・福島県・兵庫県・北海道がそれぞれ1名である．

調査は被験者の内省により文が成立する場合は「○」、文が成立しない場合は「×」、どちらとも判断がつかない場合は「△」を付けてもらった．アンケート調査の結果は人によりばらつきが激しく、答えの一貫性のないものが多く見られた．さらに、30 人全員の答えが完全に一致する複合名詞は 1 つも見られなかった．

したがって、本稿では動作性を判断するために、過半数が選んだ答え[67]の傾向を（20）に示した優先順位を反映し、評価することとする．これによる動作性の判断基準を以下表 5 に示す．波括弧の中は本調査では現れなかったタイプである．

表 5. [V+N]型複合名詞における動作性の判断基準表

＋動作性	○○×○，○○△○，○○×△，○○△△
±動作性	その他（○○○○，○×○×，××××，○×○○，○××○など）
－動作性	××○×，××△×，｛××○△，××△△｝

以上の動作性の判断基準に従い、[V+N]型複合名詞（110 例）をまず「動作性名詞（＋動作性）」「準動作性名詞（±動作性）」「非動作性名詞（－動作性）」に分類する[68]（表 5 の動作性の判断基準表によるアンケート調査の結果は【付録 4】を参照）[69]．次に、複合名詞内部の文法的関係により、修飾関係と項関係に再分類する．ただし、主述（主語-述語）関係にある[V+N]型複合名詞は、目述（目的語-述語）関係にある[V+N]型複合名詞

67 ただし、○と×が同点の場合は△と処理する．

68 本稿で選定した[V+N]型複合名詞（110 例）のうち、アンケート調査の対象から除外した実体性名詞の 40 例は、「非動作性名詞（－動作性）」として分類する．

69 【付録 4】でアンケート調査の結果は、「○」「△」「×」の回答数をそれぞれ右側に示す．例えば、「○」と答えた人が 12 名、「△」と答えた人が 5 名、「×」と答えた人が 3 名であれば、「○12,△5,×3」のように示す．そして、「テスト結果」の欄では、各欄で過半数のものをまとめて表す．この時、過半数というのは、「△」の数を含めた過半数であるため、例えば「○12,△5,×3」の場合は「○」として処理する．ただし、「○11,△8,×11」のように、「○」と「×」が同点である場合は、「△」として処理する．最後に「判断」の欄には、動作性名詞（＋動作性）は「動作性」、準動作性名詞（±動作性）は「準動作性」、非動作性名詞（－動作性）は「非動作性」という動作性の判断の結果を記す．例えば、下記の表で「忘れ物」は、各欄で過半数のものを表すと、テスト結果は「○○×△」になる．このテスト結果「○○×△」は、表 5 の動作性の判断基準表によると、「＋動作性」であることを意味するため、最終的に「忘れ物」は「動作性」（すなわち、動作性名詞）と判断する．

VN	VN をする	VN する	VN を V	VN の際	テスト結果	判断
忘れ物	○30,△0,×0	○26,△1,×3	○6,△5,×19	○11,△8,×11	○○×△	動作性

のように、二通りの意味を持たないため、主述関係にあると解釈できる例は修飾関係にあると見なす[70]. すなわち、項関係にあると判断するのは、主語以外の必須項（obligatory argument）を後項要素とする場合に限定する. 動作性の有無と複合語内部の文法的関係により日本語[V+N]型動作性名詞を分類した結果を以下の表 6 に示す. 後項要素が動作性名詞の場合は下線を引いて示し、例外は波括弧の中に示す. そして、準動作性名詞の中でも括弧の中の名詞は、日本語辞典（『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』）では「モノ名詞」として記述しているため、「実体性名詞」と見られるものである.

70 本稿で主述関係にあると想定できる例は、「空き缶，空き部屋，盗人，濡れ髪，残り物」の 5 例のみであった. しかし、これらの例はすべて「N が V する（缶が空いている）」というデキゴトを表すものではなく、「V する N（空いている缶）」という「モノ（実体性）」だけを指している. 主述関係にあると想定できる[V+N]型複合名詞はすべて実体性名詞であり、機能動詞「する」と共起することができないため、本稿では主述関係にあると解釈できる例は修飾関係にあると見なした.

表 6. 日本語[V+N]型複合名詞の分類結果（合計 110 例）

	修飾関係	項関係
動作性名詞 （＋動作性）	笑い話，別れ話，{迷い箸}	急ぎ足，買い物，借り物，考え事，忍び足，拾い物，忘れ物，寄り道，落し物
準動作性名詞 （±動作性）	[なし]	（置き土産），（織物），（刷り物），連れ涙，見せ物，読み物，言い訳，頂き物，入れ子，贈り物，駆け足，掛け声，差し水，授かり物，捨て身，立て膝，作り話，抜き荷，塗り物，仕立て物，（揚げ物），（焼き物），（和え物），（漬け物），（煮物），（炒め物），（冷やし物），書き物，縫い物，編み物，調べ物，炊き物，片付け物，もらい物，探し物，洗い物
非動作性名詞 （－動作性）	宛て名，空き缶，空き部屋，生き物，入り口，入り用，売り場，落とし穴，折り目，帰り道，変わり目，効き目，切れ味，切れ端，透き間，剃り跡，継ぎ目，出来事，出口，泣き顔，泣き声，似顔，逃げ道，盗人，濡れ髪，寝床，残り物，乗り心地，働き者，結び目，持ち主，焼け跡，行き先，呼び声，笑い顔，忘れ形見，上がり口，凝り性，通り魔	入れ物，飼い犬，数え年，着物，切り餅，下り坂，建物，尋ね人，食べ物，つり棚，連れ子，飲み物，乗り物，曲がり角，召し上がり物，持ち味，持ち物，売り物，履き物，巻き物，食い物，言い値，通り道

以上から、動作性名詞として分類されたものはすべて「デキゴト名詞（非実体性名詞）」（例：急ぎ足，考え事など）であり、非動作性名詞として分類されたものはすべて「モノ名詞（実体性名詞）」（例：着物，建物など）であることが分かる．さらに、動作性名詞および準動作性名詞として分類されたものは「買い物，贈り物：N を V（物を買う，物を贈る）」のように項関係にあるという共通点が見られる．それに対して、非動作性名詞として分類されたものの多くは「売り場，泣き顔：V 連体形 N（売る場，泣く顔）」のように修飾関係にある．これらの例を通して[V+N]型の複合名詞の意味ならびに内部構造が項関係にあることと動作性とは深い関係があることが改めて確認できる．

一方、項関係にある[V+N]型複合名詞の後項要素には「物」が現れる例が断然多く、この場合に動作性名詞も多く現れる.「動詞連用形+物」型複合名詞は、項関係にあると解釈されやすいため、動作性を帯びやすいと考えられる. それに対して、修飾関係にある[V+N]型複合名詞は、後項要素に身体部位(例:泣き顔, 笑い顔, 濡れ髪など)や場所(例:空き部屋, 逃げ道, 寝床, 行き先など)が現れる例が目立つ. この場合、意味上そもそも項関係にあるとは想定できないため、動作性を帯びにくいと考えられる. しかし、「笑い話, 別れ話, 作り話」は修飾関係にあるにも関わらず、動作性を示している. これは後項要素「話」が動作性名詞であるため、複合名詞の全体が動作性を帯びるようになったわけである. このように、修飾関係にある[V+N]型複合名詞は後項要素が動作性名詞である場合に限り、動作性を持つことができる.

ここで、複合語の内部に見られる文法的関係と動作性の関係をまとめると、修飾関係にある[V+N]型複合名詞は基本的に動作性を持つことができないが、項関係にある[V+N]型複合名詞の中には動作性を持つものが存在する. つまり、複合語内部の文法的関係が項関係にある際、動作性を帯びることができると言える.

一方、修飾関係にあるにもかかわらず、動作性を持つ例として「迷い $_{V}$箸 $_{N}$」がある. これは「N が V:箸が迷う」という主述(主語-述語)関係にあると見ることもできる. しかし、実際に「迷い箸」をする主体(動作主)は「人」であるため、ここで「箸」は動作が働きかける「対象」あるいは「道具」であると見ることもできるだろう. いずれにしても、このような構成は単純に修飾関係を持っているとは断言できないため、例外として処理した.

以上から、[V+N]型複合名詞に意味転移が起きず、複合語内部の構造が項関係を有する際、動作性を持つことができるということについて再度確認することができた. しかし、まだ残された問題として、動作性名詞でも非動作性名詞でもない中間的なものである準動作性名詞が存在するということである. 本研究で準動作性名詞として判断されたものは人によって判断が分かれ、言葉に揺れがあることが確認できた. これらは、まだ意味が変化していく過程にあるのか、それともその語構成により動作性名詞と非動作性名詞のいずれの機能をも担うことができるのかは、今後さらなる検討が必要であろう.

3. 6　3章のまとめ

本章では、日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞が同じ構成を持つにも関わらず、動作性において相違が見られることに注目し、日本語と韓国語の[V+N]型複合名詞の内

部における意味・文法的関係を考察した．その結果、日本語[V+N]型複合名詞の内部構造が修飾関係のみならず、項関係にも現れるため、動作性を帯びやすい反面、韓国語[V+N]型複合名詞の内部構造は修飾関係のみに現れ、動作性を持つことができないことが分かった．

つまり、[V+N]型複合名詞が動作性を帯びるためには、複合語内部の意味・文法的関係が項関係にあることが前提になると言える．しかし、項関係にある日本語の[V+N]型複合名詞が、必ずしも動作性を帯びるわけではなく、意味転移が起きると動作性を維持することができなくなる．

本章で明らかにした[V+N]型複合名詞が動作性を持ち得る条件を次のようにまとめることができる．

1. 意味転移が起きず、意味の結合が透明であること．
2. 複合語内部の構造が修飾関係のみならず、項関係（特に目述関係）にもあること．

表 7.　[V+N]型複合名詞の動作性の条件

	意味的条件	文法的条件
＋動作性 （買い物類）	－意味転移	＋項関係，±修飾関係
－動作性 （着物類）	＋意味転移	±項関係，＋修飾関係

一方、[V+N]型複合名詞を動作性により分類した結果、動作性名詞（＋動作性）と準動作性名詞（±動作性）、非動作性名詞（－動作性）の 3 つに分けることができた．このように動作性名詞と非動作性名詞の中間的な存在が確認できたが、この準動作性名詞の動作性にも連続的段階性（gradience）が見られる．言い換えると、より動作性に近いものがあり、より非動作性（実体性）に近いものがあるため、その境界線は明確ではない．このような準動作性名詞を究明することで、[V+N]型複合名詞が持つ動作性の正体がより明らかになることが期待される．なお、[V+N]型複合名詞の構成要素間の意味関係と動作性とも関わりがあると予想される．例えば、語構成要素が「N を V する対象：食べ物，着物」と「N を V した結果物：建物，切り餅」という意味関係を持つ場合は「モノ名詞（実体性

名詞）」のみに用いられる非動作性名詞が多く見られ、「N を V する行為：捨て身，買い物」という意味関係を持つ場合は動作性名詞が多く見られる．[V+N]型複合名詞における準動作性名詞の存在ならびに語構成要素間の意味関係と動作性との関連性については今後の課題とする．

第4章

[N+V]型複合名詞の語構成と動作性

日本語と韓国語の「名詞+動詞の名詞形」(以下[N+V]または[NV]と呼ぶ)型複合名詞の中には、動作性を帯びる「動作性名詞」と動作性をそもそも帯びない「非動作性名詞」がそれぞれ存在する.

典型的に行為を表す「動作性名詞」は機能動詞と共起することができる反面、非動作性名詞はそうではない. 例えば、日本語の[N+V]型である「花見」は機能動詞「する」と共起することができるため動作性名詞であると考えられるが、「羊飼い」「船乗り」などは機能動詞と共起することができず、実体性を表す「有生名詞(人名詞)」であるため、非動作性名詞であると考えられる. 同様に、韓国語の[N+V]型である「달맞이(tal-maci;lit. 月-迎え→月見)」「눈싸움(nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦)」「글짓기(kul-ciski;lit. 文-作り→作文)」などは機能動詞「하다(hata;する)」と共起することができるため動作性名詞であると考えられるが、「귀걸이(kwi-keli;lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング)」「밑그림(mith-kulim;lit. 下-描き→下絵)」「겉보기(keth-poki;lit. 表-見→見かけ)」などは機能動詞「하다(hata;する)」と共起できず、動作性をまったく示さない非動作性名詞である[71]. このように、同様の形式[N+V]型複合名詞でありながらも、動作性において相違が見られる.

したがって、本章では、両言語における[N+V]型複合名詞の様々な類型を考察することにより、動作性名詞とされるものが動作性を示すことができる意味・文法的条件を明らかにすることを目的とする.

---

71 動作性名詞の判断のため、主に機能動詞と共起できるか否かを調べることができるが、2. 3 でも述べたように、実体性名詞の中には「する/하다(hata)」と共起できる例(例:マスクをする)が存在する. その場合は、アスペクト的名詞やアスペクト的動詞と共起できるか、そして副詞の修飾を受けられるかを補助的に用いて、動作性名詞であるか否かを判断することができる. 例えば、韓国語の「귀걸이(kwi-keli;lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング)」は、「하다(hata;する)」と共起し、「귀걸이를 하다(イヤリングをする)」のように使える. しかし、アスペクト的名詞やアスペクト的動詞とは共起できず、副詞の修飾も受けることができないため、「귀걸이(kwi-keli;lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング)」は実体性名詞であり、動作性は全く帯びない非動作性名詞であることが分かる.

そのために、日本語の[N+V]型複合名詞（4．1）に関しては、まず先行研究を概観（4．1．1）してから、複合名詞の類型により日本語の[N+V]型複合名詞を分類（4．1．2）し、複合名詞の内部における文法的関係による日本語の[N+V]型複合名詞の動作性を考察（4．2）する．次に、韓国語の[N+V]型複合名詞（4．3）に対しても同様に、先行研究を概観（4．3．1）してから、複合名詞の類型により韓国語の[N+V]型複合名詞を分類（4．3．2）し、複合名詞の内部における文法的関係による韓国語の[N+V]型複合名詞の動作性を考察（4．4）する．そして、最終的には日本語と韓国語における[N+V]型複合名詞を語構成の観点から対照（4．5）し、最後に本章の内容をまとめる（4．6）．

4．1　日本語[N+V]型複合名詞

4．1．1 日本語[N+V]型複合名詞に関する先行研究

本節では、日本語における[N+V]型複合名詞の先行研究を概観する．日本語[N+V]型複合名詞に関する先行研究は、主に意味の観点から行われ、複合名詞の意味分類または複合名詞の構成要素間の意味関係を中心に動作性を考察している．

西尾（1961）は、動詞の名詞化の類型を、意味の観点から、次のように分類する．

（21）①動作・作用など
　a．動作・作用そのもの〔何々スルコト〕
　　泳ぎ・調べ・貸出し・繰上げ・寝射ち・乗り降り・格上げ・味うけ
　b．動作・作用の内容〔何々スルトコロノコトガラ〕
　　考え・教え・望み・願い・悩み・祈り
　c．動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど
　　金使い（が荒い）・滑り（がいい）・売れ行き（がすごい）・出来（米の―）・当たり（が柔い）
②動作・作用の所産・結果〔何々シタモノ〕
　a．他動性の動詞から〔何カヲ何々シタ結果デキタモノ〕
　　包み・貯え・揚げ（=揚げ物）・堀・書きつけ・綴じ込み
　b．自動詞の動詞から〔何カガ何々シタ結果デキタモノ〕
　　余り・固まり・氷・集まり（点の―）・くぼみ
③動作・作用の主体〔何々スルモノ・人，ソレ（ソノ人）ガ何々スル〕
　a．主体が人である場合〔何々スル（コトヲ業トスル）人〕
　　どもり（=どもる人）・すり・見習い・附添い・船乗り・酔払い
　b．主体が人以外である場合〔何々スルモノ〕
　　流れ（=流れるもの）・妨げ（=妨害物）・支え（支えるもの）

④動作・作用の客体〔何々スルモノ・人，ソレ（ソノ人）ヲ何々スル〕
つまみ・差入れ（=差入れ品）・手提げ・下ばき・外出着・雇い（=雇員）
⑤動作・作用の手段〔何々スルタメノモノ，ソレデ何々スル〕
はかり・はたき・カン切り・ネジ回し・靴下止め
⑥動作・作用の向けられる目標〔何々スル（タメノ）モノ，ソレニ何々スル〕
こぼし・糸巻き・一輪差し・ようじ入れ・洋服掛け
⑦動作・作用の行われる場所〔何々スルトコロ〕
通り（=道）・果て（地の—）・受付（=受付ける所）
⑧動作・作用の行われる時間〔何々スルトキ〕
暮れ・日暮れ・夜明け・夜更け・終り

（西尾 1961：70-71）

西尾（1961）では連用形名詞について、基本的には「何々スルコト」という動作・作用を指す意味に名詞化されるが、時によってその動詞と何らかの意味で関連のある物事を表すことがあると述べているだけで、その関連性については詳しく触れていない.

奥津（1975）は、動詞由来複合名詞の構造を形態論ではなく、構文論の観点から考え、生成文法の立場から、複合名詞の生成のための変形規則を提案している. 下記の（22）のように、NV 型複合名詞は、NVN 型という三項複合名詞から、第三項を消去して生成されたものであると説明している（下線は筆者による）.

（22）a. 味ヲ ツケル コト ⇒ 味ツケコト ⇒ 味ツケ
b. カンヲ 切ル モノ ⇒ カン切リモノ ⇒ カン切り
c. モノヲ トル ヒト ⇒ モノトリヒト ⇒ モノトリ
d. 左ガ 利ク サマ ⇒ 左利キサマ ⇒ 左利き
e. 日ガ 暮レル トキ ⇒ 日暮レドキ⇒ 日暮レ
f. 水ガ タマッタ トコロ ⇒ 水タマリトコロ ⇒ 水タマリ

（奥津 1975：38）

しかし、奥津（1975）では、第三項が消去される条件を明確に示さず、複合名詞が多義的意味を持つという現象を記述しているだけで[72]、それについて十分な考察がなされたとは思えない.

72 奥津（1997：170）では、AdvV 型および AdvA 型の多義的意味を並列して記述している.
a. 早ク 起キル コト/サマ/ヒト ⇒ 早起キ
b. 共に 稼グ コト/サマ ⇒ 共稼ギ
c. ヨチヨチト 歩ク コト/サマ ⇒ ヨチヨチ歩キ

影山(1999)は、動詞由来複合語には、次の 3 つのタイプがあると指摘している.

(23)a. N+V 複合語が全体として名詞になる場合
山登り, あら探し
b. N+V 複合語が全体として動詞(述語)として働く場合
ジーパンを丸洗いする, 運賃を値上げする
c. N+V 複合語が全体として形容詞的に働く場合
大学出(の野球選手), 親譲り(の無鉄砲)
(影山 1999:118 より一部改変)[73]

つまり、(23a)は複合語の全体が単なる名詞になるタイプ、(23b)は複合語の全体が「する」を伴って動詞的に使われるタイプ、(23c)は複合語の全体が形容詞的に使われるタイプであると説明している. さらに、影山(1999)は、動詞由来複合名詞の意味により、モノ名詞とデキゴト名詞の 2 つに区別してから、モノ名詞の場合は再分類をしている.

(24)①モノ名詞
a. 結果・産物: 虫さされ, 虫食い
b. 人間: 金持ち
c. 道具: 爪切り
d. 場所: 犬走り(建物の軒下などでコンクリート敷きにした部分)
②デキゴト名詞: ワックスがけ, ゴミ捨て, 胸騒ぎ
(影山 1999:119 より一部改変)

このうち、モノ名詞は動詞がまずモノ名詞になってから、前項要素と結合したものであると分析し、一次複合語(語根複合語)としている. それに対して、デキゴト名詞は N と V が結合してまとまった出来事や行為を表すため、動詞由来複合語としている. このように、影山(1999)は実体性を表すモノ名詞は動詞由来複合語の研究対象からそもそも除外しているため、動詞由来複合語がどの場合に出来事や行為を表すことができるかについては、全く言及していない.

伊藤 & 杉岡(2002)は、動詞由来複合語を大きく、内項を前項要素とする「内項複合語」と、付加詞(adjunct)を前項要素とする「付加詞複合語」の 2 つに分け、複合語の

73 影山(1999)では、日本語と英語の対照研究であるため、英語における動詞由来複合語の例も挙げている. しかし、本稿は日本語と韓国語の対照研究であるため、英語の例は省略する. 以下(24)も同様である.

意味（とりわけ意味機能）や語構成要素間の意味関係に注目している．次の（25）は内項複合語をその意味により分類したもので、（26）は付加詞複合語を前項要素の意味により分類したものである．

（25）a．行為：金魚すくい，石投げ，米作り，草刈り，ボタンつけ，窓ふき，子育て，図面書き，棒倒し，缶けり，靴磨き，宝探し，花見，息づき，線引き，山登り，墓参り，波乗り，里帰り
b．現象：地滑り，崖くずれ，雪解け，雨降り，ガス濡れ，耳鳴り，胸焼け，人死に，日照り，燃料切れ，声がれ，人だかり，手荒れ
c．動作主：相撲とり，小説書き，風船売り，羊飼い，人形遣い，物取り，船乗り，酒飲み，ご用聞き，金貸し，客引き，音頭取り
d．道具：ねじ回し，霧吹き，栓抜き，日除け，眼鏡ふき，水かき，爪切り，ひげ剃り，帯留め，鍋つかみ，えんぴつ削り，インク消し，郵便受け，水入れ，箸置き，小銭入れ
e．特徴：金もち，うそつき，風呂好き，物知り，親思い，罪作り，クスリ嫌い，面食い，癇癪もち，父親似，親泣かせ
f．場所：車寄せ，もの干し，船止め，ゴミ溜め，船渡し，水たまり，日溜まり，船溜まり，足がかり
g．時間：夕暮れ，夜明け，夜更け，週明け，年明け

（伊藤 & 杉岡 2002：110-111）

伊藤 & 杉岡（2002：112）は、「行為」を表す（25a）の複合名詞は「をする」を伴って使われ、「現象」を表す（25b）の複合名詞は「がする，がある，になる」を伴って使われ、直接「する」と結合できないことから[74]、単なる普通名詞であると述べている[75]．一方、以下の（26）で付加詞複合語は、前項要素が（26d）「結果状態」や（26e）「材料」の付加詞（adjunct）である場合は「だ」を伴って状態述語として使われる場合が多く、前項要素が（26a-c）のように「道具，様態，原因」の付加詞（adjunct）である場合に限り、「する」と直接結合して動作性名詞になることを示している（伊藤 & 杉岡 2002：115-128）．つまり、

74 現象を表す(25b)の中で、「地滑り，崖くずれ，雪解け，ガス漏れ，耳鳴り，胸焼け，声がれ，手荒れ」などは「する」と共起でき、アスペクト的名詞やアスペクト的動詞（例：地滑りの瞬間，雪解け中，耳鳴りが始まる，声がれが続く）とも共起できるため、本稿においては動作性名詞として見るかについて検討が必要である．

75 特徴をあらわす（25e）の複合名詞は述語として「だ」とともに使われる（例：子もちだ）一方、形容動詞として「な」を取れる（例：うそつきな男）ものもあるが、「する」と直接結合できない（例：*訳知りする）、そして具体的なものを指す実体性名詞（25c,d,f,g）も「する」と直接結合できないため普通名詞であると説明している（伊藤・杉岡 2002：112-113）．

内項複合語は名詞として機能するが、前項要素が「道具・様態・原因」などを表す付加詞複合語は動作性名詞となり、複雑述語（complex predicate）[76]として機能すると述べ、動詞由来複合語の前項要素、とりわけ付加詞（adjunct）の種類によって、動作性が決まるとしている.

(26) a. 道具：ワープロ書き，のり付け，機械編み，手作り，水洗い
b. 様態：一人歩き，若死に，早食い，立ち読み，がぶ飲み
c. 原因：船酔い，所帯やつれ，仕事疲れ，霜枯れ，飢え死に
d. 結果状態：黒こげ，びしょ濡れ，薄切り，四つ割，白塗り
e. 材料：石造り，板張り，木彫り，モヘア編み，毛織り
（伊藤 & 杉岡 2002：115）

このような一般化（Sugioka 2002, 伊藤 & 杉岡 2002）に対し、由本（2014, 2015）は、[N+V]型複合名詞が動作性名詞（動名詞）となる条件は、前項要素（N）が内項か付加詞（adjunct）かということによるのではなく、複合名詞の外に表すべき内項を受け継いでいることだと主張し、以下の（27）のように後項要素（V）が三項動詞であるため満たすべき内項が残っている場合や（28）のように前項要素（N）によって新たに満たす項が生じる場合までも動作性名詞（動名詞）として容認されると指摘した.

(27) a. *(船に)救援物資を積む → 救援物資を船積みする
パック詰め，車庫入れ，棚上げ，湯通し，陸揚げ
b. このネタは*(客に)受ける → このネタは客受けする
親離れ，乳離れ，仲間入り，湯あたり，ベンチ入り
c. 大学に*(ランクを)つける → 大学をランク付けする
動機付け，色づけ，ワックスがけ，砂糖がけ，墨入れ
（由本 2015：87）

(28) a. 山菜の灰汁を抜く → 山菜を灰汁抜きする
値上げ，底上げ，値引き，幅詰め，色止め，品定め，頭出し
b. セーターの色が落ちた → セーターが色落ちした
気疲れ，気落ち，心変わり，格落ち，型崩れ，値下がり，底割れ
（由本 2015：87）

76 複雑述語とは、「1つの動詞に接辞や別の動詞をつけて新たな動詞を作り、複雑な出来事や行為を表現するもの」（影山(編) 2001:272）である.

一方、先行研究では機能動詞と直接結合する動名詞のみを動作性名詞としているが、本稿においては 2．3 でも述べたように、機能動詞と直接結合する複合名詞（例：値上げ，日焼け，水洗いなど）のみならず、「花見をする」のように助詞を介して機能動詞と共起する例までも含めて動作性名詞と見る．先行研究で機能動詞「する」と直接結合できる例のみを動作性名詞（動名詞）と見る理由は、「する」と直接結合できる例は複合語の外に項を受け継ぐことができるからである（例：車を水洗いする）．伊藤 & 杉岡（2002）および由本（2014，2015）で共通して、二項を取る他動詞を後項要素とする「目的語-他動詞」の関係にある複合名詞は、複合語の外に項を受け継ぐことができない（例：*お父さんを肩たたきする）とし、動作性名詞（動名詞）として容認しない．しかし、「目的語-他動詞」の関係にある例の中にも、機能動詞「する」と直接結合し、複合語の外に項を受け継ぐことができる例も存在する（例：台所を目隠しする，洋服を荷造りする）．二項動詞を後項要素とする「目的語-他動詞」の関係にある複合名詞は、前項要素には必然的に目的語（内項）が来るため、さらに必須項を取ることが難しいだけであって、それが動作性を帯びないからとは思えない．そこで、本稿では動作性名詞の範囲をより広くする必要があると考えたわけである．

本稿において動作性名詞と見る範囲が先行研究とは異なるため、新たに動作性名詞となる条件を設定する必要がある．したがって、伊藤 & 杉岡（2002）および由本（2014，2015）の動詞由来複合語における動作性名詞の一般化について再検討し、本稿における動作性名詞となる条件を明らかにする．

4．1．2 日本語[N+V]型複合名詞の類型分類

日本語の[N+V]型複合名詞の例を選定するために、松下（2011）の『日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）ver.1.1（研究用）重要度順語彙リスト 60894 語』の見出し語の上位 2 万語[77]から日本語の[N+V]型複合名詞（285 語）を抽出した[78]．

77 約 6 万語の見出し語のうち、上位 2 万語から選定した理由は、韓国語との対照のため、語彙数のバランスを合わせることもあり、また頻度が低い語彙は日常生活で一般的に使われないため、動作性の判断が難しいからでもある．

78 語源が不明である例（葉書，万引き，落書きなど）や共時的に分析できない例（鳥居，月明かり，家並みなど）、ならびに前項要素と後項要素間の意味関係が把握できない例（手違い，衝立て，

まず、[N+V]型複合名詞を2．3の動作性名詞の判断基準に従い、動作性名詞と動作性名詞ではないもの（非動作性名詞）に大別する．動作性名詞の判断基準としては、2．3 の「動作性のカテゴリカルな意味」により、機能動詞（する）ならびにアスペクト的名詞・アスペクト的動詞（中，始めるなど）との共起の可否という動作性名詞の構文的な特徴を用いる．そして、動作性名詞であるか否かの判断は、コーパス資料（『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』）および検索サイト（Yahoo! Japan, Google Japan など）を参考とし、且つ日本語母語話者[79]による確認を得て総合的に判断する[80]．

それから、[N+V]型複合名詞を語構成要素間の文法的関係により下記の（29）のように「主語-述語：主述関係」「目的語-述語：目述関係」「付加語（必須的付加語を含む）-述語：付述関係」に分けて分類する．例えば、「耳鳴り」のように N と V の関係が「N ガ V（耳ガ鳴る）」という主語と述語の関係を成している場合、主述関係にあるものと見なす．そして、「子育て」のように N と V の関係が「N ヲ V（子ヲ育てる）」という目的語と述語の関係を成している場合、目述関係にあるものと見なす．それ（主述関係および目述関係）以外のもの、すなわち「山盛り」のように N と V の関係が「N ノヨウに V（山ノヨウに盛る）」、あるいは「日焼け」のように「N ニ/カラ/デ/へ V（日ニ焼ける）」という付加語と述語の関係を成している場合は、付述関係にあるものと見なす．

（29）〈語構成要素間の文法的関係による類型〉
a．主述関係：N ガ V （耳ガ鳴る） 例）耳鳴り
b．目述関係：N ヲ V （子ヲ育てる） 例）子育て

目盛り，手伝い，間引き，区切り，目付き，度合い，年寄りなど）（計 58 例）は、[N+V]型複合名詞であると想定できないため、研究対象から除外した．

79 日本語母語話者 5 名（男性 2 名，女性 3 名）を対象に 2017 年から 2022 年にかけて動作性名詞の判断のための確認を得た．日本語母語話者の情報は以下のようである．この情報は本章（4 章）を含め、以下の章（5 章・6 章）において同様である．
A: 男性，群馬県出身，30 代前半~30 代半ば
B: 男性，北海道出身，20 代後半~30 代半ば
C: 女性，東京都出身，30 代前半~30 代半ば
D: 女性，静岡県出身，30 代前半~30 代半ば
E: 女性，新潟県出身，30 代前半~30 代半ば
ただし、日本語母語話者の動作性名詞の判断に揺れがある場合は、2．3 の動作性名詞の判断基準に従って 2 名以上が動作性名詞と判断する際に本稿では動作性名詞として分類する．

80 日本語における動作性名詞の判断は、本章（4 章）を含め、以下の章（5 章・6 章）においても、同様の方法を用いる．

c. 付述関係： N ノヨウニ V （山ノヨウに盛る）　例）山盛り
N ニ/カラ/デ/ヘ V （船ニ酔う）　例）船酔い

さらに、複合名詞の形態的な構成により類型分類する.「[N+V]型」を基本型とするが、その中には語構成要素が自立語または接尾辞として存在する場合がある. これらと区別し、以下の（30）のように分類する. ただし、形態上の判断（例えば、合成語であるか派生語であるかという判断）が難しい場合は松村(編)（2006）の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕および小学館国語辞典編集部(編)（2012）『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕での区分を参考にする.

（30）〈形態による類型〉[81]
a. [N+V]基本型： 後項要素が自立語でも接尾辞でもない　例） 花見
b. $[N+[V]_{suf}]$型： 後項要素（V）が接尾辞（suf）　例） 子連れ
c. $[[N+V]_V]$型： [N+V]の箇所が自立語（複合動詞）　例） 旅立ち

以上の類型により日本語の[N+V]型複合名詞を分類した結果を表 8 に、その分析結果の集計を表 9 に示す.

81 日本語[N+V]型複合名詞の中には、前項要素（N）が動詞に由来するものである、$[[V]_N+V]$型も存在するが、本研究では「思い遣り」と「お好み焼き」の 2 例しか現れなかった. $[[V]_N+V]$型は例が少ないだけではなく、前項要素（N）が自立語であるため、[N+V]基本型と全く同じ構成を成していると判断し、[N+V]基本型と統合した.

表 8. 日本語の[N+V]型複合名詞の分類

動作性名詞	主述関係	[N+V]基本型:値上がり，背伸び，仲直り，様変わり，神懸かり，身震い，息切れ，顔負け，人違い，日持ち，耳鳴り，雪解け
	目述関係	[N+V]基本型:手洗い，花見，手当て，子育て，手入れ，思い遣り，町作り，味付け，身動き，家出，手引き，金儲け，値上げ，裏返し，心遣い，口出し，後押し，裏打ち，子守り，手抜き，人殺し，目隠し，気兼ね，歯磨き，物言い，物作り，線引き，息抜き，荷造り，耳打ち，跡継ぎ，物真似，舌打ち，暇潰し，値下げ，気晴らし，板張り，仇討ち，腕組み，物思い，金貸し，手解き，旗揚げ，舵取り，品定め，顔合わせ，魚釣り，謎解き，石積み，皆殺し，月見，歯軋り，手出し，味見，口止め，咳払い，夜更かし，縄跳び，色分け，命拾い，足止め，鼠捕り，子作り，口付け，釘付け，品揃え，草刈り，身代わり
		[[N+V]$_V$]型:気遣い，裏付け，手放し，名指し，値引き，身じろぎ
	付述関係	[N+V]基本型:一人暮らし，手作り，日焼け，手助け，昼寝，手書き，先取り，下請け，後回し，田植え，歯止め，日帰り，独り歩き，手探り，前置き，共働き，上乗せ，里帰り，先送り，水割り，太刀打ち，塩漬け，逆戻り，手直し，前払い，水揚げ，水洗い，後戻り，仲立ち，独り占め，棚上げ，塩焼き，体当たり，一纏め，横這い，山積み，下書き，船酔い，手招き，黒塗り，天引き，夜泣き，無駄遣い，野放し，逆撫で，上書き，先延ばし，肩入れ，宮仕え，逆恨み，下働き，霧吹き，先駆け，足踏み，前触れ，先回り
		[[N+V]$_V$]型: 嫁入り，天下り，横取り，後退り，逆立ち，手渡し，旅立ち
非動作性名詞	主述関係	[N+V]基本型:夜明け，日差し，夕暮れ，気紛れ，木立ち，手遅れ，人込み，昼過ぎ，日当たり，気違い，水溜り，紙切れ，日暮れ，船着き，場違い，左利き，神隠し，肉付き，風向き，筋合い，頃合い，年明け，身寄り，歯並び，右利き，紋付き，筋違い，夜更け，肩凝り
		[[N+V] $_V$]型:気付き，目覚め
	目述関係	[N+V]基本型:命懸け，金持ち，目当て，言葉遣い，心持ち，身振り，値打ち，嘘吐き，表向き，手拭い，梅干し，剃刀，面持ち，絵描き，口振り，筋書き，物置，息遣い，風通し，渦巻き，湯飲み，目付け，蛸焼き，先行き，手振り，骨組み，税込み[82]，子持ち，気休め，酒好き，跡取り，背凭れ，卵焼き，命取り，手付け，窓越し，金切り，矢継ぎ，日取り，心成し，物干し，縄張り，肘掛け
		[N+[V]$_{suf}$]型:型通り，元通り，子連れ

82 日本語で「込み」は、一部の名詞の後ろに付いて接尾辞のように用いられるが、日本語辞典(『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』)では名詞として登録されているため、本稿では「込み」を後項要素とする複合名詞は[N+V]基本型として分類した.

		[[N+V]$_{V}$]型：腰掛け，目覚まし
	付述関係	[N+V]基本型：夏休み，下着，昼休み，手掛かり，缶詰め，後書き，手持ち，心当たり，奥行き，手取り，手答え，川沿い，一握り，顔触れ，沖合い，下敷き，手当たり，夕焼け，歯切れ，表通り，的外れ，水割り，物狂い，前書き，日増し，船乗り，手打ち，石造り，心積り，外付け，春休み，二人組，冬休み，心持ち，板挟み，肌着，首飾り，山盛り，先延ばし，口当たり，海沿い，手触り，町外れ，手提げ，目障り，お好み焼き，鞭打ち，前屈み，水浸し
		[N+[V]$_{suf}$]型：一通り，道連れ
		[[N+V] $_{V}$]型：心掛け

表 9. 日本語の[N+V]型複合名詞の分類結果の集計

分類	主述関係	目述関係	付述関係	合計
動作性名詞	12（4.2%）	74（26%）	65（22.8%）	151（53%）
非動作性名詞	32（11.2%）	52（18.2%）	50（17.5%）	134（47%）
合計	44（15.4%）	126（44.2%）	115（40.4%）	285（100%）

以上から分かるように、日本語[N+V]型複合名詞は、「目述関係（126 例，約 44%），付述関係（115 例，約 40%），主述関係（44 例，約 15%）」の順に多く現れた．つまり、目述関係にある複合名詞が最も生産的であり、次に付述関係にある複合名詞も非常に生産的であるが、この 2 つの類型に比べると主述関係にある複合名詞は、ややその生産性が落ちることが分かる．

なお、動作性名詞（151 例）は「目述関係」（74 例，動作性名詞全体の約 49%）に最も多く見られ、次に「付述関係」（65 例，動作性名詞全体の約 43%）が多く見られ、「主述関係」（12 例，動作性名詞全体の約 8%）は比較的に少ない．

このように、 日本語における[N+V]型複合名詞は、「主述関係」「目述関係」「付述関係」のすべての類型が動作性を帯びることができると考えられる．なお、非動作性名詞と分類された[N+V]型複合名詞においても「主述関係」「目述関係」「付述関係」のすべての類型が観察される．

一方、同じ類型であっても動作性を帯びるものと帯びないものが存在する．次節では、類型による[N+V]型動作性名詞を中心に考察することで、動作性を持つことができる語構成の意味・文法的条件を探る．

4．2　文法的関係から見た日本語[N+V]型複合名詞の動作性

4．2．1 主述関係にある日本語[N+V]型複合名詞

主述関係にある日本語の[N+V]型複合名詞には，動作性名詞においても非動作性名詞においても[N+V]基本型のみ見られ、$[N+[V]_{suf}]$型および$[[N+V]_{V}]$型は見られなかった．すなわち、主述関係の[N+V]型複合名詞には、後項要素（V）が接尾辞である例と複合動詞から派生された例は現れにくいことが分かる．

主述関係にある[N+V]型の例としては、以下の（31）のようなものがある．大きく動作性名詞と非動作性名詞に分け、さらに非動作性名詞は意味により「有生名詞（人名詞）」「無生名詞（物名詞）」「時間名詞」「場所名詞」「抽象名詞」「デキゴト名詞」[83]に分類する．ただし、名詞の意味分類は得られた例だけを提示することとする．そして、動作性名詞でありながら実体性名詞としても両用できる複合名詞の場合は、優先的に動作性名詞として分類する（名詞分類の仕方は以下においても同様とする）．

（31）主述関係の日本語[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a．[N+V]基本型：値上がり，背伸び，仲直り，様変わり，神懸かり，雪解け，身震い，息切れ，顔負け，人違い，耳鳴り
《非動作性名詞》
a．有生名詞 [N+V]基本型：左利き，右利き
b．無生名詞 [N+V]基本型：木立ち，紙切れ，
c．時間名詞 [N+V]基本型：夜明け，夜更け，夕暮れ，昼過ぎ，日暮れ，年明け…
d．場所名詞 [N+V]基本型：水溜り，船着き
e．抽象名詞 [N+V]基本型：風向き
f．デキゴト名詞 [N+V]基本型：日差し，手遅れ，人込み，日当たり，気紛れ…
$[[N+V]_{V}]$型：気付き，目覚め

以上のように、日本語における主述関係の[N+V]型には、動作性名詞および非動作性名詞の両方が見られる．そして、非動作性名詞の中には、「有生名詞，無生名詞，時間名詞，場所名詞，抽象名詞，デキゴト名詞」のすべてが観察される．なお、主述関係

83　1．2で提示した名詞の意味分類（ソ・ジョンス　1994）により、非動作性名詞を分類する．名詞の分類は、韓国語と対照のため、同じ分類基準を用いた．

の[N+V]型には、「時間名詞」と「デキゴト名詞」が多く見られるが、とりわけ自然現象を表す例が目立つ. 特に、「時間名詞」の中には、自然現象を表す「デキゴト名詞」でありながら、「時間名詞」としても共存する例「夜明け, 夜更け, 夕暮れ, 日暮れなど」がやや多いことが特記すべき点である.

日本語における主述関係の[N+V]型の場合、動詞由来複合語の語形成において外項は前項要素にならない(Kageyama 1985, 伊藤 & 杉岡 2002)ため、前項要素は後項動詞の内項(対象)であり、したがって後項動詞には非対格動詞のみが現れる. 非対格動詞には、自然現象を表す動詞(明ける, 更ける, 暮れるなど)が多数存在するが、そのため主述関係の[N+V]型に自然現象を表す「デキゴト名詞」でありながら「時間名詞」としても共存する例が多く現れる結果となったと考えられる.

4. 2. 2 目述関係にある日本語[N+V]型複合名詞

目述関係にある日本語の[N+V]型複合名詞は, 動作性名詞においては[N+$[V]_{suf}$]型は見られず、[N+V]型および[$[N+V]_V$]型が見られるが、非動作性名詞においては[N+V]型, [N+$[V]_{suf}$]型, [$[N+V]_V$]型のすべての類型が見られる. このことから、〈形態による類型〉の中で[N+$[V]_{suf}$]型は動作性を帯びにくいことが予想される.

目述関係にある [N+V]型の例としては、以下の(32)のようなものがある.

(32)目述関係の日本語[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V]基本型:町作り, 物作り, 荷造り, 子作り, 味付け, 釘付け, 口付け, 花見, 月見, 手引き, 線引き, 裏打ち, 舌打ち, 手抜き, 息抜き, 心遣い, 人殺し, 皆殺し, 手洗い, 手当て, 手入れ, 金儲け, 金貸し, 値上げ, 値下げ, 後押し, 目隠し, 歯磨き, 跡継ぎ, 舵取り, 魚釣り, 草刈り, 子育て…
b. [$[N+V]_V$]型: 気遣い, 裏付け, 手放し, 名指し, 値引き, 身じろぎ
《非動作性名詞》
a. 有生名詞 [N+V]基本型:酒好き, 金持ち, 嘘吐き, 絵描き, 子持ち, 身寄り…
b. 無生名詞 [N+V]基本型:物差し, 手拭い, 梅干し, 湯飲み, 卵焼き…
[$[N+V]_V$]型:腰掛け, 目覚まし
c. 場所名詞 [N+V]基本型:縄張り, 物置
d. 抽象名詞 [N+V]基本型:目当て, 言葉遣い, 心持ち, 値打ち, 筋書き, 骨組み
e. デキゴト名詞 [N+V]基本型:命懸け, 風通し, 税込み, 気休め, 命取り…

[N+[V]$_{suf}$]型：型通り，子連れ

以上のように、日本語における目述関係の[N+V]型には、動作性名詞および非動作性名詞の両方が見られる．そして、非動作性名詞の中には、「有生名詞，無生名詞，場所名詞，抽象名詞，デキゴト名詞」が見られるが、本研究では「時間名詞」は観察されなかった．

目述関係の[N+V]型には、動作性名詞が 74 例（全体の動作性名詞 151 例の約 49%）で最も多く現れたことから、内項を前項要素とする場合に動作性を帯びやすいことが分かる．目述関係にあるため、後項動詞は他動詞であり、主に二項動詞、あるいは稀に三項動詞が現れる．目述関係の[N+V]型は全体的に「デキゴト名詞」が占める割合が他の類型の複合名詞より断然高いことから、目述関係の[N+V]型は主に「デキゴト名詞」を形成する類型であることが分かる．

4．2．3 付述関係にある日本語[N+V]型複合名詞

付述関係にある日本語の[N+V]型複合名詞は，動作性名詞においては[N+[V]$_{suf}$]型は見られず、[N+V]基本型および[[N+V]$_V$]型が見られる．これに対して、非動作性名詞においては[N+V]型，[N+[V]$_{suf}$]型，[[N+V]$_V$]型のすべての類型が見られることが対照的である．前節で示した通り、目述関係の[N+V]型複合名詞においても、[N+[V]$_{suf}$]型には動作性名詞が現れず、付述関係の[N+V]型複合名詞においても[N+[V]$_{suf}$]型には動作性名詞が現れないことから、改めて[N+[V]$_{suf}$]型は動作性を帯びにくいことが確認できる．

付述関係にある [N+V]型の例としては、以下の（33）のようなものがある．

（33）付述関係の日本語[N+V]型複合名詞

《動作性名詞》

a．[N+V]基本型：水洗い，手書き，下書き，上書き，共働き，下働き，逆戻り，上乗せ，後戻り，棚上げ，水揚げ，独り暮らし，独り歩き，独り占め，手作り，手助け，手招き，手探り，先取り，先送り，前置き，前払い，日焼け，日帰り，下請け，後回し，田植え，塩漬け，塩焼き，船酔い，里帰り…

b．[[N+V]$_V$]型： 嫁入り，天下り，横取り，後退り，逆立ち，手渡し，旅立ち

《非動作性名詞》

a．有生名詞 [N+V]基本型：顔触れ，物狂い，船乗り

[N+[V]$_{suf}$]型：道連れ

b. 無生名詞 [N+V]基本型：缶詰め，石造り,下着，首飾り,下敷き，手提げ，目障り…

c. 時間名詞 [N+V]基本型：夏休み，昼休み，春休み，冬休み

d. 場所名詞 [N+V]基本型：川沿い，沖合い，表通り，海沿い，町外れ

e. 抽象名詞 [N+V]基本型：手掛かり，奥行き，一握り，心持ち，口当たり，手触り…

[[N+V]$_{V}$]型：心掛け

f. デキゴト名詞[N+V]基本型：手持ち，手打ち，的外れ，日増し，板挟み，山盛り…

[N+[V]$_{suf}$]型：一通り

以上のように、日本語における付述関係の[N+V]型には、動作性名詞および非動作性名詞の両方が見られる．そして、非動作性名詞の中には、「有生名詞，無生名詞，時間名詞，場所名詞，抽象名詞，デキゴト名詞」のすべてが観察される．

付述関係の[N+V]型には、動作性名詞が65例（全体の動作性名詞151例の約43％）であり、目述関係の[N+V]型の次に多く現れる．しかし、主述関係および目述関係の[N+V]型の場合は、前項要素が後項動詞の内項であるのに対し、付述関係の[N+V]型動作性名詞の場合は前項要素が必須的付加語、すなわち後項動詞の内項である場合（例：船酔い，里帰りなど）もあるが、殆どは随意的要素（付加詞；adjunct）である（例：水洗い，手書き，共働き，一人暮らしなど）．なお、後項要素には自動詞が現れる場合もあるが（例：共働き，逆立ちなど）、二項動詞（例：水洗い，手書きなど）あるいは三項動詞（上乗せ，前置きなど）が現れる場合が殆どである．

以上のことから、日本語における[N+V]型複合名詞は〈語構成要素間の文法的関係による類型〉の主述関係，目述関係，付述関係のいずれの類型も、動作性を帯び得ることが分かる．言い換えると、前項要素が内項である場合（主述関係および目述関係にある例）に動作性を帯びやすいものの、[N+V]型複合名詞が動作性を帯びるためには、前項要素が内項であることが必須ではないと言えよう．なお、〈形態による類型〉の[N+V]基本型および[[N+V]$_{V}$]型は動作性を帯び得る一方、[N+[V]$_{suf}$]型は動作性を帯びにくいことが分かった．

4．3　韓国語[N+V]型複合名詞

4．3．1 韓国語[N+V]型複合名詞に関する先行研究

本節では、韓国語における[N+V]型複合名詞の先行研究を概観する．韓国語[N+V]型複合名詞に関する先行研究は主に語構成・語形成の観点から行われ、[N+V]型複合名詞の動作性に注目した先行研究は見当たらなかった．

従来の韓国語[N+V-接尾辞]（해돋이[hay-toti；lit. 日-昇り→日の出]）型の分析[84]においては、大きく 2 つの方法が存在する．第一に、[N+V]に接尾辞が付く[[N+V]-接尾辞]（해돋-이[haytot-i；lit. 日昇-り]）として分析する方法（コ・ジェソル 1992；シ・ジョンゴン 1994a/1994b；キム・チャンソプ 1996 など）、第二に、動詞に接尾辞が付いた後項要素「V-接尾辞」全体をひとまとまり（名詞あるいは接辞など）であると見なし、[N+[V-接尾辞]]（해-돋이[hay-toti；lit. 日-昇り]）として分析する方法である（イ・イクソプ 1965；コ・ヨングン 1973；チェ・ヒョンシク 1999；ソン・ウォンヨン 2002 など）．

しかし、どちらの分析方法においてもそれぞれに問題が生じる．第一の方法は、[N+V]の複合動詞（해돋-[haytot；lit. 日昇る]）が存在しないという問題が生じ、第二の方法は、後項要素「V-接尾辞」（-돋이[toti；lit. 昇り]）の自立性がなく名詞として認められず、なお生産的に単語を形成しないため、接尾辞としても認められないという問題が生じる．

第二の方法を取るイ・イクソプ（1965）では、複合名詞の IC 分析（immediate consitituent analysis；直接構成素分析）について論じ、「시집+살-이[sicip+sal-i；婚家+暮らし]」（N+V-接尾辞）の「살-이[sal-i；暮らし]」（V-接尾辞）が複合語を形成する可能性があるため独立性が認められ、「시집+살-이[[sicip+sal]-i]」（[[N+V]-接尾辞]）の派生名詞ではなく、「시집+살-이[sicip+[sal-i]]」（[N+[V-接尾辞]]）という合成名詞として分析されている．それに反して、コ・ヨングン（1973）では生産性の高い「V-接尾辞：-걷이（keti；lit. 取り入れ），-걸이（keli；lit. 掛け），-꽂이（kkoci；lit. さし），-살이（-sali；暮らし）など」を実質的な意味を持つ実質形態素（lexical morpheme；内容形態素）から派生されたものとし、依存性だけを含んでいるため「準接尾辞」と見なしている．以上の 2

84 「V-接尾辞」が自立性がない場合と[N+V]型の複合動詞が存在しない場合の分析が問題となる．一方、「V-接尾辞」が単独で名詞として使われる場合は合成名詞[N+[V-接尾辞]]として分析でき、[N+V]型複合動詞が存在する場合は[[N+V]-接尾辞]として分析できるため問題にはならない．

つの研究は、後項要素「V-接尾辞」を名詞あるいは接尾辞と見なすことにより、[N+[V-接尾辞]]として解釈しているが、前項名詞と後項動詞の関係については論じていない.

一方、第一の方法を取るキム・チャンソプ(1983)では前項名詞と後項動詞の関係に着目し、複合名詞は「主語-自動詞」「目的語-他動詞」「副詞語(付加語)-自動詞」「副詞語(付加語)-他動詞」という関係の中でのみ成立し、「主語-他動詞」「目的語-自動詞」という関係においては名詞化できないことを指摘した. 第二の方法を取るチェ・ヒョンシク(2003)でも、構成成分である名詞と動詞の間に「새우-잡이(saywu-capi;lit. 海老-とり→海老釣り)」は「目的語-他動詞」、「마구-잡이(makwu-capi;lit. でたらめに-とり→手当たり次第に)」は「副詞語(付加語)-他動詞」、「해돋이(hay-toti;lit. 日-昇り→日の出)」は「主語-自動詞」という統語的関係があることに注目し、動作主の意味役割を持つ名詞は動詞性複合語(すなわち動詞由来複合語)の形成に参与できないという「行為者-不可制約」により動詞の「行為者」の項は複合名詞の中では現れないと説明した(チェ・ヒョンシク 2003:216).

さらに、前項名詞と後項動詞の関係について、語形成の観点から規則論と類推論の 2 つの立場より解釈することができる.

規則論(第一の方法)の立場を取るシ・ジョンゴン(1994a/1994b)では、「V-이(i)→N」という名詞を派生する規則に基づき、[N+V-이(i)]型を[[N+V]-이(i)]の構造として分析する. そして、「해돋이(hay-toti;lit. 日-昇り→日の出)」型を前項名詞句の主要部である名詞が後項動詞へ移動し、「해+돋다(hay+totta;日+昇る)」というように統語的に複合語が形成されてから語彙的接辞「-이(i)」が結合したものとして解釈した. このような「해돋-(haytot-;lit. 日昇る)」は辞書には登録されてはいないが、潜在的な単語として認識できるため、複合語と見なすべきであり、「해돋-(haytot-;lit. 日昇る)」型複合語が語彙部門(lexicon)で形成されるのではなく、統語部門(syntax)で形成されると仮定している.

類推論(第二の方法)の立場を取るチェ・ヒョンシク(1999, 2003)では、シ・ジョンゴン(1994a/1994b)の研究に対し、(ⅰ)名詞の主要部移動の動機が不明である点、(ⅱ)共時的に存在しない臨時語(nonce word)を設定しなければならない点、(ⅲ)語形成に統語規則を用いた点を問題として挙げて批判した. そして、既存の単語の形態(あるいは意味)の類似性により新しく単語が作られるという類推を語形成のメカニズムとして捉えた. そして、類推により[N-V-이(i)]型に対して、[N-[V-이(i)]]という内部構造を持っていると

分析する. なお、N と[V-이(i)]の間の項関係を項の受継ぎにより説明し、動詞の項は接尾辞「-이(i)」に受継がれ、[V-이(i)]全体が前項名詞を項として要求すると主張した.

しかし、規則あるいは類推の一方だけでは、あらゆる語形成のプロセスを説明するにあたり、限界がある. コ・ジェソル(1992)は[N+V-接尾辞]型の語構成により、規則論とも類推論とも異なる立場を取っている. 例えば、[N+V]の構成成分が「目的語-他動詞型」(例:구두-닦이[kwutwu-takki;靴磨き(人)]),「主語-目的語型」(例:해-돋이[hay-toti;lit. 日-昇り→日の出])の関係にあるものは、統語部門で名詞抱合(noun incorporation)を経た複合動詞(N+V:구두+닦-[kwutwu+takk-], 해+돋-[hay+tot-])に接尾辞が付いて派生されたものとして見なし、「副詞語(付加語)-動詞型」(例:전기-구이[cenki-kwui;lit. 電気-焼き→ロースト])の関係にあるものは後項要素の再構造化(言わば、類推)により説明している.

さらに、ファン・ファサン(2010)では類推が語形成の過程を説明するのに有効なメカニズムであることは確かであるが、すべての語形成を類推だけで説明することは難しいため、類推の基盤となる語形成を説明するためには規則を用いるしかないと述べ、類推と規則の両方について語形成の主要なメカニズムであると主張している. そして、語形成とレキシコン(lexicon;語彙部門)に単語が登録されることとは概念的に分離できる過程であり、話者の語形成の能力は共時的であると説明した. これに従い、本稿においても、語形成のメカニズムとして規則と類推の両者を考慮に入れ、共時的な観点から[N+V]型複合名詞の語構成を分析することとする.

4. 3. 2 韓国語[N+V]型複合名詞の類型分類

韓国語の[N+V]型複合名詞の例を選定するために、国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』(約 5 万語)から 291 語[85]の[N+V]型複合名詞を抽出した[86].

---

85 日常生活でよく使われる単語を中心に選定された国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』の約5万の見出し語の中で、動詞の名詞形「V-이(i), -음(um), -기(ki)」を含む複合名詞の約 560 語のうち、291 語(動詞由来複合名詞のうち、約 52%)の[N+V]型複合名詞を抽出した.

86 語源が不明で、前項要素と後項要素間の意味関係が把握できない例(날치기[nal-chiki;ひったくり], 소용돌이[soyong-toli;渦巻き]など)や後項要素が単なる接尾辞で、元の動詞の意味が把握できない例(동갑내기[tongkap-nayki;同い年], 금붙이[kum-pwuthi;金製品]など)(計 11 例)は、[N+V]型複合名詞であると想定できないため、研究対象から除外した. 実際、

まず、[N+V]型複合名詞を2．3の動作性名詞の判断基準に従い、動作性名詞と動作性名詞ではないもの（非動作性名詞）に大別する．動作性名詞の判断基準としては、2．3 の「動作性のカテゴリカルな意味」により、機能動詞（하다[hata;する]）ならびにアスペクト的名詞・アスペクト的動詞（중[cwung；中]，시작하다[sicakhata;始める]など）との共起の可否という動作性名詞の構文的な特徴を用いる．そして、動作性名詞であるか否かの判断は、主に韓国語母語話者の内省（筆者による）から判断し、補助的にコーパス資料（国立国語院(編)（2007）の『21 世紀世宗計画コーパス（21 세기세종계획코퍼스）』）および検索エンジン（NAVER など）を参考とする[87]．

そして、[N+V]型複合名詞を語構成要素間の文法的関係により下記の（34）のように「主語-述語：主述関係」「目的語-述語：目述関係」「副詞語（付加語）-述語：付述関係」に分けて分類する．例えば、「해돋이（hay-toti；lit. 日-昇り→日の出）」のように N と V の関係が「N 이 V（N ガ V）」（해가 돋다；日ガ昇る）という主語と述語の関係を成している場合、主述関係にあるものと見なす．同様に、「글짓기（kul-ciski；lit. 文-作り→作文）」のように N と V の関係が「N 을 V（N ヲ V）」（글을 짓다；文ヲ作る）という目的語と述語の関係を成している場合、目述関係にあるものと見なす．それ(主述関係および目述関係)以外の関係、つまり「오리걸음（oli-kelum；lit. あひる-歩き→あひるのように歩くこと），귀걸이（kwi-keli；lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング）」のように N と V の関係が「N 처럼/같이 V（N ノヨウニ V）」（오리처럼 걷다；あひるノヨウニ歩く）、あるいは「N 에/에서/으로 V（N ニ/カラ/デ/ヘ V）」（귀에 걸다；耳ニ掛ける）という副詞語（付加語）と述語の関係を成している場合は付述関係にあるものと見なす．

（34）〈語構成要素間の文法的関係による類型〉

a．主述関係：N 이 V （해가 돋다） 例）해돋이（lit. 日昇り）
　　N ガ V （日が 昇る）

b．目述関係：N 을 V （고기를 잡다） 例）고기잡이（lit. 魚とり）
　　N ヲ V （魚ヲ とる）

c．付述関係：N 처럼/같이 V （오리처럼 걷다） 例）오리걸음（lit. あひる歩き）

接尾辞「[-붙이（-pwuthi）]suf」は、動詞「붙다（pwuthta；付く）」に由来するのではなく、中世韓国語では「보치（pochi）」として表記されていたものである（イ・ギムン 1991：60）．

87 筆者は、韓国の大邱出身の女性であり、20 代後半から 30 代の半ばの約 6 年にわたって、本稿を執筆した．韓国語の場合、筆者の内省により、動作性名詞の判断を行うが、使用頻度が低く、筆者の判断より動作性名詞の判断が難しい場合は、コーパス資料や検索エンジンを用いた．本章（4 章）を含め、以下の章（5 章・6 章）においても動作性名詞の判断方法は同様である．

N ノヨウニ V　(あひるノヨウニ歩く)
N 에/에서/으로 V　(귀에 걸다)　例)귀걸이(lit. 耳掛け)
N ニ/カラ/デ/ヘ V　(耳ニ掛ける)

次に、形態により[N+V-이(i)]型、[N+V-음(um)]型、[N+V-기(ki)]型に分類する. 「[N+V]型」を基本型とするが、その中には語構成要素が自立語または接尾辞として存在する場合がある. それらと区別し、以下の(35)のように分類する. ただし、形式上の判断(例えば、合成語であるか派生語であるかという判断)が難しい場合は国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』での区分を参考にする[88].

(35)〈形態による類型〉[89]
a. [N+V]基本型: 後項要素が自立語でも接尾辞でもない
例) 가슴앓이(kasum-alhi;lit. 胸-病み→胸を痛めること)
b. $[N+[V]_N]$型:後項要素(V)が自立語
例) 눈싸움(nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦)
c. $[N+[V]_{suf}]$型:後項要素(V)が接尾辞(suf)
例) 고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師)
d. $[[N+V]_V]$型:[N+V]の箇所が自立語(複合動詞)
例) 본보기(pon-poki;lit. 模範-見→見本)

以上の類型により[N+V]型を分類した結果を表 10 に示す. 同音異義語の場合は、国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』の意味番号を括弧の中に表記する. なお、分析結果の集計を表 11 に示す.

88 国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』では合成語と派生語をハイフンで示している. 例えば「끝내기(kkuth-nayki;lit. 終わり-出し→終結)」は「끝내-기(kkuthnay-ki)」で表記してあり、「끝내다(kkuthnayta;終える)」が動詞として登録されているため、$[[N+V]_V]$型と見なす. 同様に、「돈벌이(ton-peli;金-儲け)」は「돈-벌이(ton-peli)」で表記してあり、「벌이(peli;儲け)」が名詞として登録されているため、$[N+[V]_N]$型と見なす. 「달맞이(tal-maci;lit. 月-迎え→月見)」は「달-맞이(tal-maci)」で表記してあり、「맞이(maci;迎え)」は接尾辞として登録されているため、$[N+[V]_{suf}]$型と見なす.

89 韓国語の[N+V]型複合名詞の中には、前項要素(N)が動詞に由来するものである、$[[V]_N+V]$型も存在するが、本研究では「꿈풀이(kkwum-phwuli;lit. 夢-解き→夢の意味を解説すること)」「살림살이(sallim-sali;lit. 生かし-暮らし→所帯道具)」「뜀뛰기(ttwim-ttwiki;lit. 跳び-跳び→跳躍)」の 3 例しか現れなかった. これらの例は、前項要素(N)が自立語で[N+V]基本型と全く同じ構成を成しているため、[N+V]基本型の中に入れた.

表 10. 韓国語の[N+V]型複合名詞の分類

動作性名詞	主述関係	[N+V-음(um)]基本型: 귀뜸, 귀띔, 뒤트임
		[N+V-기(ki)]基本型 : 벼락치기
	目述関係	[N+V-이(i)]基本型: 가슴앓이, 구두닦이, 귀앓이, 꽃꽂이, 꿈풀이, 날품팔이, 넝마주이, 논갈이, 돌잡이, 두해살이, 뒤풀이, 때밀이, 뜻풀이, 마수걸이, 물갈이(01/02), 바람막이, 바람잡이, 밭갈이, 배앓이, 분갈이, 분풀이, 살림살이, 살풀이, 속앓이, 심심풀이, 총알받이, 탑돌이, 턱걸이, 털갈이, 품앗이, 품팔이, 하루살이, 한풀이, 화풀이
		[N+[V-이(i)]$_N$]型: 돈벌이, 밥벌이
		[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型: 가을맞이, 겨울맞이, 고기잡이, 고래잡이, 귀양살이, 달맞이, 벼슬살이, 봄맞이, 설맞이, 손님맞이, 징역살이, 피난살이, 고용살이
		[N+V-음(um)]基本型: 낯가림, 눈가림, 눈속임, 대물림, 몸부림, 발돋움, 발뺌, 밤새움, 밤샘, 상차림, 앞가림, 액땜, 입가심, 입막음, 입맞춤, 자리매김, 칼부림, 탈바꿈
		[N+[V-음(um)]$_N$]型: 곱셈, 뒷받침, 몸놀림, 반올림, 발놀림, 손놀림, 앙갚음, 판가름
		[[N+V]$_V$-음(um)]型: 끝막음, 액때움
		[N+V-기(ki)]基本型: 가지치기, 겉핥기, 곱하기, 구슬치기, 그네뛰기, 글쓰기, 글짓기, 끝말잇기, 널뛰기, 누에치기, 당일치기, 딱지치기, 땅따먹기, 뜀뛰기, 보물찾기, 본전치기, 사방치기, 새치기, 소매치기, 수건돌리기, 술래잡기, 숨쉬기, 숨은그림찾기, 실뜨기, 씨뿌리기, 양치기, 연날리기, 원반던지기, 윗몸일으키기, 이삭줍기, 장보기, 제기차기, 제비뽑기, 종이접기, 줄넘기, 줄다리기, 줄당기기, 줄타기, 지신밟기, 집짓기, 파도타기, 팽이치기, 포환던지기, 해바라기, 활쏘기, 힘겨루기
		[[N+V]$_V$-기(ki)]型: 겨울나기, 김매기, 끝내기, 모내기, 모심기, 물구나무서기, 재주넘기, 짝짓기
	付述	[N+V-이(i)]基本型: 가을걷이, 멍석말이, 방패막이, 앞잡이, 집들이, 초벌구이
		[N+[V-이(i)]$_N$]型: 고무줄놀이, 공기놀이, 공놀이, 관등놀이, 기차놀이, 길쌈놀이, 단풍놀이, 돈놀이, 마당놀이, 말놀이, 물놀이,

	関係	뱃놀이, 봄나들이, 불꽃놀이, 사물놀이, 소꿉놀이, 윷놀이, 쥐불놀이, 차전놀이, 카드놀이, 탈놀이, 폭죽놀이, 풍물놀이
		[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型: 감옥살이, 셋방살이, 시집살이, 오막살이, 옥살이, 움막살이, 종살이, 처가살이, 타향살이
		[N+[V-음(um)]$_N$]型: 개구리헤엄, 개헤엄, 게걸음, 겨울잠, 꼭두각시놀음, 낮잠, 노루잠, 눈싸움(01/02), 눈웃음, 닭싸움, 뒷걸음[90], 떼죽음, 말다툼, 말싸움, 몸싸움, 물싸움, 밑그림, 밑받침, 발걸음, 부채춤, 사탕발림, 새벽잠, 새우잠, 신선놀음, 아귀다툼, 안살림, 안성맞춤, 어깨춤, 억지웃음, 연싸움, 예사낮춤, 예사높임, 오리걸음, 줄달음, 칼싸움, 칼춤, 코웃음, 탈춤, 팔자걸음, 패싸움, 편싸움, 함박웃음
		[N+V-기(ki)]基本型: 박치기
		[N+[V-기(ki)]$_N$]型: 발차기, 앞차기, 옆차기
		[[N+V]$_V$-기(ki)]型: 가로쓰기
非動作性	主述関係	[N+V-이(i)]基本型: 걷절이, 물굽이, 해넘이, 해돋이
		[N+V-음(um)]基本型 : 사람됨
		[N+[V-음(um)]$_N$]型 : 귀울림, 산울림
		[[N+V]$_V$ -음(um)]型: 목마름
	目述	[N+V-이(i)]基本型: 간막이, 겨우살이, 계란말이, 길잡이, 등긁이, 등받이, 떡볶이, 말더듬이, 먼지떨이, 물받이, 바늘꽂이, 발걸이, 손톱깎이, 수건걸이, 연필깎이, 연필꽂이, 옷걸이, 응석받이,

90 「뒷걸음(twiskelum;lit. 後ろ歩き→後ずさり)」は、「뒤(twi;後ろ)」と「걸음(kelum;歩き・歩み)」の間に「ㅅ(s)」が入っている.「ㅅ(s)」は、通時的には本来「属格」という統語的機能を担うものであったが、現代韓国語においてはもはやその機能はなくなり、共時的には「名詞＋名詞」という構成の複合名詞、すなわち合成名詞に現れる音韻現象となった. それゆえ、韓国語の合成名詞には、前項要素と後項要素の間に「ㅅ」が挿入される例が多い. しかし、前項要素が子音で終わる場合は、この「ㅅ(s)」は入らない. その代わりに、後項要素に音韻的な変化(濃音化)が起きることもあるが、後項要素(有声子音で始まる場合)によっては音韻的な変化(濃音化)が現れない場合もある(詳しくは、通時的研究としてイ・ギムン(1972;2006)、形態・意味論的な観点からの研究としてシ・ジョンゴン(1994b:202-219)およびキム・チャンソプ(1996:23-73)を参照されたい). この現象は、日本語の複合語における連濁を考えれば理解しやすいだろう(日本語の「連濁」との対照研究としては李(2004)を参照されたい). 日本語の複合名詞で起こる連濁現象と同様に、韓国語の複合名詞において「ㅅ(s)」の挿入は、起こる場合と起こらない場合があるため、最初の段階から排除するのは良くないと判断した. したがって、本稿ではこれらの例(「ㅅ(s)」の挿入が現れる例)も含めて、[N+V]型複合名詞として扱うこととする.

名詞	関係	재떨이, 재털이, 젖먹이, 차돌박이, 책꽂이, 칸막이, 턱받이, 팔걸이, 한해살이
		[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型：안경잡이, 점박이, 총잡이, 칼잡이
		[N+V-음]基本型：마음가짐, 몸가짐
		[N+[V-음]$_{N}$]型：감자튀김, 김치볶음, 꽃받침, 몸차림, 반지름, 새우튀김, 옷차림, 제육볶음, 책받침
		[N+V-기(ki)]基本型：쓰레받기, 해바라기
		[[N+V]$_{V}$-기(ki)]型：본보기
	付述関係	[N+V-이(i)]基本型：귀걸이, 목걸이, 반닫이, 벽걸이, 오른손잡이, 왼손잡이, 코걸이
		[N+[V-이(i)]$_{N}$]型：꼬치구이, 손잡이
		[N+V-음(um)]基本型：앞여밈
		[N+[V-음(um)]$_{N}$]型：겹받침, 병조림, 장조림, 초무침, 통조림
		[N+V-기(ki)]基本型：겉보기

表 11. 韓国語の[N+V]型複合名詞の分類結果の集計

分類	主述関係	目述関係	付述関係	合計
動作性名詞	4(1.4%)	132(45.4%)	86(29.6%)	222(76.3%)
非動作性名詞	8(2.7%)	45(15.5%)	16(5.5%)	69(23.7%)
合計	12(4.1%)	177(60.8%)	102(35%)	291(100%)

以上から分かるように、韓国語[N+V]型複合名詞は、「目述関係(177 例, 約 61%), 付述関係(102 例, 約 35%), 主述関係(12 例, 約 4%)」の順に多く現れた. このことから、目述関係にある複合名詞が圧倒的に生産的であり、次に付述関係にある複合名詞がやや生産的で、主述関係にある複合名詞はその生産性が低いことが分かる.

なお、動作性名詞(計 222 例)は「目述関係」(132 例, 動作性名詞全体の約 59%)に圧倒的に多く見られ、次に多く現れたのは「付述関係」(86 例, 動作性名詞全体の約 39%)である. その反面、「主述関係」は「귀뜸/귀띔(kwi-ttum/kwi-ttuym;lit. 耳-聞こえ→耳打ち), 뒤트임(twi-thuim;lit. 後ろ-開き→ベンツ), 벼락치기(pyelak-chiki;lit. 雷-打ち→一夜漬け)」の 4 例(動作性名詞全体の約 2%)のみであり、極めて少ない.

しかし、「귀뜸/귀띔（kwi-ttum/kwi-ttuym；lit. 耳-聞こえ→耳打ち），뒤트임（twi-thuim；lit. 後ろ-開き→ベンツ）」は表面的には「N 이 V（N ガ V）：귀가 뜨다（耳が聞こえるようになる），뒤가 트이다（後ろが開ける）」という主述関係を成しているが、意味的には「N를 V게 하다（N ヲ V ニサセル）：귀를 뜨이게 하다（lit. 耳ヲ聞こえるようニサセル→耳打ちする）」「N를 V（N ヲ V）：뒤를 트다（後ろを開ける）」という（使役構造を含む）目述関係にあるかのように解釈される．「벼락치기（pyelak-chiki；lit. 雷-打ち→一夜漬け）」の場合も表面的には「N 이 V（N ガ V）」という主述関係を成しているように見えるが、意味的には「N 이 V 하는 것처럼 하다（N ガ V スルヨウニスル）：벼락이 치는 것처럼 서둘러 일을 하다（雷が打つヨウニ急いで仕事をスル）」という構造を成しているため、単純な主述関係にあるとは言えない．つまり、基本的に韓国語では「主述関係」にある[N+V]型は動作性を帯びないと考えられる．

以上から韓国語の[N+V]型は、「主述関係」にあるものは動作性を持ちにくいが、「目述関係」および「付述関係」にあるものは動作性を持つことができると考えられる．しかし、非動作性名詞と分類された[N+V]型には「主述関係」「目述関係」「付述関係」にあるものがすべて観察される．このように「目述関係」「付述関係」にあるものは、同じ構成であっても動作性を持つものと持たないものが存在する．次節では、付述関係および目述関係にある韓国語[N+V]型複合名詞を中心に動作性を持つことができる語構成の意味・文法的条件を探る．

4．4　文法的関係から見た韓国語[N+V]型複合名詞の動作性

4．4．1 目述関係にある韓国語[N+V]型複合名詞

目述関係の[N+V]型の中には、自立語を後項要素とする[N+[V]$_N$]型が存在する．この中には、動作性名詞も非動作性名詞も多数存在する．しかし、後項要素が動作性名詞である例「돈벌이（ton-peli；金-儲け），김치볶음（kimchi-pokkum；キムチ-炒め）」は、後項要素により全体的に動作性を帯びるため、目述関係にあることと動作性との関係を示すものではない．したがって、後項要素が自立語ではない目述関係の[N+V]型複合名詞を調べる必要がある．韓国語の名詞形接尾辞には「-이（i）」「-음（um）」「-기（ki）」などがある．そこで、自立語ではない「V-이（i）」「V-음（um）」「V-기（ki）」を後項要素とする、目述関係の [N+V]型について順次考察を進める．

まず、目述関係にある[N+V-이(i)]型の例としては、以下のようなものがある. 大きく動作性名詞と非動作性名詞に分け、さらに非動作性名詞は意味により「有生名詞(人名詞)」「無生名詞(物名詞)」「時間名詞」「場所名詞」「抽象名詞」「デキゴト名詞」に分類する[91]. ただし、名詞の意味分類は得られた例だけを提示することとする. そして、動作性名詞でありながら実体性名詞としても両用できる場合は、優先的に動作性名詞として分類する(名詞分類の仕方は以下においても同様とする).

(36)目述関係の 韓国語[N+V-이(i)]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V-이(i)]基本型:가슴앓이, 구두닦이, 꽃꽂이, 날품팔이, 돌잡이, 때밀이…
b. [N+[V-이(i)]$_{suf}$]型:가을맞이, 고기잡이, 고래잡이, 귀양살이, 달맞이…
《非動作性名詞》
a. 有生名詞 [N+V-이(i)]基本型:겨우살이, 두해살이, 말더듬이, 응석받이…
[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型:안경잡이, 점박이, 총잡이, 칼잡이
[[N+V]$_{V}$-이(i)]型:길잡이[92]
b. 無生名詞 [N+V-이(i)]基本型:계란말이, 먼지떨이, 손톱깎이, 책꽂이…
[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型:차돌박이

以上のように[N+V-이(i)]型には、動作性名詞と非動作性名詞の両方が見られる. しかし、非動作性名詞の中には、「有生名詞(人名詞)」と「無生名詞(物名詞)」は見られたが、「時間名詞, 場所名詞, 抽象名詞, デキゴト名詞」は本研究では観察されなかった. このように、[N+V-이(i)]型は非動作性名詞の中でも、特に有生名詞と無生名詞(特に物名詞)を主に形成する類型である. まして、動作性名詞の中には、非動作性名詞(有生名詞または無生名詞)にもなり得る例が多数存在するため、実際に非動作性名詞の数は以上の例より多い[93].

91 1. 2の名詞の意味分類(ソ・ジョンス 1994)に従い、非動作性名詞を分類する.
92 「길잡이(kil-capi;lit. 道-とり→道しるべ)」は、「有生名詞(人名詞)」でありながら、「無生名詞(物名詞)」にもなり得る.
93 動作性名詞でありながら実体性名詞にもなり得る例としては次のようなものがある.
a. 有生名詞:고기잡이(漁師), 고래잡이(鯨獲り), 고용살이(宮仕えの身), 구두닦이(靴磨きの人), 날품팔이(日雇い人夫), 넝마주이(屑屋), 때밀이(流し・垢擦り師), 총알받이(第一線部隊), 품팔이(日雇い人夫), 하루살이(その日暮らしする人)

一方、後項要素が接尾辞「[-맞이(maci;lit. 迎え)]$_{suf}$, [-살이(sali;lit. 暮らし)]$_{suf}$, [-잡이(capi;lit. とり)]$_{suf}$」である[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型は、すべて≪動作性名詞≫であることが注目される. これらの接尾辞を後項要素とする[N+[V-이(i)]$_{suf}$]型は、目述関係にあることとの関連を述べるよりは、接尾辞独自の特性によって動作性を帯びているように見える. これについては、また 5 章で詳しく述べる.

次に、目述関係にある[N+V-음(um)]型の例としては、以下のようなものがある.

(37) 目述関係の韓国語[N+V-음(um)]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V-음(um)]基本型:눈가림, 눈속임, 몸부림, 발돋움, 입가심, 입막음…
b. [[N+V]$_V$-음(um)]型:끝막음, 액때움, 액땜
《非動作性名詞》
a. 抽象名詞 [N+V-음(um)] 基本型:마음가짐, 몸가짐, (밑받침[94])

以上のように、[N+V-음(um)]型には動作性名詞も比較的少ないが、非動作性名詞も極めて少ない点が見受けられる. その理由として、非動作性名詞の[N+V-음(um)]型には、後項要素が自立語である[N+[V-음(um)]$_N$]型〔例:김치[볶음](kimchi-[pokkum];キムチ-[炒め]), 꽃[받침](kkoch-[patchim];lit. 花-[支え]→花のがく・花房)〕が多い点が挙げられる. そして、「有生名詞(人名詞)」は本研究において見られなかった反面、[N+V-음(um)]基本型に「마음가짐(maum-kacim;lit. 心-持ち→心構え), 몸가짐(mom-kacim;lit. 体-持ち→身だしなみ), 밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)」のような「抽象名詞」は僅かであるが見られた[95]. このように、目述関係にある[N+V-음(um)]基本型の生産性は非常に低いが、[N+[V-음(um)]$_N$]型(N+[볶음(pokkum;炒め)]〔例:감자볶음(kamca-pokkum;ジャガイモ-炒め),

b. 無生名詞:꽃꽂이(生け花), 바람막이(風除け), 살림살이(所帯道具), 심심풀이(暇つぶし), 초벌구이(素焼き)

94 「밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)」の場合、後項要素「받침(patchim;lit. 支え)」は自立的な名詞であり、「無生名詞(物名詞)」としても解釈できるが、「밑받침(下敷き)」全体が「裏付け」ないし「根拠」という比喩化した意味を得るようになると「抽象名詞」になるため、括弧の中に示した.

95 抽象名詞「마음가짐(maum-kacim;lit. 心-持ち→心構え), 몸가짐(mom-kacim;lit. 体-持ち→身だしなみ), 밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)」などは「하다(hata;する)」と共起できるが、アスペクト的名詞やアスペクト的動詞と共起ができないため、非動作性名詞として分類した.

오징어볶음(ocinge-pokkum;イカ-炒め), 새우볶음(saywu-pokkum;海老-炒め)…〕, N+[받침(patchim;lit. 支え→敷き)]〔수저받침(swuce-patchim;lit. 匙箸-支え→箸置き), 차받침(cha-patchim;lit. 茶-支え→茶台), 화분받침(hwapwun-patchim;lit. 植木鉢-支え→花台)…〕など)は、無生名詞(物名詞)を生産的に形成する類型であると考えられる.

最後に、目述関係にある[N+V-기(ki)]型の例としては以下のようなものがある.

(38) 目述関係の[N+V-기(ki)]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V-기(ki)]基本型:가지치기, 그네뛰기, 글쓰기, 글짓기, 끝말잇기…
b. [[N+V]$_V$-기(ki)]型:겨울나기, 김매기, 끝내기, 모내기, 재주넘기, 짝짓기…
《非動作性名詞》
a. 有生名詞 [N+V-기(ki)]基本型:해바라기
b. 無生名詞 [N+V-기(ki)]基本型:쓰레받기
c. 抽象名詞 [[N+V]$_V$-기(ki)]型:본보기

以上のように、[N+V-기(ki)]型の多くは動作性名詞であり、非動作性名詞は極めて少ない. 本研究において、[N+V-기(ki)]型の非動作性名詞は「有生名詞(人名詞)」と「無生名詞(物名詞)」、「抽象名詞」の例が各々1 つずつ観察された. つまり、目述関係の[N+V-기(ki)]型は動作性名詞を作るのに適しており、主に動作性名詞を形成する類型であることが分かる. しかし、「본보기(pon-poki;lit. 模範-見→見本)」は、複合動詞から由来した[[N+V]$_V$-기(ki)]型であるため論じないにしても、「해바라기(hay-palaki;lit. 日-向き→ひまわり), 쓰레받기(ssuley-patki;lit. ゴミ-もらい→塵取り)」は[N+V-기(ki)]基本型であるにもかかわらず、動作性を帯びないため、例外である[96]. このような例外が存在する理由については、また 5 章(5. 2 および 5. 3)で詳細に考察する.

以上から、目述関係の[N+V-이(i)]型と[N+V-음(um)]型は数少ないが、動作性名詞を形成することができ、目述関係の[N+V-기(ki)]型は、主に動作性名詞を形成することが分かった. そして、目述関係にある[N+V]型の「デキゴト名詞(非実体性名詞)」は、

96 接尾辞「-이(i)」は子音(終声)で終わる用言の語幹に付き、母音で終わる用言の語幹には付かないという音韻論的制約がある(ソン・チョルイ 1992:11, 116). それゆえに母音で終わる「해바라-(haypala-; lit. 日向く), 본보-(ponpo-;lit. 模範見る)」は音韻論的制約により「-이(i)」が付かず、代わりに「-기(ki)」が付いたとも考えられる.

すべて動作性名詞であるため、非動作性名詞には「デキゴト名詞」が現れなかった. 目述関係の[N+V]型には、動作性名詞が 132 例(動作性名詞全体の約 59%)で最も多く現れたことから、複合名詞の前項名詞が後項動詞の目的語、つまり内項である場合に動作性を帯びやすいことが分かる. このように、[N+V]型が目述関係にあることと、動作性との強い関係性が確認できる. なお、目述関係にあるため、必然的に後項動詞は他動詞、すなわち二項動詞である場合が殆どである. 稀に後項要素が三項動詞である例(책꽂이[chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚], 옷걸이[os-keli;洋服-掛け]など)も見られるが、この際は実体性のみを表す非動作性名詞として現れるため、動作性は帯びにくいと考えられる.

4. 4. 2 付述関係にある韓国語[N+V]型複合名詞

付述関係にある[N+V]型の中には、後項要素が自立語である[N+[V]$_N$]型が最も多く見られる. しかし、後項要素が動作性名詞である例「단풍놀이(tanphwung-noli;lit. 紅葉-遊び→紅葉狩り), 눈싸움(nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦), 발차기(pal-chaki;足-蹴り)」などは付述関係にあることと、動作性との関係を示すものではない. そこで、自立語ではない「V-이(i)」「V-음(um)」「V-기(ki)」を後項要素とする、目述関係の [N+V]型について順次考察を進める.

まず、付述関係にある [N+V-이(i)]型の例としては、以下のようなものがある.

(39)付述関係の韓国語[N+V-이(i)]型複合名詞

《動作性名詞》

a. [N+V-이(i)]基本型:가을걷이, 멍석말이, 방패막이, 앞잡이, 집들이, 초벌구이

b. [N+[V-이(i)]$_{suf}$]型:감옥살이, 셋방살이, 시집살이, 오막살이, 움막살이…

《非動作性名詞》

a. 有生名詞 [N+V-이(i)]基本型:오른손잡이, 왼손잡이

b. 無生名詞 [N+V-이(i)]基本型:귀걸이, 목걸이, 반닫이, 벽걸이, 코걸이

以上のように、付述関係の[N+V-이(i)]型には、動作性名詞および非動作性名詞の両方が見られる. [N+V-이(i)]型の非動作性名詞の中には、「有生名詞(人名詞)」と「無生名詞(物名詞)」が見られ、「時間名詞, 場所名詞, 抽象名詞, デキゴト名詞」は本研究では観察されなかった.

一方、動作性名詞には「감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし），시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし），오막살이（omak-sali；小屋-暮らし）」のように、後項要素を接尾辞「-살이（sali；-暮らし）」とする[N+[V-이（i）]$_{suf}$]型の例が多く見られる．動詞「살다（salta；暮らす・住む）」は、二項動詞の項として「N 을（N ヲ）」（対象）を取ることもできるが、「N 에/에서（N ニ/デ）」（場所）を取ることも可能である[97]．つまり、「감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし），시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし），오막살이（omak-sali；小屋-暮らし）」の場合、「N 에/에서 V（N ニ/デ V）」の付述関係を成しているが、「N 에/에서（N ニ/デ）」（場所）が必須的副詞語（必須的付加語）であるため、単なる付述関係にあるものとは区別する必要がある[98]．

同様に、[N+V-이（i）]基本型の動作性名詞「멍석말이（mengsek-mali；lit. むしろ-巻き→むしろに巻いて袋叩きにする私刑），방패막이（pangphay-maki；lit. 盾-防ぎ→隠れみの），집들이（cip-tuli；lit. 家-入り→引越し祝い）」の場合も、後項要素「V 이（i）」の元の動詞が以下のように副詞語（付加語）を必須要素として要求する[99]．

（40）a. 말다（malta；巻く）：　N 을 <u>N 에/으로</u> V（N ヲ <u>N ニ/デ</u> V）
　　b. 막다（makta；防ぐ）：N 을 <u>N 에/으로</u> V（N ヲ <u>N ニ/デ</u> V）
　　c. 들다（tulta；入る）：　<u>N 에/으로</u> V（<u>N ニ/ヘ</u> V）

97　韓国語辞典（国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』および国立国語院(編)（2012）の『韓国語基礎辞典』）での二項動詞「살다（salta；暮らす・住む・生きる）」の格フレームは、「N 이 N 에/에서 살다（N ガ N ニ/デ住む・暮らす）」または「N 이 N 을 살다（N ガ N ヲ暮らす・生きる）」、「N 이 N 과 살다（N ガ N ト暮らす・住む）」である．

98「감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし）」の場合、韓国語では「감옥에서 살다(lit. 監獄で暮らす)」という付述関係にあると解釈できるが、「감옥을 살다(lit. 監獄を暮らす)」という目述関係にあるとも解釈でき、この際は「刑務所生活をする」というやや慣用的な意味として用いられる．しかし、1．2（研究の対象と方法）でも述べたように、本稿で項関係にあるか否かの判断（ならびに目述関係と付述関係の区別）は、複合名詞の前項要素と後項要素との意味関係を考慮した上で、韓国語辞典（『標準国語大辞典』および『韓国語基礎辞典』）の格フレームを参考にして行った．韓国語辞典（『標準国語大辞典』）の「살다（salta；暮らす・住む・生きる）」の意味記述によると、「감옥을 살다(lit. 監獄を暮らす)」は目述関係（「N 이 N（직분・신분）을 살다（lit. N ガ N（職分・身分）ヲ暮らす・生きる）」）ではなく、付述関係（「N 이 N（장소）에/에서 살다（N ガ N（場所）ニ/デ住む・暮らす）」）にあると解釈できるため、本稿では付述関係にあると見なした．一方、同一の後項要素の「징역살이（cingyek-sali；lit. 懲役-暮らし→懲役生活）」「하루살이（halwu-sali；lit. 一日-暮らし→その日暮らし，蜉蝣/その日暮らしする人）」は、前項要素と後項要素の意味関係から目述関係（「N 이 N（직분・신분/삶）을 살다（lit. N ガ N（職分・身分/生活）ヲ生きる）」）にあると見なしたのである．

99　格フレームは国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』を参考にし、提示する．

以上のことから、付述関係にある複合名詞は、「必須補語-述語」の項関係にある場合、動作性を帯びることができると考えられる．ただ、[N+V-이（i）]基本型の「가을걷이（kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ），앞잡이（aph-capi；lit. 前-とり→手先），초벌구이（chopel-kwui；素-焼き）」の場合は、後項動詞（V：걷다[ketta；取り入れる]，잡다[capta；とる]，굽다[kwupta；焼く]）が必須的に要求しない副詞語（付加語）（N：가을[kaul；秋]，앞[aph]，초벌[chopel；素]）を複合名詞の前項要素として取っている例であるにも関わらず動作性を帯びている点で、例外のように見える．

次に、付述関係の[N+V-음（um）]型は殆ど[N+[V-음（um）]$_N$]型であり、後項要素が自立語として存在しない例は、非動作性名詞「앞여밈（aph-yemim；lit. 前-整え→襟元を前にかき合わせることやそうした時に重なる部分）」のみである．最後に、付述関係の[N+V-기（ki）]型は極めて少ないが、さらに後項要素が自立語である[N+[V-기（ki）]$_N$]型を除外すると動作性名詞の「박치기（pak-chiki；lit. 頭-打ち→頭突き）」「가로쓰기[kalo-ssuki；横-書き」と非動作性名詞の「겉보기（keth-poki；lit. 面-見→見掛け）」の 3 例しかない．この中で、動作性名詞「가로쓰기[kalo-ssuki；横-書き」は、複合動詞から由来した[[N+V]$_V$-기（ki）]型であるため論じないにしても、動作性名詞「박치기（pak-chiki；lit. 頭-打ち→頭突き）」は例外のように見える．

以上で、必須項を前項名詞として取らないが、動作性を帯びる例外的な「가을걷이（kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ）」「앞잡이（aph-capi；lit. 前-とり→手先）」「초벌구이（chopel-kwui；素-焼き）」「박치기（pak-chiki；lit. 頭-打ち→頭突き）」などは、後項要素が動作性名詞を形成する要素であるため、動作性を帯びることができると考えられる．これに関しては、5 章（5．2 および 5．3）で詳細に述べる．

多少例外はあるが、以上から付述関係の[N+V]型は、後項要素の元の動詞（V）に対して前項要素（N）が必須的に要求される場合（すなわち、必須的副詞語/必須的付加語）に、動作性を持つことができることが確認できた．つまり、韓国語においては付述関係の[N+V]型が項関係（必須補語-述語）にある場合に限り、動作性を持つことができると考えられる．なお、付述関係の[N+V]型の後項要素には二項動詞が最も多く現れる．稀に後項要素が三項動詞である例（귀걸이[kwi-keli；lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング]，벽걸이[pyek-keli；壁-掛け]など）も存在するが、この際は殆ど実体性のみを表す非動作性名詞として現れるため、動作性名詞の後項要素には二項動詞が現れる場合が殆どである．

付述関係の[N+V]型には、動作性名詞が 86 例（全体の動作性名詞 222 例の約 39%）であり、目述関係の[N+V]型の次に多く現れる. しかし、付述関係にある[N+V]型の動作性名詞には、後項要素が動作性名詞である[N+[V]$_N$]型が遥かに多く、後項要素の動作性により全体的に動作性を帯びることが一般的である[100]. 特に[N+V-음（um）]型の動作性名詞には、後項要素が動作性名詞である例のみが現れたことからも分かる. 言い換えると、[N+V]型が付述関係にあることと、動作性とはあまり関係がないと言えよう.

4. 5　日本語と韓国語[N+V]型複合名詞の語構成における対照

前節では日本語および韓国語の[N+V]型複合名詞における動作性を考察した. ここでは、両言語における[N+V]型複合名詞を語構成の観点から対照することにより、[N+V]型複合名詞が帯びる動作性の正体を明らかにすることを目的とする.

両言語における[N+V]型複合名詞を対照するために、日本語[N+V]型複合名詞は松下（2011）の『日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）ver.1.1（研究用）重要度順語彙リスト 60894 語』の見出し語の上位 2 万語から抽出した 285 例と韓国語[N+V]型複合名詞は韓国の国立国語院(編)（2012）の『韓国語基礎辞典』の見出し語（約 5 万語）から抽出した 291 例を研究対象とする.

そして、この対象となる複合名詞を大きく、動作性を帯びる「動作性名詞」と動作性を全く帯びない「非動作性名詞」に分ける. なお、両言語における動作性複合名詞の文法的条件を明らかにするため、対象となる複合名詞を内部の文法的関係により「主述関係（主語-述語）」「目述関係（目的語-述語）」「付述関係（副詞語/付加語-述語）」の 3 つに分類し、対照分析を行う（日本語の例は 4. 1. 2 の表 8 を、韓国語の例は 4. 3. 2 の表 10 を参照）.

（41）〈語構成要素間の文法的関係による類型〉

a. 主述関係：N ガ V （耳ガ鳴る）　例）耳鳴り
　　N 이 V （해가 돋다）　例）해돋이（lit. 日昇り）

b. 目述関係：N ヲ V （子ヲ育てる）　例）子育て
　　N 을 V （고기를 잡다）　例）고기잡이（lit. 魚とり）

100 本研究において、付述関係の[N+V]型動作性名詞全体（計 86 例）のうち、[N+[V]$_N$]型は 69 例が現れた. つまり、付述関係の[N+V]型動作性名詞の 8 割以上は[N+[V]$_N$]型であると言える.

c. 付述関係：N ノヨウニ V （山ノヨウニ盛る）　例）山盛り
N 처럼/같이 V （오리처럼 걷다）　例）오리걸음（lit. あひる歩き）
N ニ/カラ/デ/ヘ V （船ニ酔う）　例）船酔い
N 에/에서/으로 V （귀에 걸다）　例）귀걸이（lit. 耳掛け）

さらに、複合名詞の形態的な構成により以下のような分類ができる．自立語または接尾辞という判断は辞書を参考にする[101]．ただし、日本語の場合、動詞連用形の殆どが辞書に登録されており（持つ→持ち，切る→切り）、自立語の判断が難しいため、[N+[V]$_N$]型の分類は特に行わない．

（42）〈形態による類型〉

a. [N+V]基本型 ： 後項要素が自立語でも接尾辞でもない

例）花見，가슴앓이（kasum-alhi；lit. 胸-病み→胸を痛めること）

b. [N+[V]$_N$]型： 後項要素（V）が自立語

例）눈싸움（nwun-ssawum；lit. 雪-戦い→雪合戦）

c. [N+[V]$_{suf}$]型：後項要素（V）が接尾辞（suf）

例）子連れ，고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師）

d. [[N+V]$_V$]型：[N+V]の箇所が自立語（複合動詞）

例）旅立ち，본보기（pon-poki；lit. 模範-見→見本）

4．5．1 主述関係にある[N+V]型複合名詞

日本語における主述関係の[N+V]型複合名詞は、やや生産性があり（285 例中 44 例，[N+V]型全体の約 15％）、動作性名詞はその数は少ないが（151 例中 12 例，動作性名詞全体の約 8％）、「主述関係」（仲直り：仲ガ直る）として存在する．それに対して、韓国語における主述関係の[N+V]型複合名詞は最も少なく（291 例中 12 例，[N+V]型全体の約 4％）、動作性は帯びにくい（日本語は 4．1．2 の表 9 を、韓国語は 4．3．2 の表 11 を参照）．この類型に該当する僅かな動作性名詞は、表面的には「主述関係」にあるが、その意味は「N 를 V 게 하다（N ヲ V ニサセル）」（例：귀뜸[kwi-ttum；lit. 耳-聞こえ→

101 日本語の場合は松村(編)（2006）の『大辞林第三版』〔weblio 辞書〕および小学館国語辞典編集部(編)（2012）の『大辞泉第二版』〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕を参考にし、韓国語の場合は国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』を参考にする．

耳打ち])という使役構造、または「N 이 V 하는 것처럼 하다(N ガ V スルヨウにスル)」(例:벼락치기[pyelak-chiki;lit. 雷-打ち→一夜漬け])という独特な構造を持っている.

(43)日本語における主述関係の[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V]基本型:仲直り, 様変わり, 雪解け, 息切れ, 耳鳴り, 値上がり, 背伸び…
《非動作性名詞》
a. [N+V]基本型:夜明け, 夕暮れ, 気まぐれ, 木立ち, 人込み, 昼過ぎ, 水溜り, 紙切れ, 日暮れ, 神隠し, 船着き, 風向き, 歯並び, 筋合い…
b. [[N+V]$_V$]型:気付き, 目覚め

(44)韓国語における主述関係の[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a. [N+V]基本型:귀뜸/귀띔, 뒤트임, 벼락치기
《非動作性名詞》
a. [N+V]基本型:겉절이, 물굽이, 해넘이, 해돋이, 사람됨
b. [N+[V]$_N$]型:귀울림, 산울림
c. [[N+V]$_V$]型:목마름

主述関係にある複合名詞の後項動詞はすべて自動詞であり、特に非能格動詞は来ることができず、非対格動詞のみが現れる.「動作主不可制約(No Agent Constraint)」(アン・サンチョル 1998)によると非対格動詞が主要部(head)である場合は主語、すなわち「動作主」の意味役割は複合語の非主要部(non-head)にはなれない. このように、動詞由来複合語の語形成において、内項を前項要素とする場合が多く、外項は前項要素にならない(伊藤 & 杉岡 2002:43-52)ため、主述関係にある[N+V]型複合名詞の前項要素には内項、つまり「対象」の意味役割が来るようになる. したがって、「対象」を持たず「動作主」の意味役割のみを持っている非能格動詞は、[N+V]型複合名詞の後項要素としては現れないわけである.

4. 5. 2 目述関係にある[N+V]型複合名詞

日本語における目述関係の[N+V]型複合名詞は、最も生産的であり(285 例中 126 例, [N+V]型全体の約 44%)、動作性名詞も最も多く現れる(151 例中 74 例, 動作性名

詞全体の約 49%). 韓国語においても目述関係の[N+V]型複合名詞は最も生産的で(291 例中 177 例, [N+V]型全体の約 61%)、動作性名詞も最も多い. 特に、韓国語の動作性名詞全体(222 例)のうち、半分以上(132 例, 約 59%)が目述関係にあることに注目するべきである. (日本語は 4. 1. 2 の表 9 を、韓国語は 4. 3. 2 の表 11 を参照)

(45)日本語における目述関係の[N+V]型複合名詞

《動作性名詞》

a. [N+V]基本型:手洗い, 花見, 手当て, 子育て, 手入れ, 思い遣り, 町作り, 味付け, 身動き, 家出, 手引き, 金儲け, 値上げ, 心遣い, 口出し, 後押し,裏打ち, 手抜き, 目隠し, 歯磨き…

b. $[[N+V]_V]$型:気遣い, 裏付け, 手放し, 名指し, 値引き, 身じろぎ

《非動作性名詞》

a. [N+V]基本型:金持ち, 心持ち, 嘘吐き, 税込み, 子持ち, 気休め, 骨組み…

b. $[N+[V]_{suf}]$型:型通り, 元通り, 子連れ

c. $[[N+V]_V]$型:腰掛け, 目覚まし

(46)韓国語における目述関係の[N+V]型複合名詞

《動作性名詞》

a. [N+V]基本型:가슴앓이, 고기잡이, 구두닦이, 꽃꽂이, 날품팔이, 돌잡이, 때밀이, 뜻풀이, 눈가림, 발돋움, 상차림, 입가심, 입막음, 가지치기, 그네뛰기, 글쓰기, 글짓기, 끝말잇기…

b. $[N+[V]_N]$型:돈벌이, 밥벌이,곱셈, 뒷받침, 몸놀림, 반올림, 발놀림, 앙갚음, 손놀림, 판가름

c. $[N+[V]_{suf}]$型:가을맞이, 고기잡이, 고래잡이, 귀양살이, 달맞이, 벼슬살이…

d. $[[N+V]_V]$型:끝막음, 액땜, 겨울나기, 김매기, 끝내기, 모내기, 재주넘기…

《非動作性名詞》

a. [N+V]基本型:말더듬이, 응석받이, 해바라기, 등받이 ,떡볶이, 손톱깎이, 마음가짐, 연필꽂이, 옷걸이, 책꽂이…

b. $[N+[V]_N]$型:감자튀김, 김치볶음, 꽃받침, 제육볶음, 책받침, 옷차림…

c. $[N+[V]_{suf}]$型:안경잡이, 점박이, 총잡이, 칼잡이, 차돌박이

d. $[[N+V]_V]$型:길잡이, 본보기

目述関係にある複合名詞の後項動詞はすべて他動詞であり、主に二項動詞が現れるが、稀に三項動詞も現れる. 目述関係の複合名詞は、多くの場合、後項動詞が二項動詞(他動詞)であるため、前項名詞には必然的に目的語として「対象」の意味役割が来る

ようになる（日本語の例：子育て，韓国語の例：고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師]）．日本語においては、後項動詞が三項動詞である場合（例：手入れ，味付け）でも動作性を帯びる例が存在するが、韓国語においては後項動詞が三項動詞である場合（例：책꽂이[chayk-kkoci；lit. 本-さし→本棚]）は実体性のみを表す非動作性名詞であるため、動作性を帯びにくいと考えられる．

4．5．3 付述関係にある[N+V]型複合名詞

日本語における付述関係の[N+V]型複合名詞は非常に生産的であり（285 例中 115 例，[N+V]型全体の約 40%）、動作性名詞も多く見られる（151 例中 65 例，動作性名詞全体の約 43%）．一方、韓国語における付述関係の[N+V]型複合名詞は、目述関係にある例に比べては少ないが、かなり生産的であり（291 例中 102 例，[N+V]型全体の約 35%）、動作性を帯びる例も多数存在する（222 例中 86 例，動作性名詞全体の約 39%）．（日本語は 4．1．2 の表 9 を、韓国語は 4．3．2 の表 11 を参照）

（47）日本語における付述関係の[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a．[N+V]基本型：独り暮らし，手作り，日焼け，水洗い，昼寝，手書き，先取り，下請け，後回し，田植え，日帰り，手探り，前置き，共働き，先駆け，里帰り，先送り…
b．[[N+V]$_V$]型：嫁入り，天下り，横取り，後退り，逆立ち，手渡し，旅立ち
《非動作性名詞》
a．[N+V]基本型：手掛かり，目当て，後書き，値打ち，心当たり，手取り，手答え，川沿い，下敷き，手当たり，塩漬け，物狂い，前書き，船乗り，石造り，首飾り，町外れ…
b．[N+[V]$_{suf}$]型：一通り，道連れ
c．[[N+V]$_V$]型：心掛け

（48）韓国語における付述関係の[N+V]型複合名詞
《動作性名詞》
a．[N+V]基本型：가을걷이，멍석말이，방패막이，집들이，초벌구이，박치기
b．[N+[V]$_N$]型：공기놀이，단풍놀이，카드놀이，개구리헤엄，개헤엄，게걸음，눈싸움，눈웃음，닭싸움，말다툼，발걸음，오리걸음，코웃음，팔자걸음，패싸움，발차기，앞차기…
c．[N+[V]$_{suf}$]型：감옥살이，셋방살이，시집살이，오막살이，옥살이，움막살이…

d. [[N+V]$_V$]型:가로쓰기

《非動作性名詞》

a. [N+V]基本型:오른손잡이, 왼손잡이, 귀걸이, 목걸이, 반닫이, 벽걸이, 코걸이, 앞여밈, 겉보기…

b. [N+[V]$_N$]型:꼬치구이, 손잡이, 보쌈, 장조림, 초무침, 통조림, 겨울잠, 낮잠…

付述関係にある複合名詞の後項動詞は、主に他動詞であり、二項動詞あるいは三項動詞が現れる. 特に、付述関係にある複合名詞の場合は後項要素が「休み」「놀이(noli;遊び)」などのように単独で名詞として用いられる自立語である例が多く見られる. この現象はとりわけ韓国語の例において著しく見られる. このような例([N+[V]$_N$])は動詞由来複合語というよりは、「名詞+名詞」という構成の語根複合語である. したがって、これらの複合名詞が帯びる動作性というのは、後項要素の名詞によるものであると考えられる.

主述関係および目述関係にある[N+V]型複合名詞における前項名詞は後項動詞に対して必須項(obligatory argument)である(日本語の例:値上がり, 韓国語の例:벼락치기[pyelak-chiki;lit. 雷-打ち→一夜漬け]). 一方、付述関係にある[N+V]型複合名詞における前項名詞は、後項動詞に対して必須項である場合(日本語の例:前置き, 韓国語の例:집들이[cip-tuli;lit. 家-入り→引越し祝い])と随意項(optional argument)である場合(日本語の例:手作り, 韓国語の例:꼬치구이[kkochi-kwui;串-焼き]」)の両方が見られる. これは付述関係の複合名詞において、後項要素に自立的な名詞(日本語の例:暮らし, 帰り, 働き, 飾り, 外れ, 韓国語の例:놀이[noli;遊び], 싸움[ssawum;戦い・喧嘩], 차기[chaki;蹴り], 구이[kwui;焼き], 잡이[capi;lit. 取り→取っ手])が多く現れること(日本語の例:一人暮らし, 日帰り, 共働き, 首飾り, 町外れ, 韓国語の例:꽃놀이[kkoch-noli;lit. 花-遊び→花見], 눈싸움[nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦], 발차기[pal-chaki;足-蹴り], 꼬치구이[kkochi-kwui;串-焼き], 손잡이[son-capi;lit. 手-とり→取っ手])と関連があると考えられる. つまり、[N+V]型複合名詞において、前項名詞は後項動詞に対して基本的に必須項として現れるべきであるが、後項要素が自立的な名詞である場合は、このような制約から自由になるということである.

しかし、韓国語における付述関係の複合名詞には後項要素が自立的な名詞として現れる例の方が多いのに対して、日本語においては後項要素が自立的な名詞と見られな

い例（日焼け，田植え，後退り，後書き，値打ち，手取り，船乗りなど）もやや多く、この中には動作性を帯びる例（日焼け，田植え，後退りなど）も多数存在する．言い換えると、韓国語において付述関係にある複合名詞には語根複合語が主に形成され、動詞由来複合語はあまり形成されないが、日本語においては付述関係にある複合名詞には動詞由来複合語が生産的に形成されるということである．

一見、日本語においても韓国語においても、付述関係の[N+V]型複合名詞は、動作性を帯びるように思われるが、実際には両言語の複合名詞における語構成は異なる．

韓国語の場合、付述関係の[N+V]型動作性名詞は 4．4．2 でも考察したように、前項名詞がおおよそ後項動詞に対して必須的副詞語（必須的付加語）、すなわち必須項である．つまり、韓国語において、付述関係にある[N+V]型複合名詞は基本的には動作性を帯びないが、「必須補語-述語」という関係にある際、動作性を帯び得るということである．反面、日本語においては、付述関係にある[N+V]型の動作性名詞の中には、前項名詞が後項動詞に対して必須項である例（船酔い，前置き，田植えなど）もあるが、随意項である例（一人暮らし，手作り，日焼け，水洗い，手書き，先取り，下請けなど）も多く見られる[102]．

日本語の場合、付述関係の[N+V]型複合名詞が動作性名詞となるためには、伊藤 & 杉岡（2002：115-128）でも指摘しているように、前項要素が「道具，様態，原因」である必要があるが、前項要素が「場所」や「時間」である場合にも、動作性を帯びることができるため、以下（49）のように、「道具，様態，原因」に加えて「場所」および「時間」を追加すべきである[103]．（49）は伊藤 & 杉岡（2002：115）が提示した付加詞(adjunct)を含む動詞由来複合語の例を参考にした上で、本稿における付述関係の[N+V]型動作性名詞の前項要素となるものとその例を記述したものである．韓国語の例においても同じく分

102 日本語動詞の必須項と随意項の判断は、小泉他(編)（1989）『日本語基本動詞用法辞典』の格フレームを参考にした．

103 前項要素が「場所」（例：里帰り，上乗せ，棚上げ，天下り，横取りなど）および「時間」（例：昼寝，日帰り，前払い，前触れ，先送りなど）である付述関係の[N+V]型動作性名詞の中には、項関係にある例（里帰り，上乗せなど）のみならず付加詞（adjunct）を前項要素（N）とする例（横取り，昼寝，前払いなど）も現れる．なお、これらの例の中には、本稿において「動作性名詞」と見る、機能動詞「する」と共起する例（田植え，下働き，夜泣き，後回しなど）のみならず、伊藤 & 杉岡（2002）で「動作性名詞」と見る、機能動詞「する」が直接結合する「動名詞」（例：里帰り，上乗せ，横取り，前払いなど）も多数存在する．したがって、伊藤 & 杉岡（2002）においても「動作性名詞（すなわち、動名詞）」と見る例の中にも、前項要素には「場所」および「時間」が来られるはずである．

類したのが(50)である. 複合名詞の前項要素は、その意味を考えた上で、前項要素と後項要素が持つ文法的関係により、「道具, 様態, 原因, 場所, 時間」に分類した. その文法的関係は、各々の前項要素の分類の右側に示す.

(49) 日本語における付述関係の[N+V]型動作性名詞(計 64 例[104])の前項要素

a. 道具(15 例): NデV
例)手作り, 手書き, 手探り, 手渡し, 足踏み, 塩漬け, 水洗い, 黒塗り…

b. 様態(14 例): NデV・NニV・NノヨウニV
例)独り暮らし, 独り歩き, 共働き, 無駄遣い, 逆立ち, 山積み, 霧吹き…

c. 原因(2 例): NニV・NデV
例)日焼け, 船酔い (所帯やつれ, 仕事疲れ, 霜枯れ)[105]

d. 場所(21 例): NニV・NカラV・NデV
例)田植え, 里帰り, 上乗せ, 棚上げ, 水揚げ, 天下り, 横取り, 下働き…

e. 時間(12 例): NニV
例)昼寝, 夜泣き, 日帰り, 前払い, 前触れ, 先送り, 先延ばし, 後回し…

(50)韓国語における付述関係の[N+V]型動作性名詞(計 86 例)の前項要素

a. 道具(計 39 例): N으로 V(NデV)
例)[N+V]基本型(3 例):멍석말이, 방패막이, 박치기
[N+[V]$_N$]型(36 例):공놀이, 단풍놀이, 눈싸움, 부채춤, 발차기…

b. 様態(計 23 例): N으로 V・N처럼 V(NデV・NノヨウニV)
例)[N+V]基本型(2 例):초벌구이, 종살이
[N+[V]$_N$]型(20 例):개구리헤엄, 닭싸움, 억지웃음, 오리걸음, 줄달음…
[[N+V]$_V$]型(1 例):가로쓰기

c. 場所(計 19 例): N에 V・N에서 V・N 으로 V(NニV・NデV・N〜V)
例)[N+V]基本型(2 例):앞잡이, 집들이
[N+[V]$_N$]型(9 例):마당놀이, 밑그림, 밑받침, 안살림, 앞차기…
[N+[V]$_{suf}$]型(8 例):감옥살이, 시집살이, 오막살이, 타향살이…

d. 時間(計 5 例): N에 V(NニV)
例)[N+V]基本型(1 例):가을걷이

---

104 付述関係の[N+V]型動作性名詞は計 65 例が現れたが、この中で「旅立ち」は慣用句に近い表現であり、前項要素の意味が想定できないため、除外した. 「旅立ち」は、「旅に立つ」という項関係にあり、「旅立つ」という複合動詞から作られたものであるとも考えられる.

105 括弧の中の例は、伊藤・杉岡(2002:115)から引用したものである.

[N+[V]$_N$]型(4 例):봄나들이, 겨울잠, 낮잠, 새벽잠

上の(49)と(50)で、日本語の前項要素には、「道具, 様態, 原因, 場所, 時間」が来る例が確認できるが、韓国語の前項要素には「道具, 様態, 場所, 時間」が来る例のみ見られる[106]. しかし、韓国語における付述関係の[N+V]型動作性名詞(計 86 例)のうち、後項要素が自立的な名詞である[N+[V]$_N$]型は 69 例である. [N+[V]$_N$]型の動作性名詞は、後項要素が自立語であるため、その動作性は前項要素とは関係がなく、後項要素によるものである. したがって、他のタイプとは区別する必要がある. そこで、本稿では、付述関係の[N+V]型動作性名詞全体(計 86 例)のうち、[N+[V]$_N$]型を除外した 17 例を典型的な付述関係の[N+V]型動作性名詞と見る. これらの例(17例)は、前項要素に「場所」が来る例(10 例)以外は、すべて(すなわち、前項要素が「道具」「様態」「時間」である複合名詞)3例以下で数少ない. とりわけ、前項要素に「時間」が来る例は、「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ)」の 1 例のみである. なお、前項要素に「原因」が来る例は見当たらないことに注目したい. つまり、韓国語より日本語の付述関係の[N+V]型の方が、語構成的にも意味的にも、より自由に動作性名詞を形成すると言えよう.

以上から、韓国語においては、付述関係の[N+V]型複合名詞が動作性を帯びるためには、「必須補語-述語」の項関係にあるか、それとも後項要素が動作性名詞を形成する要素である必要があるのに対して、日本語において付述関係の[N+V]型複合名詞が動作性を帯びるためには、「必須補語-述語」の項関係にあるか否かは関係なく、後項要素との文法的関係による前項要素の種類[107]と関係があることが分かる. しかし、前項要素が「道具, 様態, 場所, 時間」である場合に必ずしも動作性を帯びるわけではないため、確たる動作性の条件を立てにくい[108].

---

106 韓国語の例において「N 에서 V(N カラ V)」という「起点」を表す「場所」が来る例は極めて少ない. この例は、本稿で対象とした資料には現れず、国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』から「밭걷이(path-keti;lit. 畑-取り入れ→畑物の取り入れ)」の一例のみが見られた.

107 前項要素の種類は、単に前項要素の意味から決まるのではなく、後項要素との文法的関係によって決められる. 例えば、一般的に「前」は場所(位置)として解釈されるが、「前払い」の前項名詞(前)と後項動詞(払う)は「(食堂の場合は料理を食べる)前に払う」という文法的関係を持つため、前項要素「前」は「場所」ではなく、「時間」として解釈される. つまり、厳格に言うと、前項要素と後項要素の意味・文法的関係が動作性と関わっていると考えられる.

108 前項要素が「道具, 様態, 場所, 時間」である例の中には、非動作性名詞も現れる(手取り, 山盛り, 川沿い, 夕焼けなど)ため、これらの前項要素を取る際に、必ずしも動作性を帯びるとは言い難い. 一方、前項要素が「原因」である例は、本研究においてすべて動作性名詞として

つまり、韓国語[N+V]型動作性名詞の語形成においては、前項名詞が後項動詞に対して必須項として現れなければならないという制約が強く作用しているが、日本語においてはこのような制約から自由であると言えよう. 最後に、韓国語と日本語における付述関係の[N+V]型複合名詞に、目述関係にある[N+V]型と共通して見られる特徴としては、日本語は後項動詞が三項動詞である例(田植え, 棚上げなど)は動作性を帯び得るが、韓国語は後項動詞が三項動詞である例(귀걸이[kwi-keli;lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング])は殆ど実体性のみを表す非動作性名詞として現れ、動作性を帯びにくいということである[109].

4. 6　4章のまとめ

[N+V]型複合名詞は、動詞由来名詞を含む複合名詞の5つのタイプのうち、最も生産的なタイプである. さらに、語構成要素間の文法的関係により「主語+述語」(N ガ V /N 이 V)の主述関係(例:夜明け, 해돋이[hay-toti;lit. 日-昇り→日の出])、「目的語+述語」(N ヲ V/N 을 V)の目述関係(例:子育て, 고기잡이[koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師])、「付加語(必須的付加語を含む)+述語」(N ニ V , N カラ V , N デ V, N ヘ V, / N 에 V, N 에서 V, N 으로 V など)の付述関係(例:後回し, 발차기[pal-chaki;足-蹴り])に再分類できる.

韓国語と日本語において、[N+V]型複合名詞の後項動詞は自動詞および他動詞の両方が現れ、前項名詞は後項動詞に対して必須項である場合が多い. 特に、主述関係と目述関係にある[N+V]型複合名詞で前項名詞は後項動詞に対して必須項であるが、付述関係にある[N+V]型複合名詞では前項名詞が後項動詞の必須項である場合(日本

現れたため、前項要素が「原因」であることは動作性と関連がある可能性も考えられる. しかし、本研究では「日焼け, 船酔い」の 2 例しか現れなかったため、より多くの例を対象に更なる検討を要する.

109 例外として韓国語で「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ)」のように後項要素が自立的な名詞ではない上、前項名詞が後項動詞に対して必須項ではなく随意項の付加詞(adjunct)として現れる例も存在するが、このような例外は極めて珍しい. この例は既存の複合名詞「밭걷이(path-keti;lit. 畑-取り入れ→畑物の取り入れ)」から類推により形成された複合名詞であると予想される. なお、「가을걷이(秋の取り入れ)」および「밭걷이(畑物の取り入れ)」の場合、後項動詞が三項動詞にも関わらず動作性を帯び得るが、このような例は農業に限って使用され、必須項である「対象」(穀物または野菜)が特定されているため、容認可能であると考えられる.

語の例：下敷き，韓国語の例：감옥살이[kamok-sali；監獄-暮らし]）と随意項である場合（日本語の例：日焼け，韓国語の例：가을걷이[kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ]）の両方とも観察される.

主述関係にある[N+V]型複合名詞の後項要素には自動詞が現れる．なお、非対格動詞のみが現れ、非能格動詞は後項要素として現れないという制約がある．主述関係にある[N+V]型は日本語においては動作性を帯び得る一方、韓国語においては動作性を持ちにくい.

目述関係にある[N+V]型複合名詞の後項要素には他動詞が現れる．この際、他動詞は主に二項動詞であり、三項動詞も現れ得る．目述関係の[N+V]型複合名詞は、両言語において最も生産的であり、かつ動作性名詞が最も多く見られる類型である．しかし、日本語においては後項動詞が三項動詞である場合でも動作性を帯び得る例が存在するが、韓国語においては後項動詞が三項動詞である場合は動作性を帯びる例が殆ど見られず、動作性を帯びにくいと思われる.

付述関係にある[N+V]型複合名詞の後項要素には自動詞が現れる場合もあるが、殆ど二項動詞あるいは三項動詞（他動詞）が現れる．日本語においては、後項動詞が三項動詞である場合でも動作性を帯び得る反面、韓国語においては、後項動詞が三項動詞である場合は動作性を帯びにくいと考えられる．まして、日本語における付述関係の[N+V]型複合名詞は、「必須補語-述語」の関係にある場合のみならず、「副次補語-述語」の関係にある場合にも動作性名詞が観察され、項関係にあるか否かには関係なく、付述関係の[N+V]型が動作性を帯び得る一方、韓国語における付述関係の[N+V]型複合名詞は、「必須補語-述語」の項関係にある場合に限り動作性を帯び得る.

以上の考察から、日本語の[N+V]型複合名詞は主述関係，目述関係，付述関係のすべての類型において動作性を帯び得る反面、韓国語の[N+V]型複合名詞は「必須補語-述語」という項関係（主に目述関係）にある類型のみが動作性を帯び得ることが分かった.

第5章

［N+V］型複合名詞における意味解釈のメカニズム

日本語と韓国語の[N+V]型複合名詞の中には、動作性を表しながら、「有生名詞（人名詞）」（日本語の例：下請け，韓国語の例：고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師]）や「無生名詞（物名詞）」（日本語の例：手作り，韓国語の例：줄넘기[cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄]）など実体性をも表す名詞が存在する．下記の日本語の例で（51）の「手作り」は、動作性名詞であるため機能動詞と共起できる．一方、（52）の「手作り」は[＋物]（手で作った物）という意味転移が起きた「無生名詞（物名詞）」であるため、機能動詞と共起できない．例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から収集した．

（51）家具、真ちゅう細工、刺繍製品、皮染色などのスークも同じで、それぞれ職人たちが手作りをしている．PB12_00124〉

（52）みんなバレンタインは手作りをプレゼントしたりデートをしたり…OY14_45103〉

韓国語においても、「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師）」が「魚をとる行為」を表す時は動作性を帯びて機能動詞と共起できるが、意味が転じて「魚をとる人」を表す時は本来の動作性は失い、「人（ヒト）」を表す有生名詞となる．

このように、本来は動作性名詞であったとしても、「意味転移」が起きると動作性を失うことが分かる．一方、同じ後項要素（日本語の例：作り，韓国語の例：잡이[capi；lit. とり]）を持つ[N+V]型複合名詞であっても、そもそも動作性を帯びないもの（日本語の例：石作り，韓国語の例：칼잡이[khal-capi；lit. 刀-とり→剣術つかい]）が存在する．これらの複合名詞は同一の動詞から由来したものを後項要素としても、動作性において相違が見られる．

本章では、このような[N+V]型複合名詞における動作性の有無に着目し、[N+V]型複合名詞の動作性名詞と実体性名詞（あるいは非動作性名詞）との関係を意味転移の観点から考察する．本稿では、動詞から由来したものが本来の動詞の性質である動作性を

全く帯びなくなり、実体性のみ帯びることになることまでも「広い意味での意味転移」と見なす. したがって、動作性名詞のみならず実体性名詞のみで用いられる非動作性名詞の例まで併せて、[N+V]型複合名詞に現れる意味転移とし、日本語と韓国語の[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズムを考察することを目的とする.

5. 1　動作性名詞の意味転移

5. 1. 1 日本語における動作性名詞の意味転移

以上で触れたように、日本語「手作り」は動作性を帯びると同時に、実体性をも表すことができる. このような意味転移のプロセスは、隣接性あるいは概念上の関連性に基づいてその意味を拡張して用いるメトニミー（metonymy；換喩）[110]により説明できる. つまり、本来動作性名詞「手作り」は、「手で作ること」という意味から、その行為と関連がある、行為によって生産される「手で作ったもの」にまで意味拡張（semantic extension）が起きたと考えられる.

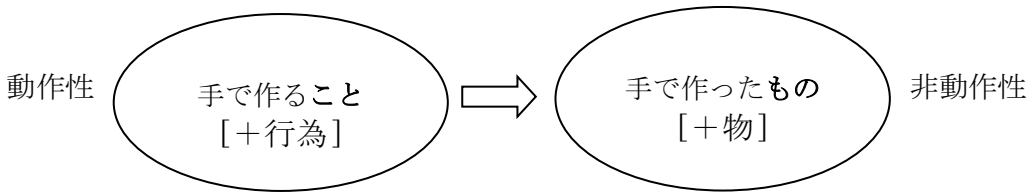


図 4.　「手作り」の意味転移

この際、[N+V]型の動作性名詞と実体性名詞は、意味的透明性において相違が見られる. [N+V]型動作性名詞は機能動詞「する」と共起できる上、比較的意味が透明であ

110 メトニミー（換喩）は従来、文学における修辞学的技法（レトリック）であると考えられたが、Lakoff & Johnson（1980）は比喩（メタファー, メトニミー）を人間の基本的な認知能力の 1 つであるとし、認知意味論の領域に取り入れた. 認知意味論で比喩（メタファー, メトニミー）は、語の意味を拡張（多義的意味拡張）する要因だと考えられる. 認知意味論の観点から籾山（2001:34）は、メトニミーを「二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」と定義している.

るため、各々の構成要素である名詞(N)および動詞(V)と置き換えられる(例:手作りをする→手で作る). つまり、動作性名詞は語構成要素の本来の意味から大きく離れていないことが分かる. その根拠として、動作性名詞(味付け, 一人暮らし, 里帰り)は、下の(53)(54)(55)のように、複合名詞の各々の構成要素である名詞(N)または動詞(V)と共起できないことから、その意味が透明であることが分かる.

(53) a. 塩で味付けをする.
b. 塩で味を付ける.
c. *味付けを付ける

(54) a. 東京に上京して一人暮らしをしている.
b. 東京に上京して一人で暮らしている.
c. *一人暮らしに(一人で)暮らす.

(55) a. 妻が出産のため、里帰りをしている.
b. 妻が出産のため、里に帰っている.
c. *里帰りに帰る.

一方、[N+V]型非動作性名詞の場合は、複合名詞の各々の構成要素である名詞(N)および動詞(V)と容易に共起できる.

(56) a. 船乗りが船に乗る. 〔動作主(Agent)→有生名詞〕
b. 下着を下に着る. 〔対象(Theme)→無生名詞〕
c. 手拭いで手を拭う. 〔道具(Instrument)→無生名詞〕
d. 日暮れに日が暮れる. 〔時間(Time)→時間名詞〕
e. 水溜りに水が溜まる. 〔場所(Location)→場所名詞〕
f. 船着きに船が着く. 〔着点(Goal)→場所名詞〕

なお、本来動作性名詞である場合でも、実体性名詞への意味転移が起きると、複合名詞の各々の構成要素である名詞(N)および動詞(V)と共起できるようになる.

(57) a. お菓子を手作りする. 〔動作性名詞〕
b. お菓子を手で作る.
c. 手作りを(手で)作る. 〔無生名詞〕

(58) a. 跡継ぎをするために、実家に帰る.〔動作性名詞〕
b. 跡を継ぐために、実家に帰る.
c. 跡継ぎが跡を継ぐ. 〔有生名詞〕

このように、動作性名詞でありながら、実体性名詞としても用いられる例は、動作性名詞から実体性名詞への意味転移が起きたと考えられる. 伊藤 & 杉岡(2002:114)においても、動詞由来複合名詞の基本的な意味は行為や現象であるが、意味拡張によって「場所」などの意味を持つことになったと説明している.

下の(59a)のように動作性名詞は、形容詞の修飾に制約があるが、(59b)のように非動作性名詞は、容易に形容詞の修飾を受けることができる. そして、動作性名詞であっても、意味転移が起き、実体性を表す場合は(60)のように、人や物の性質だけを現す(薄い、美味しい、頼もしいなど)属性形容詞の修飾を受けることができる.

(59)a. 妹は働きながら、楽しく/?楽しい子育てをしている.〔動作性名詞〕
b. 長い物差しで身長を測る. 〔無生名詞〕

(60)a. 初心者のために薄い手引きを作成する. 〔無生名詞〕
b. 美味しい手作りを彼にプレゼントするつもりだ. 〔無生名詞〕
c. 子供が頼もしい跡継ぎに成長した. 〔有生名詞〕

以上のように、動作性名詞は各々の構成要素の意味が比較的透明であるが、実体性名詞は各々の構成要素の意味が不透明である. このことから、動作性を帯びるためには、基本的に意味転移が起きないことが条件であることが分かる[111].

5. 1. 2 韓国語における動作性名詞の意味転移

韓国語「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師)」は、動作性を帯びる動作性名詞であると同時に、実体性をも表す実体性名詞としても両用できる. 本来「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり)」が「魚をとる行為」だけを指していたが、徐々にその動作を行う人までも指すようになり、「魚をとる人;漁師」[+人]という意味に転じたと考えられる. これ

111 伊藤 & 杉岡(2002:103)は、語形成としての生産性や透明性が複合語における項構造の受け継ぎと関連することを主張している. これに筆者も同意し、本稿では項構造を持っている動作性名詞は、意味転移が起きないこと、すなわち意味が透明である必要があることを提案している.

は、ある物の属性または特徴と密接な関係がある他のものまでにその意味を拡張して使用するメトニミー（metonymy）によって説明される.

キム・チャンソプ（1983：89）では、このような複合名詞の例を「行為」の意味から「人/道具」という意味へと変化したと見なし、これを意味拡張により説明した. そこで、本稿では動作性名詞「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労）」は本来「魚をとる行為」を表したが、[+人]という意味転移が起き、「魚をとる人」を指すようになったと説明する.

5．1．1における日本語の例の考察から分かるように、[N+V]型複合名詞に意味転移が起きたか否かを調べる方法として、（ｉ）複合名詞の各々の構成要素と置き換えられるか、（ⅱ）複合名詞の各々の構成要素である名詞および動詞と共起するか否かを調べることができる. 2 つの方法を以下にまとめる.

（ｉ）意味転移が起きず、意味が透明である場合は、複合名詞の各々の構成要素である名詞（N）および動詞（V）と置き換えられる.

（ⅱ）意味転移が起きて、意味が不透明である場合は、複合名詞の各々の構成要素である名詞（N）および動詞（V）と共起する.

例えば、「魚をとる行為」を表す動作性名詞「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労）」は、下記の（61a）と（61b）のように、機能動詞「하다（hata；する）」と共起でき、「고기잡이를 하다（lit. 魚とりをする→漁労をする）」が「고기를 잡다（魚をとる）」という意味に対応するため、（61a’）と（61b’）のように各々の構成要素である名詞（N：고기[koki；魚]）および動詞（V：잡다[capta；とる]）と置き換えられる. つまり、この「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労）」の意味は、各々の構成要素「N：고기（koki；魚）」と「V：잡다（capta；とる）」をくみあわせた意味「N 을 V（N ヲ V）：고기를 잡다（魚ヲとる）」から大きく離れていない（すなわち、その意味が透明である）ことが分かる.

それに対して、「魚をとる人」を表す実体性名詞「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁師）」は、（61b’）のように「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁師）」の構成要素である「N 을 V（N ヲ V）：고기를 잡다（魚ヲとる）」が後ろに来ても意味が重なることはない. 言い換えると、「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁師）」が語構成要素のくみあわせ的な意味とは異なる意味を持つようになり、その意味が不透明であるため、語構成要素

である名詞（N：고기[koki；魚]）および動詞（V：잡다[capta；とる]）と共起することができると言えよう.

(61)a. 철수는 [고기잡이]를 하러 갔다.
chelswu-nun [koki-capi]-lul ha-le ka-ss-ta.
PN-TOP 漁労（lit. 魚-とり）-ACC する-ADV 行く-PST-DECL
「チョルスは[漁労（lit. 魚取り）]をしに行った. 」

a'. 철수는 고기를 잡으러 갔다.
chelswu-nun koki-lul cap-ule ka-ss-ta.
PN-TOP 魚-ACC 捕る-ADV 行く-PST-DECL
「チョルスは魚を捕りに行った. 」

b. [고기잡이]가 [고기잡이]를 하러 갔다.
[koki-capi]-ka [koki-capi]-lul ha-le ka-ss-ta.
[漁師（lit. 魚-とり）]-NOM [漁労（lit. 魚-とり）]-ACC する-ADV 行く-PST-DECL
「[漁師（lit. 魚とり）]が[漁労（lit. 魚とり）]をしに行った. 」

b'. [고기잡이]가 고기를 잡으러 갔다.
[koki-capi]-ka koki-lul cap-ule ka-ss-ta.
[漁師（lit. 魚-とり）]-NOM 漁-ACC 捕る-ADV 行く-PST-DECL
「[漁師（lit. 魚とり）]が魚を捕りに行った. 」

一方、非動作性名詞「손톱깎이（sonthop-kkakki；lit. 爪-削り→爪切り），연필꽂이（yenphil-kkoci；lit. 鉛筆-さし→鉛筆立て）」は、「손톱을 깎다（爪ヲ切る）」「연필을 꽂다（鉛筆ヲさす）」という意味に対応しないため、下記の（62a），（63a）のようにそもそも機能動詞「하다（hata；する）」と共起できない. そして、下記の（62b），（63b）のように複合名詞の各々の構成要素である「N：손톱（sonthop；爪），연필（yenphil；鉛筆）」と「V：깎다（kkakkta；削る），꽂다（kkocta；さす）」と意味的に重なっていても「N 을 V（N ヲ V）：손톱을 깎다（爪ヲ切る），연필을 꽂다（鉛筆ヲさす）」が後ろに来ることができる.

(62)a. 늦은 시간에 *[손톱깎이]를 하면 안 된다.
nuc-un sikan-ey *[sonthop-kkakki]-lul ha-myen an toy-nta.
遅い-ADN 時間-DAT [爪-切り]-ACC する-ADV.COND NEC なる-DECL.NPST
「遅い時間に[爪切り]をしてはいけない. 」

b. 늦은 시간에 [손톱깎이]로 손톱을 깎으면 안 된다.
nuc-un sikan-ey [sonthop-kkakki]-lo sonthop-ul kkakk-umyen
遅い-ADN 時間-DAT [爪-切り]-INST 爪-ACC 切る-ADV.COND

an toy-nta.
NEC なる-DECL.NPST
「遅い時間に[爪切り]で爪を切ってはいけない．」

(63)a. 영희는 종종 *[연필꽂이]를 하곤 했다.
yenghuy-nun congcong *[yenphilkkoci]-lul ha-kon hay-ss-ta.
PN-TOP しばしば [鉛筆立て(lit. 鉛筆-さし)]-ACC する-HAB-PST-DECL
「ヨンヒはしばしば[鉛筆立て(lit. 鉛筆さし)]をしていた．」

b. 영희는 종종 [연필꽂이]에 연필을 꽂곤 했다.
yenghuy-nun congcong [yenphil-kkoci]-ey y enphi-lul kkoc-kon hay-ss-ta.
PN-TOP しばしば [鉛筆立て(lit. 鉛筆-さし)]-DAT 鉛筆-ACC さす-HAB-PST-DECL
「ヨンヒはしばしば[鉛筆立て(lit. 鉛筆さし)]に鉛筆を立てたりした．」

上記の(61b')，(62b)，(63b)で[N+V](以下 NV と呼ぶ)型複合名詞の構成要素が意味的に重なっていても「NV 가 N 을 V(NV ガ N ヲ V)」または「NV 로 N 을 V(NV デ/へ N ヲ V)」「NV 에/에서 N 을 V(NV ニ/デ N ヲ V)」という文が成立するということは、[N+V]型複合名詞に意味転移が起き、意味的に不透明であることを示唆する．

反面、動作性名詞のみに使われる「달맞이 (tal-maci;lit. 月-迎え→月見)，글쓰기 (kulssuki;lit. 文書き→作文)」などは、「NV 가 N 을 V(NV ガ N ヲ V)」または「NV 로 N 을 V(NV デ/へ N ヲ V)」「NV 에/에서 N 을 V(NV ニ/デ N ヲ V)」という文は成立せず、「NV 를 하면서 N 을 V(NV ヲシナガラ N ヲ V)」という文も不自然である．

(64)a. *[달맞이]가 달을 맞는다.
*[tal-maci]-ka tal-ul mac-nunta.
月見(lit. 月-迎え)-NOM 月-ACC 迎える-DECL.NPST
「[月見(lit. 月迎え)]が月を迎える．」

b. *[달맞이]로 달을 맞는다.
*[tal-maci]-lo tal-ul mac-nunta.
月見(lit. 月-迎え)-INST 月-ACC 迎える-DECL.NPST
「[月見(lit. 月迎え)]で月を迎える．」

c. *[달맞이]에 달을 맞는다.
*[tal-maci]-ey tal-ul mac-nunta.
月見(lit. 月-迎え)- DAT 月-ACC 迎える-DECL.NPST
「[月見(lit. 月迎え)]に月を迎える．」

d. ??[달맞이]를 하면서 달을 맞는다.

??[tal-maci]-lul　ha-myense　tal-ul　mac-nunta.

月見(lit. 月-迎え)-ACC する-ADV.SIM 月-ACC　迎える-DECL.NPST

「[月見(lit. 月迎え)]をしながら月を迎える.」

(65)a. *[글쓰기]가 글을 쓴다.

*[kul-ssuki]-ka　kul-ul　ssu-nta.

作文(lit. 文-書き)-NOM 文-ACC　書く-DECL.NPST

「[作文(lit. 文書き)]が文を書く.」

b. ?? [글쓰기]로 글을 쓴다.

?? [kul-ssuki]-lo　kul-ul　ssu-nta.

作文(lit. 文-書き)-INST 文-ACC　書く-DECL.NPST

「[作文(lit. 文書き)]で文を書く.」

c. *[글쓰기]에 글을 쓴다.

*[kul-ssuki]-ey　kul-ul　ssu-nta.

作文(lit. 文-書き)-DAT　文-ACC　書く-DECL.NPST

「[作文(lit. 文書き)]に文を書く.」

d. ???[글쓰기]를 하면서 글을 쓴다.

???[kul-ssuki]-lul　ha-myense　kul-ul　ssu-nta.

作文(lit. 文-書き)-ACC する-ADV.SIM　文-ACC　書く-DECL.NPST

「[作文(lit. 文書き)]をしながら文を書く.」

以上の「달맞이(talmaci;lit. 月迎え→月見)」および「글쓰기(kul-ssuki;lit. 文-書き→作文)」の場合、「NV 가 N 을 V(NV ガ N ヲ V)」「NV 로 N 을 V(NV デ/ヘ N ヲ V)」「NV 에/에서 N 을 V(NV ニ/デ N ヲ V)」または「NV 를 하면서 N 을 V(NV ヲシナガラ N ヲ V)」という文が成立しないのは、意味転移が起きず、各々の構成要素の意味が透明であり、同一の意味の要素が衝突するためであると考えられる. それに対して、(61b')と(62b), (63b)では意味転移([+人]または[+物])が発生し、各々の構成要素が不透明であるため、意味が重なっても意味的に衝突することはないということである.

他に、意味転移が起きたということの根拠としては、属性形容詞の修飾を受けることができるかという点が挙げられる. 形容詞の中には、人あるいは物の状態や属性だけを表す例「멋지다(素敵だ), 날카롭다(鋭い), 예쁘다(可愛い)」などが存在する. 動作性名詞は以下の(61'a)のように、形容詞の修飾には制約を受ける. しかし、意味転移が発

生した場合には、(61'b'), (62'b), (63'b)のように容易に属性形容詞の修飾を受けられる.

(61')a. 철수는 *멋진 [고기잡이]를 하러 갔다.
chelswu-nun *mesci-n [koki-capi]-lul ha-le ka-ss-ta.
PN-TOP 素敵だ-ADN 漁労(lit. 魚-とり)-ACC する-ADV 行く-PST-DECL
「チョルスは素敵な[漁労(lit. 魚取り)]をしに行った.」

b'. 멋진 [고기잡이]가 고기를 잡으러 갔다.
mesci-n [koki-capi]-ka koki-lul cap-ule ka-ss-ta.
素敵だ-ADN [漁師(lit. 魚-とり)]-NOM 漁-ACC 捕る-ADV 行く-PST-DECL
「素敵な[漁師(lit. 魚とり)]が魚を捕りに行った.」

(62')b. 늦은 시간에 날카로운 [손톱깎이]로 손톱을 깎으면 안 된다.
nuc-un sikan-ey nalkhalowu-n [sonthop-kkakki]-lo sonthop-ul
遅い-ADN 時間-DAT 鋭い-ADN [爪-切り]-INST 爪-ACC
kkakk-umyen an toy-nta.
切る-ADV.COND NEC なる-DECL.NPST
「遅い時間に鋭い[爪切り]で爪を切ってはいけない.」

(63')b. 영희는 종종 예쁜 [연필꽂이]에 연필을 꽂곤 했다.
yenghuy-nun congcong yeyppu-n [yenphil-kkoci]-ey yenphi-lul
PN-TOP しばしば 可愛い-ADN [鉛筆立て(lit. 鉛筆-さし)]-DAT 鉛筆-ACC
kkoc-kon hay-ss-ta.
さす-HAB-PST-DECL
「ヨンヒはしばしば可愛い[鉛筆立て(lit. 鉛筆さし)]に鉛筆を立てたりした.」

ここまでの議論は、動作性名詞は意味転移が起きず各々の構成要素の意味が比較的透明であるが、実体性名詞は[+人]または[+物]への意味転移が発生し、意味的に不透明であるとまとめることができる. 言い換えると意味転移が起きない場合は動作性を帯びやすくなる一方、意味転移が起きると実体性を帯びやすくなる. つまり、動作性と意味転移は密接な関係にあると言えよう.

5. 2 [N+V]型複合名詞の意味転移仮説

4 章で韓国語の[N+V]型は、基本的に項関係（特に目述関係）にある際に動作性を帯びることを確認した. しかし、項関係にありながらも動作性を帯びない複合名詞が存在する. 項関係にあることが動作性を帯びる条件であれば、なぜこのようなケースが起こるのであろうか.

本稿ではその理由を説明するため、項関係の[N+V]型複合名詞が本来動作性を帯びていたが、意味転移により動作性が失われたと仮定する. 論理的に考えても、本来動作性を帯びなかったものが突然動作性を持つようになったと説明するよりは、本来動作性を帯びるものが何らかの理由（本稿での主張によると「意味転移」）により失われたと説明した方が自然であるためである. シ・ジョンゴン（1994b：134）においても、「行為」の意味を持たない「人/道具」の意味を表す「X+-ㄱ（ki）」は存在しない点を挙げ、「行為→人/道具」という意味転移は可能であるが、「人/道具→行為」という順は不可能であると述べている.

一方、日本語の先行研究（4. 1. 1 を参照）では、主に[N+V]型複合名詞の意味が注目され、その語形成はあまり言及されていなかったのに対し[112]、韓国語の先行研究（4. 3. 1 を参照）では、主に[N+V]型複合名詞の語構成（とりわけ IC 分析）および語形成が注目され、その意味はあまり言及されていなかった. そして、従来の先行研究では共通して、[N+V]型複合名詞の中に動作性を帯びる例があることは認識しているものの、動作性名詞における意味転移、すなわち動作性と意味転移の関連性については論じられていない. なお、4. 3. 1 でも述べたように、[N+V]型複合名詞の前項名詞と後項動詞の関係を規則論と類推論の 2 つの立場から解釈することができる. しかし、規則論および類推論による解釈は、あくまでも語形成の観点からの分析であり、複合名詞の意味は考慮に入れていない.

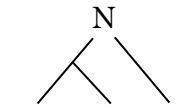
そこで、本稿では初めて、意味と語構成（あるいは語形成）という両方の観点から 2 つの仮説を立て、[N+V]型複合名詞における動作性と意味転移の関係を考えたい. 以下の（66）と（67）に 2 つの仮説における韓国語の例を挙げ、図式で表すが、意味転移が起

112 伊藤 & 杉岡（2002）は、日本語における動詞由来複合語の形成について論じているが、動詞由来複合語がどの部門（語彙部門ないし統語部門）で形成されるかについては述べる一方、動詞由来複合語がどのようにして形成されるか（規則や類推などの語形成論）については言及していない.

きる部分には下線を引いて示す．日本語よりは韓国語において 2 つの仮説が適用できる例が遥かに多く、仮説の説明に容易であるため、ここでは便宜上、韓国語の例を中心に議論を進める．

第一は、[[N+V]-接尾辞]全体として、意味転移が起きると動作性が失われるという「全体意味転移仮説」である．

（66）



[N + V] -suf]

[[줄 + 넘]$_{VP}$-기]]$_N$ ≪動作性名詞≫

[[cwul+ nem]$_{VP}$- ki]$_N$

[[縄 + 跳]$_{VP}$-び]$_N$

［＋物］ ⇓

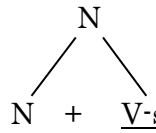
[[줄 + 넘] $_{VP}$-기] $_N$ ≪無生名詞≫

[[cwul+ nem]$_{VP}$- ki]$_N$

[[縄 + 跳] $_{VP}$-び（縄）] $_N$

第二は、[N+[V-接尾辞]]の後項要素「V-接尾辞」に意味転移が起きると動作性が失われるという「後項要素意味転移仮説」である．

（67）



N + V-suf

[[성냥]$_N$ + 팔-이]$_N$ ≪動作性名詞≫

[[sengnyang]$_N$ + phal-i]$_N$

[[マッチ]$_N$ + 売り] $_N$

［＋人］ ⇓

[[성냥]$_N$ + 팔-이]$_N$ ≪有生名詞≫

[[sengnyang]$_N$ + phal-i]$_N$

[[マッチ]$_N$ + 売り（の人）] $_N$

第一の「全体意味転移仮説」は、[N+V-接尾辞]型が動作性を帯びていたが、全体として意味転移が起き、動作性が失われたと見る立場である．現代韓国語での[N+V-기（ki）]型のように[N+V-이（i）]型と[N+V-음（um）]型も本来は動作性名詞を主に形成し

たが、[N+V-接尾辞]全体に意味転移が起き、動作性が失われたと見ることができる. 全体として意味転移が起きる過程は、例えば「줄넘기(cwul-nemki;縄-跳び)」「소매치기(somay-chiki;lit. 裾-打ち→スリ)」は、本来動作性名詞「縄を跳ぶこと」「スリをすること」であったが、それに関わる物や人をも表すことができるようになり、「줄넘기(cwul-nemki;縄-跳び)」「소매치기(somay-chiki;lit. 袖-打ち→スリ)」全体として[+物](縄を跳ぶため使う物→跳び縄)または[+人](スリをする人)という意味転移が起きたと考えられる. したがって、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例の限りではあるが、「줄넘기(cwul-nemki;縄跳び)」などの後項要素(넘기[nemki;跳び])の生産性が低い理由が説明できる.

ただし、この仮説(全体意味転移仮説)によると、[N+V]型複合名詞の[N+V]が複合動詞として存在しない場合、これに結合する接尾辞をどのように処理するかということが問題となる. この接尾辞を派生接尾辞として見るならば、[N+V]に結合できることが説明できないためである. そこで、本稿では[N+V]に結合する「-이(i)」「-음(um)」「-기(ki)」の性格[113]を、派生接尾辞でありながら統語的構成に結合する特別な接尾辞(韓国語学における、いわゆる統語的接尾辞[114])とし、韓国語の[N+V]型複合名詞を統語的構成[N+V]に統語的接辞(名詞形語尾)が付いてから単語化したものであると想定する[115](詳

113 現代語においても「-음(um)」と「-기(ki)」は、名詞形語尾として存在するものの、「-이(i)」は名詞形語尾としては存在しないため、共時的には名詞形接尾辞である. キム・ワンジン(1976)は中期韓国語において「-이(i)」は子音で終わる用言に付き、「-기(ki)」は母音で終わる用言に付いて動名詞を作ると説明している. つまり、名詞形語尾「-기(ki)」の異形態として「-이(i)」が存在したということである. 言い換えると、通時的に「-이(i)」は、動作性名詞を形成していたが、共時的に「V-이(i)」は名詞形接辞であるため、現代に至ってその生産性に乏しいと言えよう. 一方、[N+V-이(i)]型複合名詞は、殆ど後項要素が生産性に富んでいるため、「後項要素意味転移仮説」により説明できる. よって、本稿では[N+V-이(i)]型複合名詞に関しては「後項要素意味転移仮説」を適用することを提案する.

114 本稿で言うところの「統語的接辞」は、「名詞派生接尾辞」(すなわち、名詞形接尾辞)とは区別するために用いる用語であり、統語的構成に結合できる「名詞形語尾」を意味する. これは、イム・ホンビン(1989)で言う「統語的派生」(-들[-たち], -끼리[-同士], -답-[-らしい]など)とは、その性質が異なるが、助詞や語尾までも統語的派生の性格を持っているとするなら(イム・ホンビン 1989:186-189)、広い意味で「-음(um), -기(ki)」も統語的派生の接尾辞として見る可能性はあるだろう.

115 「줄넘기(cwul-nemki;縄-跳び)」類複合名詞の形成において、本稿と類似した立場を取る研究としては、コ・ジェソル(1992), シ・ジョンゴン(1994b), ソン・ウォンヨン(2002), チェ・ヒョンヨン(2002)を参照されたい. これらの研究は、すべて「줄넘기(cwul-nemki;縄-跳び)」類複合名詞を統語的構成[N+V]に名詞形接辞または名詞形語尾が付いたものであると分析している. または、[N+V]が複合動詞として存在しない場合に[N+V](소매치-[somaychi-;lit. 袖打

しくは、この節の最後に本稿の立場について後述する). このように考えると、[N+V]型動作性名詞に項関係にある例が多く現れる理由も説明できる.

次に、第二の「後項要素意味転移仮説」は、後項要素「V-接尾辞」が動詞(V)の動作性を保っているが、後項要素に意味転移が起きることにより、動作性が失われると見る立場である. 本稿で後項要素が動作性名詞であるため、動作性を帯びると述べた「꽃놀이(kkoch-noli;lit. 花-遊び→花見), 눈싸움(nwun-ssawum;lit. 雪-戦い→雪合戦), 발차기(pal-chaki;足-蹴り)」などの例を考えれば容易に分かる. 同様に、比較的生産性の高い後項要素「[[Y]$_N$(Y=売り物)-팔이(phali;lit. 売り)]$_N$〔X=성냥팔이(sengnyang-phali;マッチ-売り), 신문팔이(sinmwun-phali;新聞-売り)・・・〕, [[Y]$_N$(Y=身体の部分・場所)-앓이(alhi;lit. 病み)]$_N$〔X=가슴앓이(kasum-alhi;lit. 胸-病み→胸を痛めること), 귀앓이(kwi-alhi;lit. 耳-病み→耳を痛めること)・・・〕」や接尾辞「[-맞이(maci;lit. 迎え)]$_{suf}$, [-살이(sali;lit. 暮らし)]$_{suf}$, [-잡이(capi;lit. とり)]$_{suf}$」などが動作性を帯びると、右側主要部の規則により複合名詞全体が動作性を持つことができると解釈できる. 生産性の高い後項要素は、まだ辞書に登録されるほどではないが、「떨이[-팔이](tteli[-phali];lit. 売れ残りの品-売り→安売り), 시녀[-살이]$_{suf}$(sinye[-sali;lit. 侍女-暮らし→侍女として暮らすこと])」のように項関係にあると考えられない動作性名詞まで形成できることからも分かる. そして、この動作性は、後項要素「-팔이(phali;lit. 売り)[行為], -잡이(capi;lit. とり)$_{suf}$[行為]」が実体性[+人]の意味に転じる(例:껌팔이[kkem-phali;ガム-売り], 총잡이[chong-capi;lit. 銃-とり→拳銃つかい])ことによって、失われる.

この立場から見ると、4. 4 で例外として処理した、項関係にあるわけでもないのに動作性を帯びる「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ), 앞잡이(aph-capi;lit. 前-とり→手先), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き), 박치기(pakchiki;lit. 頭打ち→頭突き)」などや項関係にあるにもかかわらず動作性を帯びない「해바라기(hay-palaki;lit. 日-向き→ひまわり), 쓰레받기(ssuley-patki;lit. ゴミ-もらい→塵取り)」などの例が説明できる[116]. しかし、後項要素の生産性が低い複合名詞は、この仮説

つ], 줄넘-[cwulnem-;lit. 縄跳ぶ])という臨時語(または潜在語)を設定することで、[N+V]型複合名詞の形成過程を説明する研究(キム・チャンソプ 1996)もある.

116 「초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」と「가을걷이(kaul-keti;秋-取り入れ→秋の取り入れ)」の場合、後項要素「구이(kwui;lit. 焼き)」「-걷이(keti;lit. 取り入れ)」が「N+구이(kwui;焼き): 새우구이(saywu-kwui;海老-焼き), 오징어구이(ocinge-kwui;イカ-焼き)…」「N+-걷

（後項要素意味転移仮説）による説明が難しいという問題がある．そして、後項要素が動作性を既に持っているとすれば、なぜ項関係にある[N+V]型が動作性を帯びやすいかは説明できない．

基本的に[N+V]型複合名詞は、「全体意味転移仮説」により説明でき、「後項要素意味転移仮説」は「칸막이（khan-maki；lit．間-遮り→間仕切り），꽃받침（kkoch-patchim；lit. 花-支え→花のがく・花房）」のように実体性のみ表す非動作性名詞の例や、「가을걷이（kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ）」「초벌구이（chopel-kwui；素-焼き）」のように項関係（必須補語-述語）でない動作性名詞を説明するために立てた仮説である．「全体意味転移仮説」と「後項要素意味転移仮説」の関係は、語形成の観点である「規則」と「類推」の関係にあると考えられる．言い換えると、「全体意味転移仮説」は「規則」の観点であり、「後項要素意味転移仮説」は「類推」の観点であると言える．つまり、「類推」が存在するためには、その基盤となる「規則」が必要であるように、「全体意味転移仮説」は「後項要素意味転移仮説」の基盤となる仮説である．ただし、前述したように、「規則」および「類推」はあくまで語形成の観点からの立場であり、意味は考慮に入れていないが、「意味転移仮説」は語構成・語形成のみならず意味までも考慮に入れる点で異なる．

以上で述べた「全体意味転移仮説」および「後項要素意味転移仮説」の長所と短所を表にまとめると次のようである．

이（keti；取り入れ）：덩굴걷이（tengkwul-keti；蔓物-取り入れ→蔓物の取り入れ），자리걷이（cali-keti；lit. 席-取り入れ→出棺後、故人の冥福を祈る儀式）…」のように動作性名詞を生産的に作るため、もはや「구이（kwui；焼き）」や「-걷이（keti；取り入れ）」が動作性名詞を形成する要素となり、これにより形成された「초벌구이（素焼き）」「가을걷이（秋の取り入れ）」が動作性を帯びると説明できる．同様に「쓰레받기（ssuley-patki；lit. ゴミ-もらい→塵取り）」の場合も「-받기（patki；lit. もらい）」が「N+-받기（patki；lit. もらい）：턱받기（thek-patki；lit. 顎-もらい→よだれ掛け），땀받기（ttam-patki；lit. 汗-もらい→汗取り）…」のように「無生名詞（物名詞）」を生産的に作るため、もはや「-받기（patki；lit. もらい）」が実体性名詞を形成する要素となり、「쓰레받기（塵取り）」という「無生名詞（物名詞）」を形成すると考えられる．一方、「해바라기（haypalaki；lit. 日-向き→ひまわり）」は一般的には使われないが、国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』では「日光浴」という意味の動作性名詞として記述している．なお、後項要素「-바라기（palaki；lit. 向き）」は、「N+-바라기（palaki；向き）：개밥바라기（kaypap-palaki；lit. 犬飯-向き→金星），천상바라기（chensang-palaki；lit. 天上-向き→いつも顔をもたげている人）…」のように実体性名詞を作るため、「全体意味転移仮説」および「後項要素意味転移仮説」の両者により説明できる．

表 12. 意味転移仮説の長所と短所

意味転移仮説	全体意味転移仮説	後項要素意味転移仮説
分析	[[N+V]-接辞]	[N+[V-接辞]]
意味転移が起きる部分	[N+V-接辞]の全体	後項要素 [V-接辞]
理論的な立場	規則	類推
長所	・動作性名詞でありながら実体性名詞として共存する例の説明に容易 ・(動作性名詞でありながら実体性名詞として共存する例の限り)後項要素の生産性が低い理由が説明可能 ・項関係にある動作性名詞が多い理由が説明可能	・後項要素(V)が生産性に富む(特に、自立語や接尾辞である)例の説明に容易 ・項関係でない動作性名詞や項関係にある非動作性名詞の存在が説明可能
短所	・動作性名詞でありながら実体性名詞として共存しない例は説明不可 ・[N+V]が複合動詞として存在しない場合、その語形成の説明が困難	・後項要素の生産性に乏しい例は説明不可 ・[N+V]型動作性名詞に項関係にある例が多い理由は説明不可

これまで、韓国語の例を挙げて 2 つの意味転移仮説を提示したが、日本語の場合はおおむね「全体意味転移仮説」のみが適用できると考えられる.「全体意味転移仮説」が適用できる日本語の例としては、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する「舵取り」(有生名詞)や「目隠し」(無生名詞)などが挙げられる. つまり、本来は「舵取り」「目隠し」が「舵を取ること」「目を隠すこと」という動作性名詞であったが、[N+V]の全体に、それに関わる[+人](舵を取る人)または[+物](目を隠すため使う物)という意味転移が

起き、動作性が失われたと説明できる．一方、日本語の場合は「後項要素意味転移仮説」が適用されるような例は殆ど見受けられず、本研究で対象とした資料では、「塩焼き」の一例のみが現れた[117].

よって、本稿では基本的に「全体意味転移仮説」を優先するが、複合名詞の語構成によっては、「後項要素意味転移仮説」も適用し、両者の仮説とも考慮に入れたい．つまり、動作性名詞でありながら実体性名詞としても用いられる[N+V]型複合名詞の場合は、基本的に「全体意味転移仮説」を適用するが、動詞性名詞と実体性名詞として両用できず、後項要素「V-接尾辞」の生産性が比較的高く、類推による複合名詞の形成が説明できる場合は、「後項要素意味転移仮説」を適用する.

上述したように、「全体意味転移仮説」は「後項要素意味転移仮説」の基盤となる仮説であるため、基本的に[N+V]型動作性名詞の全体で意味転移が起きることにより、動作性が失われると考えられる．しかし、一部の複合名詞は、後項要素[V-接尾辞]が動作性を持ち、この後項要素に意味転移が起きることにより、動作性が失われるという「後項要素意味転移仮説」により説明できる．一方、「全体意味転移仮説」で説明できる例の中でも、後項要素が生産性に富む例「고기잡이（koki-capi；lit．魚-とり→漁労，漁師），감옥살이（kamok-sali；監獄-暮らし）」などは、「後項要素意味転移仮説」によっても説明できる．したがって、「全体意味転移仮説」と「後項要素意味転移仮説」を厳密に区別することには意味がなく、「全体意味転移仮説」により説明が不可能である場合に「後項要素意味転移仮説」により説明できるということがより重要である.

しかし、「全体意味転移仮説」において最も問題になるのは、上述したように[N+V]が複合動詞として存在しない場合である．日本語の場合は、[N+V]型複合名詞の後項要素は動詞の連用形であるため、語形成において問題とならない一方、韓国語の場合は[N+V]型複合名詞の後項要素は[V-接尾辞]という形態を取っているため問題となる.

---

117 「後項要素意味転移仮説」を適用するためには、後項要素が生産性に富む必要があるが、日本語の[N+V]型複合名詞は、韓国語と異なり後項要素の生産性が比較的低い．例えば、韓国語では動作性名詞でありながら実体性名詞としても両用できる例の中にも後項要素が生産性に富む例（고기잡이[koki-capi；lit．魚-とり→漁労，漁師]，성냥팔이[sengnyang-phali；マッチ-売り]など）が目立つのに対し、日本語では「塩焼き」の一例しか見られなかった．なお、日本語の非動作性名詞においても、後項要素が生産性に富む例は少なく、かつ「後項要素意味転移仮説」が適用できる例は、後項要素が自立語（例：夏休み，表通りなど）である場合が殆どであるため、「後項要素意味転移仮説」を適用するまでもない.

[N+V]が複合動詞として存在しない場合に、臨時語（または潜在語）として認めるか（キム・チャンソプ 1996）、もしくは目的語（あるいは、非対格動詞の主語）が動詞の一部になる現象である名詞抱合（noun incorporation）の理論（いわゆる主要部移動）を取り入れて説明する研究（コ・ジェソル 1992; シ・ジョンゴン 1994a/1994b など）もある．しかし、すべての[N+V]を臨時語または潜在語として見るには負担が大きく、本来名詞抱合は空範疇原則（empty category principle, ECP）によると、補部（complement）は主要部移動（head movement）が可能であるが、それ以外には主要部移動が不可能であるため、付加詞（adjunct）は動詞に抱合できない（Baker 1985：110-116）．それにもかかわらず、[N+V]型複合名詞には随意的な成分である付加詞（adjunct）を含んだ例「가을걷이（kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ），소금구이（sokum-kwui；塩-焼き）」が多数存在する．そして、助詞を含んだ形の「앞으로감기（aphulo-kamki；lit. 前へ-巻き→巻き戻し），뒤로돌기（twilo-tolki；lit. 後ろに-回り→逆上がり）」なども存在することから、[N+V]を 1 つの単位として見ることは難しい．

したがって、[N+V]に結合する接尾辞を統語的接尾辞（名詞形語尾）と見るのが最も妥当であろう．つまり、統語部門で「N+V-接尾辞」が作られた後、高い頻度で用いられることにより、語彙部門に登録されたと考えられる．

パク・ヨンチャン（2005）の『日本語式用語醇化資料集（일본어 투 용어 순화 자료집）』[118]からこれを裏付けるいくつかの例が見られた．例えば、日本語を韓国語に醇化したが、実際に定着しなかった例として「집 나감（cip nakam；家-出），임시 심기（imsi simki；lit. 臨時植え→仮植），짐 꾸리기（cim kkwuliki；lit. 荷物-括り→荷造り），몫 나누기（moks nanwuki；lit. 取り分-分け→割り当て）」などがあるが、これらの[N+V]型複合名詞の名詞形接尾辞「-음（um）」および「-기（ki）」の使用は、名詞形語尾「-음（um）」および「-기（ki）」と大きく変わらない．このことから、最初の[N+V]型複合名詞の語形成の段階では、「-음（um）」および「-기（ki）」は統語的接尾辞であったが、「N+V-統語的接尾辞」の形が高い頻度で用いられ、複合名詞として定着したもの「実際に定着した例：줄 서기（cwul seki；lit. 列-立ち→並ぶこと），본전치기（poncen-chiki；

118 パク・ヨンチャン（2005）の『日本語式用語醇化資料集（일본어 투 용어 순화 자료집）』は、韓国が日本の植民地支配から解放された後、韓国における「国語醇化運動」により、日本統治時代に入ってきた日本語を韓国語の固有語に置き換える（つまり、醇化する）過程で生まれた用語を集めたものである．「国語醇化運動」は、解放直後の 1945 年から始まったが、1970 年代から 1990 年代に最も活発に行われた．

lit. 元-打ち→元を取ること)」であると推測できる. [N+V]が語彙部門で形成されるか、それとも統語部門で形成されるかというのは、動詞由来複合語の語形成において、重要な争点になってきた問題であるが、本論文の趣旨から外れるため、これ以上論じない.

5. 3　意味転移仮説の検証

ここでは前節で提示した意味転移仮説を検証する. 前節で述べたように、日本語の場合は「後項要素意味転移仮説」が適用されるような例は殆どなく、主に「全体意味転移仮説」のみが適用される. 意味転移仮説を検証するためには、「全体意味転移仮説」と「後項要素意味転移仮説」が適用される例を併せて照らし合わせる必要があるが、日本語の例は極めて少なく、意味転移仮説の検証が難しいため、ここでは韓国語の例を中心に議論を進めることにする.

韓国語の[N+V]型複合名詞の中で、動作性名詞でありながら実体性名詞(有生名詞あるいは無生名詞)としても共存する例は、殆ど「必須補語-述語」という項関係(おおよそ目述関係)にある. そして、これらの例が動作性名詞でありながら、実体性名詞としても用いられることから、動作性名詞と実体性名詞(すなわち「有生名詞(人名詞)」および「無生名詞(物名詞)」)の間には、何らかの関係があることが予想される.

5. 3. 1 全体意味転移仮説の検証

[N+V]型複合名詞において、動作性名詞の全体に意味転移が起きると動作性が失われるという「全体意味転移仮説」は、この動作性名詞と実体性名詞(有生名詞および無生名詞)との関係をよく反映している. この仮説を裏付ける例としては、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例が挙げられる. 以下は動作性名詞でありながら、実体性名詞として共存する韓国語の例を後項要素[V-接尾辞]を中心にまとめたものである[119].

119 本稿の研究対象である国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』から動作性名詞でありながら実体性名詞(有生名詞あるいは無生名詞)としても共存する例を抽出した後(5.5 で提示する)、同じ後項要素を持つ例を国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』から検索し、提示する. 以下の(71)においても同様である.

(68) 動作性名詞と実体性名詞が共存する例

a. [N+V-이(i)]型

①[-구이(kwui;焼き)]:소금구이(sokum-kwui;塩-焼き), 숯구이(swuch-kwui;炭-焼き), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き), 통구이(thong-kwui;lit. 丸のまま-焼き→丸焼き), 화로구이(hwalo-kwui;火鉢-焼き)…

②[-꽂이(kkoci;さし)]:꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花)

③[-닦이(takki;磨き)]:구두닦이(kwutwu-takki;lit. 靴-磨き→靴磨き, 靴磨きの人)

④[-막이(maki;防ぎ)]:뒷막이(twis-maki;lit. 後ろ-防ぎ→後片付け, 裏側に当てる板), 바람막이(palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け), 방패막이(pangphay-maki;lit. 盾-防ぎ→盾に取ること, 隠れみの), 빗물막이(pismwul-maki;lit. 雨-防ぎ→雨除け), 옆막이(yeph-maki;lit. 横-防ぎ→横を遮ること/もの), 추위막이(chwuwi-maki;lit. 寒さ-防ぎ→寒さ対策, 防寒グッズ)…

⑤[-밀이(mili;押し・擦り)]:뒷밀이(twis-mili;lit. 後ろ-押し→後押し, 後援者), 때밀이(ttay-mili;lit. 垢-擦り→垢擦り, 流し・垢擦り師), 팔밀이(phal-mili;lit. 腕-押し→昔、結婚式の日に新郎が新婦の家に着いた時、新郎を出迎えて、式場まで腕を押して引導すること/人)

⑥[-받이(pati;もらい)]:돈받이(ton-pati;lit 金-もらい→金貸し), 복받이(pok-pati;lit. 福-もらい→福を受け取ること/人), 씨받이(ssi-pati;lit. 種-もらい→血筋を継ぐためによその女性に子を産ませたこと, またその女性), 야단받이(yatan-pati;lit. 小言-もらい→人に叱られること, またそのようにされる人), 응석받이(ungsek-pati;lit. 甘え-もらい→甘やかすこと, 甘えん坊), 재롱받이(caylong-pati;lit. 面白くて可愛い仕草/茶目-もらい→子供などの可愛い仕草を見る, 面白くて可愛い仕草をする子・茶目っ子), 총알받이(chongal-pati;lit. 銃丸-もらい→敵弾に当たること/状態, 戦闘部隊の最前列)…

⑦[-살이(sali;暮らし)]:겨우살이(kyewu-sali;lit. 冬-暮らし→冬過ごし, 冬着・冬物), 살림살이(sallim-sali;lit. 生かし-暮らし→生活すること, 所帯道具), 식모살이(sikmo-sali;lit. 女中-暮らし→女中暮らし, 女中暮らしの人), 하루살이(halwu-sali;lit. 一日-暮らし→その日暮らし, その日暮らしの人)…

⑧[-잡이(capi;とり)]:고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師), 고래잡이(kolay-capi;鯨-とり), 매잡이(may-capi;lit. 鷹-とり→鷹を狩ること, 鷹を狩る人), 바잡이(pa-capi;lit. バー-とり→バーを取って引くこと, バーを取って引く人), 전당잡이(centang-capi;lit. 質屋-とり→物品を質草にして金貸しをすること/人)…

⑨[-주이(cwui;拾い)]:넝마주이(nengma-cwui;lit. ぼろ-拾い→屑拾い, 屑屋)

⑩[-팔이(phali;売り)]:껌팔이(kkem-phali;ガム-売り), 날품팔이(nalphwum-phali;lit. 日雇い-売り→日雇いで働く, 日雇い人夫), 성냥팔이(sengnyang-

phali；マッチ-売り），신문팔이（sinmwun-phali；新聞-売り），품팔이（phwum-phali；lit. 手間-売り→賃労働/手間仕事，賃労働/手間仕事をする人）…

⑪[-풀이（phwuli;解き・ほぐし）]：심심풀이（simsim-phwuli；lit. 退屈-ほぐし→暇つぶし，暇つぶしにするもの），속풀이（sok-phwuli；lit. 中-ほぐし→二日酔いによる胃の不快な症状を良くすること．または二日酔いに良い食べ物）

b. [N+V-음（um）]型

⑫[-가심(kasim；すすぎ)]：약가심（yak-kasim；lit. 薬-すすぎ→薬を飲んだ後の口直し，またその口直しになるもの），입가심（ip-kasim；lit. 口-すすぎ→口直し，またその口直しになるもの）

⑬ [-차림（chalim;整え・そろえ）]：상차림（sang-chalim；lit. 食卓-整え/膳-そろえ→食事の準備，膳）

c. [N+V-기（ki）]型

⑭[-넘기（nemki；跳び）]：줄넘기（cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄）

⑮[-뛰기（ttwiki；跳び）]：널뛰기（nel-ttwiki；lit. 板-跳び→板跳び，板飛びに使う板）

⑯[-짓기（ciski;作り）]：집짓기（cip-ciski；lit. 家-作り→家を建てること，家を建てるための材料）

⑰[-치기（chiki;打ち）]：굴레치기（kwulley-chiki；lit. くびき-打ち→女性の首飾りを専門的に盗むこと/人），매장치기（maycang-chiki；lit. 毎回場-打ち→市が立つたびに買い物に行くこと/人），새치기（say-chiki；lit. 間-打ち→割り込み，割り込みをする人），소매치기（somay-chiki；lit. 裾-打ち→スリ），양치기（yang-chiki；lit. 羊-打ち→羊を飼うこと，羊飼い）…

上の(68)の例は、すべて「全体意味転移仮説」により説明できるが、その中でも比較的生産的に複合名詞を形成する④[-막이（maki；lit. 防ぎ）]，⑥[-받이（pati；lit. 受け取り）]，⑧[-잡이（capi；lit. とり）]，⑩[-팔이（phali；lit. 売り）]などを後項要素とする例は、類推のメカニズムにより形成されたとも考えられ、「後項要素意味転移仮説」からも説明できる．その一方で「구두닦이（kwutwu-takki；lit. 靴-磨き→靴磨き，靴磨きの人）」「줄넘기（cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄）」「널뛰기（nel-ttwiki；lit. 板-跳び→板跳び，跳び板）」「집짓기（cip-ciski；lit. 家-作り→家を建てること，家を建てるための材料）」は、これらの複合名詞以外で後項要素③[-닦이（takki；磨き）]，⑭[-넘기（nemki；跳び）]，⑮[-뛰기（ttwiki；跳び）]，⑯[-짓기（ciski；作り）]を持つ実体性名詞

が韓国語辞典(『韓国語基礎辞典』および『標準国語大辞典』)には見当たらない[120]. このように、後項要素の生産性に乏しいため、「全体意味転移仮説」より説明する他ないこれらの例は、何より「全体意味転移仮説」をよく証明してくれる例であると言える.

ここでは、「全体意味転移仮説」を支える例として(ⅰ)[N+V-이(i)]型の「구두닦이(kwutwu-takki;lit. 靴-磨き→靴磨き, 靴磨きの人)」および(ⅱ)[N+V-기(ki)]型の「줄넘기(cwul-nemki;lit. 縄-跳び)」「널뛰기(nel-ttwiki;lit. 板-跳び)」「집짓기(cip-ciski;lit. 家-作り)」を中心に、「全体意味転移仮説」を検証する.

(ⅰ)[N+V-이(i)]型

[N+V-이(i)]型の「구두닦이(kwutwu-takki;lit. 靴-磨き)」は、「N 을 V 하는 [행위](NヲVスル[行為]):구두$_N$를 닦$_V$는 [행위](靴$_N$ヲ磨く$_V$[行為])」という動作性名詞であると同時に、「N 을 V 하는 [사람](NヲVスル[人]):구두$_N$를 닦$_V$는 [사람](靴$_N$ヲ磨く$_V$[人])」という「有生名詞(人名詞)」を表すこともできる. この「有生名詞(人名詞)」の場合、下記の(69)のように「NV 가 N 을 V(NV ガ N ヲ V)」が成立することから意味転移が起きたことが確認できる.

(69) [구두닦이]$_{NV}$가 구두$_N$를 닦다$_V$.
[lit. 靴磨き]$_{NV}$ガ 靴$_N$ヲ 磨く$_V$.

(ⅱ)[N+V-기(ki)]型

[N+V-기(ki)]型の「줄넘기(cwul-nemki;lit. 縄-跳び→縄跳び, 跳び縄), 널뛰기(nel-ttwiki;lit. 板-跳び→板跳び, 跳び板), 집짓기(cip-ciski;lit. 家-作り→家を建てること, 家を建てるための材料)」の場合も、動作性名詞「N 을 V 하는 [행위](NヲVスル[行為])」〔例:줄넘기(cwul-nemki;縄-跳び):줄$_N$을 넘$_V$는 [행위](縄$_N$ヲ跳ぶ$_V$[行為])〕であると同時に、「N 을 V 하기 위한 [도구](NヲVスルための[道具])〔例:줄넘기(cwul-nemki;lit. 縄-跳び→跳び縄):줄$_N$을 넘$_V$기 위한 [도구](縄$_N$ヲ跳ぶ$_V$ための[道具])〕であるため、すべて「無生名詞(物名詞)」と見ることができる. 「無生名

120 「넝마주이(nengma-cwui;lit. ぼろ-拾い→屑拾い, 屑屋)」も同じ後項要素を持つ実体性名詞が見当たらないが、後項動詞の「줍다(cwupta;lit. 拾う)」が音韻変化しているため、論外とする. しかし、この例も動作性名詞でありながら実体性名詞(有生名詞)としても用いられるが、後項要素は生産性に乏しいため、何より「全体意味転移仮説」を支える例であると言える.

詞(物名詞)」への意味転移が起きたことは、下記の(70)のようにすべて「NV로 N을 V(NVデNヲV)」が成立することからも分かる.

(70)a. [줄넘기]$_{NV}$로 줄$_{N}$을 넘다$_{V}$.
[lit. 縄跳び]$_{NV}$デ縄$_{N}$ヲ跳ぶ$_{V}$.

b. [널뛰기]$_{NV}$로 널$_{N}$을 뛰다$_{V}$.
[lit. 板跳び]$_{NV}$デ板$_{N}$ヲ跳ぶ$_{V}$.

c. [집짓기]$_{NV}$로 집$_{N}$을 짓다$_{V}$.
[lit. 家作り]$_{NV}$デ家$_{N}$ヲ作る$_{V}$.

以上の実体性名詞「구두닦이(kwutwu-takki;lit. 靴-磨き→靴磨きの人), 줄넘기(cwul-nemki;lit. 縄-跳び→跳び縄), 널뛰기(nel-ttwiki;lit. 板-跳び→跳び板), 집짓기(cip-ciski;lit. 家-作り→家作りの材料)」の後項要素[-닦이(takki;lit. 磨き)], [-넘기(nemki;lit. 超え)], [-뛰기(ttwiki;lit. 跳び)], [-짓기(ciski;lit. 作り)]は、新しく「有生名詞(人名詞)」または「無生名詞(物名詞)」を形成するほどの生産性がないため、これらは本来動作性名詞「구두닦이(靴磨き), 줄넘기(縄跳び), 널뛰기(板跳び), 집짓기(lit. 家作り)」の全体から[+人]または[+物]へと意味転移が起きたとしか説明できない.

5. 3. 2 後項要素意味転移仮説の検証

上述したように、動作性名詞と実体性名詞(「有生名詞(人名詞)」および「無生名詞(物名詞)」)との関係は、本来無かった動作性が新しく現れるというよりは、本来持っていた動作性が、意味転移が起きることにより失われると説明した方が論理的には無理がないだろう. しかし、このような説明は次のような問題を含む. つまり、項関係にある[N+V]型複合名詞が動作性を持つことが基本であるというならば、同一の構造の実体性名詞は、動作性名詞の意味転移により発生したものであると説明できるため、これらの実体性名詞は必ず動作性名詞としても共存しているはずである. ところが、項関係にある[N+V]型複合名詞には、動作性は全く帯びない非動作性名詞、すなわち実体性名詞(有生名詞あるいは無生名詞)としてのみ用いられる例(「有生名詞(人名詞)」の例:총잡이[chong-capi;lit. 銃-とり→拳銃つかい], 「無生名詞(物名詞)」の例:손톱깎이[sonthop-kkakki;lit. 爪-削り→爪切り])も多数存在する.

このような問題は、「後項要素意味転移仮説」により解決できる.「後項要素意味転移仮説」によると[N+[V-接尾辞]]の後項要素[V-接尾辞]に意味転移が起きることにより、動作性が失われたと説明できる. つまり、「後項要素意味転移仮説」によると複合名詞が動作性を帯びるのは、後項要素[V-接尾辞]のためであると言えよう. このように、複合名詞の動作性が後項要素によるものであり、なお後項要素における意味転移により動作性が失われるということを明らかにするためには、非動作性名詞の「총잡이(chong-capi;lit. 銃-とり→拳銃つかい), 손톱깎이(sonthop-kkakki;lit. 爪-削り→爪切り)」の後項要素「-잡이(capi;とり), -깎이(kkakki;削り)」が動作性名詞を形成するものでなければならない. したがって、項関係にある[N+V]型の非動作性名詞の後項要素が動作性名詞の後項要素として現れるかを調べた. 下記の(71)は、非動作性名詞の後項要素の代表とそれに該当する例である. これらを後項要素とする動作性名詞の例を隅付き括弧の中に示す. 動作性名詞の判断は、日常生活で使用しない単語の場合、母語話者の内省だけでは判断が難しく、国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』を参考にした[121].

(71) 非動作性名詞としてのみ用いられる例

a. [N+V-이(i)]型

①[-더듬이(tetumi;lit. どもり・探り)]:말더듬이(mal-tetumi;lit. 言葉-どもり→)【발더듬이(pal-tetumi;足-探り), 손더듬이(son-tetumi;手-探り)】

②[-살이(sali;lit. 暮らし)]:두해살이(twuhay-sali;lit. 二年-暮らし→越年生), 한해살이(hanhay-sali;lit. 一年-暮らし→一年生植物)【감옥살이(kamok-sali;監獄-暮らし), 고용살이(koyong-sali;lit. 雇用-暮らし→人に雇われて生活すること), 벼슬살이(pyesul-sali;lit. 官職-暮らし→役人暮らし・宮仕え), 시집살이(sicip-sali;lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし)…】

③[-잡이(capi;lit. とり)]:길잡이(kil-capi;lit. 道-とり→道しるべ), 바람잡이(palam-capi;lit. 風-とり→さくら), 안경잡이(ankyeng-capi;lit. メガネ-とり→メガネの子), 총잡이(chong-capi;lit. 銃-とり→拳銃つかい), 칼잡이

121 『標準国語大辞典』で「V 하는 일(V すること)」というデキゴト名詞(非実体性名詞)として意味記述をし、[N+V]型複合名詞に「하다(hata;する)」が直接結合した形である「NV 하다(NV する)」が見出し語として登録されている場合、動作性名詞であると判断した. ただし、『標準国語大辞典』に見出し語として「NV 하다(NV する)」が登録されていない場合でも、辞典の例文で機能動詞「하다(hata;する)」と共起する例が現れたり(例: 상차림을 하느라[食事の準備[lit. 食卓整え]をしていて]、母語話者の内省により機能動詞「하다(hata;する)」ならびにアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起できると判断できる場合(例:은행털이를 하다[銀行強盗<lit. 銀行はたき>をする], 은행털이 중(銀行強盗<lit. 銀行はたき>中)には、動作性名詞であると見なし、提示した.

(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)【고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労), 돌잡이(tol-capi;lit. 初誕生日-とり→選び取り・将来選び)…】

④[-걸이(keli;lit. 掛け)]:발걸이(pal-keli;足-掛け), 수건걸이(swuken-keli;タオル-掛け), 옷걸이(os-keli;洋服-掛け), 팔걸이(phal-keli;lit. 腕-掛け→肘掛け) 【낚시걸이(nakksi-keli;lit. 釣り-掛け→少量を与え多くの利益を得るために仕掛ける行動), 발등걸이(paltung-keli;lit. 足の甲-掛け→先手を打つこと), 턱걸이(thek-keli;lit. 顎-掛け→懸垂)…】

⑤[-긁이(kulki;lit. 掻き)]:등긁이(tung-kulki;lit. 背中-掻き→孫の手) 【<北朝鮮語>[122]부대긁이(pwutay-kulki;lit. 焼き畑-掻き→焼畑農業)】

⑥[-깎이(kkakki;lit. 削り)]:손톱깎이(sonthop-kkakki;lit. 爪-削り→爪切り), 연필깎이(yenphil-kkakki;鉛筆-削り)【두벌깎이(twupel-kkakki;lit. 二度目-削り→還俗した人が再び僧になること), 질깎이(cil-kkakki;lit. 陶土-削り→陶磁器を作る際に、器の形を整えること)…】

⑦[-꽂이(kkoci;lit. さし)]:바늘꽂이(panul-kkoci;針-さし), 연필꽂이(yenphil-kkoci;lit. 鉛筆-さし→鉛筆立て), 책꽂이(chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚)【꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花)】

⑧[-떨이(tteli;lit. はたき)]:먼지떨이(menci-tteli;lit. 埃はたき→はたき), 재떨이(cay-tteli;lit. 灰-はたき→灰皿)【못정떨이(mosceng-tteli;lit. 当て金-はたき→釘を深く持ち込む時に用いる当て金を使って岩を砕く), 주머니떨이(cwumeni-tteli;lit. ポケット-はたき→皆で財布をはたいて飲み食いすること)】

⑨[-막이(maki;lit. 遮り・防ぎ)]:간막이/칸막이(kan-maki/khan-maki;lit. 間-遮り→間仕切り)【녹막이(nok-maki;lit. 錆-防ぎ→錆止め), 바람막이(palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け), 물막이(mwul-maki;lit. 水-防ぎ→水止め), 홍수막이(hongswu-maki;lit. 洪水-防ぎ→洪水を防ぐために堤防を築くこと)…】

⑩[-말이(mali;lit. 巻き)]:계란말이(kyeylan-mali;卵-巻き)
【멍석말이(mengsek-mali;lit. むしろ-巻き→むしろに巻いて袋叩きにする私刑), 진창말이(cinchang-mali;lit. ぬかるみ-巻き→泥まみれ)】

⑪[-받이(pati;lit. もらい)]:등받이(tung-pati;lit. 背中-もらい→背もたれ), 물받이(mwul-pati;lit. 水-もらい→), 응석받이(ungsek-pati;lit. 甘え-もらい→甘やかすこと, 甘えん坊), 턱받이(thek-pati;lit. 顎-もらい→よだれ掛け)【고기받이(koki-pati;lit. 魚-もらい→漁船から汲み上げる魚を受け取ること), 돈받이(ton-pati;lit. 金-もらい→貸したお金を返してもらうこと/人), 빚받이

122 本稿で扱った北朝鮮語(朝鮮民主主義人民共和国で用いられている言語)の例は、例の前に<北朝鮮語>と表記する. 韓国語において、同じ後項要素を持つ動作性名詞の例が見当たらない場合に限り、参考のため国立国語院(編)(2016)の『ウリマルセム(우리말샘)』から、北朝鮮語の例を提示することにした次第である.

(pic-pati;lit. 借り-もらい→借金を取り立てること), 애받이(ay-pati;lit. 子-もらい→お産の時に赤ちゃんを受け取ること, 産婆)…】

⑫[-볶이(pokki;lit. 炒め)]:떡볶이(ttek-pokki;lit. 餅-炒め→トッポッキ:棒状にした白い餅を適当な長さに切って調味料を加えて野菜と共に炒めた料理)【<北朝鮮語>콩볶이(khong-pokki;lit. 豆-炒め→豆を炒めること)】

⑬[-털이(theli;lit.)]:재털이(cay-theli;lit. 灰-はたき→灰皿)【은행털이(unhayng-theli;lit. 銀行-はたき→銀行強盗)】

⑭[-박이(paki;lit. 打ち込み・ぶつけ)]:점박이(cem-paki;lit. 斑点-打ち込み→顔や体にほくろや斑点がある人や動物), 차돌박이(chatol-paki;lit. 石英-打ち込み→牛の肋間についている、白色でやや固い脂肪質の肉)【<北朝鮮語>코박이(kho-paki;lit. 鼻-ぶつけ→地面に鼻をぶつけること)…】

b. [N+V-음(um)]型

⑮[-받침(patchim;lit. 支え)]:꽃받침(kkoch-patchim;lit. 花-支え→花のがく・花房), 밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)【뒷받침(twis-patchim;lit. 後ろ-支え→後押し), 속받침(sok-patchim;lit. 中-支え→中に敷物や内部を支えるフレームなどを差し込むこと)…】

⑯[-지름(cilum;lit. 突っ切り)]:반지름(pan-cilum;lit. 半-突っ切り→半径)【<北朝鮮語>목지름(mok-cilum;lit. 街角-突っ切り→街角で道を突っ切ること)】

⑰[-차림(chalim;lit. 整え・そろえ)]:몸차림(mom-chalim;lit. 体-整え→身繕い), 옷차림(os-chalim;lit. 服-整え→装い)【상차림(sang-chalim;lit. 食卓-整え/膳そろえ→膳)】

c. [N+V-기(ki)]型

⑱[-받기(patki;lit. もらい)]:쓰레받기(ssuley-patki;lit. ゴミ-もらい→塵取り)【공기받기(kongki-patki;lit. 手玉-もらい→石なご・お手玉)】

⑲[-보기(poki;lit. 見)]:본보기(pon-poki;lit. 模範-見→見本)【맛보기(mas-poki;味-見), 장보기(cang-poki;lit. 市場-見→買い物)】

(71)の例から、たとえ非動作性名詞で、実体性名詞としてのみ現れる例「칸막이(khan-maki;lit. 間-遮り→間仕切り), 두해살이(twuhay-sali;lit. 二年-暮らし→二年生植物), 꽃받침(kkoch-patchim;lit. 花-支え→花のがく・花房)」であるとしても、その後項要素[V-接尾辞]である「-막이(maki;遮り・防ぎ), -살이(sali;暮らし), -받침(patchim;支え)」などは、動作性名詞「홍수막이(hongswu-maki;lit. 洪水-防ぎ→洪水を防ぐために堤防を築くこと), 시집살이(sicip-sali;lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし), 뒷받침(twis-patchim;lit. 後ろ-支え→裏付け)」を形成できる要素であることが確認できる.

一般的に、「밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け), 몸차림(mom-chalim;lit. 体-整え→身繕い), 옷차림(os-chalim;lit. 服-整え→装い), 해바라기(hay-palaki;lit. 日-向き→ひまわり)」は実体性名詞のみに用いられるため、本稿(4. 3. 2の表 10)では非動作性名詞として分類した. しかし、国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』では「NV 하다(NV する)」型(밑받침하다[mith-patchim-hata;lit. 下-支え-する→裏付けする], 몸차림하다[mom-chalim-hata;lit. 体-整え-する→身繕いする], 옷차림하다[os-chalim-hata;lit. 服-整え-する→装いする], 해바라기하다[hay-palaki-hata;lit. 日-向き-する→日焼けする])の見出し語を提示しており、『標準国語大辞典』での意味記述から見ても動作性名詞であることが分かる[123]. つまり、現代韓国語では動作性名詞として使われるのが一般的ではないだけであり[124]、これらの複合名詞は動作性名詞であることには違いない.

一方、非動作性名詞の後項要素には、[튀김(thwikim;lit. 揚げ)], [볶음(pokkum;lit. 炒め)], [-먹이(meki;lit. 飲み)], [-닫이(tati;lit. 閉じ・閉め)]など動作性名詞の後項要素として現れない例も存在する. このうち、[튀김(thwikim;lit. 揚げ)], [볶음(pokkum;lit. 炒め)]の場合は、自立語として存在し、動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存する[125]. したがって、動作性名詞である後項要素に意味

---

123 「밑받침하다(mith-patchim-hata;lit. 下-支え-する→裏付けする)」は「ある出来事や現象の背景や根拠を整える」という意味、「몸차림하다(mom-chalim-hata;lit. 体-整え-する→身繕いする)」は「きれいに見せるため、化粧をしたり、装飾品を付けたりして、 身だしなみを整える」という意味、「옷차림하다(os-chalim-hata;lit. 服-整え-する→身なりを整える)」は「服装を整えて着る」という意味、「해바라기하다(hay-palaki-hata;lit. 日-向き-する→日焼けする)」は「寒い時、日当たりが良いところに出て、日光にさらす」という意味であるとして記述しているが、品詞が動詞であるだけで、先行名詞と意味は全く同じである. このことから、「하다(hata;する)」に先行する名詞「밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)」「몸차림(mom-chalim;lit. 体-整え→身繕い)」「옷차림(os-chalim;lit. 服-整え→装い)」「해바라기(hay-palaki;lit. 日-向き→ひまわり)」は、行為を表す動作性名詞であることが分かる.

124 現代韓国語で「밑받침(mith-patchim;lit. 下-支え→下敷き, 裏付け)」「몸차림(mom-chalim;lit. 身-整え→身繕い)」「옷차림(os-chalim;lit. 服-整え→装い)」は「하다(hata;する)」と共起が可能であるが、アスペクト的名詞・アスペクト的動詞との共起は難しい. 例えば、「*밑받침 시작(裏付けの始め)」「*몸차림 도중(身繕いの途中)」「*옷차림 완료(装いの完了)」は一般的に成立しない.

125「튀김(thwikim;揚げ)」と「볶음(pokkum;炒め)」は、複合名詞の形成要素として現れる場合は、おおよそ「새우[튀김](saywu-[thwikim];海老-[フライ(lit. 揚げ)]), 김치[볶음](kimchi-[pokkum];キムチ-[炒め])」のような実体性名詞(無生名詞)を形成する. なお、単独で用いられる場合にも「[튀김]을 먹다([揚げ物(lit. 揚げ)]を食べる)」「[볶음]을 만들다([炒め物(lit. 炒め)]を作る)」のように実体性名詞として用いられる一方、「[튀김]을 하다([揚げ物(lit. 揚げ)]をする), [튀김] 중([揚げ物(lit. 揚げ)]中)」「[볶음]을 하다([炒め物(lit. 炒め)]をす

転移が起きることにより、これらの後項要素を含む複合名詞全体が実体性名詞になったと説明できる. このように、[N+V]型非動作性名詞の後項要素が動作性名詞として存在する場合は、「後項要素意味転移仮説」の反例ではない.

しかし、「젖먹이(cec-meki;lit. 乳-食い→乳飲み子)」の[-먹이(meki;lit. 食い)]と「반닫이(pan-tati;lit. 半-閉じ→上部の半分だけに扉が付いているたんす)」の[-닫이(tati;lit. 閉じ・閉め)]を後項要素とする他の動作性名詞は、韓国語辞典(『韓国語基礎辞典』および『標準国語大辞典』)で見当たらない. そのため、「젖먹이(cec-meki;lit. 乳-飲み→乳飲み子)」および「반닫이(pan-tati;lit. 半-閉じ→上部の半分だけに扉が付いているたんす)」は「後項要素意味転移仮説」に反する例外であるかのように見える.

このような例外を説明する方法として、動作性名詞を形成する「-이(i)」と実体性名詞を形成する接尾辞「-이(i)」を別の接尾辞であると設定することも可能である. もしくは、動作性名詞を形成する接尾辞「-이(i)」の意味が[+人]または[+物]へと転じたとも考えられる. 言い換えると、「有生名詞(人名詞)」や「無生名詞(物名詞)」を形成する接尾辞「-이(i)」は、動作性名詞を形成する「-이(i)」とは異なるものであると見ることもできるだろう[126].

実体性名詞と動作性名詞を形成する接尾辞を別のものとして設定するならば、「有生名詞(人名詞)」の「구두닦이(kwutwu-takki;lit. 靴-磨き→靴磨きの人)」と動作性名詞の「구두닦이(kwutwu-takki;靴-磨き)」は別の接尾辞「-이(i)」によって形成されたと見なければならない. これは語形成の観点からは非常に非経済的である.

僅かではあるが「젖먹이(cec-meki;lit. 乳-飲み→乳飲み子)」が機能動詞「하다(hata;する)」と共起する例が見られることから[127]、動作性名詞として見る余地もある. そ

る), [볶음] 중([炒め物(lit. 炒め)]中)」のように機能動詞「하다(hata;する)」ならびにアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起し、動作性名詞としても用いられる.

126 名詞、語根、擬声・擬態語などに付く接尾辞「-이(i):절름발이(cellum-pali;lit. 引きずり-足→足の悪い人), 멍청이(mengchengi;間抜け), 뚱뚱이(ttwungttwungi;でぶ)」などは、[N+V]型動作性名詞「달맞이(tal-maci;lit. 月-迎え→月見)」または、非動作性名詞「귀걸이(kwi-keli;lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング)」での「-이(i)」とは別のものとして扱う.

127 韓国海洋学会(編)(2005)の『海洋科学用語辞典(해양과학용어사전)』における見出し語「포유류 (哺乳類)」の解説では、以下のように記述し、「젖먹이(cec-meki;lit. 乳-飲み→乳飲み子)」と機能動詞「하다(hata;する)」が共起する例が見られる.

「포유류(哺乳類): 분류학상 동물문 포유강의 동물로 태반을 가지고 새끼를 낳고 젖먹이 하는 동물(分類学上、動物門哺乳綱の動物として胎盤を持ち、子を産み、乳を飲ませる[lit. 乳飲みをする]動物)」

して、[V+V]〔動詞+動詞の名詞形〕型である「여닫이(ye-tati;lit. 開け-閉め→引き戸)」の場合、機能動詞「하다(hata;する)」と共起できる例が見られることから[128]、「반닫이(pan-tati;lit. 半-閉じ→上部の半分だけに扉が付いているたんす)」の後項要素が動作性を帯びる可能性も否定できない. このように、例外と思われる「젖먹이(cec-meki;lit. 乳-飲み→乳飲み子)」および「반닫이(pan-tati;lit. 半-閉じ→上部の半分だけに扉が付いているたんす)」の場合でも、後項要素が動作性を帯びる可能性はあると考えられる.

多少例外があるとしても、項関係にある[N+V]型の非動作性名詞は、おおよそ後項要素が[N+V]型動作性名詞の後項要素として現れ、「後項要素意味転移仮説」により説明できることが分かった. したがって、項関係にある[N+V]型動作性名詞の後項要素に意味転移が起こり、その後項要素が[N+V]型非動作性名詞をも形成するようになったと見ることができるだろう.

反対に、[N+V]型複合名詞の後項要素が動作性名詞を形成する要素であるとすれば、項関係でない[N+V]型動作性名詞が形成可能な理由も「後項要素意味転移仮説」により説明できるだろう. つまり、本来[N+V]型複合名詞の内部の文法的関係が項関係にあってこそ、動作性を帯びることができるが、後項要素[V-接尾辞]だけで動作性を持ち始め、動作性名詞を形成する要素になることにより、項関係でない[N+V]型動作性名詞「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」などを形成するようになったと説明できる[129].

「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ)」および「초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」の内部の文法的関係は、「가을 N 에 걷다 V(秋 N ニ取り入れる V)」「초벌 N 로 굽다 V (素焼き N デ焼く V)」という付述関係(副詞語/付加語-述語)にあり、複合語内に後項動詞(V)の必須項が現れないにもかかわらず、動作性を帯びている. その理由は、「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ)」および

128 NAVER(韓国の代表的な検索エンジン)による検索で以下のような例が見られた.
a. 아무래도 여닫이를 하다보면 손이 많이 닿는 부분이거든요(どうしても開け閉めをしていたら、手がよく触れる部分ですから) . <NAVER 지식(知識)in>
b. ...그럼 여러 번 여닫이를 하다보면 닫히거나...(…では何回も開け閉めをしていたら、閉ざされたり…) <NAVER CAFE: 올뉴카니발 YP 공식 동호회(オールニューカーニバル YP 公式クラブ)>

129 ここでは、4.4.2 で例外として処理した「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ), 앞잡이(aph-capi;lit. 前-とり→手先), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き), 박치기(pak-chiki;lit. 頭-打ち→頭突き)」のうち、比較的後項要素の生産性が落ちる「가을걷이(kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」を中心に述べる.

「초벌구이（chopel-kwui；素-焼き）」の後項要素[-걷이（keti；取り入れ）]および[-구이（kwui；焼き）]が動作性名詞を形成する要素であるためであると考えられる．例えば、[-걷이（keti；lit. 取り入れ）]は、動作性名詞「덩굴걷이（tengkwul-keti；lit. 蔓-取り入れ→蔓を刈り込むこと），자리걷이（cali-keti；lit. 席-取り入れ→出棺後、故人の冥福を祈る儀式）」のみならず、項関係（必須補語-述語）でない「가을걷이（kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ），뒤걷이（twi-keti；lit. 後-取り入れ→後片付け）」などの動作性名詞を形成できる．同様に、[구이（kwui；焼き）]は、項関係（必須補語-述語）にある動作性名詞「숯구이（swuch-kwui；炭-焼き），흙구이（hulk-kwui；土-焼き）」はもちろん、項関係（必須補語-述語）でない「가마구이（kama-kwui；釜-焼き），통구이（thong-kwui；lit. 丸ごと-焼き→丸焼き），소금구이（sokum-kwui；塩-焼き）」などの動作性名詞を形成できる[130]．このように、「後項要素意味転移仮説」によると、4．4 で例外として処理した、項関係にある[N+V]型非動作性名詞のみならず、項関係でない[N+V]型動作性名詞が形成可能な理由も説明できる非常に有効な仮説である．

5．3．3 日本語における意味転移仮説の適用可能性

これまで、韓国語の[N+V]型複合名詞の例を中心に、「全体意味転移仮説」を支える例と「後項要素意味転移仮説」を支える例を挙げ、2 つの意味転移仮説が有効であることを検証した．とりわけ、「全体意味転移仮説」は、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例を説明する際に有効であり、「後項要素意味転移仮説」は、実体性名詞としてのみ用いられる非動作性名詞や項関係でない動作性名詞の存在を説明する際に有効な仮説であることを確認した．

同様に、日本語の[N+V]型複合名詞の中で、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例（舵取り，目隠しなど）は「全体意味転移仮説」により説明できる．しかし、日本語[N+V]型において実体性のみを表す非動作性名詞の中には、後項要素が単独で動作性を帯びず、動作性名詞を形成する要素でもないため、「後項要素意味転移仮

130 これは、4.4.2 で例外として処理した「앞잡이（aph-capi；lit. 前-とり→手先），박치기（pak-chiki；lit. 頭-打ち→頭突き）」においても同様に適用できる．これらの後項要素「잡이（capi；lit. とり）」「치기（chiki；lit. 打ち）」は、言うまでもなく非常に生産的な要素であり、これらの後項要素を持つ例を韓国語辞典（『標準国語大辞典』）で調べると 170~200 例以上である．この中には、動作性名詞の例も数多く見られる．その例は（68）の⑧[-잡이（capi；lit. とり）]および⑰[-치기（chiki；lit. 打ち）]を参照されたい．

説」の適用が難しい例（傘立て，海沿いなど）も存在する．もちろん、通時的には、これらの例の後項要素が動作性名詞を形成する要素であった可能性もある．しかし、共時的には、後項要素が動作性名詞を形成する要素ではないため、これらの例の後項要素は、元々実体性名詞を形成するための要素であるかのように見える．ゆえに、後項要素に意味転移が起きてから前項要素と結合した可能性も考えられる．その根拠として、これらの例「傘立て，海沿い」の後項要素が「立て：箸立て，針立て，筆立て…」「沿い：川沿い，道沿い，山沿い…」など他の複合語を形成するほど生産性に富むことが挙げられる．これらの後項要素を、単語と見るか接尾辞と見るかというのは問題となるものの、いずれにせよ複合語を形成する要素であるため、意味転移が起きる点に関しては問題にならないだろう．

以上の考察から、「全体意味転移仮説」は日本語と韓国語の両言語において有効な仮説であり、「後項要素意味転移仮説」は韓国語の例においては有効であるのに対して、日本語の例においてはその適用がやや難しいことが分かる．これは、韓国語と日本語の複合名詞の語形成における相違から来るものであると考えられる．韓国語の[N+V]型複合名詞における後項要素は、形態的に動詞に接尾辞が付いた形であるため、後項要素が単語または接尾辞として容認されるためには、複合名詞を形成する要素としてかなり生産性があるものではないといけない．その反面、日本語の[N+V]型複合名詞における後項要素は動詞連用形であり、比較的に自由に動詞連用形名詞が作られるため[131]、その生産性は問題とならない．このような形態的な特徴による語形成も影響を与えたと言えよう．したがって、日本語の例においても、実体性のみを表す非動作性名詞の場合は

131 日本語の動詞連用形名詞を接辞（-i）が付いた派生名詞とも分析できるが、動詞連用形名詞は動詞連用形と全く同じ形をしているため、外見上動詞であるか名詞であるかの区別が容易ではない．なお、動詞連用形名詞を形成するにあたって、特に制約がないため、韓国語に比べると比較的に自由に新しい名詞を形成できる．例えば、動詞「捨てる」の連用形「捨て」は、日本語辞典（『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』）に登録されていないが、「捨て場」「ぽい捨て」「使い捨て（つかいすて/つかいずて）」のような複合語を形成する．さらに、「ごみ捨て」のように日本語辞典（『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』）に登録されていない複合語までも形成し、「ごみ捨て場」「ごみ捨てルール」のように用いられる．それに対して、韓国語における動詞の名詞形は、名詞形接尾辞「-이（i）」「-음（um）」「-기（ki）」によって音韻論・意味論的制約があり、自由に新しい名詞を形成することは難しい．なお、比較的自由に構文的に名詞化する名詞形語尾「-기（ki）」が結合したとしても、作られた名詞形（例：버리기[lit. 捨て]，쓰레기버리기[lit. ごみ捨て]）は、名詞的用法に制限があり、複合語（または名詞句）のように用いられない（例：*쓰레기버리기 장소[lit. ごみ捨て場]，*쓰레기버리기 규칙[lit. ごみ捨てルール]）．

「後項要素意味転移仮説」の適用ができる可能性はあるものの、後項要素が生産性の非常に高い動詞連用形であるため、その検証が難しい.

なお、伊藤 & 杉岡(2002)は、[N+V]型複合名詞の語形成について、内項を前項要素とする複合名詞(内項複合語)は統語部門である項構造のレベルで形成されるのに対して、付加詞を含む複合名詞(付加詞複合語)は語彙部門である LCS(Lexical Conceptual Structure;語彙概念構造)のレベルで形成されるとしている. この主張によると、内項複合語の後項要素は動詞であるため、全体として意味転移が起きるという「全体意味転移仮説」が適用でき、付加詞複合語の後項要素は名詞であるため、後項要素に意味転移が起きるという「後項要素意味転移仮説」が適用できると予想される. そこで、日本語[N+V]型複合名詞における「意味転移仮説」の検証については今後の検討課題としたい.

これまで両言語における[N+V]型複合名詞に起きる意味転移の様相について、2 つの意味転移仮説を立て、[N+V]型複合名詞が動作性を失うプロセスを考えてみた. 次節では、 [N+V]型複合名詞に意味転移が起きて、さらにどのような意味に解釈されるかを考察する.

5. 4　日本語[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム

本節では、日本語[N+V]型複合名詞に現れる意味転移の傾向性(すなわち、意味解釈のメカニズム)を明らかにするため、動作性名詞でありながら実体性の意味を持つことができる例「舵取り, 目隠しなど」と実体性名詞の意味だけを持つ非動作性名詞の例「船乗り,目覚ましなど」を複合名詞の類型によって考察する.

日本語の[N+V]型複合名詞の例は、松下(2011)の『日本語を読むための語彙データベース(VDRJ)ver. 1. 1(研究用)重要度順語彙リスト 60894 語』の上位 2 万語の中から抽出した 285 例を対象とする. 上位 2 万語から選定した理由として、使用頻度が低い語は日常生活で一般的に使われないため、動作性名詞の判断が難しいのではないかと考えられるためである. [N+V]型複合名詞の例(計 285 例)を対象とし、2. 3 で提示した動作性名詞の判断基準によって分類した際に動作性名詞は 151 例を抽出することができたが、この中で動作性名詞でありながら実体性名詞(有生名詞あるいは無生名詞)としても共存する例は僅か 21 例であった.

本稿では、この動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存する以下の(72)の例(計 21 例)に注目し、動作性名詞から実体性名詞への意味転移が起き、どのような意味に解釈されるかを考察する. なお、必要に応じてこれらに加え、上位 2 万語以下の例も用いる.

(72) a. 無生名詞(物名詞): 手作り, 手引き, 歯止め[132], 目隠し, 水割り, 塩漬け, 下書き, 上書き, 石積み, 鼠捕り, 霧吹き

b. 有生名詞(人名詞)[133]: 人殺し, 下請け, 子守り, 跡継ぎ, 神懸かり, 金貸し, 舵取り, 下働き, 身代わり, 道連れ

一方、日本語[N+V]型複合名詞の語内部においても、文を構成する要素に平行する「主語-述語の《主述関係》」「目的語-述語の《目述関係》」「付加語-述語の《付述関係》」が見られる. 本稿においてもこのような複合名詞の内部における項関係に注目し、日本語の[N+V]型動作性名詞および非動作性名詞における意味解釈のメカニズムを考察する.

---

132 「歯止め」は一般的にデキゴト名詞(非実体性名詞)として用いられるため、モノ名詞(実体性名詞)として用いられるのは、日本語として不自然であるという日本語母語話者の意見もあった. しかし、日本語辞典(『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』)では、「〜するもの」という物名詞(無生名詞)として記述している. そして、日本の通販サイト(Rakuten や Yahoo!ショッピングなど)では「タイヤ歯止め」や「ハイプラ歯止め」という名称を用いている. つまり、日常生活でモノ名詞(実体性名詞)として使用されていることが分かる.

133 動作性名詞でありながら有生名詞(人名詞)としても共存する例として「仲立ち」「神懸かり」「下働き」「草刈り」が現れたが、これらの例は動作性名詞として用いられるのが一般的であり、有生名詞(人名詞)として用いられるのは、日本語として不自然であるという日本語母語話者からの意見があった. 日本語辞典(『大辞林第三版』および『大辞泉第二版』)では、すべて「〜する人」という人名詞(有生名詞)として記述しているものの、「仲立ち」「草刈り」は共時的には有生名詞(人名詞)として使用しないため、本稿では除外した. 反面、以下のように①「神懸かり」および②「下働き」は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の検索で人名詞(有生名詞)として用いられた例が僅かではあるが見られるため、本稿の対象に含める.

①また、教祖が生き神として確立していく過程にも、信者のなかになお多数の神懸かりがいたと思われるが…〈LBh1_00029〉

②江戸で新たに雇い入れたのは、手代一人と小僧二人、下働きが一人だった. 〈LBo9_00086〉

5. 4. 1 日本語[N+V]型動作性名詞における意味転移

チャ・ジュンギョン（2004）はデキゴト名詞（動作性名詞の上位概念）の中の一部は文脈によって実体性の意味を持つことができるが、デキゴト性と実体性の意味は固定されたものではなく、文脈によって変わるものであり、そのためデキゴト名詞が実体性名詞である「動作主，結果，対象，場所，時間，方法」などの多義の意味を形成するようになると説明している．本稿においても、動作性名詞の多義的意味分類は、チャ・ジュンギョン（2004）のデキゴト名詞の多義的意味分類を参考にし、「動作主名詞，道具名詞，結果名詞」に分類した（意味分類基準は後述する）．その分類結果は以下の表 13 に示す．

表 13. 日本語[N+V]型動作性名詞の多義的意味分類[134]

分類	例
動作主名詞 （10 例）	人殺し，下請け，子守り，跡継ぎ，神懸かり，金貸し，舵取り， 下働き，身代わり，道連れ
道具名詞 （4 例）	手引き，目隠し，鼠捕り，霧吹き
結果名詞 （4 例）	手作り，水割り，塩漬け，石積み

この節では、日本語の[N+V]型動作性名詞における意味転移を「動作主名詞，道具名詞，結果名詞」の順に考察し、その分類基準も共に提示する．

日本語の[N+V]型動作性名詞の中には、特に「有生名詞（人名詞）」あるいは「無生名詞（物名詞）」の実体性名詞として共存する例が多少見られる．まず、[N+V]型動作性名詞が「有生名詞（人名詞）」すなわち「動作主名詞」として共存する例として「人殺し、舵取り、下働き」などが挙げられる．これらの複合名詞は、機能動詞ならびにアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起し、動作性を帯びることができる（人殺しをする，舵取り中）．こ

134 （72）で提示した動作性名詞と実体性名詞として共存できる 21 例のうち、「歯止め，下書き，上書き」の3例は、本稿における意味解釈のメカニズム（すなわち、多義的意味分類基準でもある、語彙的な意味とその成立する構文）の適用がやや難しいため除外した．

の際、複合名詞の意味は、各々の構成要素の合成的（compositional）な意味からそれ程離れていない.

一方、これらの例が実体性（ヒト）を帯びる場合は、本来の意味から離れるため、以下の（73）のように示すことができる. これらの複合名詞（NV）は、下記のように「NV ガ N ヲ V」または「NV ガ N デ V」という構文で、主語のガ格で現れ、動作主（Agent）として働く. この際、これらの複合名詞の語彙的な意味は「N ヲ V スルヒト」という意の「有生名詞（人名詞）」として用いられる. このように本稿では、主語（ガ格）の位置で「NV ガ N ヲ V」（人殺しガ人ヲ殺す）または「NV ガ N デ/ニ V」（下働きガ下デ働く）という構文が成立し、《動作主》「N ヲ V スルヒト」（人ヲ殺すヒト）または「N デ/ニ V スルヒト」（下デ働くヒト）の意を表す複合名詞のことを「動作主名詞」と命名する.

（73） 動作主名詞（NV ガ N ヲ/デ/ニ V）

a. [人殺し]$_{NV}$ ガ{人}$_{N}$ ヲ{殺す}$_{V}$ → 人ヲ殺すヒト《動作主》

b. [舵取り]$_{NV}$ ガ{舵}$_{N}$ ヲ{取る}$_{V}$ → 舵ヲ取るヒト《動作主》

c. [下働き]$_{NV}$ ガ{下}$_{N}$ デ{働く}$_{V}$ → 下デ働くヒト《動作主》

目述関係にある[N+V]型複合名詞の場合、複合名詞（NV）の各々の構成要素である名詞（N）および動詞（V）と共起する際に成立する構文は、（73a）と（73b）のように「NV ガ N ヲ V」（人殺しガ人ヲ殺す/舵取りガ舵ヲ取る）となる. この「NV ガ N ヲ V」という構文は、（73a）「人殺し」と（73b）「舵取り」の後項動詞である「殺す」と「取る」が持つ構文でもある. （73a）「人殺し」の後項動詞「殺す」は、「動作主」と「対象（被動者）」の 2 つの項を必要とする二項動詞である. しかし、複合名詞「人殺し」の後項動詞「殺す」の「対象（被動者）」の項は前項名詞「人」により満たされているが、「動作主」の項は満たされていない. したがって、欠けている必須項である「動作主」の箇所に来られる意味に転じたということである. 同様に、（73b）の「舵取り」の場合にも、後項動詞「取る」が二項動詞であるため、同じく適用できる.

一方、付述関係にある[N+V]型複合名詞の「下働き」は、（73c）のように主語（ガ格）の位置で「NV ガ N デ V」という構文が成立する. 「下働き」の後項動詞「働く」は、一項動詞（ここでは非能格動詞）であり、必須項として「動作主」のみを要求し、必ずしもデ格の「場所」を必要としない. しかし、[N+V]型複合名詞は外項（動作主）を前項要素としないという制約があるため、外項（動作主）は前項要素として現れない. つまり、後項動詞が非能

格動詞であり、外項（動作主）以外の必須項が存在しないため、前項名詞には随意項、すなわち付加詞（adjunct）であるデ格の「下」が現れるわけである．前項要素に随意項（下）が現れると、当然のことながら複合語内で必須項である「動作主」は満たされないため、この箇所に来られる意味に転じたと考えられる．目述関係にある例と同様に、付述関係にある例においても、（73c）の「下働き」が成立する構文「NV ガ N デ V」は、後項動詞である「働く」が持つ構文に違いない．

次に、[N+V]型動作性名詞が「無生名詞（物名詞）」として共存する例として、「目隠し」や「手作り」などが挙げられる．「目隠し」と「手作り」は、意味の面では両方とも「物（モノ）」を表すが、複合名詞の各々の構成要素が成立する構文は異なることに注目したい．目述関係にある「目隠し」は「NV デ N ヲ V（目隠しデ目ヲ隠す）」となるが、付述関係にある「手作り」は「N デ NV ヲ V（手デ手作りヲ作る）」となる．したがって、複合名詞の各々の構成要素が意味的に成立する構文により、「無生名詞（物名詞）」を更に分けることができる．

まず、「無生名詞（物名詞）」の第1タイプとして「目隠し」類は、目述関係にあり「NV デ N ヲ V」（目隠しデ目ヲ隠す）という構文が成立する．この構文で複合名詞はデ格で現れ、「N ヲ V スル道具（モノ）」（目ヲ隠す道具）という《道具》の意を表すため、本稿では「道具名詞」と命名する．特記すべきことは、「道具名詞」には、目述関係にある複合名詞のみ見られるということである．

（74）道具名詞（NV デ N ヲ V）
a. [目隠し]$_{NV}$ デ{目}$_{N}$ ヲ{隠す}$_{V}$ → 目ヲ隠す道具 《道具》
b. [鼠捕り]$_{NV}$ デ{鼠}$_{N}$ ヲ{捕る}$_{V}$ → 鼠ヲ捕る道具 《道具》

動作主名詞の場合と同様に、「道具名詞」が成立する「NV デ N ヲ V」という構文は、後項動詞（隠す，取る）が持つ構文と一致する．これらの後項動詞「隠す」「捕る」は「動作主」および「対象」の項を要求する二項動詞である．しかしながら、「対象」の項は前項名詞「目」「鼠」により満たされているが、「動作主」の項は満たされていない．それにも関わらず、「道具名詞」の場合は、必須項である「動作主」ではなく、随意項である「道具」を指す意味に転じたと考えられる[135]．

135 英語で動詞由来複合語の道具名詞（例：can-opener）は、主語（外項）の位置に来られるため（例：Can-openers open cans）、動作主名詞（例：life-saver）と同様に、必須項である外項を指す意味として解釈されると考えられる．日本語においても、道具名詞が主語となるのは、一

次に、「無生名詞（物名詞）」の第 2 タイプとして「手作り」類は、付述関係にあり「N デ NV ヲ V」（手デ手作りヲ作る）という構文が成立する．この構文で複合名詞はヲ格で現れ、「N デ V シタ結果物（モノ）」（手デ作った結果物）という《結果》の意を表すため、本稿では「結果名詞」と命名する．

（75） 結果名詞（N デ NV ヲ作る）

a. {手}$_{N}$ デ[手作り]$_{NV}$ ヲ{作る}$_{V}$ → 手デ作った結果物 《結果》

b. {塩}$_{N}$ デ[塩漬け]$_{NV}$ ヲ{漬ける（作る）}$_{V}$ → 塩デ漬けた結果物 《結果》

同様に、結果名詞が成立する「N デ NV ヲ V」という構文は、後項動詞（作る，漬ける）が持つ構文と一致する．しかし、「動作主名詞」と「道具名詞」の場合と違って、「結果名詞」の前項名詞は内項ではなく、付加詞（adjunct）であることに注目したい．もちろん、「動作主名詞」の場合にあっても（73c）の「下働き」のように、前項名詞が付加詞（adjunct）である例も見られるが、これは後項動詞が一項動詞である場合に限る．それに反して、（75）の結果名詞「手作り」と「塩漬け」は、後項動詞「作る」と「漬ける」が二項動詞であるにも関わらず、付加詞（adjunct）を前項名詞として取っている．これらの例は、前項名詞が付加詞（adjunct）であるため、複合名詞の内部において、後項動詞の内項である「対象」の項は満たされていない．それゆえ、欠けている内項の「対象」の箇所に来られる《結果》という意味に転じたと解釈できる．これらの結果名詞の共通点は、前項名詞が「材料」および「手段・方法」であり、後項動詞は状態変化を含むいわゆる「作成動詞（creation verb）」であることである．（75b）の「塩漬け」場合は、後項動詞「漬ける」を作成動詞の代表的な例である「作る」に置き換え、「塩デ塩漬けヲ作る」にするとより自然になる．したがって、厳密に言うと結果名詞が成立する構文は「{材料/手段・方法}$_{N}$ デ[結果物]$_{NV}$ ヲ作る $_{V}$」と言えよう．すなわち、結果名詞の構成要素としては、特定の前項名詞と後項動詞が来ることが予想される．これは、複合名詞の意味には後項要素のみならず、前項要素と後項要素の意味・文法的関係が関与していることを示唆する．

般的ではないが不可能ではない．例えば道具名詞「鼠捕り」が「鼠捕りが鼠を捕る」のように主語（外項）の位置に来られる．日本語の道具名詞が英語のように外項を指す意味として解釈されるとは言い切れないものの、単に「道具」という随意項を指すとも言い難い．したがって、これらの道具名詞を他の随意項を指す例（例：日暮れ，水回りなど）とは区別すべきである．

以上から、日本語[N+V]型動作性名詞は「《動作主》,《道具》,《結果》」への意味転移が起き得ることが分かった. 本研究において、「動作主名詞」には目述関係および付述関係の両方の例が見られたが、「道具名詞」には目述関係の例のみが見られ、「結果名詞」には付述関係の例のみが見られた. このことは、複合名詞の後項動詞の種類と関係がある. まず、「動作主名詞」は二項動詞を後項要素とする場合は目述関係に現れる一方、一項動詞を後項要素とする場合は付述関係に現れる. 次に、「道具名詞」は二項動詞を後項要素とし、前項要素はその内項「対象」であるため、目述関係のみ見られる. 最後に、「結果名詞」は二項動詞を後項要素とするが、前項要素は付加詞(adjunct)であるため、複合語の内部では内項が満たされない. よって、内項の「対象」に来られるような意味に転じることになる. このように、複合名詞の意味は後項動詞の項と関連していることが分かる.

5. 4. 2 日本語[N+V]型非動作性名詞における意味解釈

前節では日本語[N+V]型動作性名詞を中心に、意味転移により本来動作性名詞であるものが実体性名詞になることを考察した. その意味転移にはある傾向が見られ[136]、特に後項動詞の種類および前項要素と後項要素の意味・文法的関係が関連していることを明らかにした. ここでは、[N+V]型非動作性名詞、つまり動作性名詞とは共存せず実体性のみを表す複合名詞の場合においても、同じ傾向が見られるかを調べる.

なお、動作性名詞の場合、その動作性を失って実体性を持つようになるというのは、意味転移により説明できるが、元々実体性名詞のみで用いられる非動作性名詞の場合は

136 日本語[N+V]型動作性名詞の中には、《動作主》《道具》《結果》への意味転移が現れ、実体性名詞とも共存できる例(舵取り, 目隠し, 手作りなど)が存在する. 本稿で対象とした動作性名詞と実体性名詞として共存できる 21 例のうち、「歯止め, 下書き, 上書き」の 3 例以外はすべて本稿で提示した意味解釈のメカニズム(多義的意味分類基準でもある、語彙的な意味とその成立する構文)に当てはまることを確認した. ただし、「歯止め」は文字通りの「N ヲ V スル道具(モノ):歯ヲ止める道具」という意味ではないが、「(動く車の)歯(すなわち、タイヤ)を止める道具」というやや比喩的な意味で解釈できるため「道具名詞」と見ることができる. 同様に、比喩的な意味(「車のタイヤ」を「歯」に喩える)で考えた際は、「NV デ N ヲ V:歯止めデ歯(すなわち、タイヤ)ヲ止める」という「道具名詞」が成立する構文にも当てはまる. そして、「下書き」および「上書き」は、結果的には「N ニ V シタ結果物:下ニ書いた結果物, 上ニ書いた結果物」という意味であり、「N ニ NV ヲ V:下ニ下書きヲ作る, 上ニ上書きヲ作る」という構文が成立すると考えられるため、「結果名詞」と見ることができるだろう. このように、動作性名詞であっても、多少比喩的な意味で使われた場合は、本稿で提示した意味解釈のメカニズムの適用がやや難しいことが予想される.

そもそも動作性を帯びないため、厳密に言うと意味転移が起きたとは考えられない．しかし、本稿では動作性名詞に現れる意味転移のメカニズムが実体性名詞においても同様にその意味に影響を及ぼすと見て、同じアプローチで考察したい．すなわち、本稿では非動作性名詞の意味が意味転移によりある意味から他の意味に変わるのでなく、本来の動詞が持っていた動作性が消えて、複合名詞がどのような意味として解釈されるかに注目する．

したがって、動作性名詞の場合と同様に、チャ・ジュンギョン（2004）のデキゴト名詞の多義的意味分類を参考にし、[N+V]型非動作性名詞を「動作主名詞，道具名詞，道具・場所名詞，対象名詞，結果名詞」に分類する（意味分類基準は後述する）．非動作性名詞の分類結果は【付録 5】①を参照されたい．本節では、日本語の[N+V]型非動作性名詞における意味解釈を「動作主名詞，道具名詞，道具・場所名詞，対象名詞，結果名詞」の順に考察し、その分類基準も共に提示する．

[N+V]型非動作性名詞の中においても、「有生名詞（人名詞）」と「無生名詞（物名詞）」が見られる．まず、非動作性名詞が「人（ヒト）」を表す場合を見てみよう．「有生名詞（人名詞）」の中でも、特に目述関係にある代表的な例として「絵描き，羊飼い，酒飲み」などを取り上げる．これらの例は、[N+V]型動作性名詞の「動作主名詞」に類似し、同様に下記の（76）のように、主語の位置で「NV ガ N ヲ V（絵描きガ絵ヲ描く）」という構文が成立する．

（76） 目述関係の動作主名詞（NV ガ N ヲ V）

a. [絵描き]$_{NV}$ガ{絵}$_{N}$ヲ{描く}$_{V}$ → 絵ヲ描くヒト 《動作主》

b. [羊飼い]$_{NV}$ガ{羊}$_{N}$ヲ{飼う}$_{V}$ → 羊ヲ飼うヒト 《動作主》

c. [酒飲み]$_{NV}$ガ{酒}$_{N}$ヲ{飲む}$_{V}$ → 酒ヲ飲むヒト 《動作主》

これらの複合名詞が成立する「NV ガ N ヲ V」という構文は、後項動詞である「描く」「持つ」「飲む」が持つ構文であり、これらの後項動詞は、「動作主」と「対象（被動者）」の 2 つの項を必要とする二項動詞である．したがって、複合名詞は欠けている必須項である「動作主」の箇所に来られる意味として解釈できる．これらの複合名詞は「N ヲ V スルヒト」という《動作主》の意を表す「有生名詞（人名詞）」として用いられ、主語（ガ格）の位置で「NV ガ N ヲ V」という構文が成立するため、「動作主名詞」と見られる．

さらに、「動作主名詞」は目述関係のみならず、付述関係である「必須補語-述語」の項関係にも見られる（例：船乗り，物狂い）．これらの例では下記の（77）のように、主語（ガ格）の位置で「NV ガ N デ/ニ V」（船乗りガ船ニ乗る）という構文が成立し、《動作主》「N デ/ニ V スルヒト」（船ニ乗るヒト）の意を表す．前項名詞は後項動詞の必須項であるため、目述関係にある例と同様に内項を前項要素とする点は一致している．

（77）付述関係の動作主名詞（NV ガ N デ/ニ V）

a. [船乗り]$_{NV}$ ガ{舟}$_{N}$ ニ{乗る}$_{V}$ → 船ニ乗るヒト 《動作主》

b. [物狂い]$_{NV}$ ガ{物}$_{N}$ ニ{狂い}$_{V}$ → 物ニ狂うヒト 《動作主》

以上のように動作主名詞は、目述関係にある例にせよ付述関係にある例にせよ、基本的に内項を前項要素としていることが分かる．さらに、「有生名詞（人名詞）」と考えられる例の中には、主述関係にある例として「左利き，右利き」などが挙げられる．これらの例の共通点は、「人（ヒト）」の特徴を表すということである[137]．主述関係の例においても、内項を前項要素とするため、他の例（目述関係および付述関係の例）と変わりがない．このことから、「動作主名詞」の前項要素は主に後項動詞の内項であることが分かる．

次に、[N+V]型非動作性名詞が「物（モノ）」を表す例として「手拭い，物置，首飾り，梅干し」などが挙げられる．これらの複合名詞は、意味の面ではすべて「物（モノ）」を表すが、複合名詞の各々の構成要素が成立する構文は異なる．目述関係にある「手拭い」は「NV デ N ヲ V」（手拭いデ手ヲ拭う）、同じく目述関係にある「物置」は「NV ニ N ヲ V」（物置ニ物ヲ置く）という構文が成立する．そして、付述関係にある「首飾り」は「N ニ NV ヲ V」（首ニ首飾りヲ飾る）という構文が成立する．一方、「梅干し」は目述関係（梅ヲ干す）にあるとも解釈できるが、前節の動作性名詞における結果名詞の構文を参考すると、「{材料/手段・方法}$_{N}$ デ[結果物]$_{NV}$ ヲ作る $_{V}$（梅デ梅干しヲ作る）」という付述関係にあるとも解釈できる．このように、複合名詞の各々の構成要素が意味的に成立する構文により、これらの「無生名詞（物名詞）」を更に分類することができる．

137 「人（ヒト）」の特徴を表す例を「動作主名詞」として見るか別途の名詞（特徴名詞）として設定するかについては検討が必要であるだろう．例えば、目述関係にある「酒好き，金持ち」などもここに含まれる．しかし、本稿では動作性名詞の意味転移に焦点を合わせ、同じ構成を持つ非動作性名詞と照らし合わせながら考察するため、そもそも動作性を帯びることができない「人（ヒト）」の特徴を表す例は別途分類しない．

まず、非動作性名詞における「無生名詞（物名詞）」の第 1 タイプとして「手拭い」類（湯飲み、目覚まし、物差しなど）は、すべて目述関係にあり「NV デ N ヲ V」（手拭いデ手ヲ拭う）という構文が成立する. この構文で、「手拭い」類の複合名詞はデ格で現れ、「N ヲ V スル道具（モノ）」という《道具》の意を表すため、「道具名詞」と見られる. 動作性名詞の「道具名詞」と同様に、非動作性名詞の「道具名詞」においても、目述関係にある複合名詞のみが見られる.

（78）道具名詞（NV デ N ヲ V）
a. [手拭い]$_{NV}$デ{手}$_{N}$ヲ{拭う}$_{V}$ → 手ヲ拭う道具 《道具》
b. [湯飲み]$_{NV}$デ{湯}$_{N}$ヲ{飲む}$_{V}$ → 湯ヲ飲む道具 《道具》
c. [目覚まし]$_{NV}$デ{目}$_{N}$ヲ{覚ます}$_{V}$ → 目ヲ覚ます道具《道具》

非動作性名詞における「無生名詞（物名詞）」の第 2 タイプとしての「物置」類（札入れ, 車寄せなど）においても、すべて目述関係にある物名詞であるため、「道具名詞」との区別が容易ではない. しかし、「道具名詞」の後項動詞はすべて二項動詞なのに対して、「物置」類の後項動詞は三項動詞である. そして、この複合名詞はニ格の位置で「NV ニ N ヲ V」（物置ニ物ヲ置く）という構文が成立する. この構文で「物置」類の複合名詞はニ格で現れ、《道具》「N ヲ V スル道具」または《場所》「N ヲ V スルトコロ」という意を表すため、本稿では「道具・場所名詞」と命名する. 「道具・場所名詞」の場合においても、「道具名詞」と同様に、目述関係にある複合名詞のみが見られる. しかし、「道具名詞」は「デ格」で現れ「NV デ N ヲ V」という構文が成立する一方、「道具・場所名詞」は「ニ格」で現れ「NV ニ N ヲ V」という構文が成立する. このように、「道具名詞」と「道具・場所名詞」とは、成立する構文と複合名詞が現れる箇所が異なる.

（79）道具・場所名詞（NV ニ N ヲ V）
a. [物置]$_{NV}$ニ{物}$_{N}$ヲ{置く}$_{V}$ → 物ヲ置くトコロ 《道具/場所》
b. [札入れ]$_{NV}$ニ{札}$_{N}$ヲ{入れる}$_{V}$ → 札ヲ入れるトコロ 《道具/場所》

次に、非動作性名詞における「無生名詞（物名詞）」の第 3 タイプとして「首飾り」類（下敷きなど）は、付述関係の複合名詞のみに現れ、「N ニ NV ヲ V」（首ニ首飾りヲ飾る）という構文が成立する. この構文で、「首飾り」類の複合名詞はヲ格で現れ、「N ニ V スル対象物（モノ）」という《対象》の意を表すため、本稿では「対象名詞」と命名する.

（80）対象名詞（N ニ NV ヲ V）

a. {首}$_{N}$ニ[首飾り]$_{NV}$ヲ{飾る}$_{V}$ → 首ニ飾る対象物 《対象》

b. {下}$_{N}$ニ[下敷き]$_{NV}$ヲ{敷く}$_{V}$ → 下ニ敷く対象物 《対象》

「対象名詞」が成立する「N ニ NV ヲ V」という構文は、「道具・場所名詞」が成立する「NV ニ N ヲ V」という構文と非常に類似している．両方の複合名詞はともに後項動詞が三項動詞であり、「N ニ N ヲ V」という構文が成立する．しかし、複合名詞が現れ得る箇所は「道具・場所名詞」の場合はニ格（N ニ）であり、「対象名詞」の場合はヲ格（N ヲ）である点で異なる．このことは、前項名詞の意味（意味役割）と関係がある．

「道具・場所名詞」（例：物置）の場合は、前項名詞がヲ格を取る「対象」(例：物)であるため、複合名詞の内部において、後項動詞の内項である「場所」の項が満たされていない．それゆえ、欠けている内項の「場所」の箇所に来られる《道具》あるいは《場所》という意味に転じたと解釈できる．一方、「対象名詞」（例：首飾り）の場合は、前項要素がニ格を取る「場所」（例：首）であるため、複合名詞の内部において、後項動詞の内項である「対象」の項が満たされていない．それゆえ、欠けている内項の「対象」の箇所に来られる《対象》という意味に転じたと解釈できる．このように、後項動詞が三項動詞である場合は、前項要素と後項要素の意味・文法的関係が複合名詞の意味に関わることが分かる．つまり、動詞由来複合名詞の意味は、その後項動詞が従える項、特に必須項の意味役割と関係があり、これには前項要素と後項要素の意味・文法的関係が大きく関わっていると言えよう．

最後に、非動作性名詞における「無生名詞（物名詞）」の第 4 タイプとして「梅干し」類（缶詰め，紙切れなど）は、すべての項関係、すなわち「主述関係，目述関係，付述関係」で現れ、「{材料/手段・方法}$_{N}$デ[結果物]$_{NV}$ヲ作る $_{V}$」（梅デ梅干しヲ作る）あるいは「N ヲ V シテ NV ヲ作る」（梅ヲ干しテ梅干しヲ作る）、「N ニ V シテ NV ヲ作る」（缶ニ詰めテ缶詰めヲ作る）「N ガ V シテ NV ガ作られる」（紙ガ切れテ紙切れガ作られる）という構文が成立する．

（81）結果名詞（N デ NV ヲ作る/N ニ NV ヲ作る）

a. {梅}$_{N}$デ[梅干し]$_{NV}$ヲ作る/

{梅}$_{N}$ヲ{干し}$_{V}$テ[梅干し]$_{NV}$ヲ作る → 梅ヲ干しテ作った結果物 《結果》

b. {缶}$_{N}$ニ[缶詰め]$_{NV}$ヲ作る/
{缶}$_{N}$ 二{詰め}$_{V}$テ[缶詰め]$_{NV}$ヲ作る → 缶ニ詰めテ作った結果物 《結果》

c. {紙}$_{N}$ガ{切れ}$_{V}$テ[紙切れ]$_{NV}$ガ作られる → 紙ガ切れテ出来た結果物《結果》

これらの構文で「梅干し」類の複合名詞は、ヲ格で現れ「N ヲ V シテ作った結果物（梅ヲ干しテ作った結果物）」または「N ニ V シテ作った結果物（缶ニ詰めテ作った結果物）」、そしてガ格で現れ「N ガ V シテ作られた結果物（紙ガ切れテ作られた結果物）」という《結果》の意を表すため、「結果名詞」と見ることができる. しかし、非動作性名詞における「結果名詞」は、動作性名詞における「結果名詞」に比べると、意味的透明性がかなり下がることが成立する構文の複雑性からも分かる. 「梅干し」が単なる「梅を干したモノ」ではなく、語彙化が進んでおり、複合名詞の意味が不透明であることと関係があるだろう.

5. 5 韓国語[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズム

本節では、韓国語[N+V]型複合名詞に現れる意味転移の傾向性（すなわち、意味解釈のメカニズム）を明らかにするため、動作性名詞でありながら実体性の意味を持つことができる例（고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労, 漁師], 바람막이[palam-maki；lit. 風-防ぎ→風除け]など）と、実体性名詞の意味だけを持つ非動作性名詞の例（칼잡이[khal-capi；lit. 刀-とり→剣術つかい], 목걸이[mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス]など）を複合名詞の類型によって考察する.

韓国語の[N+V]型複合名詞の例は、国立国語院(編)（2012）の『韓国語基礎辞典』（約 5 万語）から抽出した 291 例を対象とする. これらの[N+V]型複合名詞の例を前項要素と後項要素の文法的関係によって、「主語-述語の《主述関係》」（計 12 例）、「目的語-述語の《目述関係》」（計 177 例）、「副詞語（부사어；付加語）-述語の《付述関係》」（計 102 例）の 3 つの類型に分類した. そして、[N+V]型複合名詞の例（計 291 例）を対象とし、2. 3 で提示した動作性名詞の判断基準によって分類した際に動作性名詞の例は計 222 例を抽出することができたが、この中で動作性名詞でありながら実体性名詞（有生名詞あるいは無生名詞）としても共存する例は僅か 26 例であった.

(82) a. 有生名詞(人名詞)

①[N+V-이(i)]型:고기잡이(漁師), 고래잡이(鯨獲り), 고용살이(宮仕えの身), 구두닦이(靴磨きの人), 날품팔이(日雇い人夫), 넝마주이(屑屋), 때밀이(流し[138]・垢擦り師), 바람잡이(さくら), 방패막이(隠れみの), 앞잡이(手先), 총알받이(第一線部隊), 품팔이(日雇い人夫), 하루살이(その日暮らしする人)

②[N+V-기(ki)]型: 소매치기(すり), 양치기(羊飼い)

b. 無生名詞(物名詞)

①[N+V-이(i)]型:꽃꽂이(生け花), 바람막이(風除け), 살림살이(所帯道具), 심심풀이(暇つぶし), 초벌구이(素焼き)

②[N+V-음(um)]型:상차림(膳), 입가심(口直し), 밑받침(下敷き)

③[N+V-기(ki)]型:널뛰기(跳び板), 줄넘기(跳び縄), 집짓기(家造りの材料)

上記の(82)の例は、本来動作性名詞から「人(ヒト)」(有生)または、「物(モノ)」(無生)へと意味転移が起こったものと見なされる. 本稿では、このような動作性名詞でありながら、実体性の意味を持つことができる例に注目し、これらの複合名詞(例:고기잡이[koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師])の後項要素(例:잡이[capi;とり])と同要素を持ちながら実体性名詞としてのみ用いられる非動作性名詞(例:오른손잡이[olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き])と比較する. また、非動作性名詞の中でも動作性名詞と共通して多く現れる後項要素を持つ例を中心に考察する.

ただし、本稿では主述関係にある複合名詞には意味転移が起きる例(実体性名詞)が現れなかったため除外し、目述関係と付述関係にある複合名詞を対象にし、その類型による韓国語の[N+V]型動作性名詞および非動作性名詞における意味解釈のメカニズムを考察する.

5. 5. 1 韓国語[N+V]型動作性名詞における意味転移

韓国語の[N+V]型動作性名詞の中には、「有生名詞(人名詞)」あるいは「無生名詞(物名詞)」の実体性名詞として共存する例がしばしば見られる. 韓国語[N+V]型複合名詞では、目述関係にのみこのような例が見られ、付述関係にある例では見られなかった.

138 日本語辞典(小学館国語辞典編集部(編)(2012)の『大辞泉第二版』)では、「流し」を「銭湯で入浴客の背中などを洗うこと. また、それを職業とする人」と記述している. 韓国語の「때밀이(ttay-mili;lit. 垢-擦り→垢擦り, 流し・垢擦り師)」は、「垢を擦ること」という行為を表す動作性名詞であると同時に、「銭湯で垢擦りを職業とする人」という人を表す有生名詞(人名詞)である.

付述関係にある複合名詞（計 71 例）の中で、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存できる例は「초벌구이（chopel-kwui；素-焼き）」の一例のみであり、ここでは例外として扱うことにする[139]．つまり、韓国語[N+V]型複合名詞において、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存できる例は、目述関係にある場合のみ現れると考えられる．

したがって、ここでは韓国語の[N+V]型動作性名詞の中で、前項要素と後項要素の文法的関係が目述関係にある例を中心に考察する．前項名詞を「N」、後項動詞を「V」で表す時、「N 을 V（N ヲ V）」という構造を持つ例を目述関係（目的語-述語）にあると見なす．このような複合名詞は動作性名詞（例：고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労]）である場合は、機能動詞「하다（hata；する）」と共起し、その意味が透明であるため、「N 을 V（N ヲ V）」（例：고기를 잡다[魚ヲとる]）という意味から大きく離れていない．しかし、この動作性名詞に意味転移が発生すると、動作性は完全に消え、実体性の意味を持つようになる．

チャ・ジュンギョン（2004）はデキゴト名詞（動作性名詞の上位概念）が文脈によって「動作主，結果，対象，場所，時間，方法」という実体性の意味を多義的に持つことができると説明している．本稿においても、チャ・ジュンギョン（2004）のデキゴト名詞の多義的意味分類「行為者，結果，対象，道具，場所，時間，方法」を参考にし、韓国語の[N+V]型動作性名詞を「動作主名詞，道具名詞，結果名詞」に分類した（意味分類基準は後述する）．その分類結果を以下の表 14 に示す．

139 5 章で述べたように、この例外は「後項要素意味転移仮説」により説明できる．

表 14. 韓国語[N+V]型動作性名詞の多義的意味分類

分類	例
動作主名詞 (15 例)	고기잡이（漁師），고래잡이（鯨獲り），고용살이（宮仕えの身），　구두닦이（靴磨きの人），날품팔이（日雇い人夫），넝마주이（屑屋），때밀이（流し・垢擦り師），바람잡이（さくら），　앞잡이（手先），　방패막이（隠れみの），총알받이（第一線部隊），품팔이（日雇い人夫），하루살이（その日暮らしする人），소매치기（すり），양치기（羊飼い）
道具名詞 (8 例)	바람막이（風除け），살림살이（所帯道具），심심풀이（暇つぶし），입가심（口直し），밑받침（下敷き），널뛰기（跳び板），줄넘기（跳び縄），집짓기（家造りの材料）
結果名詞 (3 例)	꽃꽂이（生け花），　초벌구이（素焼き），　상차림（膳）

表 14 で、韓国語の[N+V]型動作性名詞は、《動作主》あるいは《道具》への意味転移が活発に起き、《結果》への意味転移は珍しいことが分かる. 本節では、これらを「動作主名詞, 道具名詞, 結果名詞」の順に考察し、その分類基準も共に提示する.

まず、動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存する際に、《動作主》の意味を持つ「動作性名詞」の代表的な例として「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労, 漁師），양치기（yang-chiki；羊-飼い），구두닦이（kwutwu-takki；lit. 靴-磨き→靴磨き, 靴磨きの人）」などが挙げられる. これらの複合名詞が、《動作主》の意を表す場合は「N 을 V 하는 사람（N ヲ V スルヒト）」という語彙的な意味を持ち、以下のように「NV 가 N 을 V（NV ガ N ヲ V）」という構文が成立する. このような構文が成立し、《動作主》の意味「N 을 V 하는 사람（N ヲ V スルヒト）」を持つ名詞を本稿では「動作主名詞」と命名する.

（83）動作主名詞（NV 가 N 을 V[NV ガ N ヲ V]）

a. [고기잡이]$_{NV}$가 {고기}$_{N}$를 {잡다}$_{V}$　→ 고기를 잡는 사람《動作主》
[lit. 魚とり]$_{NV}$ガ{魚}$_{N}$ヲ{とる}$_{V}$　→ 魚ヲ　とる　ヒト

b. [양치기]$_{NV}$가 {양}$_{N}$을 {치다}$_{V}$　→ 양을 치는 사람《動作主》
[羊飼い]$_{NV}$ガ{羊}$_{N}$ヲ{飼う}$_{V}$　→ 羊を 飼う ヒト

c. [구두닦이]$_{NV}$가 {구두}$_{N}$를 {닦다}$_{V}$ → 구두를 닦는 사람《動作主》
[lit. 靴磨き]$_{NV}$ガ{靴}$_{N}$ヲ{磨く}$_{V}$ → 靴ヲ 磨く ヒト

上記の例文のように、《動作主》の意を表す際、これらの複合名詞は主語「NV 가（NV ガ）」の位置に現れる. そして、複合名詞の前項要素は目的語として現れ、後項要素は述語として現れる.

次に、目述関係にある[N+V]型複合名詞の中で「道具名詞」の例を見てみよう. 動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する際に、《道具》の意味を持つ「道具名詞」の例としては、「바람막이（palam-maki；lit. 風-防ぎ→風除け），줄넘기（cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄）」などが挙げられる. これらの複合名詞が《道具》の意を表す場合は「N 을 V 하는 도구（N ヲ V スル道具）」という語彙的な意味を持ち、以下のように「NV 로 N 을 V（NV デ N ヲ V）」という構文が成立する. このような構文が成立し、《道具》の意味「N 을 V 하는 도구（N ヲ V スル道具）」を持つ名詞を本稿では「道具名詞」と命名する.

（84）道具名詞（NV 로 N 을 V[NV デ N ヲ V]）
a. [바람막이]$_{NV}$로 {바람}$_{N}$을 {막다}$_{V}$ → 바람을 막는 도구 《道具》
[lit. 風防ぎ]$_{NV}$デ{風}$_{N}$ヲ {防ぐ}$_{V}$ → 風ヲ 防ぐ 道具
b. [줄넘기]$_{NV}$로 {줄}$_{N}$을 {넘다}$_{V}$ → 줄을 넘는 도구 《道具》
[lit. 縄跳び]$_{NV}$デ{縄}$_{N}$ヲ{跳ぶ}$_{V}$ → 縄ヲ 跳ぶ 道具

上記の例文で《道具》の意を表す際、これらの複合名詞は副詞語（付加語）「NV 로（NV デ）」の位置に現れる. そして、《動作主》の意を表す例と同様に、複合名詞の前項要素は目的語として現れ、後項要素は述語として現れる.

一方、目述関係にある動作性複合名詞が、《動作主》の意味としても、《道具》の意味としても両用できる例として「때밀이（ttay-mili；lit. 垢-擦り→垢擦り，流し・垢擦り師，垢擦りタオル）」がある.「때밀이（ttay-mili；垢-擦り）」は、機能動詞「하다（hata；する）」と共起して用いられる時は、「N ヲ V」（때를 밀다；垢ヲ擦る）という行為を表す. しかし、以下の(85a)ように主語の位置では「N 을 V 하는 사람（N ヲ V スルヒト）」という《動作主》の意味として用いられる一方、以下の（85b）のように、副詞語（付加語）の位置「NV 로（NV デ）」では「N 을 V 하는 도구（N ヲ V する道具）」という《道具》の意味としても用いられる.

(85) a. [때밀이]$_{NV}$가 {때}$_{N}$를 {밀다}$_{V}$ → 때를 미는 사람 《動作主》
[lit. 垢擦り]$_{NV}$ガ{垢}$_{N}$ヲ{擦る}$_{V}$ → 垢ヲ 擦る ヒト

b. [때밀이]$_{NV}$로 {때}$_{N}$를 {밀다}$_{V}$ → 때를 미는 도구 《道具》
[lit. 垢擦り]$_{NV}$デ{垢}$_{N}$ヲ{擦る}$_{V}$ → 垢ヲ 擦る 道具

国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』の意味記述では、「때밀이(ttay-mili;垢-擦り)」を動作性名詞の「垢を擦る行為」と動作主名詞の「垢を擦るヒト」のみを記述しているが、実際には「垢を擦る道具」という《道具》の意味としても用いられる. つまり、「때밀이(ttay-mili;垢-擦り)」が《道具》の意味としても用いられるようになったのは、つい最近のことだと推測できる. このことから、「때밀이(ttay-mili;垢-擦り)」という動作性名詞から一次的に《動作主》への意味転移が起きてから、その後二次的に《道具》への意味転移が発生した可能性が考えられる.

このように、目述関係にある複合名詞では優先的に《動作主》への意味転移が起きやすく、次に《道具》への意味転移が発生し得ると思われる. 言い換えると、意味転移には優先順位が存在する可能性があると言えよう(これについては 7. 1. 4 で後述する).

最後に、目述関係にある動作性名詞の中で《結果》への意味転移が起きる「結果名詞」の例として「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花), 새우구이(saywu-kwui;海老-焼き)[140], 상차림(sang-chalim;lit. 食卓-整え/膳-そろえ→膳)」などがある. これらの複合名詞は《道具》の意を表す「道具名詞」(바람막이[palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け])と同様に「無生名詞(物名詞)」として実現されるが、語彙的には「N 으로 V 한 결과물 (N デ V シタ結果物)/N 에 V 한 결과물 (N ニ V シタ結果物)」または「N 을 V 한 결과물 (N ヲ V シタ結果物)」という《結果》の意を表し、《道具》の語彙的な意味とは区分できる. そして、以下のように「N 으로 NV 를 V (N デ NV ヲ V)/ N 에 NV 를

140 「새우구이(saywu-kwui;海老-焼き)」は筆者が追加した例である. 動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例のうち、結果名詞は「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花), 초벌구이(chopel-kwui;素-焼き), 상차림(sang-chalim;lit. 食卓-整え/膳-そろえ→膳)」の 3 例のみ現れた. 本稿の研究対象となる国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』(約 5 万語)の見出し語では、「구이 (kwui;焼き)」を後項要素とする複合名詞は「초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」と「꼬치구이(kkochi-kwui;串-焼き)」の 2 例のみ現れた. そこで、同じ後項要素を持つ動作性名詞の例を国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』から検索し、「새우구이(saywu-kwui;海老-焼き)」を筆者の判断で追加した.

V（N ニ NV ヲ V）」または「N 을 NV 로 V（N ヲ NV ニ V）」という構文が成立する．このような構文が成立し、《結果》の意味「N 으로 V 한 결과물（N デ V シタ結果物）/N 에 V 한 결과물（N ニ V シタ結果物），N 을 V 한 결과물（N ヲ V シタ結果物）」を持つ名詞を本稿では「結果名詞」と命名する．

（86）結果名詞（N 으로 NV 를 V[N デ NV ヲ V]/ N 을 NV 로 V[N ヲ NV ニ V]）

a. {꽃}$_{N}$ 으로 [꽃꽂이]$_{NV}$ 를 {꽂다（만들다）}$_{V}$ → 꽃으로 꽂은 결과물《結果》
{花}$_{N}$ デ[lit. 花さし]$_{NV}$ ヲ{さす（作る）}$_{V}$ → 花デ さした 結果物

a'. {꽃}$_{N}$ 을 [꽃꽂이]$_{NV}$ 로 {꽂다（만들다）}$_{V}$ → 꽃을 꽂은 결과물 《結果》
{花}$_{N}$ ヲ[lit. 花さし]$_{NV}$ ニ{さす（作る）}$_{V}$ → 花ヲ さした 結果物

b. {새우}$_{N}$ 로 [새우구이]$_{NV}$ 를 {굽다（만들다）}$_{V}$ → 새우로 구운 결과물《結果》
{海老}$_{N}$ デ [海老焼き]$_{NV}$ ヲ {焼く（作る）}$_{V}$ → 海老デ焼いた結果物

b'. {새우}$_{N}$ 를 [새우구이]$_{NV}$ 로 {굽다（만들다）}$_{V}$ → 새우를 구운 결과물《結果》
{海老}$_{N}$ ヲ [海老焼き]$_{NV}$ ニ {焼く（作る）}$_{V}$ → 海老ヲ焼いた結果物

c. {상}$_{N}$ 에 [상차림]$_{NV}$ 을 {차리다（만들다）}$_{V}$ → 상에 차린 결과물《結果》
{食卓}$_{N}$ ニ[lit. 食卓整え]$_{NV}$ ヲ{整える（作る）}$_{V}$ → 食卓ニ整えた結果物

c'. {상}$_{N}$ 을 [상차림]$_{NV}$ 으로 {차리다（만들다）}$_{V}$ → 상을 차린 결과물《結果》
{膳}$_{N}$ ヲ [lit. 膳そろえ]$_{NV}$ ニ {そろえる（作る）}$_{V}$ → 膳ヲをそろえた結果物

上記の例文で述語として現れる「꽂다（kkocta；さす）」「굽다（kwupta；焼く）」「차리다（chalita；整える・そろえる）」は、限界（telic）が想定でき、完結性（telicity）を持つ達成動詞（accomplishment verb）であり、動作主の行為が対象の状態変化をもたらす状態変化動詞（change of state verb）である．なお、これらの後項動詞「꽂다（kkocta；さす）」「굽다（kwupta；焼く）」「차리다（chalita；整える・そろえる）」は、前項名詞との関係により、意味的な観点から眺めるとある材料（前項名詞）をもって新しい結果物を生産する作成動詞であるため、上記の例でそれぞれの述語を「만들다（mantulta；作る）」に置き換えるとより自然な文となる．このように、《結果》への意味転移が起きる例の前項要素「꽃（kkoch；花）」「새우（saywu；海老）」「상（sang；lit. 食卓/膳）」は「材料」または「場所」（「상（sang；lit. 食卓/膳）」のみ）という意味として解釈できるため、目的語「NV 를(ヲ)」の位置では「{재료}$_{N}$ 로 [결과물]$_{NV}$ 을 만들다 $_{V}$（{材料}$_{N}$ デ[結果物]$_{NV}$ ヲ作る $_{V}$）/{장소}$_{N}$ 에 [결과물]$_{NV}$ 을 만들다 $_{V}$（{場所}$_{N}$ ニ[結果物]$_{NV}$ ヲ作る $_{V}$）」という構文

が、そして副詞語（付加語）「NV 로（ニ）」の位置では「{재료}N 를 [결과물]NV 로 만들다 v（{材料}N ヲ[結果物]NV ニ作る v）」という構文が成立する.

以上から、韓国語[N+V]型動作性名詞は「《動作主》,《道具》,《結果》」への意味転移が起き得ることが分かる. 動作主名詞と道具名詞には目述関係にある例のみ見られたが、結果名詞の場合は目述関係にあるとも、付述関係にあるとも解釈できる. 結果名詞の場合は目述関係にあると見るか、付述関係にあると見るかについては検討が必要であろう.

5. 5. 2 韓国語[N+V]型非動作性名詞における意味解釈

前節では、動作性名詞における意味転移を考察したが、本節では韓国語の[N+V]型非動作性名詞を中心に考察したい. ただし、動作性名詞の場合は、動作性名詞から実体性名詞への意味転移が起きたと考えられるが、非動作性名詞の場合は、動作性名詞から意味転移が起きたと見ることはできない. そこで、複合名詞の各々の構成要素の意味と関連し、複合名詞そのものがどのような意味として解釈されるかに焦点を合わせる.

したがって、本節においてもチャ・ジュンギョン（2004）のデキゴト名詞の多義的意味分類を参考にし、韓国語の[N+V]型非動作性名詞を「動作主名詞, 道具名詞, 道具・場所名詞, 対象名詞, 結果名詞」に分類する（意味分類基準は後述する）. 非動作性名詞の分類結果は【付録 5】②を参照されたい[141]. この節では、韓国語の[N+V]型非動作性名詞における意味解釈を「動作主名詞, 道具名詞,（道具・場所名詞, 対象名詞）, 結果名詞」の順に考察し、その分類基準も共に提示する.

141 1.2（研究の対象と方法）の名詞の意味分類（表2を参照）で述べたように、本稿における「有生名詞（人名詞）」は「動物」のみならず「植物」も含む概念である. したがって、「한해살이（hanhay-sali;lit. 一年-暮らし→一年生植物）」や「해바라기（hay-palaki;lit. 日-向き→ひまわり）」などの植物も「動作主名詞」（人名詞）の対象に含めた. なぜなら、「한해살이（hanhay-sali;lit. 一年-暮らし→一年生植物）」などの植物も、本稿で提示する「動作主名詞」の意味解釈メカニズムである「한해살이 NV 가 한해 N 를 살다 v（lit. 一年暮らし NV ガ一年 N ヲ暮らす v）」という構文が成立し、「한해 N 를 사는 v 식물（一年 N ヲ暮らす v 植物）」という《動作主》の意を表すためである.

5. 5. 2. 1 目述関係にある[N+V]型非動作性名詞における意味解釈

まず、目述関係にある[N+V]型複合名詞の中で、実体性名詞としてのみ用いられる例、すなわち[N+V]型非動作性名詞の例を見てみよう. [N+V]型非動作性名詞の中にも動作性名詞の例と同様に《動作主》および《道具》の意を表す例が存在する.

[N+V]型動作性名詞の例には《動作主》《道具》《結果》への意味転移が見られたが、同様に非動作性名詞においても《動作主》《道具》《結果》の意を表す例が存在する. 《動作主》の意を表す例として「칼잡이 (khal-capi ; lit. 刀-とり→剣術つかい), 총잡이 (chong-capi ; lit. 銃-とり→拳銃つかい)」、そして《道具》の意を表す例として「손톱깎이 (sonthop-kkakki ; lit. 爪-削り→爪切り), 안경닦이 (ankyeng-takki ; メガネ-拭き)」などがある.

(87) 動作主名詞(NV 가 N 을 V[N V ガ N ヲ V])

a. [칼잡이]$_{NV}$가 {칼}$_{N}$을 {잡다}$_{V}$ → 칼을 잡는 사람 《動作主》
[lit. 刀とり]$_{NV}$ガ{刀}$_{N}$ヲ{とる}$_{V}$ → 刀ヲ とる ヒト

b. [총잡이]$_{NV}$가 {총}$_{N}$을 {잡다}$_{V}$ → 총을 잡는 사람 《動作主》
[lit. 銃つかい]$_{NV}$ガ{銃}$_{N}$ヲ{とる}$_{V}$ → 銃ヲ とる ヒト

(88) 道具名詞(NV 로 N 을 V[N V デ N ヲ V])

a. [손톱깎이]$_{NV}$로 {손톱}$_{N}$을 {깎다}$_{V}$ → 손톱을 깎는 도구 《道具》
[爪切り]$_{NV}$デ {爪}$_{N}$ヲ {切る}$_{V}$ → 爪ヲ 切る 道具

b. [안경닦이]$_{NV}$로 {안경}$_{N}$을 {닦다}$_{V}$ → 안경을 닦는 도구 《道具》
[メガネ拭き]$_{NV}$デ{メガネ}$_{N}$ヲ{拭く}$_{V}$ → メガネヲ 拭く 道具

以上のように(87a)の「칼잡이 (khal-capi ; lit. 刀-とり→剣術つかい」と(87b)の「총잡이 (chong-capi ; lit. 銃-とり→拳銃つかい」は《動作主》「N 을 V 하는 사람(N ヲ V スルヒト)」の意を表し、主語の位置で「NV 가 N 을 V (NV ガ N ヲ V)」という構文が成立するため、「動作主名詞」と見られる. 次に(88a)の「손톱깎이 (sonthop-kkakki ; lit. 爪-削り→爪切り)」と(88b)の「안경닦이 (ankyeng-takki ; メガネ-拭き)」は《道具》「N 을 V 하는 도구(N ヲ V スル道具)」の意を表し、副詞語(付加語)の位置で「NV 로 N 을 V (N V デ N ヲ V)」という構文が成立するため、「道具名詞」と見られる.

一方、目述関係にある非動作性名詞には、動作性名詞には現れなかった《道具/場所》の意を表す例として「책꽂이 (chayk-kkoci ; lit. 本-さし→本棚)」と「옷걸이 (os-

keli;洋服-掛け)」などが存在する. これらの複合名詞は《道具》の意を表す例と同様に、結果的には「無生名詞(物名詞)」として実現される. しかし、「책꽂이(chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚)」および「옷걸이(os-keli;洋服-掛け)」は《道具》「N 을 V 하는 도구(N ヲ V スル道具)」または《場所》「N 을 V 하는 곳(N ヲ V スルトコロ)」という語彙的な意味を表し、以下の例のように、「NV 에 N 을 V(NV ニ N ヲ V)」という構文が成立する. つまり、「道具名詞」とは区別できる語彙的な意味および構文を持っていると言える. したがって、これらの構文「NV 에 N 을 V(NV ニ N ヲ V)」が成立し、《道具/場所》「N 을 V 하는 도구(N ヲ V スル道具)/N 을 V 하는 곳(N ヲ V スルトコロ)」の意を表す名詞を本稿では「道具・場所名詞」と命名する.

(89) 道具・場所名詞(NV 에 N 을 V[NV ニ N ヲ V])

a. [책꽂이]$_{NV}$에 {책}$_{N}$을 {꽂다}$_{V}$ → 책을 꽂는 곳 《道具/場所》
[lit. 本さし]$_{NV}$ニ{本}$_{N}$ヲ{さす}$_{V}$ → 本ヲ さす トコロ

b. [옷걸이]$_{NV}$에 {옷}$_{N}$을 {걸다}$_{V}$ → 옷을 거는 곳 《道具/場所》
[洋服掛け]$_{NV}$ニ{洋服}$_{N}$ヲ {掛ける}$_{V}$ → 洋服ヲ掛けるトコロ

上記の例のように《道具/場所》の意を表す時、これらの複合名詞は副詞語(付加語)「NV 에(NV ニ)」の位置に来られる. そして、複合名詞の前項名詞は目的語として現れ、後項要素は述語として現れる.

最後に、目述関係にある[N+V]型非動作性名詞の中で、《結果》「N 으로 V 한 결과물 (N デ V シタ結果物) /N 을 V 한 결과물 (N ヲ V シタ結果物)」の意を表し、「N 으로 NV 를 V (N デ NV ヲ V)」および「N 을 NV 로 V (N ヲ NV ニ V)」」という構文が成立する「結果名詞」の例として「떡볶이(ttek-pokki;lit. 餅-炒め→トッポッキ), 계란말이(kyeylan-mali;卵-巻き)」などがある[142].

142 結果名詞の特徴上、動詞「하다(hata;する)」と共起できる場合が多いが、「떡볶이-를 하다(ttekpokki-lul hata;lit. トッポッキ-をする→トッポッキ-を作る)」「계란말이-를 하다(kyeylanmali-lul hata;卵巻き-をする→卵巻き-を作る)」のように用いられる時の「하다(hata;する)」は「機能動詞」ではなく、「本動詞」あるいは「代動詞」であると考えられる(ソ・ジョンス 1994, チャ・ジュンギョン 2004). これは実体性名詞「밥(pap;ご飯), 나무(namwu;木)」が「밥-을 하다(pap-ul hata;lit. ご飯をする→ご飯を作る)」「나무-를 하다(namwu-lul hata;lit. 木をする→たきぎを取る)」のように用いられることと同様である.

(90) 結果名詞(N으로 NV를 V[N デ NVヲV]/N을 NV로 V[N ヲ NVニV])

a. {떡}$_N$으로 [떡볶이]$_{NV}$를 {볶다(만들다)}$_V$ → 떡으로 볶은 결과물《結果》
{餅}$_N$デ [lit. 餅炒め]$_{NV}$ヲ {炒める(作る)}$_V$ → 餅デ炒めた結果物

a'. {떡}$_N$을 [떡볶이]$_{NV}$로 {볶다(만들다)}$_V$ → 떡을 볶은 결과물 《結果》
{餅}$_N$ヲ [lit. 餅炒め]$_{NV}$ニ {炒める(作る)}$_V$ → 餅ヲ炒めた結果物

b. {계란}$_N$으로 [계란말이]$_{NV}$를 {말다(만들다)}$_V$ → 계란으로 만 결과물《結果》
{卵}$_N$デ [卵巻き]$_{NV}$ヲ {巻く(作る)}$_V$ → 卵デ巻いた結果物

b'. {계란}$_N$을 [계란말이]$_{NV}$로 {말다(만들다)}$_V$ → 계란을 만 결과물 《結果》
{卵}$_N$ヲ [卵巻き]$_{NV}$ニ {巻く(作る)}$_V$ → 卵ヲ巻いた結果物

以上の(90)の例「떡볶이(ttek-pokki;lit. 餅-炒め→トッポッキ)」および「계란말이(kyeylan-mali;卵-巻き」は、目述関係にある動作性名詞における結果名詞「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花), 새우구이(saywu-kwui;海老-焼き)」と同様に、動詞が完結した結果状態がその結果物となる. したがって、以上の例(90)で述語として現れる「볶다(pokkta;炒める)」および「말다(malta;巻く)」を「만들다(mantulta;作る)」に置き換えることでより自然な文となる. このことから、「結果名詞」の後項動詞には特定の動詞(達成動詞, 状態変化動詞, 作成動詞)だけが現れると予想できる. 動作性名詞の結果名詞の例と同様に、前項名詞が「材料」という意味として解釈できるため、目的語「NV」の位置では「{재료}$_N$로 [결과물]$_{NV}$을 만들다 $_v$({材料}$_N$デ[結果物]$_{NV}$ヲ作る$_v$)」という構文が、そして副詞語(付加語)「NV」の位置では「{재료}$_N$를 [결과물]$_{NV}$로 만들다 $_v$ ({材料}$_N$ヲ[結果物]$_{NV}$ニ作る$_v$)」という2つの構文が両方とも成立する.

5. 5. 2. 2 付述関係にある[N+V]型非動作性名詞における意味解釈

最後に、[N+V]型非動作性名詞の中で付述関係にある例を見てみよう. 前項名詞を「N」、後項動詞を「V」で表記すると、主述関係(主語-述語)の「N이 V(N ガ V)」および目述関係(目的語-述語)の「N 을 V(N ヲ V)」以外に、「N 으로 V(N デ V)」または「N에 V(N ニ V)」などの構造を持つ場合、付述関係(副詞語/付加語-述語)にあると見なす. 一方、付述関係にある[N+V]型複合名詞の中には、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例は見られなかった. これは、言い換えると韓国語の[N+V]型複合名詞において、付述関係の動作性名詞は、目述関係の動作性名詞と異なり、複合名詞の全体として意味転移が発生すること(全体意味転移仮説による説明)はできないことを意味する.

付述関係にある[N+V]型複合名詞には動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存できる例は存在しないが、動作性名詞としてのみ用いられる例または非動作性名詞としてのみ用いられる例は存在する.

本節では、付述関係にある非動作性名詞の例を中心に、目述関係にある複合名詞の例と比較しながら、その意味解釈のメカニズムを考察する. 付述関係にある[N+V]型非動作性名詞の例の中には、「有生名詞(人名詞)」の例として「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」、「無生名詞(物名詞)」の例として「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」「목걸이(mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス)」などがある. そして、結果名詞の例として「소금구이(sokum-kwui;塩-焼き), 꼬치구이(kkochi-kwui;串-焼き)」などがあるが、これらを順次考察する.

まず、「有生名詞(人名詞)」の例である「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」は、《動作主》「N으로 V하는 사람(N デ V スルヒト)」の意を表す動作主名詞である. この後項要素「잡이(capi;lit. とり)」は、動詞「잡다(capta;とる)」から由来したものであり、前節で考察した目述関係にある「動作主名詞」の例(83a)の「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」および(87a)の「칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)」の後項要素と同一のものである. そして、付述関係にある非動作性名詞のうち、「無生名詞(物名詞)」の例である「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」の後項要素も同一のものであるが、ここで比較して見てみよう.

(91) a. [고기잡이]$_{NV}$가 {고기}$_{N}$를 {잡다}$_{V}$ → 고기를 잡는 사람 《動作主》
[lit. 魚とり]$_{NV}$ガ {魚}$_{N}$ヲ {とる}$_{V}$ → 魚ヲ とる ヒト

b. [칼잡이]$_{NV}$가 {칼}$_{N}$을 {잡다}$_{V}$ → 칼을 잡는 사람 《動作主》
[lit. 刀とり]$_{NV}$ガ{刀}$_{N}$ヲ {とる}$_{V}$ → 刀ヲ とる ヒト

c. [오른손잡이]$_{NV}$가 {오른손}으로 {잡다}$_{V}$→오른손으로 잡는 사람《動作主》
[lit. 右手とり]$_{NV}$ガ {右手}$_{N}$デ {とる}$_{V}$ → 右手デ とる ヒト

d. {손}$_{N}$으로 [손잡이]$_{NV}$를 {잡다}$_{V}$ → 손으로 잡는 대상물《対象》
{手}$_{N}$デ [lit. 手とり]$_{NV}$ヲ{とる}$_{V}$ → 手デ とる 対象物

上記に目述関係の(91a)「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」と(91b)「칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)」は主語の位置で「NV가 N을 V (NV ガ N ヲ V)」という構文が成立し、付述関係の(91c)「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右

手-とり→右利き)」は主語の位置で「NV 가 N 으로 V (NV ガ N デ V)」という構文が成立する. (91a)の「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」の場合、後項要素「잡이(capi;lit. とり)」は辞書に登録されている「새우잡이(saywu-capi;lit. 海老-とり→海老釣り), 고래잡이(kolay-capi;鯨-とり)」のみならず、「오징어잡이(ocinge-capi;lit. イカ-とり→イカ釣り), 조개잡이(cokay-capi;lit. 貝-とり→潮干狩り)」など非常に生産的に複合語を形成する要素である. そして、厳密に言うと、(91a)「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」と(91c)「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」は同一の動詞として見ることは難しい. むしろ、意味的に考えると(91c)「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」の後項要素は(91b)「칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)」の後項要素と類似した意味であろう.

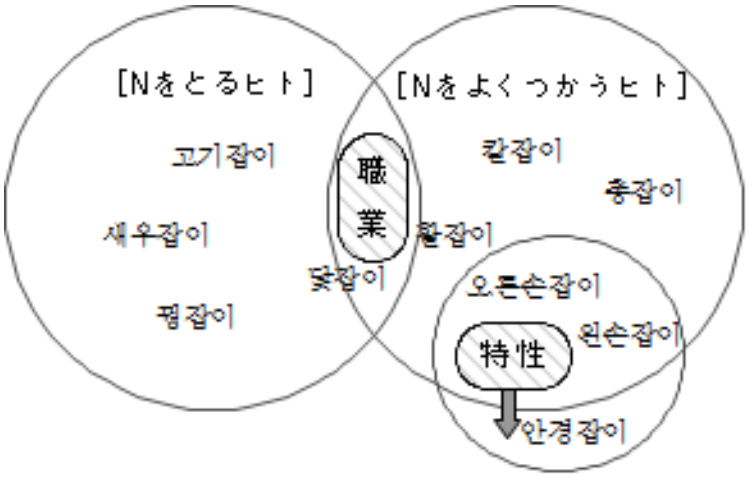


図 5. 「**잡이**(capi)」を後項要素とする複合名詞の意味関係

上記の図 5 のように、実体性名詞の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」は多義性を持つ. この中で最も基本的な意味は本来の動詞である「잡다(capta;とる)」の意味に最も近い「N 을 잡는 사람(N ヲとるヒト)」(例: 고기잡이[koki-capi;lit. 魚-とり→漁師], 새우잡이[saywu-capi;lit. 海老-とり→海老を捕る人], 꿩잡이[kkweng-capi;lit. キジ-とり→キジを捕る人])と言える. そして、本来の動詞「잡다(capta;とる)」の意味から離れた「N 을 잘 쓰는 사람(N ヲよくつかうヒト)」という意味は、基本意味の「N 을 잡는

사람(N ヲとるヒト)」から「職業」という共通点により派生された意味として考えられる. その根拠として、2 つの意味の真ん中に位置する「활잡이(hwal-capi;lit. 弓-とり→弓を射る人・射手)」は、「활 N을 잡는 사람(弓 N ヲとるヒト)」および「활 N을 잘 쓰는 사람(弓 N をよくつかうヒト)」という 2 つの意味を両方とも持っているという点が挙げられる. 「활잡이(hwal-capi;lit. 弓-とり)」は「弓をとることが職業であるヒト(射手)」であるが、弓をとる仕事をしながら自然に弓をよく使い、上手に扱えることになるため、「弓をよく使うヒト→弓術にすぐれたヒト」という意味まで持つようになったと解釈できる. このように、「잡이(capi;lit. とり)」は本来の動詞「잡다(capta;とる)」の意味から離れて派生された意味の「N 을 잘 쓰는 사람(N ヲよくつかうヒト)」により、「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」および「왼손잡이(oynson-capi;lit. 左手-とり→左利き)」のような複合名詞も形成するようになったと考えられる. この「特性」という共通点により、もはや「안경 N 을 잘 쓰는 사람(メガネ N をよくつかうヒト)」という意味の「안경잡이(ankyeng-capi;lit. メガネ-とり→メガネの子)」のような、本来の後項動詞「잡다(capta;とる)」の意味とは全く関係のない複合名詞までも形成するようになったと思われる. したがって、本来の動詞「잡다(capta;とる)」の意味から最も近い例から遠い例を順番に並べると「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)>칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)>오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)>안경잡이(ankyeng-capi;lit. メガネ-とり→メガネの子)」という順になる.

上述したように、付述関係にある複合名詞においては全体において意味転移が発生しない. これに関連付けて考えると、付述関係にある「오른손잡이(olunson-capi;lit. 右手-とり→右利き)」は後項要素「잡이(capi;lit. とり)」の意味が転じたものであると考えられる. 言い換えると、目述関係にある「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」は全体として意味転移が発生するが、後項要素「잡이(capi;lit. とり)」が「N をとることを職業とするヒト」という意味で生産的に用いられることにより、後項要素においても意味転移が発生し、「N をよくつかうヒト」という意味を持つようになったと解釈できる[143].

143 国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』では、「잡이(capi;lit. とり)」を一部の名詞の後ろに付いて「[1]何かを捕る仕事」および「[2]何かを扱う人」という意味を持つ接尾辞であると記述している. つまり、「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」と「칼잡이(khal-capi;lit. 刀-とり→剣術つかい)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」を同音異義語ではなく、多義語の関係として記述していることが分かる.

しかし、「손잡이（son-capi；lit. 手-とり→取っ手）」は（91d）のように、他の複合名詞とは異なり、「N 으로 V 하는 대상물（N デ V スル対象物）」（손으로 잡는 대상물[手デとる対象物]）という《対象》の語彙的な意味を持ち、目的語の「NV 를（NVヲ）」の位置で「N デ NV ヲ V」（손으로 손잡이를 잡다[手デ lit. 手とりヲとる]）という構文が成立するため、本稿では「対象名詞」と命名する．一方、「손잡이（son-capi；lit. 手-とり→取っ手）」の後項要素「잡이（capi；lit. とり）」は、「手でとる部分」という意味の自立的な名詞であり、「외잡이（oy-capi；lit. 片-とり→器の片方だけ付いている取っ手）」のように接頭辞（외-[oy; lit. 片]）とも結合可能である．したがって、「손잡이（son-capi；lit. 手-とり→取っ手）」は後項要素の「잡이（capi；lit. とり）」において既に「物（モノ）」（ここでは《対象》）への意味転移が起きてから前項要素と結合されたと分析できる．

同様に、付述関係にある「無生名詞（物名詞）」の例である「목걸이（mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス）」は、後項要素「걸이（keli；lit. 掛け）」が辞書に登載されている自立的な名詞ではないが、「귀걸이（kwi-keli；lit. 耳-掛け→耳飾り・イヤリング），코걸이（kho-keli；lit. 鼻-掛け→鼻輪），벽걸이（pyek-keli；壁-掛け）」のように比較的生産的に他の複合名詞を形成することができるという点から後項要素から意味転移が起きた（後項要素意味転移仮説により説明できる）可能性が見られる．この例と前節（5.5.2.1）の目述関係にある非動作性名詞で考察した、後項要素が同一のものである「無生名詞（物名詞）」の例（89b）「옷걸이（os-keli；洋服-掛け）」と比較してみよう．

(92) a. [옷걸이]$_{NV}$에 {옷}$_{N}$을 {걸다}$_{V}$ → 옷을 거는 곳 《道具/場所》
[洋服掛け]$_{NV}$ニ{洋服}$_{N}$ヲ {掛ける}$_{V}$ → 洋服ヲ掛けるトコロ
b. {목}$_{N}$에 [목걸이]$_{NV}$를 {걸다}$_{V}$ → 목에 거는 대상물 《対象》
{首}$_{N}$ニ[lit. 首掛け]$_{NV}$ヲ {掛ける}$_{V}$ → 首ニ掛ける対象物

目述関係にある「옷걸이（os-keli；洋服-掛け）」は、「N 을 V 하는 도구（N ヲ V スル道具）/N 을 V 하는 곳（N ヲ V スルトコロ）」という《道具/場所》の意を表し、副詞語（付加語）の位置で「NV 에 N 을 V（NV ニ N ヲ V）」という構文が成立する「道具・場所名詞」であるが、付述関係にある「목걸이（mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス）」は「N 에 V 하는 대상물（N ニ V スル対象物）」という《対象》の意を表し、目的語の位置で「N 에 NV 를 V（N ニ NV ヲ V）」という構文が成立する「対象名詞」である．このように、

これらの複合名詞は「N 에 N 을 V(N ニ N ヲ V)」という類似した構文が成立する反面、意味は異なる. この理由については次節で詳しく述べる.

最後に、付述関係にある非動作性名詞の中で、「N 으로 V 한 결과물(N デ V シタ結果物)」という《結果》の意を表す「結果名詞」の例として「소금구이(sokum-kwui;塩-焼き), 꼬치구이(kkochi-kwui;串-焼き)」を見てみよう.

(93) 結果名詞(NV 로 N 을 V)

a. {소금}$_{N}$으로 [소금구이]$_{N}$를 {굽다(만들다)}$_{V}$→ 소금으로 구운 결과물《結果》
{塩}$_{N}$デ [塩焼き]$_{NV}$ヲ {焼く(作る)}$_{V}$ → 塩デ 焼いた 結果物

b. {꼬치}$_{N}$로 [꼬치구이]$_{NV}$를 {굽다(만들다)}$_{V}$ → 꼬치로 구운 결과물 《結果》
{串}$_{N}$デ [串焼き]$_{NV}$ヲ {焼く(作る)}$_{V}$ → 串デ 焼いた 結果物

上記の例「소금구이(sokum-kwui;塩-焼き), 꼬치구이(kkochi-kwui;串-焼き)」は、目述関係にある結果名詞の例(86)の「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花), 새우구이(saywu-kwui;海老-焼き)」および(90)の「떡볶이(ttek-pokki;lit. 餅-炒め→トッポッキ), 계란말이(kyeylan-mali;卵-巻き)」と同様に、目的語の位置で「N 으로 NV 를 V (N デ NV ヲ V)」という構文が成立する. 反面、目述関係にある結果名詞とは違って、副詞語(付加語)の位置で「N 을 NV 로 V (N ヲ NV ニ V)」という構文は成立しない. 目述関係にある結果名詞とは異なり、付述関係にある結果名詞「소금구이(sokum-kwui;塩-焼き)」および「꼬치구이(kkochi-kwui;串-焼き)」は、前項名詞が「材料」ではなく「方法」ないし「道具」として現れるため、《結果》の意を表す複合名詞の共通する分母を「{재료/방법/도구}$_{N}$ 로 [결과물]$_{NV}$ 을 만들다 $_{V}$({材料/方法/道具}$_{N}$ デ [結果物]$_{NV}$ヲ作る $_{V}$)」にまとめることができよう.

5. 5. 3 意味転移の傾向性と意味転移が不可能な複合名詞

これまで、韓国語の[N+V]型複合名詞には、特定の意味転移の傾向性が見られ、大きく《動作主》《道具》《道具/場所》《対象》《結果》への意味転移が現れることを明らかにした[144]. 特に、目述関係にある動作性複合名詞の場合は、《動作主》《道具》《結果》への意

144 本稿で対象とした韓国語の[N+V]型複合名詞においては、動作性名詞と実体性名詞として共存できる 26 例は、すべて本稿で提示した意味解釈のメカニズム(多義的意味分類基準でも

味転移が主に発生し、目述関係にある非動作性複合名詞の場合は、《動作主》《道具》《結果》はもちろん、動作性名詞では現れなかった《道具/場所》という意味として解釈されることもある. 付述関係にある複合名詞の場合は、主に《動作主》《対象》《結果》の意味として解釈されるが、とりわけその中でも《対象》の意味は、目述関係の複合名詞においては現れず、付述関係の複合名詞でのみ現れる.

そして、[N+V]型複合名詞は、その意味によって特定の構文を取ることができることを明らかにした. 《動作主》の意を表す複合名詞(例:고기잡이[koki-capi;lit. 魚-とり→漁師])は主語の位置で「NV 가 N 을 V (NV ガ N ヲ V)」という構文が成立し、《道具》の意を表す複合名詞(例:바람막이[palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け])は副詞語(付加語)の位置で「NV 로 N 을 V (NV デ N ヲ V)」という構文が成立する. 《道具/場所》の意を表す複合名詞(例:책꽂이[chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚])は副詞語(付加語)の位置で「NV 에 N 을 V(NV ニ N ヲ V)」という構文が成立し、《結果》の意を表す複合名詞(例:꽃꽂이[kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花])は目的語の位置では「N 으로 NV 를 V (N デ NV ヲ V)」という構文が成立することを考察した. これらの構文を比較して見ると、同じ目述関係にある複合名詞の例であるとしても、以下の(94)のように複合名詞が現れる位置は明確に異なる.

(94) 目述関係にある複合名詞の意味による特定の構文

a. 動作主名詞(고기잡이[lit. 魚とり]): [ ]NV 가 N(고기)를 V(잡다)
[ ]NV ガ N(魚)ヲ V(とる)

b. 道具名詞(바람막이[lit. 風防ぎ]): [ ]NV 로 N(바람)을 V(막다)
[ ]NV デ N(風)ヲ V(防ぐ)

c. 道具・場所名詞(책꽂이[lit. 本さし]): [ ]NV 에 N(책)을 V(꽂다)
[ ]NV ニ N(本)ヲ V(さす)

ある、語彙的な意味とその成立する構文)に当てはまることを確認した. しかし、非動作性名詞の例の中には、この意味解釈のメカニズムの適用が難しい例もあった. 本稿においては、例外として「차돌박이(chatol-paki;lit. 石英-打ち込み→牛の肋間についている、白色でやや固い脂肪質の肉), 점박이(cem-paki;lit. 斑点-打ち込み→顔や体にほくろや斑点がある人や動物)」の 2 例が現れたが、これらは人や物の性質(とりわけ外見)を表す例である. なお、これらの例はすべて文字通りの意味ではなく、比喩的な意味であるため、この意味解釈のメカニズムの適用が難しいと考えられる. 動作性名詞は概ねその意味が透明であるが、非動作性名詞はその意味が不透明であるため、非動作性名詞においては、本稿で提示した意味解釈のメカニズムの適用が難しい例が存在するのも十分あり得るだろう.

d. 結果名詞(꽃꽂이[lit. 花さし]): N(꽃)으로 [ ]$_{NV}$를 V(꽂다)
N(花)デ [ ]$_{NV}$ヲ V(さす)

以上のように、目述関係にある複合名詞は、その意味によって特定の構文を取り、複合名詞が現れる位置もそれぞれ異なる. 主語の位置に来られる場合は《動作主》の意味、副詞語(付加語)の位置に来られる場合は《道具》または《道具/場所》の意味、目的語の位置に来られる場合は《結果》の意味を持つことができる.

それでは、同じ目述関係にある複合名詞の意味が《動作主》(主語の位置)、《道具》および《道具/場所》(副詞語/付加語の位置)、《結果》(目的語の位置)に分かれた経緯を考えてみよう. 結論から言うと、これは複合名詞の後項動詞の特性ならびに前項要素と後項要素との関係が関わっていると考えられる.

まず、動作主名詞「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁師)」と道具名詞「바람막이(palam-maki;lit. 風-防ぎ→風除け)」、そして道具・場所名詞「책꽂이(chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚)」のような例は前項名詞と後項動詞の関係が密接であり、一般的な意味として考えた際に「N 을 V(N ヲ V)」(例:고기$_N$를 잡다$_V$[魚$_N$ヲとる$_V$], 바람$_N$을 막다$_V$[風$_N$ヲよける$_V$], 책$_N$을 꽂다$_V$[本$_N$ヲさす$_V$])という意味以外の解釈は難しい.

それに対して、結果名詞「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花)」のような例は、前項名詞と後項動詞の関係を「N 을 V(N ヲ V)」(꽃$_N$을 꽂다$_V$[花$_N$ヲさす$_V$])としても解釈できるが、「N 으로 V(N デ V)」(꽃$_N$으로 꽂다$_V$[花$_N$デさす$_V$])と解釈できる余地がある.

つまり、「꽃꽂이(kkoch-kkoci;lit. 花-さし→生け花)」の後項動詞「꽂다(kkocta;さす)」は「N 으로 N 을 V(N デ N ヲ V)」という格フレームを持つことができるため、複合名詞の前項要素が「材料(または方法や道具)」の意味として解釈できる場合、《結果》の意味を持つことができると考えらえる. これは付述関係にある複合名詞においても同じ解釈が可能であろう.

一方、《対象》の意味は目述関係にある複合名詞には見られず、付述関係にある複合名詞のみに見られた. その理由として考えられるのは、目述関係にある複合名詞の場合は目的語を前項名詞とするため、《対象》への意味転移は不可能になるからである. これは目的語の位置に「対象」の意味役割(semantic role)が現れやすいことと関係しているだろう. それに対して付述関係にある複合名詞の場合は、副詞語(付加語)を前項名詞と

するため、目的語の位置が空いている. したがって、《対象》の意味として解釈できるということである.

このような解釈は、前節で考察した(92)の目述関係にある例「옷걸이(os-keli;洋服-掛け)」と付述関係にある例「목걸이(mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス)」においても通用する.

(95)a. 道具・場所名詞(옷걸이;洋服掛け) : [ ]NV에 N(옷)을 V(걸다)
[ ]NVニ N(洋服)ヲ V(掛ける)

b. 対象名詞(목걸이;lit. 首掛け) : N(목) 에 [ ]NV를 V(걸다)
N(首)ニ [ ]NVヲ V(掛ける)

つまり、目述関係の「옷걸이(os-keli;洋服-掛け)」の場合、(95a)のように、前項名詞「옷(os;洋服)」が目的語の位置を既に占めているため、必須的副詞語(必須的付加語)「NV 에(NV ニ)」の位置に下がり、《道具/場所》の意味を獲得することになる. 一方、付述関係の「목걸이(mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス」の場合は、(95b)のように、前項名詞「목(mok;首)」が必須的副詞語(必須的付加語)の位置を占め、目的語の位置が空いているため、目的語「NV을(NVヲ)」の位置に来られる《対象》の意味を獲得できるようになるということである. このように、これらの複合名詞は「N에 N을 V(NニNヲV)」という同一の構文が成立するとしても、前項名詞と後項動詞の関係により複合名詞が出現可能な位置が異なるため、その意味が《道具/場所》と《対象》に分かれたわけである.

最後に、動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存できる例の大半は、前項要素と後項要素との関係が目述関係にあるという共通点が見られた. しかしながら、付述関係にある複合名詞の場合は、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存できる例は見られなかった[145]. さらに、本研究では、主述関係にある複合名詞において意味転移が起きたと考えられる例(すなわち、実体性名詞として用いられる例)は見当たらなかった. このことから、複合名詞の構成要素間の文法的関係と意味転移は密接な関係にある

145 上述したように、付述関係にある複合名詞(計 71 例)の中で、例外的に動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存できる例は「초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」の一例のみであった. しかし、後項要素「구이(kwui;lit. 焼き)」は自立的な名詞であり、単独で用いられるため、「초벌구이(chopel-kwui;素-焼き)」の場合は後項要素「구이(kwui;lit. 焼き)」において既に意味転移が発生してから前項要素と結合したと考えられる.

ということが分かる．言い換えると、複合名詞における文法的関係が目述関係にある際は「全体（N+V）」において意味転移が起き得る反面、付述関係にある際は「後項要素（V）」において意味転移が発生するということである．

これを 5．2 の意味転移仮説により説明すると、目述関係にある複合名詞の全体において意味転移が起きるということは「全体意味転移仮説」により説明が可能であり、付述関係にある複合名詞の後項要素において意味転移が発生するということは「後項要素意味転移仮説」により説明が可能である．

一方、意味転移が発生しない動作性名詞も存在する．目述関係の「달맞이（tal-maci；lit. 月-迎え→月見）」と付述関係の「시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし）」のように、「맞이（maci；迎え）」「살이（sali；暮らし）」を後項要素とする例がそうである．これらの複合名詞において意味転移が発生しないのはなぜだろうか．またここにも前項名詞と後項動詞の関係および後項動詞の特性、特に項構造が関係している．「달맞이（tal-maci；lit. 月-迎え→月見）」の後項動詞「맞다（macta；迎える）」は、「動作主（主語）」を除外したら「対象（目的語）」以外の項は取らない．そして、「시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし）」の後項動詞「살다（salta；暮らす・住む）」は基本的に「対象（主語）」を除外したら「場所（必須的副詞語；必須的付加語）」以外の項を取らない．しかし、「달맞이（tal-maci；lit. 月-迎え→月見）」では目的語（対象）が来るところを前項名詞（달[tal；月]）が占めしており、「시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし）」では必須的副詞語（場所）が来るところを前項名詞（시집[sicip；婚家]）が占めている．結局、後項動詞の必須項のうち、「動作主」あるいは「対象」が現れる「主語」（NV 가[NV ガ]）の箇所だけが空白であるため、「달맞이（tal-maci；lit. 月-迎え→月見）」と「시집살이（sicip-sali；lit. 婚家-暮らし→嫁入り暮らし）」は「動作主」への意味転移のみ起き得るということである．つまり、意味転移が起きる可能性はあるものの、「月を迎える（ことを職業としている）ヒト」または「婚家で暮らす（ことを職業としている）ヒト」を表す単語の必要性がなかったため、意味転移は発生しなかったと考えられる．

その根拠として、主述関係にある複合名詞（例：해돋이[hay-toti；lit. 日-昇り→日の出]）においては意味転移が殆ど起きないという点を挙げられる．すなわち、主語（対象）が来るところを前項名詞が既に占めしており、これ以上の他の項を取ることができないため、意味転移が起きにくいということである．「動作主不可制約（No Agent Constraint）」（アン・サンチョル 1998：560）があるため、主述関係にある複合名詞の前項名詞には対

象の意味役割だけが現れ得る[146]. したがって、主述関係にある複合名詞において必須成分の《動作主》および《対象》への意味転移は不可能であり、随意成分の《時間》または《場所》への意味転移は可能であろう.

5. 6 [N+V]型複合名詞の意味解釈と語彙概念構造

語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure;LCS)とは、1979 年代の生成意味論の影響を受け、Jackendoff(1983, 1990)によって提案された意味構造に関する理論である. 語彙の意味を基本的な要素で分解する語彙分解(lexical decomposition)の方法論を通して、単なる語彙の意味を記述するのではなく、語彙の意味の中で、その語彙が現れる統語的構造を決定する意味の特性を抽出して示したものである.

この語彙概念構造(LCS)は[N+V]型複合名詞における意味解釈にも有効であると考えられる. Kageyama(2001:48)では、以下の(96)のように語彙概念構造を基盤として[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズムを説明しようと試みた. 例えば、「金持ち」の後項動詞である「持つ」の語彙概念構造において「金」が対象の項として代入された結果、複合名詞「金持ち」は残された項(x)、すなわち主語に焦点を当てた意味として解釈される.

(96) 「持つ」: [x] BE WITH [y] (BE WITH means 'have')
「金持ち」: <u>Compound formation</u> [x] BE WITH [MONEY]
The inserted element (MONEY) is backgrounded and the focus is there by shifted to the possessor(x).
(由本 2015:92 より再引用)

本章では、動詞由来複合名詞において本来の動詞的な性質である動作性が消え、意味転移が起きる点に注目している. したがって、意味転移が発生する以前の本来動詞が持っている意味にも注目する必要があるだろう. 文の中だけではなく、複合名詞における語形成のプロセスにも動詞の統語構造および項構造が関与し得る. これを裏付ける例として、これまで複合名詞はその意味により特定の構文を取ることができることを見てきた.

146 動作主の主語(外項)は、動詞由来複合語を形成できないという制約(Di Sciullo & Williams 1987)があり、非能格動詞は[N+V]型複合名詞の後項要素の動詞として現れないが、対象(内項)を持つ非対格動詞は後項要素として現れ得る.

このような特性と関連し、ここでは日本語と韓国語における複合名詞の意味解釈と複合名詞の後項動詞が持つ語彙概念構造との関連性について概観する.

まず、「動作主名詞」の代表的な例として日本語「舵取り」と韓国語「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師)」を見てみよう. この際、後項動詞は「取る/잡다(capta;とる)」であり、これを語彙概念構造で示すと次のようである.

(97) 日本語の動作主名詞「舵取り」
{取る} x ACT ON-y
(x:舵取り, y:舵)

(98) 韓国語の動作主名詞「고기잡이(漁労, 漁師)」
{잡다[capta;とる]} x ACT ON-y
(x:고기잡이[koki-capi;lit. 魚-とり], y:고기[koki;漁])

「取る/잡다(capta;とる)」は活動を表す活動動詞(activity verb)[147]であり、対象の項(y)を目的語として取る他動詞である. したがって、「舵取り」と「고기잡이(koki-capi;lit. 魚-とり→漁労, 漁師)」の前項名詞「舵」および「고기(koki;魚)」は後項動詞「取る/잡다(capta;とる)」の「対象(y)」の項を満たすことになるため、結果的に「動作主(x)」の項のみ、空いている状態になる. それゆえ「取る/잡다(capta;とる)」の活動の主体である《動作主》への意味転移が可能になるわけである. 「動作主名詞」が「NV(舵取り)ガ N(舵)ヲ V(取る)/NV(고기잡이[lit. 魚とり])가[ガ] N(고기[漁])를[ヲ] V(잡다[とる])」という構文が可能であることも同じ脈絡で理解できよう.

---

147 Vendler(1967)は動詞の語彙的アスペクトによって、動詞を「状態(states)」「到達(achievements)」「活動(activities)」「達成(accomplishments)」の4つの種類に分類している. そして、影山(1996, 1997)では、以下のように、Vendler(1967)の動詞 4 分類を基にした語彙概念構造を提示している(影山 & 由本 1997:6).
a.状態動詞(stative verbs):
[STATE[ ]y BE AT-[ ]z]
b.到達動詞(achievement verbs):
[EVENTBECOME [STATE[ ]y BE AT-[ ]z]]
c.活動動詞(activity verbs):
[EVENT[ ]x ACT (ON-[ ]y)]
d.達成動詞(accomplishment verbs):
[EVENT[ ]x ACT (ON-[ ]y)] CAUSE [EVENTBECOME [STATE[ ]y BE AT-[ ]z]]

次に、「道具名詞」の代表的な例として日本語「風除け」と韓国語「바람막이（palam-maki；lit. 風-防ぎ→風除け）」を見てみよう. この際、後項動詞「除ける/막다（makta；lit. 防ぐ）」は、同様に活動動詞であり、「対象（y）」の項を目的語を取る他動詞であるため、以上の「動作主名詞」の例と同じ語彙概念構造を持つ. しかし、前節で「道具名詞」が持つ構文である「NV（風除け）デ N（風）ヲ V（除ける）/ NV（바람막이[lit. 風防ぎ]）로[デ] N（바람[風]）을[ヲ] V（막다[防ぐ]）」に代入して「道具（z）」の項を追加すると、後項動詞「除ける」および「막다（makta；防ぐ）」の語彙概念構造は次のように示すことができる.

（99） 日本語の道具名詞「風除け」
{除ける} x ACT ON-y <u>BY MEANS OF-z</u>
（x：ø, y：風, z：風除け）

（100） 韓国語の道具名詞「바람막이（風除け）」
{막다[makta；防ぐ]} x ACT ON-y <u>BY MEANS OF-z</u>
（x：ø, y：바람[palam；風], z：바람막이[palam-maki；lit. 風-防ぎ]）

以上のように、「道具名詞」の後項動詞の語彙概念構造は下線の「BY-MEANS-OF-z」が追加される. そこで、この下線の部分に来られる意味である《道具》への意味転移が可能になる. しかし、「道具（z）」の項は必須項ではなく、随意項であるにも関わらず、この箇所に来られる意味に転じることが特徴的である. 英語の動詞由来複合名詞における道具名詞は接尾辞「-er」は動詞の外項を指し（Levin & Rappaport 1988）、道具名詞となるため、主語になり得る一方（例： The can-opener opened the can）、日本語と韓国語において道具名詞は主語として容認されないことが一般的である. それでは、日本語と韓国語における動詞由来複合名詞が随意項である「道具」の項を指すことができるのはなぜだろうか. 由本（2015）は語彙概念構造だけでは説明できない道具名詞はクオリア構造（qualia structure；特質構造）を想定すれば説明可能になると主張し、以下の（101）のように「湯呑み」を例として挙げている.

（101）「湯のみ」
$$\begin{bmatrix} \text{形式役割=} & \text{container } [\alpha]_z \\ \text{目的役割=} & [x] \text{ DRINK } [y_{\text{liguid}}] \\ [\text{主体役割：} & [x] \text{ put } [y_{\text{liguid}}] \text{ in } [z_{\text{container}}]] \end{bmatrix}$$

（由本 2015：102）

由本（2015）は、「湯のみ」を、「飲む」という行為に直接関わる道具ではなく、「飲む」という行為に必須の前提として考えられる「液体を容器に入れる」という行為に用いられる道具であると説明し．「液体を容器に入れる」という前提となる行為は「飲む」の主体役割に存在するものなので、「飲む」の主体役割の「z（容器）」がその指示対象として同定され、「湯のみ」が「容器」という意味の道具名詞として解釈されると主張した．このように道具名詞における意味解釈については、世界知識に属する百科事典的意味（encyclopedic meaning）[148]を組み入れた分析が必要であると考えられる．つまり、「道具」の項は必須項ではないが、ある動作（例えば「除ける」）を行うことに伴って、ある道具（例えば「風除け」）を用いることが前提となるため、「道具」の意味解釈が可能となるわけであろう．

次に、「道具・場所名詞」の代表的な例として日本語「物置」と韓国語「책꽂이（chayk-kkoci；lit．本-さし→本棚）」を見てみよう．これらの後項動詞「置く」および「꽂다（kkocta；さす）」の語彙概念構造を示すと次のようである．

（102） 日本語の道具・場所名詞「物置」
{置く} x CAUSE [BECOME [y BE <u>AT-ON-z</u>]]
（x：ø, y：物, z：物置）

（103） 韓国語の道具・場所名詞「책꽂이（本棚）」
{꽂다[kkocta；さす]} x CAUSE [BECOME [y BE <u>AT-ON-z</u>]]
（x：ø, y：책[chayk；本], z：책꽂이[chayk-kkoci；lit. 本-さし]）

これらの後項動詞「置く」および「꽂다（kkocta；さす）」は、目的語の対象に対し、位置変化（移動）をもたらす動詞であり、「対象（y）」および「場所（z）」の 2 つの項を必須項として取ることができる．複合名詞の前項名詞「物」および「책（chayk；本）」が「対象（y）」の項を占めているため、自然と内項のうち「着点（z）」の箇所が空席になる．この箇所は、「道具・場所名詞」が成立する「NV（物置）ニ N（物）ヲ V（置く）/ NV（책꽂이[lit. 本-さし]）에[ニ] N（책[本]）을[ヲ] V（꽂다[さす]）」という構文の「NV（物置，책꽂이[chayk-kkoci；

148 百科辞典的意味とは、「ある語が指し示す対象（の典型的なもの、代表的なもの）がもつもろもろの性質・特徴、さらには、その対象と関連をもつ（たとえば、その対象から連想される）様々な事柄」（籾山 2006：170）である．

lit. 本-さし→本棚])」、つまり以上で下線の「AT-ON-z」に当たる部分であり、「道具・場所名詞」の意味である《道具/場所》としての意味解釈が可能になる部分でもある.

次に、「対象名詞」の代表的な例として日本語「下敷き」と韓国語「목걸이(mok-keli; lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス)」を見てみよう. これらの複合名詞の後項動詞も「道具・場所名詞」の後項動詞と同様に、対象に対し位置変化(移動)をもたらす動詞であり、「対象(y)」および「着点(z)」の 2 つの項を取ることができる. これらの後項動詞「敷く」および「걸다(kelta;掛ける)」の語彙概念構造を示すと、次のようである.

(104) 日本語の対象名詞「下敷き」
{敷く} x CAUSE [y BE AT-ON-z]
(x:ø, y:下敷き, z:下)

(105) 韓国語の対象名詞「목걸이(首飾り・ネックレス)」
{걸다[kelta;掛ける]} x CAUSE [y BE AT-ON-z]
(x:ø, y:목걸이[mok-keli;lit. 首-掛け], z:목[mok;首])

以上のように、対象名詞である場合、前項名詞「下」および「목(mok;首)」が「着点(z)」の項を占めているため、自然と内項のうち「対象(y)」の箇所が空席になるため、「対象(y)」の項に来られる意味《対象》として解釈できる. 「対象(y)」は、「対象名詞」が成立する「N(下)ニ NV(下敷き)ヲ V(敷く)/ N(목[首])에[ニ] NV(목걸이[lit. 首掛け])를[ヲ] V(걸다[掛ける])」という構文の「NV(下敷き, 목걸이[mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス])」に当たる部分である.

一方、以上で考察した日本語と韓国語の道具・場所名詞「物置」および「책꽂이(chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚)」の後項動詞の語彙概念構造と対象名詞「下敷き」および「목걸이(mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス)」の後項動詞の語彙概念構造は同一である. これらは全く同じ語彙概念構造を見せているが、複合名詞が位置する場所だけが異なる. 既に前節においても指摘した通り、両方の複合名詞とも後項動詞が三項動詞であり、「N ニ N ヲ V/ N 에 N 을 V」という同一の構文が成立する. しかし、道具・場所名詞(例:物置, 책꽂이[chayk-kkoci;lit. 本-さし→本棚])は目述関係(例:物を置く, 책을 꽂다[lit. 本をさす])のみに見られ、「NV ニ N ヲ V/NV 에 N 을 V」(例:物置ニ物ヲ置く, 책꽂이에 책을 꽂다[lit. 本さしニ本ヲさす])という構文が成立するが、対

象名詞（例：下敷き，목걸이[mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス]）は付述関係（例：下に敷く，목에 걸다[lit. 首に掛ける]）のみに見られ、「N ニ NV ヲ V/N 에 NV 를 V」（例：下ニ下敷きヲ敷く，목에 목걸이를 걸다[lit. 首ニ首掛けヲ掛ける]）という構文が成立する．つまり、「道具・場所名詞」は目述関係にある複合名詞であり、対象名詞は付述関係にある複合名詞であることからこのような相違が見られるわけである．

このように、位置変化（移動）を表す動詞を後項要素として持つ場合、目述関係にある複合名詞「物置」および「책꽂이（chayk-kkoci；lit. 本-さし→本棚）」は《道具》ないし《場所》の意を表す「道具・場所名詞」となるが、付述関係にある複合名詞「下敷き」および「목걸이（mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス）」は《対象》の意を表す「対象名詞」となる．以上のことから、複合名詞の後項動詞が同一の語彙概念構造を持っているとしても、前項要素と後項要素の文法的関係により複合名詞の意味が決まるということが分かる．

ただし、前項名詞と後項動詞の文法的関係が「道具・場所名詞」においては目述関係にあり、「対象名詞」においては付述関係にあるが、これらの複合名詞は共通して必須成分である 2 つの項のうち、1 つが満たされていないことに注目するべきである．これは「動作主名詞」と「道具名詞」の後項動詞がおおよそ 1 つの内項のみを有し、複合語内において内項がすべて満たされている点とは対照的である．

最後に、「結果名詞」の代表的な例として、日本語の動作性名詞「塩漬け」および韓国語の動作性名詞「꽃꽂이（kkoch-kkoci；lit. 花-さし→生け花）」と日本語の非動作性名詞「缶詰め」および韓国語の非動作性名詞「통조림（thong-colim；lit. 缶-煮→缶詰め）」を見てみよう．下記はこれらの複合名詞の後項動詞の語彙概念構造を「結果名詞」が共通して成立する構文である「N デ NV ヲ作る」または「N ニ NV ヲ作る」に代入し、表したものである．

（106）日本語の動作性名詞の結果名詞「塩漬け」
{漬ける} [x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [[y BE WITH-z] and [y' BE AT-IN THIS WORLD]]]
（x：ø, y'：塩漬け, z：塩）

（107）韓国語の動作性名詞の結果名詞「꽃꽂이（生け花）」
{꽂다[kkocta；さす]} [x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [[y BE WITH-z] and [y' BE AT-IN THIS WORLD]]]
（x：ø, y'：꽃꽂이[kkoch-kkoci；lit. 花-さし], z：꽃[kkoch；花]）

（108） 日本語の非動作性名詞の結果名詞「缶詰め」

{詰める} [x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [[y BE AT-IN-z] and [y' BE AT-IN THIS WORLD]]]

（x：ø, y'：缶詰め, z：缶）

（109）韓国語の非動作性名詞の結果名詞「통조림（缶詰め）」

{조리다[colita；煮る]} [x ACT ON-y] CONTROL [BECOME [[y BE AT-IN-z] and [y' BE AT-IN THIS WORLD]]]

（x：ø, y'：통조림[thong-colim；lit. 缶-煮], z：통[thong；缶]）

以上の結果名詞における後項動詞はすべて状態変化を表す動詞であり、とりわけ動作が完結するまで時間を要する達成動詞（accomplishment verb）が目立つ．そして、これらの後項動詞の語彙概念構造はそれぞれ異なるものの、複合名詞が位置する場所は「対象（y）」であることが一致する．つまり、結果名詞は状態変化動詞を後項要素とする点と後項動詞の「対象（y）」の項が複合語内で満たされていない点が共通していると言えよう．このことは、結果名詞は対象名詞と同様に「対象（y）」の項と関係があることを示唆する．しかし、結果名詞の場合、「対象（y）」の項は状態変化を経た結果であるため、最初の状態とは異なる「対象の結果物（y'）」である．言い換えると、結果名詞は対象名詞と同様に「対象（y）」の項の位置に来られる意味として解釈できるが、「状態変化を経た結果物（y'）」であるという点で相違が見られる．なお、結果名詞の後項動詞における語彙概念構造には多少ばらつきが見られるのに対して、対象名詞の後項動詞における語彙概念構造は一貫性が見られる点で異なる．

以上で考察した「動作主名詞」「道具名詞」「道具・場所名詞」「対象名詞」「結果名詞」の後項要素として現れる動詞の語彙概念構造は、名詞転換動詞（denominal verb）の語彙概念構造と非常に類似している．名詞転換動詞に関する研究である Clark & Clark（1979）では、名詞転換動詞を「道具動詞（Instrument verbs），動作主動詞（Agent verbs），位置動詞（Location verbs），物材動詞（Locatum verbs），結果動詞（Goal and source verbs）」に分類している．これと関連し影山 & 由本（1997：32）では、この中で最も生産的な名詞転換動詞を中心にそれぞれの語彙概念構造を次の(110)ように提示している．下線部の前置詞的な要素が名詞概念が代入される部分である．影山 & 由本（1997）では、結果動詞の語彙概念構造は扱っていないため、結果動詞の語彙概念構造は、影山（1996）および伊藤 & 杉岡（2002）を参考にし、筆者が作成した．

（110）名詞転換動詞の語彙概念構造

a. 動作主動詞：[ ]x ACT ON-[ ]y AS/LIKE-[Noun]z

例）John butchered the cow.

b. 道具動詞：[ ]x ACT ON-[ ]y BY-MEANS-OF-[Noun]z

例）John bicycled into town.

c. 位置動詞：[ ]x CAUSE [BECOME [[ ]y BE AT-[Noun]z]]

例）He kenneled the dog.

d. 物材動詞：[ ]x CAUSE [BECOME [[ ]y BE WITH-[Noun]z]]

例）They carpeted the floor.

e. 結果動詞：[[ ]x ACT（ON-[ ]y）] CAUSE [BECOME [[ ]y BE AT-[Noun]z]]

例）Edward powdered the aspirin.

上の（110a）の「動作主動詞」の語彙概念構造は、（97）-（98）の「動作主名詞」の後項動詞の語彙概念構造と類似している．そして、（110b）の「道具動詞」の語彙概念構造は（99）-（100）の「道具名詞」の後項動詞の語彙概念構造に対応し、（110c）の「位置動詞」の語彙概念構造は（102）-（103）の「道具・場所名詞」の後項動詞の語彙概念構造に対応する．（110d）の「物材動詞」の語彙概念構造は、特に動作性名詞である（106）「塩漬け」と（107）「꽃꽂이（kkoch-kkoci；lit. 花-さし→生け花）」の「結果名詞」の後項動詞の語彙概念構造の上位事象に対応し、（110e）の「結果動詞」の語彙概念構造は動作性名詞のみならず非動作性名詞を含め、すべての「結果名詞」の後項動詞の語彙概念構造の下位事象と非常に類似しているため、対応させることができる．

以上のように、[N+V]型複合名詞の後項動詞の語彙概念構造が名詞転換動詞の語彙概念構造に非常に似ていることが分かる．[N+V]型複合名詞は本来の後項動詞が帯びる動作性が失われ、実体性名詞として用いられるようになる反面、名詞転換動詞は元々実体性名詞であったものが動詞として用いられるようになったという点で、[N+V]型複合名詞と名詞転換動詞の方向性は正反対である．それにもかかわらず、それぞれの語彙概念構造が対応を見せている点が興味深い．たとえ、これらの方向性は異なるとしても、各々の語彙の意味的な要素により特定の語彙概念構造を持つようになるということは明確である．英語においては名詞が動詞に転じて用いられることが珍しくない反面、日本語と韓国語においては名詞が動詞に転じることは非常に珍しい．その代わりに、日本

語と韓国語では動作性を帯びる複合名詞が発達し、その空白を埋めているように考えられる.

このように、[N+V]型複合名詞において特定の意味解釈の傾向が見られる理由も、複合名詞のそれぞれの構成要素が持つ関係により特定の語彙概念構造を有するためであろう. 以上で考察した複合名詞の語彙概念構造を名詞転換動詞の例を参考にしてまとめると次のように示すことができる. 下線部は複合名詞(NV)が代入される部分である.

(111) [N+V]型複合名詞の語彙概念構造

a. 動作主名詞: x ACT ON-y AS/LIKE-[NV]z

b. 道具名詞: x ACT ON-y BY-MEANS-OF-[NV]z

c. 道具・場所名詞: x CAUSE [BECOME [y BE AT-[NV]z]]

d. 対象名詞: x CAUSE [[NV]y BE AT-z]

e. 結果名詞: [x ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [[y BE WITH/AT-z] and [[NV]y' BE AT-IN THIS WORLD]]]

以上のうち「動作主名詞」および「道具名詞」を除外したすべての[N+V]型複合名詞、すなわち「道具・場所名詞, 対象名詞, 結果名詞」は共通して内項のうち 1 つの項が満たされていないため、その箇所に来られる意味として解釈できる. ここで注目すべき点は、「動作主名詞」および「道具名詞」においては動作性名詞が多く見られるが、「道具・場所名詞, 対象名詞, 結果名詞」においては非動作性名詞が目立つことである. 特に「道具・場所名詞, 対象名詞」の場合は、非動作性名詞のみが見られ、後項要素には常に三項動詞が現れる. このことは、外項以外の必須項(すなわち、内項)がすべて複合名詞の内部で満たされていない場合は動作性を持ち得ず、実体性の意味として解釈される可能性が高いということを示唆する. 後項要素が二項動詞である複合名詞(動作主名詞および道具名詞)は複合語内で内項は当然のことながら満たされるが、後項要素が三項動詞である複合名詞(道具・場所名詞, 対象名詞)は、必然的に 2 つの内項のうち、1 つは複合語内で満たされないためである.

複合名詞の内部において後項動詞の内項がすべて満たされていない場合は、複合名詞の意味が不完全な状態となり、その不完全さを満たすため、複合名詞は内項の位置に来られるような意味として解釈されるようになるわけであろう. これに対し、「動作主名

詞」および「道具名詞」は外項以外のすべての必須項（内項）を複合名詞の内部で満たしているため、比較的この制約から自由であり、動作性を帯びやすいことが予想される.

これまで、[N+V]型複合名詞においての動作性は、前項名詞と後項動詞の文法的関係および後項動詞の種類と関係があることを見てきた.「動作主名詞」および「道具名詞」は目述関係にある例が目立つ上、後項要素には二項動詞が来る場合が殆どである.「道具・場所名詞」はすべて目述関係にある上、後項要素には三項動詞が現れる. それに対して、「対象名詞」および「結果名詞」には付述関係が目立つ. なお「対象名詞」は付述関係にある場合のみ見られ、「道具・場所名詞」と同様に、後項要素にはおおよそ三項動詞が現れる. このうち、動作性名詞が現れ得る例は「動作主名詞」および「道具名詞」であり、「道具・場所名詞」および「対象名詞」には非動作性名詞のみが現れる. このことから、[N+V]型複合名詞が目述関係にあって後項動詞が二項動詞である場合には動作性を帯び得る反面、付述関係にあって後項動詞が三項動詞である場合は動作性を帯びにくいことが分かる.

複合名詞の後項要素に二項動詞が来る場合に動作性を帯びやすく、三項動詞が来る場合は動作性を帯びにくいという事実は、以上で指摘した外項以外のすべての必須項（内項）を複合語内においてすべて満たした場合に複合名詞が動作性を帯びやすいという事実と相通ずる. つまり、複合名詞の後項要素に二項動詞が来る場合は、複合名詞がおおよそ目述関係に現れ、内項を複合語内ですべて満たしているため、動作性を帯びやすいということである. これに反して、複合名詞の後項動詞が三項動詞である場合は、複合語内においてすべての内項を満たすことができないため、動作性は帯びにくく、「物置，下敷き」および「책꽂이（chayk-kkoci；lit. 本-さし→本棚），목걸이（mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス）」のような実体性のみを表す非動作性名詞になると説明できよう.

以上から、日本語と韓国語の[N+V]型複合名詞は「必須補語-述語」の項関係（特に目述関係）にあり、後項動詞が二項動詞である際に動作性を帯びやすく、なお複合名詞の内部において外項以外の必須項（内項）をすべて満たされている際に動作性を帯びやすいことが分かった. この点で、両言語における[N+V]型複合名詞が動作性を帯びる様相は非常に似ているように見える.

しかし、これはあくまでも動作性名詞でありながら、実体性をも表す例と実体性のみを表す非動作性名詞の例を中心とした分析であるため、必ずしも複合名詞の全般につい

て適用されるわけではない．本章では[N+V]型複合名詞における意味転移に焦点を合わせたため、動作性名詞のみに用いられる例は含まれていないからである．4 章でも言及したように、韓国語の[N+V]型複合名詞は、項関係にある場合に動作性を帯びることができる反面、日本語の[N+V]型複合名詞は項関係にあるか否かには関係なく動作性を帯びることができる．つまり、日本語で動作性名詞のみに用いられる例の中には、項関係でない複合名詞が多数存在するということである．一方、5．3 の意味転移仮説の検証から分かるように、韓国語の[N+V]型複合名詞は、本来動作性名詞を主に形成するタイプであるが、意味転移により実体性名詞としても解釈できると考えられる．特に、韓国語で動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例は後項要素が自立的な名詞や接尾辞でない限り、すべて目述関係にあることからも分かる．そのため、韓国語の場合は複合名詞の全般において本節における分析が適用できるが、日本語の場合は一部の複合名詞、すなわち動作性名詞でありながら実体性をも表す例と実体性のみを表す非動作性名詞の例に限って適用できることが予想される．

5．7　5 章のまとめ

本章では、[N+V]型複合名詞の中には動作性名詞でありながら、実体性をも表すことができる例が存在することに着目し、[N+V]型複合名詞における動作性名詞と実体性名詞（あるいは非動作性名詞）との関係を意味転移の観点から考察することを試みた．意味転移の観点というのは、複合名詞が本来動作性を帯びていたが、意味転移により動作性が失われたと仮定することから始まる．そして、意味転移の観点から「全体意味転移仮説」（[N+V]型の全体として意味転移が起きると動作性が失われると見る立場）と「後項要素意味転移仮説」（後項要素に意味転移が起きると動作性が失われると見る立場）という 2 つの仮説を立て、これらの意味転移仮説が[N+V]型複合名詞の分析に有効であることを示した．

さらに、意味転移の観点から、両言語の[N+V]型複合名詞における意味解釈のメカニズムを考察した．動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例の考察を通して、[N+V]型複合名詞の意味転移が任意に起きるのではなく、後項要素の動詞が持つ意味役割のうちの 1 つの箇所で起きることを主張した．同様に、実体性のみを表す非動作性名詞の例の場合においても、[N+V]型複合名詞の意味は、後項動詞の種類とその後項動詞と前項名詞との文法的関係により、ある程度決定されることを明らかにした．要する

に、[N+V]型複合名詞の意味は、後項動詞が従える項の意味役割と関係があり、複合名詞の語内部で満たされていない項の意味役割の意味として解釈されるということである. このことにより、両言語の [N+V]型複合名詞は、大きく「動作主名詞, 道具名詞, 道具・場所名詞, 対象名詞, 結果名詞」という5つの意味の実体性名詞として解釈できる. この中で、「動作主名詞, 道具名詞, 結果名詞」には動作性名詞でありながら、実体性名詞としても共存できる例が見られるが、「道具・場所名詞, 対象名詞」には非動作性名詞のみが見られた. その理由は、「道具・場所名詞」および「対象名詞」は共通して後項要素にはおおよそ三項動詞が現れるが、それゆえ複合語内で外項以外の必須項(すなわち、内項)をすべて満たすことができないからである. このように、複合語内で内項がすべて満たされていない場合は動作性を持ち得ず、実体性の意味として解釈されると考えられる.

つまり、4 章(4. 4. 2)の考察で韓国語の動詞由来複合名詞は項関係にある例のみ動作性を帯び得るのは、項関係にある際に複合語内ですべての内項が満たされるためであると言えよう. それに対して、日本語の付述関係にある例の考察(4. 2. 3)から分かるように、日本語では内項が満たされていないにも関わらず動作性を帯びる例が多数存在し、かつ後項要素が三項動詞であるが動作性を帯びる例「前置き, 棚上げ, 田植え, 水揚げ」などが存在する. これらの例は共通して後項要素が三項動詞であり、「N ニ V:前に置く」という文法的関係(すなわち、付述関係)を持っている点が、非動作性名詞の「対象名詞」(例:下敷き, 首飾りなど)に類似している. しかし、本研究では、後項要素が三項動詞である複合名詞の中に、「道具・場所名詞」(例:物置)のように「N ヲ V:物ヲ置く」という文法的関係(すなわち、目述関係)を持つ動作性名詞は見当たらなかった. このことから、日本語の複合名詞は、後項動詞の内項のうち、「目的語(対象)」は複合語内で満たされなくても、動作性を帯びることができるということが分かる. これを支える例として、実際に 4. 2. 3 で考察した日本語の付述関係にある動作性名詞(例:水洗い, 手書き, 手作り, 手助け, 手探り, 前払い, 後回しなど)は、複合語内で「目的語(対象)」は満たされていないという共通点が見られる.

このように考えると、両言語に共通して、目述関係にある複合名詞の後項要素に三項動詞が現れる場合は、動作性を帯びることができない(言い換えると「道具・場所名詞」は、動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できない)理由も説明できる. [N+V]型複合名詞が動作性を帯びるためには、韓国語においては、後項動詞の内項が複合語内で

満たされなければいけないが、日本語においては「対象」(多くの場合、目的語)以外の内項が複合語内で満たされなければならない. よって、後項要素が三項動詞である目述関係の複合名詞の場合、韓国語においてはそもそも複合語内ですべての内項を満たすことができないため、必然的に動作性を帯びることができず、日本語においては前項要素が「目的語(対象)」であり、もう 1 つ残された内項が複合語内で満たされないため、動作性を帯びることができないということである.

一方、「道具・場所名詞」の後項要素には常に三項動詞が現れるが、「対象名詞」の後項要素には三項動詞でない例「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」も見られる. しかし、「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり)」は自立的な名詞であり、後項要素に既に《対象》への意味転移が起きているため、例外と見られる. 言い換えると、「잡이(capi;lit. とり)」は、前項要素と結合する以前に既に、二項動詞「잡다(capta;とる)」の必須項(動作主, 対象)のうち、内項の「対象」を指す「対象名詞」となっているわけである. つまり、「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」は、[N+V]型複合名詞というより、単なる「名詞＋名詞」の合成名詞であるため、後項要素に二項動詞が現れると考えられる. このように、後項要素が自立的な名詞(あるいは造語成分[149])である場合を除外して、典型的な[N+V]型の「対象名詞」の後項要素には、「道具・場所名詞」と同様に常に三項動詞が現れることが予想される.

しかし、日本語の[N+V]型複合名詞は、複合語内で「対象」(多くの場合、目的語)は満たされなくてもそれ以外の内項を満たしていれば動作性を帯び得るとしたら、「対象名詞」の中に動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できる例が現れなかったことが説明できない. 「対象名詞」は複合語内で「対象」は満たしていないが、それ以外の内項は満たしているからである. もちろん、本研究の「対象名詞」の中に、動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できる例が現れなかったことは、ただの偶然である可能性もある. したがって、より多くの例を対象に検討する必要があるだろう. もしくは、「対象名詞」

149 造語成分(「語素」とも呼ばれる)とは、複合語を構成する要素の中で、語基から接辞への中間に位置する存在を言う(山下 1995). つまり、造語成分(語素)は自立性はないが、語彙的な意味を持っている複合語の構成要素であると言える. この造語成分(語素)を後項要素とする対象名詞(例:下着)の場合も、自立的な名詞を後項要素とする対象名詞と同様に、後項要素に既に《対象》への意味転移が起きていると考えられる. 対象名詞「下着」の後項要素「着」は自立性はないものの、名詞に非常に近いものであり、単独で「着るもの」という意を表すからである. それゆえ、この対象名詞「下着」の後項要素には三項動詞ではなく、二項動詞が来られるわけであろう.

は前述したように、後項要素に既に《対象》への意味転移が起きてから、前項要素と結合した可能性も考えられる. これについては今後の検討課題としたい.

第6章

その他[Pref+V][Ad+V][A+V]型複合名詞の動作性

日本語と韓国語における動詞由来名詞を含む複合名詞の 5 つのタイプのうち、最も生産的なタイプは[N+V]型複合名詞であり、次は[V+N]型複合名詞である. しかし、[N+V]型および[V+N]型に比べると生産性は落ちるが、その他の動詞由来複合名詞である 3 つのタイプ、すなわち[Pref+V]〔接頭辞＋動詞の名詞形〕型, [Ad+V]型〔副詞＋動詞の名詞形〕, [A+V]〔形容詞＋動詞の名詞形〕型複合名詞も機能動詞と共起することができ、動作性を帯び得ると思われる.

本章では、日本語と韓国語の両言語における[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型複合名詞が持つ動作性に注目し、動詞由来複合名詞を形成するメカニズムならびに動作性名詞となる条件を明らかにすることを目的とする.

研究対象とする[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型複合名詞は、韓国語の例は国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』(約 5 万語)、日本語の例は松下(2011)の『日本語を読むための語彙データベース(VDRJ) ver. 1. 1(研究用)重要度順語彙リスト 60894 語』の見出し語から抽出した. そして、両言語における[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型複合名詞の例を 2. 3 の動作性名詞の判断基準に従い、動作性名詞と非動作性名詞に分類した. 日本語の分類結果を以下の表 15 および表 16 に、韓国語の分類結果を表 17 および表 18 に示す.

表 15. 日本語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果（計 147 例）

[Pref+V]型	動作性名詞	相乗り，大商い，大当たり，大暴れ，大荒れ，大慌て，大威張り，大写し，大騒ぎ，大掴み，大泣き，大化け，大燥ぎ，大振り，大回り，大儲け，大喜び，大笑い，大食い，小商い，小売り，小躍り，小走り，小回り，小分け，素揚げ，素通り，素泊まり，素潜り，素焼き，素振り，丸洗い，丸写し，丸抱え，丸齧り，丸投げ，丸呑み，丸儲け，丸焼き
	非動作性名詞	大有り，大急ぎ，大入り，大切り，大助かり，大詰め，大通り，大降り，大盛り，小止み，小上がり，小書き，小刻み，小切り，小切れ，小出し，小遣い，小作り，小包み，小太り，小降り，最果て，ずぶ濡れ，素掘り，どん詰まり，不入り，不払い，不向き，不渡り，真っ盛り，真向かい，丸干し，丸見え，丸分かり，最寄り
[Ad+V]型	動作性名詞	うたた寝，ごろ寝，漫ろ歩き，ばら蒔き，ポン引き
	非動作性名詞	但し書き，ちょっと見，ぶら下がり，ぐしょ濡れ，めった打ち
[A+V]型	動作性名詞[150]	青光り，厚着，厚切り，厚塗り，荒稼ぎ，薄着，嬉し泣き，遅出，遅蒔き，固茹で，軽はずみ，細切り，高鳴り，高望み，高笑い，近付き，遠出，遠乗り，遠吠え，遠回し，遠回り，長居，長生き，長続き，長持ち，長煩い，苦笑い，早打ち，早起き，早送り，早食い，早咲き，早死に，早仕舞い，早立ち，早寝，深入り，深追い，深読み，安売り，若返り，若死に，若作り，悪巧み，悪乗り，悪ふざけ，悪酔い，速歩き，高止まり
	非動作性名詞	厚揚げ，厚焼き，薄焼き，幼馴染み，苦し紛れ，黒焦げ，細切れ，遠巻き，早生まれ，早見，古漬け，細引き，細巻き，臭い消し

150 [A+V]型の動作性名詞のうち、「遅出，固茹で，軽はずみ，近付き，遠回し，早咲き，厚切り」は、日本語母語話者によって動作性名詞の判断に揺れがあった．これらの例を動作性名詞と見るか、もしくは準動作性名詞として別に分類すべきかについては検討が必要である．しかし、本稿では、2 名以上の日本語母語話者が 2．3 の動作性名詞の判断基準により、動作性名詞と判断したため、動作性名詞として分類した．

表 16. 日本語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果の集計

分類	[Pref+V]型	[Ad+V]型	[A+V]型	合計
動作性名詞	39(26.5%)	5(3.4%)	49(33.3%)	93(63.3%)
非動作性名詞	35(23.8%)	5(3.4%)	14(9.5%)	54(36.7%)
合計	74(50.3%)	10(6.8%)	63(42.9%)	147(100%)

まず、日本語のその他の動詞由来複合名詞(計 147 例)においては、以上の表 16 から分かるように、[Pref+V]型(74 例, 約 50%)が最も多く現れ、次に[A+V]型(63 例, 約 43%)が多く現れ, [Ad+V]型(10 例, 約 7%)は僅かである. 動作性名詞(計 93 例)はどのタイプでも現れるが、[A+V]型(49 例, 動作性名詞全体の約 53 %)に最も多く、次に[Pref+V]型(39 例, 動作性名詞全体の約 42%)に多く現れ、[Ad+V]型(5 例, 動作性名詞全体の約 5%)には数少ない. このように、日本語の[Pref+V]型および[A+V]型に動作性名詞が多く現れるが、[Pref+V]型(74 例)には、動作性名詞(39 例, 全体の[Pref+V]型の約 53%)のみならず、非動作性名詞(35 例, 全体の[Pref+V]型の約 47%)も多く現れる. これに対して、日本語の[A+V]型(63 例)は、非動作性名詞(14 例, 全体の[A+V]型の約 22%)より動作性名詞(49 例, 全体の[A+V]型の約 78%)がずっと多く現れ、このタイプ([A+V]型)は主に動作性名詞を形成するタイプであることが分かる.

表 17. 韓国語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果（計 23 例）

[Pref+V]型	動作性名詞	개죽음, 늦잠, 덧셈, 되감기, 되치기, 맞벌이, 소모임, 풋잠, 헛걸음, 헛웃음
	非動作性名詞	살얼음, 선걸음
[Ad+V]型	動作性名詞	높이뛰기, 마구잡이, 멀리뛰기, 비틀걸음, 뻥튀기, 싹쓸이, 아주높임, 오래달리기, 종종걸음, 총총걸음
	非動作性名詞	(なし)
[A+V]型	動作性名詞	어숫썰기
	非動作性名詞	(なし)

表 18. 韓国語[Pref+V]型・[Ad+V]型・[A+V]型複合名詞の分類結果の集計

分類	[Pref+V]型	[Ad+V]型	[A+V]型	合計
動作性名詞	10(43.5%)	10(43.5%)	1(4.3%)	21(91.3%)
非動作性名詞	2(8.7%)	0(0%)	0(0%)	2(8.7%)
合計	12(52.2%)	10(43.5%)	1(4.3%)	23(100%)

次に、韓国語のその他の動詞由来複合名詞(計 23 例)においては、上記の表 18 から分かるように、すべてのタイプの例が比較的少ないが、[Pref+V]型(12 例, 約 52%)が最も多く、次に[Ad+V]型(10 例, 約 44%)が多く現れ, [A+V]型(1 例, 約 4%)は非常に少ない. そして、韓国語のその他の動詞由来複合名詞(計 23 例)には、動作性名詞(21 例, 動作性名詞全体の約 91.3%)が主に現れ、非動作性名詞(2 例, 動作性名詞全体の約 8.7%)の例は非常に少ない. なお、動作性名詞(計 23 例)はどのタイプでも現れるが、主に[Pref+V]型(10 例, 動作性名詞全体の約 48 約%)と[Ad+V]型(10 例, 動作性名詞全体の約 48%)に現れ、[A+V]型(1 例, 動作性名詞全体の約 4%)には現れにくいと考えられる. このように、韓国語の[Pref+V]型および[Ad+V]型に動作性名詞が多く現れるが、[Pref+V]型(12 例)には動作性名詞(10 例, 全体の[Pref+V]型の約 83%)のみならず、非動作性名詞(2 例, 全体の[Pref+V]型の約 17%)も僅かではあるが見られる. これに対して、本研究において韓国語の[Ad+V]型(10 例)には、非動作性名詞は現

れず、動作性名詞（10 例，全体の[Ad+V]型の 100%）のみが現れたことから、このタイプ（[Ad+V]型）は動作性名詞を主に形成するタイプであることが分かる.

以上のことから、両言語におけるその他の動詞由来複合名詞（[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型）には、すべてのタイプにおいて動作性名詞が現れることが分かる. そして、日本語においては[A+V]型が主に動作性名詞を形成するタイプであるのに対し、韓国語においては[Ad+V]型が主に動作性名詞を形成するタイプであることを確認した.

本章では、以上の例（表 15 および表 17）を基に、動詞由来複合名詞に現れる動詞の種類に注目し、両言語における[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型複合名詞における語形成のメカニズムを対照する. そして、この語形成のメカニズムと関連し、動詞由来複合名詞が動作性を帯びる条件を探る. しかし、全般的に日本語の例（表 15）に比べると韓国語の例（表 17）は少ない. そこで、十分な例が確保できなかったタイプに関しては、以上の例（表 17）に加えて、韓国語辞典[151]を参考にして、両言語における[Pref+V]型、[Ad+V]型、[A+V]型複合名詞を対照分析することとする.

6. 1　日本語と韓国語の[Pref+V]型複合名詞

本稿で対象とする資料から[Pref+V]型複合名詞は、日本語は 74 例、韓国語は 12 例が現れた. 日本語の例に比べると、韓国語の例があまりにも少なかったため、国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』から韓国語の[Pref+V]型の 12 例を筆者の判断で追加した. 追加した例は下記の（113）で括弧の中に示す.

日本語と韓国語において[Pref+V]型複合名詞の後項要素には、自動詞と他動詞が現れる. そして、両言語において共通して、他動詞である場合は、二項動詞が殆どであり、三項動詞は現れにくい.

（112）a. 動作性名詞：相乗り，大商い，大当たり，大暴れ，大荒れ，大慌て，大威張り，大写し，大騒ぎ，大掴み，大泣き，大化け，大燥ぎ，大振り，大回り，大儲け，大喜び，大笑い，大食い，小商い，小売り，小躍り，小走り，小回り，小分け，素揚げ，素通り，

151 国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』または国立国語院(編)（2016）の『ウリマルセム（우리말샘）』を参考にする.

素泊まり，素潜り，素焼き，素振り，丸洗い，丸写し，丸抱え，丸齧り，丸投げ，丸呑み，丸儲け，丸焼き

b. 非動作性名詞：大有り，大急ぎ，大入り，大切り，大助かり，大詰め，大通り，大降り，大盛り，小止み，小上がり，小書き，小刻み，小切り，小切れ，小出し，小遣い，小作り，小包み，小太り，小降り，最果て，ずぶ濡れ，素掘り，どん詰まり，不入り，不払い，不向き，不渡り，真っ盛り，真向かい，丸干し，丸見え，丸分かり，最寄り

（113） a. 動作性名詞：개죽음，늦잠，덧셈，되감기，되치기，맞벌이，소모임，풋잠，헛걸음，헛웃음（군걸음，되넘기，선잠，첫걸음…）

b. 非動作性名詞：살얼음，선걸음（늦깎이，되깎이，맏잡이，맞닫이，맞바라기，외잡이，풋먹이，풋절이…）

日本語の例（112a）の「大当たり，大写し，大騒ぎ，大儲け，大喜び，大笑い，大燥ぎ，小躍り，小走り，丸写し，丸齧り…」などは機能動詞またはアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起できるため、動作性名詞である（例：大騒ぎする，素焼き中）．同様に、韓国語の例（113a）の「개죽음（kay-cwukum；犬-死に），늦잠（nuc-cam；遅-寝→lit. 寝坊），덧셈（tes-seym；lit. 出し-数え→出し算），되감기（toy-kamki；lit. また-巻き→早戻し），되치기（toy-chiki；lit. また-打ち→返し技），맞벌이（mac-peli；lit. 互い-儲け→共働き），소모임（so-moim；lit. 小-集まり→小会），풋잠（phwus-cam；lit. 深くない-寝→浅い眠り），헛걸음（hes-kelum；lit. 無駄-歩き→無駄足），헛웃음（hes-wusum；lit. から-笑い→そら笑い），군걸음（kwun-kelum；lit. 無駄-歩き→無駄足），되넘기（toy-nemki；また-売り），선잠（sen-cam；lit. 生半可な-寝→うたた寝），첫걸음（ches-kelum；lit. 初-歩き→第一歩）」は機能動詞またはアスペクト的名詞・アスペクト的動詞と共起できるため、動作性名詞である（例：맞벌이를 하다[共働きをする]，헛웃음 중[そら笑い中]）．

この際、接頭辞は名詞や動詞などの単語に付くため、前項要素が接頭辞であれば後項要素は必然的に名詞であると考えられる．実際に後項要素が自立的な名詞（日本語の例：当たり，写し，騒ぎ，儲け，喜び，笑い，踊り，走り，韓国語の例：죽음[cwukum；死]，잠[cam；寝・眠り]，셈[seym；lit. 数え→計算]，벌이[peli；儲け]，모임[moim；集まり]，걸음[kelum；歩き・歩み]，웃음[wusum；笑い]など）である場合が殆どである．このような場合には後項要素によって動作性を帯びると考えられる．特に、韓国語の例において、

後項要素「셈(seym;lit. 数え→計算), 벌이(peli;儲け), 모임(moim;集まり), 걸음(kelum;歩き・歩み)」などは単独で名詞として用いられる上、「셈하다(seym-hata;lit. 数え-する→計算する), 벌이하다(peli-hata;lit. 儲け-する→儲ける)」と「모임을 하다(lit. 集まりをする→集まる), 걸음을 하다(lit. 歩きをする→歩く)」のように、機能動詞(하다;hata)と共起できるため、後項要素が動作性を既に持っていると見ることが妥当であろう. つまり、韓国語の[Pref+V]型動作性名詞は、後項要素が動作性を帯びる自立的な名詞であるため、動作性を帯びていると考えられる.

それに対して、日本語の例においては、後項要素「当たり, 写し, 騒ぎ, 儲け, 喜び, 笑い, 踊り, 走り」などは単独で名詞として用いられるが、単独では機能動詞と共起できないため、後項要素が動作性を帯びるかについては検討が必要である.

一方、韓国語[Pref+V]型動作性名詞の中で、「되감기(toy-kamki; lit. また-巻く→早戻し), 되치기(toy-chiki;lit. また-打ち→返し技), 되넘기(toy-nemki;lit. また-超え→また売り)」のように後項要素(-감기[kamki;lit. 巻き], -치기[chiki;lit. 打ち], -넘기[nemki;lit. 超え])が自立的な名詞として存在しない例もある[152]. しかし、これは接頭辞「되-(toy;また)」と動詞が結合した「되감다(toy-kamta;lit. また-巻く→巻き戻す, 早戻しする), 되치다(toy-chita;lit. また-打つ→打ち返す), 되넘다(toy-nemta;また-超える)」から派生された名詞と思われる.

同様に、日本語[Pref+V]型動作性名詞の中においても、「大燥ぎ, 丸齧り」のように後項要素(燥ぎ, 齧り)が自立的な名詞として存在しない例もある. これらの例は、接頭辞と動詞が結合した形(*大燥ぐ, *丸齧る)が存在しないという点から動詞から派生されたものとは思えない.

よって、日本語の[Pref+V]型動作性名詞は、後項要素によって動作性を帯びるには違いないが、後項要素が単独で動作性を帯びるのではなく、接頭辞と結合してから動作性を帯びるようになったと考えられる.

152 非動作性名詞の中で後項要素が自立的な名詞ではない例(늦깎이[nuc-kkakki;lit. 遅-削り→奥手], 맞닫이[mac-tati;lit. 互い-閉じ→両方に分かれていて合わせて閉じる扉], 맞바라기[mac-palaki;lit. 互い-向き→真向かい], 풋절이[phwus-celi;青-漬け])が存在する. しかし、これらは既存の名詞(되깎이[toy-kkakki;lit. また-削り→また僧侶になること], 반닫이[pan-tati;lit. 半-閉じ→上部の半分だけに扉が付いているたんす], 하늘바라기[hanul-palaki;lit. 空-向き→天水農業の田んぼ], 겉절이[keth-celi;lit. 表-漬け→浅漬け])から類推により形成されたものとして考えられる.

このように、両言語において、[Pref+V]型動作性名詞は、後項要素により動作性を帯びているため、事実上[Pref+V]型複合名詞が動作性を帯び得るとは言い難い．その構成からも単なる派生語であり、動詞由来複合語として容認できない．

6．2　日本語と韓国語の[Ad+V]型複合名詞

[Ad+V]型複合名詞は、以下の（114）と（115）のように、日本語は 10 例、韓国語は 10 例が現れた．韓国語において、[Ad+V]型はやや生産性があり、以下の例（115）以外にも多く現れる．例えば、インターネットに関する比較的新しい造語「새로고침（saylo-kochim；lit. 新たに-直し→リロード），바로가기（palo-kaki；lit. すぐ-行き→ショットカット・ブックマーク）」なども形成することができる．それに対して、日本語において、[Ad+V]型は他のタイプ（[Pref+V]型と[A+V]型）に比べると最も生産性が低く（10 例，約 7%）、その例も数少ない．

韓国語において[Ad+V]型は、実際にはやや生産的であるが、本稿で対象とした資料では数少なかったため、国立国語院(編)（1999）の『標準国語大辞典』および国立国語院(編)（2016）の『ウリマルセム』から韓国語の[A+V]型の 11 例を筆者の判断で追加した．追加した例は下記の（115）で括弧の中に示す．日本語と韓国語において[Ad+V]型複合名詞の後項要素には、自動詞および他動詞が両方とも現れる．ただし、他動詞の場合は二項動詞が殆どであり、三項動詞は現れにくい．

（114）a. 動作性名詞：うたた寝，ごろ寝，漫ろ歩き，ばら蒔き，ポン引き
　　b. 非動作性名詞[153]：但し書き，ちょっと見，ぶら下がり，ぐしょ濡れ，
　　めった打ち

（115）a. 動作性名詞：높이뛰기，마구잡이，멀리뛰기，비틀걸음，뻥튀기，
　　싹쓸이，아주높임，오래달리기，종종걸음，총총걸음
　　（다시보기，막잡이，마주잡이，멀리던지기，미리보기，
　　바로가기，바로꽂이，새로고침，서로치기，오래매달리기
　　…）
　　b. 非動作性名詞：（갓밝이）

153 この中で「ばら蒔き，ぶら下がり」は「ばら蒔く，ぶら下がる」が動詞として存在し、本来複合動詞から派生されたものであると考えるため、[Ad+V]型複合名詞と見ることに検討が必要である．

以上の日本語の例(114)では、「うたた寝，ごろ寝，漫ろ歩き，ばら蒔き，ポン引き」のみ動作性を帯びる一方、韓国語の例(115)では、「갓밝이(kas-palki;lit. たった今-明け→明け方)」[154]以外はすべて動作性を帯びており、韓国語において[Ad+V]型は主に動作性名詞を形成するタイプであることが分かる. そして、(114)の日本語の例で特徴的なことは、オノマトペの場合、反復する形態(例:ごろごろ)の一部(ごろ)だけが前項要素として結合するという点である.

動作主不可制約(アン・サンチョル 1998)により、[N+V]型の前項要素には「動作主」の項は来られないため、自然と主述関係にある[N+V]型の後項要素には非能格動詞が現れないという制約がある. しかし、[Ad+V]型複合名詞の場合は後項要素に非対格動詞のみならず非能格動詞も複合名詞の形成に参与することができる(日本語の例:ごろ寝，韓国語の例:높이뛰기[nophi-ttwiki;lit. 高く-跳び→高跳び]など). なお、後項要素が非能格動詞である場合(日本語の例:ごろ寝， 韓国語の例:높이뛰기[nophi-ttwiki;lit. 高く-跳び→高跳び])に動作性を帯びやすく、非対格動詞である場合(日本語の例:ぐしょ濡れ，韓国語の例:갓밝이[kas-palki;たった今-明け→明け方])は動作性を帯びにくいと考えられる.

以上の(114)と(115)において、後項要素が他動詞である例(日本語:ちょっと見，ポン引き，韓国語:마구잡이[makwu-capi;lit. やたらに-とり→無鉄砲な振る舞い], 싹쓸이[ssak-ssuli;lit. さっと-掃き→ひとつ残らず無くすこと]など)も存在するが、これらの[Ad+V]型複合名詞は、前項要素が後項動詞の必須項ではないため、動詞由来複合語の形成において制約が見られる. この理由により、[Ad+V]型複合名詞は生産性が落ちるため、結果的に他のタイプより多少その例が少ない結果となったのであろう.

一方、英語の動詞由来複合語の語形成においては、おおよそ複合語内部に動詞の必須成分(目的語および前置詞句)が満たされなければならないという規則が守られるため(Selkrik 1982)、前項要素が付加詞 (adjunct)である場合は、複合語の後項要素には主語以外としては後項動詞の必須成分のない自動詞ないし受動態分詞として現れる(例: good looking, home made). そこで、日本語と韓国語の動詞由来複合語の語形

154 本稿で対象した韓国語の資料(国立国語院(編)(2012)の『韓国語基礎辞典』)では、[Ad+V]型の非動作性名詞は現れなかったが、国立国語院(編)(1999)の『標準国語大辞典』の検索から得られた例である.

成においては、このような規則から果たして自由であると言えるだろうかという疑問が湧いてくる．つまり、「ポン引き」および「마구잡이（makwu-capi；lit. やたらに-とり→無鉄砲な振る舞い）」のように後項動詞が他動詞である[Ad+V]型複合名詞は、動詞由来複合語として形成されたわけではなく、既存の[N+V]型複合名詞から類推により形成された可能性も考えられる．例えば、日本語「客引き」および韓国語「고기잡이（koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師）」のような既存の複合名詞から類推により日本語「ポン引き」および韓国語「마구잡이（makwu-capi；lit. やたらに-とり→無鉄砲な振る舞い）」が形成された可能性も否めない．

しかし、日本語「ごろ寝」および韓国語「높이뛰기（nophi-ttwiki；lit. 高く-飛び→高跳び），멀리뛰기（melli-ttwiki；lit. 遠く-跳び→幅跳び），오래달리기（olay-talliki；lit. 長く-走り→マラソンのように長く走る競走）」のように、後項動詞が非能格動詞である場合は、主語（動作主）以外に必須成分がないため、動作主不可制約に従い、動詞由来複合語の語形成規則を守っているわけである．これらの後項動詞が[V+V]〔動詞+動詞の名詞形〕型（日本語の例：添い寝，韓国語の例：젖혀뛰기[cechye-ttwiki；そり-跳び]，이어달리기[ie-talliki；lit. 引き継いで-走り→リレー走]など）の後項要素として現れることから、このような例こそ典型的な [Ad+V]型複合名詞であると言えよう．したがって、このような複合名詞が動作性を帯びやすいと考えられる．

一方、本研究においては、[Ad+V]型複合名詞の後項動詞が非対格動詞である例は日本語「ぐしょ濡れ」および韓国語「갓밝이（kas-palki；たった今-明け→明け方）」以外は見当たらなかった．これは複合名詞の後項要素に非対格動詞が来る場合には動詞の必須成分である主語（対象）が複合語内で満たされないため、動詞由来複合語の形成が難しくなるからであるだろう．それゆえ、動作性も帯びにくいと考えられる．このことから、日本語と韓国語における[Ad+V]型は、後項動詞の外項以外の必須成分を複合語内で満たさなければならないという語形成規則におおむね従っていることが分かる．

6．3　日本語と韓国語の[A+V]型複合名詞

日本語において、[A+V]型複合名詞は比較的生産的で、本研究では 63 例が現れた．なお、日本語の[A+V]型には動作性名詞が 49 例（[A+V]型全体の約 78%）で非常に多く見られ、このタイプは主に動作性名詞を形成するタイプであることが分かる．それに対して、韓国語において[A+V]型複合名詞は非常に生産性が低く、「形容詞の語根+動詞」という

構成の動作性名詞「어슷썰기（esus-sselki；lit. 斜めぎみ-切り→斜めに切ること）」のたったひとつの例のみが見られた．その他、「단꿈（tan-kkwum；甘い-夢），쓴웃음（ssun-wusum；lit. 苦い-笑い→苦-笑い），잰걸음（cayn-kelum；lit. 早い-歩き→早足）」のような例は見られるが、すべて「形容詞の冠形形（連体形）＋動詞」のタイプであり、かつ後項要素が自立的な名詞である．よって、事実上韓国語において[A+V]型複合名詞の形成は非常に難しいと言える．

日本語の[A+V]型複合名詞（高跳び，早食い）が韓国語では[Ad+V]型複合名詞（높이뛰기[nophi-ttwiki；lit. 高く-跳び→高跳び]，빨리먹기[ppalli-mekki；lit. 早く-食い→早食い]）に対応する場合が多いことから、韓国語において[A+V]型複合名詞が生産的ではない代わりに、[Ad+V]型複合名詞の形成が発達していると考えられる．反対に、日本語においては[Ad+V]型複合名詞が生産的ではない代わりに、[A+V]型複合名詞の形成が活発に起きると言えよう．一方、日本語の[A+V]型複合名詞の後項要素には自動詞および他動詞が両方とも現れる．ただし、他動詞の場合は二項動詞が殆どであり、三項動詞は現れにくい．

（116）a. 動作性名詞：青光り，厚着，厚切り，厚塗り，荒稼ぎ，薄着，嬉し泣き，
遅出，遅蒔き，固茹で，軽はずみ，細切り，高鳴り，高望み，
高笑い，近付き，遠出，遠乗り，遠吠え，遠回し，遠回り，
長居，長生き，長続き，長持ち，長煩い，苦笑い，早打ち，
早起き，早送り，早食い，早咲き，早死に，早仕舞い，
早立ち，早寝，深入り，深追い，深読み，安売り，若返り，
若死に，若作り，悪巧み，悪乗り，悪ふざけ，悪酔い，
速歩き，高止まり

b. 非動作性名詞：厚揚げ，厚焼き，薄焼き，幼馴染み，苦し紛れ，黒焦げ，
細切れ，遠巻き，早生まれ，早見，古漬け，細引き，細巻き，
臭い消し

前節で考察した[Ad+V]型複合名詞と同様に、[A+V]型複合名詞の後項要素には非能格動詞が複合名詞の形成に参加でき（例：嬉し泣き，高笑い，遠吠え，苦笑い，早起き，早寝，速歩きなど）、この場合はおおよそ動作性名詞として実現される．反面、[Ad+V]型複合名詞と違って、[A+V]型複合名詞の後項要素には、非対格動詞も多く現れる．そして、この場合は動作性名詞として実現されるもの（例：青光り，長生き，長続き，早死に，若死に，高止まりなど）と非動作性名詞として実現されるもの（例：幼馴染み，黒

焦げ，細切れ，早生まれなど）の両方が見られる．[Ad+V]型は後項要素に非対格動詞が現れる例が少ない上に、その例は動作性を帯びにくい反面、日本語の[A+V]型は後項要素に非対格動詞が現れる例がやや多く、中には動作性を帯びる例も存在するという点で異なる．

つまり、日本語では、必須成分である「対象」（主語）が複合名詞の中で満たされなくても[A+V]型複合名詞の形成が可能であり[155]、動作性を帯びると考えられる．このことから、日本語において[A+V]型複合名詞の形成は、非常に生産的であり、韓国語と比べると制約から遥かに自由であることが分かる．[Ad+V]型複合名詞と同様に、[A+V]型複合名詞は前項要素が後項動詞の必須項ではないため、韓国語においてはこのような制約が強く作用し、生産性が殆どないのに対して、日本語においてはこのような制約から自由であり、むしろ[Ad+V]型複合名詞よりも[A+V]型複合名詞の方が生産性に富んでいる結果に繋がったと考えられる．

6．4　6章のまとめ

本章では、日本語と韓国語の両言語の動詞由来複合名詞[Pref+V]型，[Ad+V]型，[A+V]型における語形成のメカニズムならびに動作性名詞の条件を考察した．

[Pref+V]型，[Ad+V]型，[A+V]型のすべてが動作性を帯び得るが、このうち[Pref+V]型は後項要素がおおよそ自立的な名詞であるため、このタイプの複合名詞が帯びる動作性は後項要素によるものであると考えられる．よって、事実上[Pref+V]型はそもそも動詞由来複合名詞と見ることができず、このタイプが動作性を帯び得るとも言い難い．

[Ad+V]型は、両言語において、形成可能な動詞由来複合語である．そして、韓国語においては新語なども作れるほど、やや生産性が高く、動作性名詞を主に形成するタイプである．それに対して、日本語においては最も生産性が低いため、その例が非常に少ない．[Ad+V]型は、前項要素が後項動詞の必須項ではないため、動詞由来複合語の形成において制約があり、比較的生産性の低いタイプとなったと考えられる．一方、[Ad+V]型の後項要素に自動詞が現れる際は、非対格動詞のみならず非能格動詞も来

155 英語の動詞由来複合語の形成の場合、主語の制約により主語以外の動詞の必須成分が複合語内で満たされなければならないという規則に従っているが、日本語と韓国語の場合も動詞由来複合語の形成において主語以外のすべての必須成分が複合語内で満たされなければならないという規則に従っているかについては検討が必要であろう．

られる点が、[N+V]型と対照的である. [Ad+V]型の後項要素には、非能格動詞が主に現れ、むしろ非対格動詞の方が珍しいという点も特徴的である. なお、後項要素が非能格動詞である場合は動作性を帯びやすく、非対格動詞である場合は動作性を帯びにくい. 後項要素に非能格動詞が現れる場合は、後項動詞の外項以外の必須成分を複合語内で満たさなければならないという動詞由来複合語の語形成規則に従っているため、動作性を帯び得るが、後項要素に非対格動詞が現れる場合は、この語形成規則を守らないため、動作性を帯びにくいと考えられる.

[A+V]型は、日本語においてはかなり生産的な複合名詞であるのに対して、韓国語においては殆ど生産性がなく、事実上韓国語の[A+V]型複合名詞は形成できないと考えられる. 一方、[Ad+V]型と同様に、日本語の[A+V]型の後項要素には非対格動詞のみならず、非能格動詞も現れ得る. しかし、日本語の[Ad+V]型の後項要素には、非対格動詞が現れる例は少なく、その例が動作性を帯びにくいのに対して、日本語の[A+V]型の後項要素には非対格動詞が現れる例が多く、その中には動作性を帯びる例も見られる. このことから、日本語の[A+V]型は、後項動詞の必須成分が複合名詞の中で満たされなければならないという制約から自由であることが分かる.

上述したように、[Ad+V]型および[A+V]型の後項要素には、非能格動詞が現れ得る. そして、この場合、おおよそ動作性を帯びるという点で従来の先行研究（由本 2014, 2015）に対する反例となる. 由本（2014, 2015）によると、動作性を帯びるためには複合語の外に満たすべき内項の存在が必要であるが、[Ad+V]型「ごろ寝」や[A+V]型「早起き」などは後項要素が非能格動詞であるため、満たすべき内項がそもそもないにも関わらず、動作性を帯びている. 由本（2014, 2015）を含む先行研究では、[N+V]型複合名詞を中心に考察してきたため、すべての動詞由来複合名詞を網羅することができないという限界があった. そこで、本稿では、すべてのタイプの動詞由来複合名詞を考察したという点で意義があるだろう.

前述したように、非能格動詞を後項要素とする[Ad+V]型および[A+V]型はおおよそ動作性を帯びることから、両言語において「動作主」（主語）以外の必須項が複合語内で満たされている場合、動作性を帯びやすいということが分かる. 言い換えると、動詞由来複合語の規則を守っている時に動作性を帯びることができると言えよう.

一方、[Ad+V]型および[A+V]型の後項要素に他動詞が現れる例（日本語：ポン引き, 早打ち, 韓国語：마주잡이[macwu-capi；lit. 向かい合って-とり→前後二人で担ぐこと,

前後二人で担ぐ輿や担架], 미리보기[mili-poki;lit. 予め-見→プレビュー]など)も存在する. これらの例は、既存名詞から類推により形成されたものであるのか、それとも日本語と韓国語において、このような動詞由来複合語の形成が可能であるのかについて検討が必要である.

もし他動詞を後項要素とする[Ad+V]型および[A+V]型の形成が可能であるとすれば、ある条件を立てることができる. 他動詞を後項要素とする[Ad+V]型および[A+V]型は、「対象」(目的語)の項を複合語内で満たしていないという共通点が見られる. そこで、前項要素と後項要素の関係から「対象」が容易く想定できる場合は、「対象」が満たされなくても動作性を帯び得る可能性を考えられる. 日本語の[A+V]型において、非対格動詞を後項要素とする例の中に動作性名詞が見られることからも、日本語の動詞由来複合名詞においては、「対象」は満たされなくても動作性を帯び得ることが改めて確認できる. 韓国語は動詞由来複合語の形成において、後項動詞の必須成分が複合名詞の内部で満たされなければならないという制約におおむね従っている反面、日本語は動詞由来複合語の形成においてこのような制約から比較的自由であるように見えるが、その理由がここにあると考えられる.

最後に、日本語の場合は[A+V]型複合名詞が発達しているのに対して、韓国語の場合は[Ad+V]型複合名詞が発達し、互いに補完し合っていることが特徴的であった. 例えば、「早く食べる」という同じデキゴトを表すために、日本語では「早食い」という[A+V]型で表す一方、韓国語では「빨리먹기(ppalli-mekki;lit. 早く-食い→早食い)」という[Ad+V]型で表す. つまり、ある言語において生産的ではないタイプの代わりに他のタイプが発達するようになると考えられる. これは、日本語においては「形容詞(A)」が形態的に名詞に近いものであり、韓国語においては「副詞(Ad)」が形態的に名詞に近いものであるため、その形態的特徴により、複合名詞の形成における生産性に相違が見られることが予想される. これを支える一例として、日本語では「形容詞」が「名詞」と両用できる例(自由, 無理, 平安, 便利など)が多い一方、韓国語では「副詞」が「名詞」と両用できる例(처음[cheum;初め, 初めて], 참[cham;真, 本当に]など)が多いことが挙げられる. 動詞由来複合名詞には、「N+V」型が最も多く現れ、生産性の高いタイプであるが、形態的に名詞に近いものほど、動詞由来複合名詞の構成要素として参加しやすいと考えられる. この現象については更なる研究が必要であろう.

Ⅲ 結論

第7章

おわりに

本章では、これまで考察してきたことをまとめ、本論文で得られた成果を述べる. そして、本論文の意義と今後の課題について述べる.

7. 1 研究成果

7. 1. 1 日本語と韓国語における動詞由来複合名詞の動作性

本論では、日本語と韓国語における動詞由来複合名詞が帯びる動作性について検討してきた. 両言語における動詞由来名詞(動詞の名詞形)を含む複合名詞を大きく 5 つのタイプ「[V+N]〔動詞の名詞形＋名詞〕型, [N+V]〔名詞＋動詞の名詞形〕型, [Pref+V]〔接頭辞＋動詞の名詞形〕型, [Ad+V]〔副詞＋動詞の名詞形〕型, [A+V]〔形容詞＋動詞の名詞形〕型」に分類し、順次考察した. この 5 つのタイプの複合名詞が帯びる動作性ついて、両言語における類似点や相違点を簡潔にまとめると以下のようになる.

①[V+N]型複合名詞

[V+N]型複合名詞は、日本語においては動作性を帯びることができるのに対して、韓国語においてはそもそも動作性を帯びない. なぜなら、日本語[V+N]型複合名詞は、内部構造が付述関係のみならず、項関係にあると解釈できるため、動作性を帯びることができるが、韓国語[V+N]型複合名詞は、内部構造が付述関係のみに現れるため、動作性を帯びることができない.

②[N+V]型複合名詞

[N+V]型複合名詞は、両言語において最も生産的なタイプである. [N+V]型は、語構成要素間の文法的関係により、さらに「主述関係（主語-述語）」「目述関係（目的語-述語）」「付述関係（付加語-述語）」の 3 つに分類できる.

＜類似点＞

［ｉ］ 主述関係と目述関係にある[N+V]型の前項名詞は、後項動詞に対して必須項であるが、付述関係にある[N+V]型の前項名詞は後項動詞の必須項である場合（日本語の例：下敷き，韓国語の例：감옥살이[kamok-sali；監獄-暮らし]）と随意項である場合（日本語の例：日焼け，韓国語の例 ：가을걷이[kaul-keti；lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ]）の両方とも観察される.

［ⅱ］ 主述関係にある[N+V]型の後項要素には、非対格動詞のみが現れ、非能格動詞は後項要素として現れないという制約がある.

［ⅲ］ 目述関係にある[N+V]型の後項要素には、主に二項動詞の他動詞が現れ、三項動詞は稀である.

［ⅳ］ 付述関係にある[N+V]型の後項要素には、主に二項動詞や三項動詞の他動詞が現れる.

＜相違点＞

［ｉ］ 主述関係にある[N+V]型は、日本語においては動作性を帯び得る一方、韓国語においては動作性を帯びにくい.

［ⅱ］ 目述関係および付述関係にある[N+V]型は、日本語においては後項動詞が三項動詞である場合でも動作性を帯び得る一方、韓国語においては後項動詞が三項動詞である場合は動作性を帯びにくい.

［ⅲ］ 付述関係にある[N+V]型は、日本語においては項関係にあるか否かには関係なく動作性を帯び得る一方、韓国語においては「必須補語-述語」の項関係にある場合に限り動作性を帯び得る.

③[Pref+V]型複合名詞

両言語において[Pref+V]型複合名詞は、後項要素が動作性を帯びるため、動作性を帯び得るという共通点が見られる. よって、厳密には[Pref+V]型が動作性を帯び得るとは言い難い.

④[Ad+V]型複合名詞

両言語において[Ad+V]形複合名詞は、形成可能な動詞由来複合語である. しかし、その生産性においては相違が見られる.

＜類似点＞

[ｉ] [Ad+V]型の後項要素には、自動詞と他動詞の両方とも現れる.

[ⅱ] [Ad+V]型の後項要素に自動詞が現れる際、非対格動詞のみならず非能格動詞も来られるが、非能格動詞が主に現れ、むしろ非対格動詞が現れることは珍しい([N+V]型とは対照的).

[ⅲ] 後項要素が非能格動詞である場合は動作性を帯びやすく、非対格動詞である場合は動作性を帯びにくい.

＜相違点＞

[Ad+V]型複合名詞は、日本語においては最も生産性が低いため、その例が非常に少ない反面、韓国語おいては新語なども作れるほど、やや生産性があり、動作性名詞を主に形成するタイプである. 韓国語では、[A+V]型は生産性がない代わりに、この[Ad+V]型が発達し、生産的である.

⑤[A+V]型複合名詞

[A+V]型複合名詞は、日本語においてはかなり生産的なタイプであるのに対して、韓国語においては殆ど生産性がない. 日本語の[A+V]型は、語形成の制約から比較的自由であるため、日本語では、[Ad+V]型の代わりに、[A+V]型が発達している.

[ｉ] 日本語の[A+V]型の後項要素には、自動詞と他動詞の両方とも現れる.

［ⅱ］日本語の[A+V]型の後項要素に自動詞が来る際に、非対格動詞と非能格動詞の両方が現れ、後項要素に非能格動詞が現れる際に動作性を帯びやすい（[Ad+V]型と同様）.

［ⅲ］日本語の[A+V]型は後項要素に非対格動詞が現れる例がやや多く、中には動作性を帯びる例も存在する（[Ad+V]型とは対照的）.

以上のことから、両言語における動詞由来複合名詞の動作性は、動詞由来複合語の語形成規則と関わっていることが分かる. 日本語においては、すべてのタイプの複合名詞が動作性を帯び得る一方、韓国語においてはそうではない. 韓国語はおおよそ動詞由来複合語の語形成規則に従っているのに対して、日本語は語形成の制約から比較的自由である. このことより、このような相違が生まれたと考えられる.

例えば、韓国語において、[N+V]型が動作性を帯びるためには、「必須補語-述語」という項関係にある必要がある反面、日本語においては項関係にあるか否かには関係なく、動作性を帯び得る. なお、韓国語において、[N+V]型の後項動詞が三項動詞である場合は動作性を帯びにくい反面、日本語においては後項動詞が三項動詞である場合でも動作性を帯び得る.

韓国語の[N+V]型において、「副次補語-述語」という関係にある場合と、後項動詞が三項動詞である場合に、動作性を帯びにくい理由は、この場合は動詞由来複合語の語形成規則に従っていないためであると考えられる. 言い換えると、韓国語では、後項動詞の外項以外の必須項を複合語内ですべて満たさなければならないという動詞由来複合語の語形成規則に従っている場合に動作性を帯び得るが、日本語においては、この語形成規則に従っていない場合でも動作性を帯び得るということになる.

一方、日本語の[Ad+V]型の後項要素に自動詞が現れる場合、非能格動詞の場合は動作性を帯び得るが、非対格動詞の場合は動作性を帯びにくい. これは韓国語においても同様である. [Ad+V]型の後項要素に非対格動詞が現れる際は、必然的に後項動詞の内項（対象）を複合語内で満たすことができないため、動作性を帯びにくい. これに反して、非能格動詞は外項以外に満たすべき必須項が存在しないため、非能格動詞が[Ad+V]型の後項要素に現れる際には、動作性を帯び得ると考えられる. このことから、日本語においても、動詞由来複合語の語形成規則と動作性は全く関連がない訳ではないということが分かる.

しかし、日本語の[A+V]型においては、後項要素に非対格動詞が現れる場合でも動作性を帯びる例がしばしば見られる．上述したように、日本語では[Ad+V]型の例が少ない代わりに、[A+V]型が発達し、生産的である．理由ははっきりしないが、日本語の[A+V]型は、語形成の制約から比較的自由である．そのため、日本語では[A+V]型が発達する結果となったと考えられる．本研究においては、[Ad+V]型の例が非常に少なかったため、本当に日本語において[Ad+V]型だけが、動詞由来複合語の形成に制約を受けるかどういかについては、より多くの例を収集した上で、更なる検討を要する．

なお、由本（2014, 2015）では、動作性名詞（動名詞）となる条件は、複合語の外に満たすべき内項を持つことであると主張したが、[Ad+V]型（ごろ寝）および[A+V]型（早起き）の後項要素には非能格動詞が現れ、動作性を帯び得る．非能格動詞は満たすべき内項がそもそもないため、由本（2014, 2015）の主張によると後項要素に非能格動詞が現れると動作性を帯びることができないのである．しかし、実際に後項要素に非能格動詞が現れる例が動作性を帯び得るということから、由本（2014, 2015）の動作性名詞となる条件を見直す必要があろう．これについては 7．1．3 で詳しく論じる．

7．1．2 意味転移仮説と[N+V]型複合名詞の分析

ところで、両言語において最も多いタイプは、[N+V]型複合名詞である．他のタイプと違って[N+V]型には、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例がしばしば見られる．そこで、本稿では、[N+V]型複合名詞を中心に、動作性名詞と実体性名詞（あるいは非動作性名詞）の関係を「意味転移が起きると動作性が失われる」という意味転移仮説より説明した．意味転移仮説は、語構成・語形成の観点から意味転移が起きる箇所を考えると、以下の表 19 のように、2 つの仮説が立てられる．

表 19.　[N+V]型複合名詞における意味転移仮説

意味転移仮説	分析	意味転移が起きる部分	例
全体意味転移仮説	[[N+V]-接辞]	[N+V-接辞]の全体	韓国語の例：줄넘기（cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄） 日本語の例：舵取り，目隠し
後項要素意味転移仮説	[N+[V-接辞]]	後項要素 [V-接辞]	韓国語の例：총잡이（chong-capi；lit. 銃-とり→拳銃つかい） 日本語の例：たこ焼き

2 つの意味転移仮説の関係は、語形成の観点から見ると「全体意味転移仮説」は「規則」の観点、「後項要素意味転移仮説」は「類推」の観点に近いものである．「類推」が存在するためには、その基盤となる「規則」が必要であるように、「全体意味転移仮説」は「後項要素意味転移仮説」の基盤となる仮説であるため、基本的に[N+V]型動作性名詞の全体において意味転移が起きることにより、動作性が失われるという考えである．一方、「後項要素意味転移仮説」によると、後項要素（V）が動作性を持っており、この後項要素に意味転移が起きることにより、動作性が失われるということになる．したがって、動作性名詞でありながら実体性名詞としても共存する例は「全体意味転移仮説」により説明でき、実体性のみ表す非動作性名詞の例は「後項要素意味転移仮説」により説明できる．

「全体意味転移仮説」は「規則」のメカニズムと関連があり、「後項要素意味転移仮説」は「類推」のメカニズムと関連があるという点で、既存の「N+V」型複合名詞の分析の観点から大きく離れないが、本研究が既存の分析と異なるのは、複合名詞において意味転移の可否を調べた点である．例えば、後項要素が生産性に富む実体性名詞「총잡이（chong-capi；lit. 銃-とり→拳銃つかい）」の場合、後項要素が動作性名詞を形成する要素であり、動作性を帯びる後項要素に意味転移が起き（後項要素意味転移仮説）、実体性名詞になったと考えられるため、その構成を[총 N-[잡 V-이 Suf.]]（[chong-[cap-i]]；lit. 銃-とり→拳銃つかい）と分析できる．一方、後項要素の生産に乏しい「줄넘기（cwul-nemki；lit. 縄-跳び→縄跳び，跳び縄）」の場合は、動作性名詞全体において意味転移が起き（全体意味転移仮説）、実体性名詞になったとしか説明できないため、[[줄 N 넘 V]-기 Suf.]（[[cwulnem]-ki]；縄跳-び）という語構成として分析できる．このように、後項要素の生産性および意味転移の可否を調べることにより、従来の先行研究で盛

んに議論されてきた「N+V」型複合名詞の分析についての新しいアプローチを試みたという点で本論文の意義があると言えよう.

7. 1. 3 動詞由来複合名詞の動作性の条件

ここでは、本稿での考察を基に、動詞由来名詞を含む複合名詞が動作性を帯びるための動作性の条件をまとめる.

動詞由来複合名詞が動作性を帯びるためには、まず意味転移が起きず、語構成要素の意味が透明であることが前提となる. そして、複合名詞の内部における文法的関係が主に「必須補語-述語」という項関係、とりわけ「目的語-述語」という目述関係にある際に動作性を帯びやすい. 韓国語[N+V]型複合名詞においては、付述関係にある複合名詞の場合は「必須補語-述語」の関係にある場合のみ動作性を帯び得る一方、日本語[N+V]型複合名詞においては「必須補語-述語」のみならず「副次補語-述語」の関係にある場合でも動作性を帯び得る. その理由を形態的に考えると、日本語における動詞由来複合名詞の後項要素は動詞の連用形であるため、動詞としても容認される反面、韓国語における動詞由来複合名詞の後項要素は動詞に接尾辞が付いた名詞形であるため、動詞としては制約が強いのだと考えられる. つまり、韓国語における動詞の名詞化は、動詞よりは名詞に近いものであると思われるが、日本語における動詞の名詞化はより動詞に近いものであろう.

次に、動詞由来複合名詞が動作性を帯びるためには、後項動詞の必須項の中で満たされていない、たった 1 つの項(とりわけ外項)の存在が必要となる. 目述関係および付述関係にある[N+V]型複合名詞の場合は、後項要素におおよそ他動詞が現れ、必須項として動作主(外項)を要求するが、外項は複合名詞の形成要素として参加できない. よって、外項は複合名詞の中で満たされないことになるため、目述関係および付述関係の複合名詞が、動作性を帯び得ると考えられる. それに対して、必須項がすべて満たされている主述関係(日本語の例:日暮れ, 夜明け, 日差し, 韓国語の例:해돋이[hay-toti;lit. 日-昇り→日の出], 물굽이[mwul-kwupi;lit. 水-曲がり→海・川などの湾曲部])にある複合名詞の場合は、動作性を帯びにくい.

韓国語の[N+V]型複合名詞は、主述関係にある際に動作性を帯びにくい反面、日本語の[N+V]型複合名詞は、主述関係にある際にも動作性を帯び得る. 主述関係にある

日本語の動作性名詞の例「値上がり，息切れ，背伸び」などは、共通して前項名詞が「全体-部分関係（whole-part relation）」もしくは「所有権関係（ownership relation）」にあるもので、「商品の値上がり」「喫煙者の息切れ」「猫の背伸び」のようにさらに項を取ることができる．由本（2014，2015）でも、前項要素（N）によって新たに満たす項が生じる場合に動作性名詞（動名詞）として容認されると指摘している．ここで、一つ異なる点は由本（2014，2015）は外項以外に満たすべき内項がある場合に動作性名詞（動名詞）と見たが、本稿における動作性名詞の場合は外項も含めて満たすべき項としている点である．つまり、主述関係にある[N+V]型複合名詞は、前項名詞により満たすべき項が生じる場合に限って、動作性を帯び得ると言える．

一方、韓国語の動詞由来複合名詞において、動作性を帯びるためには、複合名詞の内部において後項動詞の外項以外の必須項はすべて満たされなければならない．言い換えると、動詞由来複合語の語形成規則に従っている際に動作性を帯び得るということである．したがって、韓国語において付述関係にある[N+V]型複合名詞は、「必須的副詞語（필수적 부사어；必須的付加語）-述語」という「必須補語-述語」の関係にある場合のみ、動作性を帯び得るわけである．なお、韓国語の[Ad+V]型における動作性名詞の後項要素には、満たすべき内項がない非能格動詞が現れる結果となったと考えられる．韓国語において後項要素に三項動詞が現れる場合は、内項を複合名詞の内部においてすべて満たすことができないため、動作性を帯びることができず、非動作性名詞としてのみ実現される（例：옷걸이[os-keli；洋服-掛け]，목걸이[mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス]）．例外として後項要素に三項動詞が現れる動作性名詞「밭걷이（path-keti；lit. 畑-取り入れ→畑物の取り入れ），꽃꽂이（kkoch-kkoci；lit. 花-さし→生け花），턱걸이（thek-keli；lit. 顎-かけ→懸垂）」などが存在するが、この場合は満たすべき内項は前項要素と後項要素の関係から想定可能であるため、可能になると考えられる．例えば、밭걷이（path-keti；lit. 畑-取り入れ→畑物の取り入れ）の場合は、畑から取り入れるものは「穀物」や「野菜」であることが想定できるため、複合名詞の内部においてすべての内項が満たされていない場合でも動作性を帯び得るということになる．

それに対して、日本語においては、動作性名詞は外部から内項を満たすことが可能であり（例：大根を千切りする，野菜を水洗いする，服を箱詰めする）、むしろ複合名詞の後項動詞の内項である「対象」の項が複合名詞の内部で満たされていない場合に動作性を帯びやすいと考えられる．韓国語の場合は、おおよそ後項要素が動作性を帯びる自

立的な名詞（例：구이[kwui；焼き]）である例（例：소금구이[sokum-kwui；塩-焼き]）のみ、複合名詞の内部において内項（対象）が満たされなくても動作性を帯び得ることと対照的である.

これは、韓国語においては付述関係にある[N+V]型複合名詞が「必須補語-述語」の関係にある場合に動作性を帯び得るが、日本語においては「必須補語-述語」のみならず、「副次補語-述語」の関係にある場合でも動作性を帯び得ることと繋がる. 日本語の[N+V]型複合名詞の後項要素に二項動詞が現れる場合、前項名詞に付加詞（adjunct）が来る「副次補語-述語」という付述関係にある動作性名詞「水洗い，手作り，手書き，手助け，日焼け」などの例が多く存在する. なお、後項要素に三項動詞で現れる場合、「必須補語（必須的付加語）-述語」という付述関係にある動作性名詞「田植え，水揚げ」などの例が存在する. これらの例は、後項動詞の必須項である「対象」の項が欠けている共通点が見られる. 理由は明らかではないが、「対象」の項は必須項にも関わらず、複合名詞の語内部で満たされていなくても、動作性を帯びることができる. その理由は、おおよそ「対象」の項は、与えられなくても容易に想定可能な場合が多いためであると考えられる. 例えば、「水洗い」の「対象」は、「洗濯物」や「汚れている物（食器や果物など）」であると想定される. そして、「田植え」をする「対象」は、「稲の苗」であることが想定される. この時の「対象（y）」は、複合名詞の内部において、特定されるため、以下のように語彙概念構造で表すと定項（constant）として示し得る.

（117）a. 水洗い[[　　]x ACT ON-[洗濯物/汚れている物]y] BY-MEANS-OF-[水]z]]
b. 田植え [　　]x CAUSE [[稲の苗]y BE AT-ON-[田]z]

このように、「対象」の項が複合名詞の語内部で特定される場合は、その項が満たされなくても動作性を帯びることができるため、「対象」の項以外の内項が満たされてこそ、動作性を帯びることができると考えられる[156]. したがって、「道具・場所名詞」（例：物置，札入れなど）が動作性を帯びることができず、非動作性名詞になることは、必然的であると言えよう. 「物置」と「札入れ」の後項要素は三項動詞であるが、前項要素が「対象」の項

156 このことは、結果名詞の「手作り」「塩漬け」が動作性を帯びることができる理由も説明できる. 結果名詞の場合は、前項名詞に「材料」や「手段・方法」が来るため、いつも「対象」の項は満たされていない.

であり、必須項である「場所」の項が複合名詞の内部で満たされていないため、動作性を帯びることはできないということになる. 一方、「物置」と同じ後項要素の「床置き」は、前項要素が「対象」ではなく「場所」であり、「対象」以外の内項が複合名詞の内部で満たされているため、動作性を帯びることができる.

このように考えると、[Ad+V]型(例:ごろ寝)および[A+V]型(例:早起き)の後項要素に非能格動詞が現れる場合、動作性を帯び得る理由が説明できる. 非能格動詞は内項を持たず、外項のみを取る. 由本(2014, 2015)の主張によると、動作性を帯びるためには複合名詞の外に満たすべき内項の存在が必要であるが、非能格動詞は内項をそもそも持たないため、これらの例(ごろ寝, 早起き)は動作性を帯びることができない. しかし、本稿での主張によると、複合名詞の内部に満たすべき内項がそもそも存在しないため、むしろ動作性を帯び得るということになる. なお、韓国語の[Ad+V]型(例:갓밝이[kas-palki;lit. たった今-明け→明け方])の後項要素に非対格動詞が現れる場合は動作性を帯びにくい反面、日本語の[A+V]型(例:早死に)の後項要素に非対格動詞が現れる場合に動作性を帯び得る理由も説明できる[157]. 非対格動詞は外項は持たず、内項(対象)のみを取る. つまり、韓国語の[Ad+V]型の後項要素に非対格動詞が現れる場合は、複合名詞の内部において外項以外の項(ここでは内項)が満たされないため、動作性を帯びにくい一方、日本語の[A+V]型の後項要素に非対格動詞が現れる場合は、複合名詞の内部で「対象」以外に満たすべき内項がないため、動作性を帯び得るということになる.

これまで見てきたように、動詞由来複合名詞が動作性を帯びるためには、韓国語においては後項動詞の外項以外の必須項が複合名詞の内部においてすべて満たされなければならない反面、日本語においては「対象」の項以外の内項が複合名詞の内部においてすべて満たされなければならない. しかし、日本語ほど一般的ではないものの、韓国語においても前項要素と後項要素の関係から「対象」の項がすぐ想定できる場合は「対象」の項が複合語内で満たされなくても動作性を帯び得る(例:밭걷이[path-keti;lit. 畑-取り入れ→畑物の取り入れ]). さらに、この事実より、両言語における[Ad+V]型およ

157 既に言及したように、韓国語では[A+V]型は生産性がなく、代わりに[Ad+V]型が発達しているため、本研究において後項要素に非対格動詞や非能格動詞が現れる[A+V]型は見られなかった. それに対して、日本語では[Ad+V]型は生産性に乏しく、代わりに[A+V]型が発達しているため、本研究において後項要素に非対格動詞が現れる[Ad+V]型は「ぐしょ濡れ」の1例しか見当たらなかった.

び[A+V]型の動作性名詞の後項要素に二項動詞は現れるが、三項動詞は現れにくい理由も説明できる.

7．1．4 動詞由来複合名詞の意味解釈のメカニズム

最後に、本稿での考察を基に、動詞由来名詞を含む複合名詞における意味解釈のメカニズムについてまとめる. 動詞由来複合名詞が実体性の意味として解釈されるのは、多くの場合[N+V]型複合名詞であるため、ここでは[N+V]型を中心に述べる.

本稿の[N+V]型複合名詞における意味解釈（あるいは意味転移）の考察から、複合名詞の意味は後項動詞が持つ必須項の意味役割と関係があり、複合名詞は語内部で満たされていない項の意味として解釈されることを確認した. そして、[N+V]型複合名詞が実体性の意味として解釈される際は、主に《動作主》《道具》《道具/場所》《対象》《結果》の意味として解釈されるため、本稿ではそれぞれ「動作主名詞」「道具名詞」「道具・場所名詞」「対象名詞」「結果名詞」と命名した. このうち「動作主名詞」「道具名詞」「結果名詞」は、実体性名詞として共存する動作性名詞と非動作性名詞の両方に見られるが、「道具・場所名詞」および「対象名詞」は非動作性名詞のみに見られる. 本稿で提示した[N+V]型複合名詞の意味分類と意味解釈のメカニズをまとめたものが次の表 20 である.

表 20.　[N+V]型複合名詞の意味分類と意味解釈のメカニズム

	語彙的な意味	文法的な性質 （成立する構文）	例
動作主名詞	N ヲ/デ/ニ V するヒト	NV ガ N ヲ/デ/ニ V	舵取り，下働き，船乗り
	N 을/으로/에서 V 하는 사람 （N ヲ/デ/デ V スルヒト）	NV 가 N 을/으로/에서 V （NV ガ N ヲ/デ/デ V）	고기잡이(漁師), 오른손잡이(右利き), 앞잡이(手先)
道具名詞	N ヲ V スル道具	NV デ N ヲ V	鼠捕り，手拭い
	N 을 V 하는 도구 （N ヲ V スル道具）	NV 로 N 을 V （NV デ N ヲ V）	바람막이(風除け), 손톱깎이(爪切り)
道具・場所名詞	N ヲ V スル道具/トコロ	NV ニ N ヲ V	物置
	N 을 V 하는 도구/곳 （N ヲ V スル道具/トコロ）	NV 에 N 을 V （NV ニ N ヲ V）	옷걸이(洋風)
対象名詞	N ニ V スル対象物	N ニ NV ヲ V	下敷き
	N 에 V 하는 대상물 （N ニ V スル対象物）	N 에 NV 를 V （N ニ NV ヲ V）	목걸이(首飾り)
結果名詞	N デ/ニ V シタ結果物, N ヲ/ニ V シテ作った結果物, N ガ V シテ作られた結果物	N デ/ニ NV ヲ作る, N ヲ/ニ V シテ NV ヲ作る, N ガ V シテ NV ガ作られる	手作り，塩漬け，梅干し， 缶詰め，紙切れ
	N 을/으로/에 V 한 결과물 （N ヲ/デ/ニ V シタ結果物）	N 으로/에 NV 를 만들다 （N デ/ニ NV ヲ作る） N 을 NV 로 만들다 （N ヲ NV ニ作る）	꽃꽂이(生け花), 소금구이(塩焼き), 통조림(缶詰め)

以上のことから、複合名詞の構成要素間の文法的関係、すなわち文法的な性質（成立する構文）が複合名詞の意味に関わっていることが分かる．言い換えると、複合名詞の構成要素が成立する構文から、複合名詞の意味がある程度予測できるということである．

しかし、動詞由来複合名詞に意味転移が起き、実体性の意味として解釈されるためには、基本的に複合名詞の後項動詞が持つ必須項のうち、前項要素と結合した後も満たすべき項の存在が 1 つ以上必要となる．つまり、複合語内で満たすべき項が残された場合は実体性の意味として解釈される可能性が高く、反対に複合語内で満たすべき項が残されていない場合は実体性の意味として解釈されにくいということである．

[N+V]型複合名詞の後項要素に一項動詞が現れる場合は、非対格動詞のみが後項動詞として複合名詞の形成に参加できるため、外項は持たず、1 つの内項（対象）のみを持つ. しかし、この内項（対象）を複合名詞の内部において前項要素が満たすため、これ以上の必須項を取ることができず、実体性の意味として解釈されにくい. ただし、随意項である「時間」（例：日暮れ）や「場所」（例：水回り，물굽이[mwul-kwupi；lit. 水-曲がり→海・川などの湾曲部]）の意味として解釈される可能性はある.

[N+V]型複合名詞の後項要素に二項動詞が現れる場合は、後項動詞の内項を前項名詞が満たしているため、その複合名詞は後項動詞の外項である「動作主」を指す「動作主名詞」、あるいは随意項である「道具」を指す「道具名詞」となる（日本語の例：舵取り，風除け，韓国語の例：고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労，漁師]，바람막이[palam-maki；lit. 風-防ぎ→風除け]）.

[N+V]型複合名詞の後項要素に三項動詞が現れる場合は、後項動詞の 2 つの内項のうち 1 つは前項名詞が満たし、その複合名詞は後項動詞の内項のうち、残されたもう 1 つの項を指す意味として解釈される. 例えば、後項動詞が三項動詞である例として「物置，下敷き」が挙げられる. 「物置」は前項名詞が後項動詞の「対象」の項を満たしているため、残されたもう 1 つの項である「場所」を指す「道具・場所名詞」となる反面、「下敷き」は前項名詞が後項動詞の「場所」の項を満たしているため、残されたもう 1 つの項である「対象」を指す「対象名詞」となるわけである. このように、残された項の意味に解釈されることにより、後項動詞の外項以外の必須項（内項）は複合名詞においてすべて満たされる結果となる.

特に、韓国語においては、後項要素に三項動詞が現れる場合、動作性を帯びることができず、実体性の意味としてのみ解釈され、「道具・場所名詞」（例：옷걸이[os-keli；洋服-掛け]）あるいは「対象名詞」（例：목걸이[mok-keli；lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス]）になることが特徴的である. 一方、日本語においては、後項要素に三項動詞が現れる場合でも動作性を帯び得るが、前項要素が「対象」の項を満たしている場合は動作性を帯びることができず、残されたもう 1 つの項である「場所」を指す「道具・場所名詞」（例：物置，札入れ）となる. このように、複合名詞の意味は、後項動詞の種類と前項要素と後項要素との文法的関係により、ある程度決定されると考えられる.

さらに、複合名詞における意味解釈には、優先順位があると考えられる. 本研究において実体性を表す複合名詞は両言語とも「動作主名詞<道具名詞<対象名詞/道具・場

所名詞」[158]の順で多く現れた. この順は、Jackendoff(1990)により提案された以下の「意味役割の階層(主題階層)(thematic hierarchy)」に非常に類似している.

(118) Agent<Beneficiary,Recipient<Experiencer<Instrument
<Patient, Theme<Loation

一方、Grimshaw(1990)によると、英語における動詞由来複合語(verbal compounds)の構造は、非主要部は卓越性階層(Prominenece Hierarchy)の意味役割の次元(Thematic Dimension)である「動作主(Agent)<経験者(Experiencer)<到達点/起点/場所(Goal/Source/Location)<対象/被動者(Theme/Patient)」およびアスペクト的階層(Aspectual Dimension)である「使役主(Causer)<非使役主(Non-Causer)」(Grimshaw 1990:24)の 2 つの独立的な階層を守り、最も下位のものから複合語に合成されるとされる.

ところが、日本語と韓国語においては、「意味役割の次元」を違反する例(日本語:下敷き, 手書き, 水洗い, 韓国語:소금구이[sokum-kwui;塩-焼き], 가을걷이[kaul-keti;lit. 秋-取り入れ→秋の取り入れ], 손잡이[son-capi;lit. 手-とり→取っ手]など)が存在するため、このような条件が厳格には適用されないように思われる. しかしながら、たとえ Grimshaw(1990)の「意味役割の次元」を守らない例があるとは言え、守る例の方が多い事実に鑑みれば、「意味役割の次元」が動詞由来複合語の語形成と全く関係がないとも言い難いだろう.

日本語と韓国語の動詞由来複合語の語形成においても、基本的に「意味役割の次元」の最下位のもの「対象(Theme)」から複合語に合成される傾向が見られる. 実際の例からも[N+V]型複合名詞の前項要素に「対象」を取る場合が全体の複合名詞の半分以上を占めるほど最も多い. 前述したように、非能格動詞の主語である「動作主」は複合語内では現れないことも、複合語の前項要素に「対象」を取ることが多い理由になるだろう. そして、「対象(Theme)」を前項要素とする場合は、後項要素には二項動詞が来る場合が多い. したがって、[N+V]型複合名詞(例:舵取り)の後項要素として二項動詞(例:取る)が来ると、前項要素には内項(例:舵)を取り、複合名詞は結果的に残された外項の意味

158 両言語に共通して「動作主名詞」(日本語 22 例, 韓国語 27 例)が最も多く現れ、次に「道具名詞」(日本語 11 例, 韓国語 19 例)が現れた. しかし、「対象名詞」および「道具・場所名詞」に関しては、両言語で異なる結果が見られた.

役割である「動作主」として解釈されるため、[N+V]型複合名詞の中で、最も多いのが「動作主名詞」になるわけである. なお、[N+V]型複合名詞の中で比較的三項動詞を後項要素とする「道具・場所名詞」や「対象名詞」が少ない理由も説明できる. これは、複合名詞の後項要素に一項動詞や二項動詞に比べて三項動詞が現れる場合が少ないことと関係があるだろう.

複合名詞の意味が語内部で満たされていない項の意味役割と関係があるとすれば、三項動詞を後項要素とする「道具・場所名詞」の「物置」や「対象名詞」の「下敷き」は、外項を指す「動作主名詞」としても解釈できるべきであるが、決してそうはならない. 「道具・場所名詞」および「対象名詞」の場合、後項要素はおおよそ三項動詞であるため、そのうち 1 つの内項を前項要素として取っても、2 つの項(外項と内項)が残される. しかし、外項である「動作主」を指す意味として解釈されることはなく、常に内項の意味役割の意味に解釈される. このことより、外項と内項の両方がある場合は、外項より内項の意味役割としての意味解釈が優先されることが分かる.

以上から、[N+V]型複合名詞における意味解釈は「動作主(Agent)<道具(Instrument)<対象(Theme)<場所(Goal/Source/Location)」[159]という階層が存在し、基本的に階層の上位の意味から優先的に解釈されることが予想される. ただし、外項と内項の両方がある場合は、内項を指す意味として解釈されるため、後項要素が三項動詞である場合は「場所(Goal/Source/Location)<対象(Theme)」という順で優先的に解釈されるだろう. 後項要素に三項動詞が現れる場合は、Grimshaw(1990)の「意味役割の次元」によると最下位の「対象」を優先的に前項要素とするため、結果的に「場所」の項を指す「道具・場所名詞」になる可能性が高いからである.

しかし、本稿で対象とした資料で、韓国語においては後者(後項要素が三項動詞である場合)の予想が当てはまるが、日本語においては「対象名詞」(9 例)が「道具・場所名詞」(5 例)より多く現れたため、この予想が当てはまらない. 日本語の動詞由来複合名詞では「対象」の項は、想定できる場合が多いため複合語内で満たされていない例が多い

159 [N+V]型複合名詞の後項要素には二項動詞が現れる例が最も多いが、他動詞である場合は「対象」を前項要素とするため、外項を指す「動作主名詞」になる場合が最も多く、次に「道具名詞」になる場合が多い. しかし、二項動詞を後項要素とする場合でも、自動詞である例(例:目障り)や「場所」を前項要素とする例(例:手持ち)は、内項の「対象」を指す「対象名詞」になる. なお、「対象」を前項要素とする場合でも、「場所」を内項として持つ自動詞(例:着く)を後項要素とする場合(例:船着き)は、内項の「場所」を指す「場所名詞」になる.

が、これと関連があると考えられる.「対象名詞」の場合は、複合語内で「対象」の項が満たされていないが、「道具・場所名詞」の場合は、複合語内で「対象」の項が満たされている. つまり、日本語では、複合語内で「対象」以外の内項を優先的に満たすため、「対象名詞」の方が形成されやすいが、韓国語では、複合語内で「対象」の項を優先的に満たすため、「道具・場所名詞」の方が形成されやすいと言えよう.

もしくは、「対象名詞」は後項要素に意味転移が既に起きてから、前項要素と結合した可能性も考えられる(すなわち、「後項要素意味転移仮説」により説明できる). 例えば、「下敷き」および「首飾り」の後項要素「敷き」および「飾り」に[+物]という意味転移が起きて、「敷く物」および「飾る物」という実体性名詞(すなわち、対象名詞)となってから、前項要素(「下」および「首」)と結合したということである[160]. 日本語の動詞由来複合名詞において「対象」の項は複合語内で満たされなくても動作性を帯びることができる. ゆえに、本来ならば「対象名詞」は複合語内で「対象」以外の内項は満たされているため、動作性を帯び得るはずである. それにも関わらず、本研究では「対象名詞」の中に動作性名詞でありながら実体性名詞として共存できる例が見られなかった. このことからも「対象名詞」は、後項要素に意味転移が起きている可能性を排除できない. つまり、後項要素が《対象》の意を表すため複合名詞の全体が「対象名詞」になっただけで、実は複合名詞であることとは関係がないということである. 言い換えると、本研究で日本語の[N+V]型複合名詞に「対象名詞」が「道具・場所名詞」より多く現れたのは、ただの偶然にすぎない可能性がある. したがって、動詞由来複合名詞(例:下敷き)ではなく、動詞由来名詞(例:敷き)の単独の場合にどの意味で解釈されやすいかを確認する必要があるだろう. 動詞由来名詞にも同様に、外項と内項の両方がある場合、内項を指す意味として解釈されるとすれば、「対象」の意味として優先的に解釈されることが予想される. 本論文は、動詞由来複合名詞を対象とする研究であるため、動詞由来名詞についてはこれ以上論じないが、動詞由来名詞の場合においても、意味解釈の優先順位が存在するかについては今後の課題としたい.

---

160 このことは、韓国語の「対象名詞」においても同じく適用できる. 例えば、韓国語の対象名詞「손잡이(son-capi;lit. 手-とり→取っ手)」の後項要素「잡이(capi;lit. とり→取っ手)」は、自立的な名詞で、既に[+物]という意味転移が起きている. そして、5. 5. 2. 2 でも言及したように、対象名詞「목걸이(mok-keli;lit. 首-掛け→首飾り・ネックレス)」の後項要素「걸이(keli;lit. 掛け)」は、自立的な名詞ではないが、後項要素の生産性が高いため、後項要素に意味転移が起きた(すなわち、後項要素意味転移仮説)と考えられる.

7．2　本論文の意義および今後の課題

本論文には、大きく 3 つの意義があると考えられる．第一に、語構成・語形成の観点から、両言語の動詞由来複合名詞が帯びる動作性を考察することで、従来にない新しい観点の日韓対照研究ができたということである．さらに、動作性による両言語間に現れる相違を明らかにすることで、従来の言語学の研究では説明が困難であった語彙の空白（lexical gap）[161]が発生する要因を一部説明できる．第二に、語彙の空白と関連し、通訳・翻訳で発生する非等価の問題を解決するための手がかりを提供することができる．第三に、外国語教育の分野で、韓国語学習者または日本語学習者にとって有用な学習情報を提供できる．例えば、機能動詞と共起ができる複合名詞を見分けるため、または初めて見る複合名詞の意味を推測するため、本論文の成果を活用できることが期待される．

しかし、本稿では、[V+N]型と[N+V]型を中心に考察し、[Pref+V][Ad+V][A+V]型については両言語において十分な例が確保できなかったため、深い考察までに至らなかった．しかも、[Pref+V][Ad+V][A+V]型はその例が少ないだけではなく、使用頻度も低い場合が多いため、動作性の判断が難しいという限界がある．一方、[Pref+V][Ad+V][A+V]型においても数少ないが意味転移が起きると考えられる例が存在する．日本語では殆ど見られず、特に韓国語の例で見られる．例えば、韓国語の[Ad+V]型複合名詞「마주잡이（macwu-capi；lit. 向かい合って-とり→前後二人で担ぐこと，前後二人で担ぐ輿や担架）や「뻥튀기（ppeng-thwiki；lit. ポン-跳ね→米・ジャガイモ・トウモロコシなどを圧力をかけて膨らませること，ポン菓子）」などが挙げられる．これらの複合名詞は、以下の（119）のように本稿における動詞由来複合名詞の意味解釈のメカニズムを適用すると、

---

161 語彙の空白は次のように 5 つに分類することができる．これらの分類はチェ・ホチョル ＆ ハン・ジョンハン ＆ オ・ジャングン（2004）での分類方法を参考にし、発展させたものである．

①語彙不在：ある言語ではある概念が語彙化されているが、他の言語ではその概念自体がないため、その概念を表す単語が不在する．

②意味的空白：ある言語では意味が分化しているが、他の言語ではそうではない．意味の過分化により下位語が生じ、意味の未分化により多義性を持つようになる．

③範疇的空白：ある言語では語彙の品詞が他の言語では違う品詞として現れる．

④統語的空白：ある言語では単一の語彙として現れた概念が他の言語では句的形態として現れる．

⑤語用的空白：ある言語でのコミュニケーション状況と文脈による言語の使用が他の言語での社会的、文化的な相違点により異なる．

複合語内で満たされていない内項（対象）を指す「対象名詞」あるいは「結果名詞」として解釈されると説明できる.

（119）a. 対象名詞：[마주잡이]$_{Ad+V}$를 {마주}$_{Ad}$ {잡다}$_{V}$
[lit. 向かい合ってとり]$_{Ad+V}$ヲ{向かい合って}$_{Ad}$ {とる}$_{V}$
b. 結果名詞：[뻥튀기]$_{Ad+V}$가 {뻥}$_{Ad}$ {튀다}$_{V}$
[lit. ポン跳ね]$_{Ad+V}$가 {ポン}$_{Ad}$ {跳ねる}$_{V}$

なお、本稿においては対象外とした日本語の「引き出し」や韓国語の「즐겨찾기（culkye-chacki；lit. 楽しんで-探し→ブックマーク）」のような[V+V]〔動詞+動詞の名詞形〕型複合名詞においても同じく適用できることが予想される. このように、[N+V]型複合名詞のみならず、他のタイプにおいても意味解釈のメカニズムが適用できると考えられる.

一方、5. 6 で「動作主名詞」や「道具名詞」の場合は後項動詞に活動動詞（activity verb）が現れ、「道具・場所名詞」や「対象名詞」の場合は、後項動詞に位置変化（移動）を表す動詞が現れ、「結果名詞」の後項動詞には状態変化を表す達成動詞（accomplishment verb）が主に現れるということを指摘した. つまり、動詞由来複合名詞の意味は、後項動詞の意味役割と関係があるが、さらに動詞の意味とも関連性が見られる. 例えば、「動作主名詞」（日本語の例：舵取り, 韓国語の例：고기잡이[koki-capi；lit. 魚-とり→漁労, 漁師]）の後項動詞には活動動詞が現れるが、その活動は一回性の活動ではなく、何回も繰り返してすることで上達する、あるいは専門性が得られる活動である. そこで、「動作主名詞」はその活動と関連がある仕事をする人として解釈されるわけである. そして、「道具名詞」（風除け/바람막이（palam-maki；lit. 風-防ぎ→風除け）の後項動詞には活動動詞が現れるが、その活動は特定な道具を必要とするか、ある道具を使うことが前提になる活動である. そこで、その活動と関連がある道具として解釈されるわけである. 本稿では、主に動詞の種類（一項動詞, 二項動詞など）ならびに動詞の項構造や意味役割に焦点を合わせ、動詞由来複合名詞の意味解釈メカニズムを提案したため、動詞の意味の面では十分取り組むことができなかったという限界がある. 動詞の意味の面から考察することで、新たな動詞由来複合名詞の意味解釈メカニズムを見出すことができると期待される.

そして、本稿では、動作性名詞を中心に動詞由来複合名詞を考察し、動作性名詞と比較として非動作性名詞における意味解釈をも考察した. そのため、動作性名詞と同じ

後項要素を持つ非動作性名詞の例を中心に考察することになり、非動作性名詞だけに現れる後項要素やその意味にはあまり注目をしなかったという限界がある．例えば、「夕暮れ」や「川沿い」のようなそもそも動作性を帯びることができない後項要素を持つ例は本稿の意味解釈の対象には含まれていない．しかし、非動作性名詞には、「動作主名詞」「道具名詞」「道具・場所名詞」「対象名詞」「結果名詞」以外にも「時間名詞」（例：夕暮れ）や「場所名詞」（例：川沿い）なども見られる．特に、「時間名詞」（例：夜明け，夕暮れなど）はいつも後項動詞の随意項を指す意味として解釈され、「場所名詞」は後項動詞の必須項を指す意味として解釈される例（船着き）もあるが、随意項を指す意味として解釈される例（水回り）もある．したがって、今後は「時間名詞」や「場所名詞」を含めて、非動作性名詞を中心に意味解釈のメカニズムをさらに検討する必要があるだろう．意味解釈のメカニズムの[N+V]型以外の他のタイプへの適用や動詞の意味と関連した更なる分析、そして非動作性名詞を中心とした更なる検討については今後の課題にする．

参考文献

〈日本語で書かれた文献〉

石井正彦（1984）「複合動詞の成立― V+V タイプの複合名詞との比較」『日本語学』3(11), pp.81‐94, 東京: 明治書院

石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』東京: ひつじ書房

伊藤たかね ＆ 杉岡洋子（2002）『語の仕組みと語形成』東京: 研究社

李文相（2004）「韓・日両言語における音韻添加 ： サイッソリ化と連濁・促音化を中心に(小特集 言語学・言語教育の現場から)」『萩国際大学論集』6 (1), pp.1-19, 萩国際大学論集委員会

大塚望（2007）「する文の多機能性: 文法的機能」『日本語日本文学』17, pp.23-39, 創価大学日本語日本文学会

大塚望（2011）「「する」文の格構造」『創価大学日本語日本文学会』21, pp.33-48, 創価大学

大野晋（1978）『日本語の文法を考える』東京: 岩波書店

岡嶋裕子（2014）「母語での漢字使用の有無は機能動詞結合の習得に違いを生ずるか: 日本語学習者の作文における産出使用を対象に」『言語情報科学』12, pp.73-89 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会での報告） [所収: 言語学研究会(編)（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』, pp.151-279, 東京: むぎ書房]

奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8, 東京: むぎ書房 [再録: 川本茂雄 ＆国広哲弥 ＆ 林大(編)（1979）『日本の言語学 第 5 巻 意味・語彙』, pp.151-168, 東京: 大修館書店]

奥田靖雄（1968-72）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 むぎ書房 [再録: 言語学研究会(編)（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』, pp.21-149, 東京: むぎ書房]

沖久雄（1983）「複合名詞の意味と構文」『日本語学』2(12), pp.47-57, 東京: 明治書院

奥津敬一郎（1975）「複合名詞の生成文法」『国語学』101, pp.19-34 [再録: 斎藤倫明 ＆ 石井正彦(編)（1997）『語構成（日本語研究資料集）』pp.-158-175, 東京: ひつじ書房）

小野尚之（2005）『生成語彙意味論』東京: くろしお出版

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京: ひつじ書房

影山太郎（1996）『動詞意味論：言語と認識の接点』東京: くろしお出版

影山太郎（1999）『形態論と意味』東京: くろしお出版

影山太郎(編)（2001）『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店

影山太郎（2009）「外心構造における意味と形態のミスマッチ―『太っ腹』タイプの形容名詞―」由本陽子他(編)『語彙の意味と文法』pp.25-45, 東京: くろしお出版

影山太郎 ＆ 柴谷方良（1989）「モジュール文法の語形成論－「の」名詞句からの複合語形成－」久野暲 ＆ 柴谷方良(編)『日本語学の新展開』pp139-166, 東京: くろしお出版

影山太郎 ＆ 由本陽子（1997）『語形成と概念構造』東京: 研究社

神田靖子（2002）「機能動詞結合とその他動性をめぐる覚書」『同志社大学留学生別科紀要』2, pp.55-73, 同志社大学
岸本秀樹（2005）『統語構造と文法関係』東京: くろしお出版
金恩愛（2003）「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」『朝鮮学報』188, pp.1-83, 朝鮮学会
金元美（2008）『日・韓両語の語構成から見た表現様相の対照考察』韓国外国語大学院博士学位論文
金恵珍（2016a）「日本語『V+N』型複合名詞の動作性に関する研究」『日本言語文化』34, pp.109-129, 韓国日本言語文化学会
金恵珍（2016b）「韓国語「N+V」型複合名詞の動作性に関する考察―構成要素間の文法的関係を中心に―」『朝鮮語教育―理論と実践―』11, pp.48-68, 朝鮮語教育学会
金恵珍（2017）「韓国語「N+V」型複合名詞の動作性と意味の転移との関係について」『言語・地域文化研究』23, pp.127-145, 東京外国語大学院博士後期課程論叢
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』東京: ひつじ書房
小泉保 & 船城道雄 & 本田晶治 & 仁田義雄 & 塚本秀樹(編)（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
呉海蓮（2012）「複合名詞構成素としての動詞連用形」『日本文化研究』41, pp.291-305, 東アジア日本学会
崔昇浩（1994）「用言の名詞化に関する一考察」『人文科学研究』23, pp.179-196 名古屋大学大学院研究科
斎藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』東京: ひつじ書房
阪倉篤義（1957）「語構成序説」『日本文法講座・第 1 巻総論』東京: 明治書院 [再録: 斎藤倫明 & 石井正彦(偏)（1997）『語構成（日本語研究資料集）』pp.7-23, 東京: ひつじ書房]
阪倉篤義（1966）『語構成の研究』東京: 角川書店
斎賀秀夫（1957）「語構成の特質」『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』東京: 筑摩書房
佐々裕子 & 堀江薫（1998）「文および語構成における形式名詞『もの』『ところ』『こと』の相関性に関する一考察」『KLS18』pp.133-143, 関西言語学会
澤田浩子（1999）「現代日本語『－もの』の複合名詞をめぐって―モノとコトの認知の世界―」『KLS19』pp.153-163, 関西言語学会
施宛宜（2001）「動詞連用形に由来する複合語に関する考察―複合名詞を中心として―」『専修国文』68, pp.1-15, 専修大学日本語日本文学文化学会
高橋勝忠（2011）「動詞連用形の名詞化とサ変動詞「する」の関係」『英語英米文学論輯 』10, pp.15-33, 京都女子大学
田中寛（1990）「動詞連用形の構文・語彙的な機能‐日本語教育の立場から‐」『言語と文化』3, pp.35-80, 文教大学
谷口秀治（2007）「動詞的な言い方と名詞的な言い方」『大分大学国際教育センター紀要』1, pp.61‐70, 第 1 号大分大学国際教育センター(編)
玉村文郎（1975）「和語は造語力が弱いか」岩淵悦太郎 & 西尾寅弥(編)『新日本語講座 1 現代日本語の単語と文字』pp.121‐146, 京都: 汐文社 [再録: 斎藤倫明 & 石井正彦(編)（1997）『語構成（日本語研究資料集）』pp.101‐116, 東京: ひつじ書房]
玉村文郎（1988）「複合語の意味」『日本語学』7(5), pp.23-32, 東京: 明治書院

外崎淑子（2005）『日本語述語の統語構造と語形成：―意味役割の表示と状態述語、心理述語、使役構文からの提言―』東京: ひつじ書房
中川秀太（2003）「道具名詞を直接目的語にとる「する」について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』3, pp.19-28, 早稲田大学
竝木崇康（1985）『語形成（新英文法選書 2）』東京: 大修館書店
西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43, pp.60-81, 国語学会 [再録: 斎藤倫明 & 石井正彦(編)（1997）『語構成（日本語研究資料集）』pp.192 -212, 東京: ひつじ書房]
西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』東京: 明治書院
野田大志（2011）『現代日本語における複合語の意味形成：構文理論によるアプローチ』名古屋大学院博士学位論文
野間秀樹（1990）「朝鮮語の名詞分類―語彙論・文法論のために―」『朝鮮学報』135, pp.1-59, 朝鮮学会
早津恵美子（2009）「語彙と文法との関わり―カテゴリカルな意味―」『政大日本研究』6, pp.1-70, 国立政治大学日本語文学系（台湾）
益岡隆志（2008）「叙述類型論にむけて」益岡隆志(編)『叙述類型論』, pp.3-18, 東京: くろしお出版
文化庁（1990）『外国人のための基本語用例辞典第三版』東京: 大蔵省印刷局
水谷静夫(編)（1983）『朝倉日本語新 講座 3 文法と意味 1』東京: 朝倉書店
峰田祐司（1990）「日本語の複合動詞と複合名詞の意味的相違」『横浜市立大学論叢』40(3), pp.165‐219, 横浜市立大学学術研究会(編)
宮島達夫（1994）『語彙論研究』東京: むぎ書房
村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4(1), 東京: 明治書院
村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』東京: ひつじ書房
村木新次郎（2012）『日本語の品詞体系とその周辺』東京: ひつじ書房
望月圭子（1991）「日・中・英語の語形成（その 1）」『東京外国語大学論集』42, pp.29-47, 東京外国語大学
籾山洋介（2001）「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明他(編)『認知言語学論考』1, pp.29-58, 東京: ひつじ書房
籾山洋介（2006）「1-8. 認知言語学」鈴木良次(編)『言語科学の百科事典』, pp.157-177, 東京: 丸善株式会社
森田良行（2008）『動詞・形容詞・副詞の事典』東京: 東京堂出版
山下喜代（1995）「形態素と造語成分」『日本語学』14(5), pp.54-63, 東京： 明治書院
山橋幸子（2009）「転成名詞の別の見方」『札幌大学綜合論叢』27, pp.97-110, 札幌大学
湯本昭南（1977）「あわせ名詞の意味記述をめぐって」『東京外国語大学論集』27, pp.31-46 東京外国語大学
由本陽子（2009）「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」由本陽子 & 岸本秀樹（編）『語彙の意味と文法』, pp.209-229, 東京: くろしお出版
由本陽子（2010）「身体部分を表す名詞を結合した日本語の「N＋V」複合語について」宮本陽一（編）『言語文化共同研究プロジェクト 2009：自然言語への理論的アプローチ』, pp.89-98, 大阪大学言語文化研究科
由本陽子（2014）「「名詞＋動詞」型複合語が述語名詞となる条件：生成語彙論からのアプローチ」岸本秀樹 & 由本陽子（編）『複雑述語研究の現在』, pp.179-203, 東京: ひつじ書房

由本陽子（2015）「「名詞＋動詞」複合語の統語範疇と意味的カテゴリー」益岡隆志(編)『日本語研究とその可能性』, pp.80-105, 東京: 開拓社
由本陽子（2016）「日本語複合名詞の意味解釈メカニズム」『言語文化共同研究プロジェクト2015：自然言語への理論的アプローチ』, pp.79-88, 大阪大学大学院言語文化研究科
由本陽子（2021）「総合的複合語形成に関わる制約の再検討」『英文学研究』支部総合号13, pp.175-182, 日本英文学会
羅聖淑（2013）「日本語動詞の連用形―日韓対照研究―」『日本大学歯学部紀要』41, pp.37-45, 日本大学歯学部

〈韓国語で書かれた文献〉

강범모[カン・ボムモ]（1999）‘어휘 의미 정보의 구조와 표상’, “한국어 의미학” 5, pp.83-118,한국어의미학회
강범모[カン・ボムモ]（2002）‘술어 명사의 의미구조’, “언어학” 31, pp.3-30, 한국언어학회
강현화 & 원미진[カン・ヒョンファ & ウォン・ミジン]（2015）‘언어학습자를 위한 『한국어기초사전』편찬의 원리와 실제’, “민족문화연구” 67, pp.39-63, 고려대학교 민족문화연구원
高永根[コ・ヨングン]（1973）‘現代國語의 接尾辭에 대한 構造的 研究（Ⅰ）－確立基準을 中心으로－’, “서울대학교 논문집 人文社會科學篇” 18, pp.71-100, 서울대학교
고영근[コ・ヨングン]（1974）“국어 접미사의 연구”, 광문사
고재설[コ・ジェソル]（1992）‘「구두닦이」형 합성명사에 대하여’, “서강어문” 8, pp.17-46, 서강어문학회
김광해[キム・グァンヘ]（1982）‘복합명사의 신생과 어휘화과정에 대하여’, “국어국문학” 88, pp.5-29, 국어국문학회
김석득[キム・ソクトゥク]（1992）“우리말 형태론 -말본론-”, 서울: 탑출판사
김성규[キム・ソンギュ]（1987）“어휘소 설정과 음운 현상”, 서울대 석사학위논문
김완진[キム・ワンジン]（1976）“老乞大의 諺解에 대한 比較 研究”, 한국연구원
김진해[キム・ジンヘ]（1998）‘다의화 유형에 따른 합성어 의미 연구’, “경희어문학” 19, pp.269-296, 경희대국어국문학과
김진해[キム・ジンヘ]（2014）‘은유적 합성명사의 결합관계와 인지언어학적 해석', “국어학 통권” 70, pp.29-57, 국어학회
김창섭[キム・チャンソプ]（1983）‘「줄넘기」와「갈림길」型합성명사에 대하여, “국어학” 12, pp.73-99, 국어학회
김창섭[キム・チャンソプ]（1996）“국어의 단어형성과 단어구조 연구”, 태학사.
김해연[キム・ヘヨン]（2009）‘합성명사의 형성과 번역의 언어적 동기’, “담화와인지” 16（1）, pp.1-23, 담화인지언어학회
김혜진[キム・ヘジン]（2019）‘한국어 [N+V-이/음/기]형 복합명사의 의미 전이의 경향성에 대해서’, “언어” 44（4）, pp.785-806, 한국언어학회
나은미[ナ・ウンミ]（2007）‘합성어 구성 성분의 의미 결합 양상-합성명사를 중심으로-’, “한성어문학” 26, pp.19-43, 한성대한성어문학회
남기심・고영근[ナム・ギシム & コ・ヨングン]（1993；2009）“표준국어문법론（개정판 26 쇄）”, 서울: 탑출판사

마성식[マ・ソンシク](1999) ‘Ullmann 의 의미 변화 이론과 그 적용(Ⅰ) -The Principles of Semantics 를 중심으로-’, “한국어 의미학” 5, pp.27-82, 한국어의미학회
박소영[パク・ソヨン](2012) ‘「행위성명사+이다」구문의 통사론적 분석’, “생성문법연구” 22(2), pp.391-416, 한국생성문법학회
박용찬[パク・ヨンチャン](2005) “일본어 투 용어 순화 자료집”, 서울: 국립국어원
박진호[パク・ジンホ](1994) “통사적 결합관계와 논항구조”, 서울대학교 박사학위논문
배선미[ペ・ソンミ](2009) ‘다국어 어휘부의 인지언어학적 연구’, “전문연구인력지원사업 최종 연구결과보고서”, 한국연구재단(NRF) 연구성과물
서정수[ソ・ジョンス](1975) “동사「하-」의 문법”, 대구: 형설출판사
서정수[ソ・ジョンス](1994) “국어문법”, 서울: 뿌리깊은나무
소쉬르, 페르디낭 드[ソシュール, フェルディナン・ド](1910) “3 ème Cours de Linguistique Gènèrale(1910-1911) : d'après les cahiers d'Emile Constantin”(김성도 옮김[キム・ソンド(訳)](2017) “소쉬르의 마지막 강의 제 3 차 일반언어학 강의 (1910~1911) : 에밀 콩스탕탱의 노트”, 서울: 민음사)
송원용[ソン・ウォンヨン](2002) “국어 어휘부와 단어형성 체계에 대한 연구”, 서울대학교 국어국문학과 박사학위논문
송원용[ソン・ウォンヨン](2007) ‘국어의 단어형성체계 재론’, “진단학보” 104, pp.105-126, 진단학회
宋喆儀[ソン・チョルイ](1992) “國語의 派生語形成 硏究”, 파주: 태학사
시정곤[シ・ジョンゴン](1994a) ‘「해돋이」와「돈벌이」형의 단어형성’, “한국어학” 1, pp.333-363, 한국어학회
시정곤[シ・ジョンゴン](1994b) “국어의 단어형성 원리”, 고양: 국학자료원
시정곤[シ・ジョンゴン](2008) ‘국어 형태론에서 단어형성 전용요소의 설정에 대한 타당성 연구’, “한국어학” 38, pp.83-107, 한국어학회
신희삼[シン・ヒサム](2007) ‘합성어 기능에 따른 합성명사의 형성 원리’, “한국어의미학” 22, pp.141-163, 한국어의미학회
신희삼[シン・ヒサム](2008) ‘N1+N2 의 의미구조연구’, “한국어의미학” 26, pp.103-122, 한국어의미학회
沈在箕[シム・ジェギ](1980) ‘名詞化의 意味機能’, “언어”5(1), pp.79-102, 한국언어학회
안상철[アン・サンチョル](1998) “형태론”, 서울: 민음사
李基文[イ・ギムン](1972;2006) “國語史概說(新訂版 15 쇄)”, : 태학사
李基文[イ・ギムン](1991) “國語 語彙史 硏究”, 서울: 동아출판사
李翊燮[イ・イクソプ](1965) ‘國語 複合名詞의 IC 分析’, “국어국문학” 30, pp.121-129, 국어국문학회
이익섭 & 채완[イ・イクソプ & チェ・ワン](1999) “국어문법론강의”, 學硏社(2006 재판 7 쇄)
이병규[イ・ビョンギュ](2001), ‘서술성의 개념’ 남기심 편 “국어 문법의 탐구Ⅴ”, pp.513-535, 파주: 태학사
이병규[イ・ビョンギュ](2009) “한국어 술어명사문 문법”, 서울: 한국문화사

이재인[イ・ゼェイン](1991) '국어 복합명사 구성의 이해', 서울대학교 대학원 국어연구회 편 "국어학의 새로운 인식과 전개", pp.612-628, 서울: 민음사
이재인[イ・ゼェイン](1996) '국어 합성명사 형성에서의 의미론적 제약 현상', "배달말" 21, pp.75-93, 배달말학회
이희숙[イ・ヒスク](2010) '합성어에 대한 일고', "언어학연구" 16, pp.225-243, 한국중원언어학회
任洪彬[イム・ホンビン](1974) '名詞化의 意味特性에 대하여', "국어학" 2, pp.83-104, 국어학회
任洪彬[イム・ホンビン](1989) '統辭的 派生에 대하여', "어학연구" 25(1), pp.167-196, 서울대학교어학연구소
윤항진[ユン・ハンジン](2009) '경동사구문과 허사', "현대문법연구" 57, pp.107-125,현대문법학회
장원재[チャン・ウォンジェ](2009) "현대 한일 어휘와 그 형성에 관한 대조연구", 파주: 태학사
전상범[チョン・サンボム](1995) "형태론", 서울: 한신문화사
차준경[チャ・ジュンギョン](2004) '사건 명사의 의미 전이', "한국어 의미학" 15, pp.249-272, 한국어의미학회
채현식[チェ・ヒョンシク](1999) '조어론의 규칙과 표시', "형태론" 1(1), pp.25-42, 서울: 박이정
채현식[チェ・ヒョンシク](2003) "유추에 의한 복합명사 형성 연구", 태학사
채희락[チェ・ヒラク](1996) '「하-」의 특성과 경술어 구문', "어학연구" 32(3), pp.409-476, 서울대학교어학연구소
최태옥 & 안병곤[チェ・テオク & アン・ビョンゴン](2001), '동사에서 유래한 복합파생명사에 대한 일한 대조연구', "일본어교육연구" 18, pp.125-150 한국일본어교육학회
최형용[チェ・ヒョンヨン](2002) "국어 단어의 형태・통사론적 연구－통사적 결합어를 중심으로－", 서울대학교 대학원 국어국문학과 박사학위논문
최호철 & 한정한 & 오장근[チェ・ホチョル & ハン・ジョンハン & オ・ジャングン](2004), "다국어 기계번역을 위한 중간언어 모형과 방법론 연구(2) ", 고려대학교 민족문화연구원
하치근[ハ・チグン](1992) '파생법에서 어휘화한 단어의 처리 문제', "우리말연구" 2, pp.33-57, 우리말글학회
홍기선[ホン・ギソン](1996) '영어의 동사성 복합어 연구', "어학연구" 32(1), pp.43-59, 서울대학교 언어교육원
홍기선[ホン・ギソン](1999) '논항의 판별기준 : 한국어의 동사성 복합어', "인문논총" 42, pp.85-103, 서울대학교 인문대학 인문학연구소
홍기선[ホン・ギソン] (2001) '영어의 동사성 복합어 : 논항과 부가어', "언어"26(4), pp.821-843, 한국언어학회
홍재성[ホン・ジェソン](1999) '기능동사 구문 연구의 한 시각: 어휘적 접근', "인문논총" 41, pp.135-173, 서울대학교 인문대학 인문학연구소
황화상[ファン・ファサン](2010) '단어형성 기제로서의 규칙에 대하여', "국어학" 58, pp.61-91, 국어학회

〈英語で書かれた文献〉

Allen, Margaret R.（1978） *Morphological Investigations*, Doctoral dissertation, University of Connecticut

Aronoff, Mark（1976） *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge: MIT press

Baker, Mark（1985） *Incorporation :A Theory of Grammatical Function Changing*, Ph.D.dissertation, Cambridge: MIT press

Bentivogli, Luisa & Pianta, Emanuele（2000） ‘Looking for Lexical Gaps’, *Proceedings of the 9th EURALEX International Congress*

Cvilkaite, Jurgita（2006） ‘Lexical Gaps: Resolution by Functionally Complete Units of Translation’, *DARBAI ir DIENOS 45,* pp.127-142

Clark, Eve V. & Clark, Herbert H.（1979） ‘When nouns surface as verbs’, *Language 55*, pp.767-811

Di Sciullo, Anna-Maria & Williams, Edwin（1987） On the Definition of Word, Cambridge: MIT press

Fabb, Nigel（1984） *Syntactic Affixation*, Doctoral dissertation, MIT

Grimshaw, Jane & Armin Mester（1988） ‘Light Verbs and Theta-Marking’, *Linguistic Inquiry 19 (2)*, Cambridge: MIT Press

Grimshaw, Jane（1990） *Argument Structure*, Cambridge: MIT Press

Jackendoff, Ray（1983） *Semantic and Cognition*, Cambridge: MIT Press

Jackendoff, Ray（1990） *Semantic structures*, Cambridge: MIT Press

Janssen, Maarten（2004） ‘Multilingual Lexical Databases, Lexical Gaps, And SIMuLLDA’, *International Jornal of Lexicography 17 (2),* pp.137-154

Kageyama, Taro（1982） ‘Word Formation in Japanese’, *Lingua 57*, pp. 215-258

Kageyama, Taro（1985） ‘Configurationality and the Interpretation of Verbal Compounds’, *English Linguistics 2*, pp.1-20

Kageyama, Taro（1991） ‘Light Verb Constructions and the Syntax-Morphology Interface’, *Current English Linguistics in Japan.*(ed.) by Nakajima, Hague: Mouton De Gruyter

Kageyama, Taro（1992） ‘Lexical *Su-* versus Dummy *Su-*:A Reply to Miyara’, *Gengo Kenkyuu 102*, pp.165-174

Kageyama, Taro（1996） *Doosi-imiron*, Tokyo: Kuroshio Publishers

Kageyama, Taro（1997） ‘Denominal Verbs and Relative Salience in Lexical Conceptual Structure’, *Verb Semantics and Syntactic structure.* (ed.) by Kageyama, pp.45-96, Tokyo: Kuroshio Publishers

Kageyama, Taro（2001） ‘Polymorphism and Boundednsee in Event/Entity Nominalizations’, *Journal of Japanese Linguistics 17*, pp.29-57

Lakoff, George ＆ Johnson, Mark（1980） *Metaphors We Live by,* Chicago: University of Chicago Press

Lehrer, Adrienne（1970） ‘Notes on lexical gaps’, *Journal of Linguistics 6*（2）, pp.257-261

Levin, Beth ＆ Rappaport, Malka（1988） ‘Non-event *-er* Nominals: A probe into Argument Structure’, *Linguistics 26*, pp.1067-1083

Lieber, Rochelle（1983） ‘Argument Linking and Compounding in English’, *Linguistic Inquiry 14*, pp.251-286

Matsumoto, Yo（1996） ‘A Sytactic Account of Light Verb Phenomena in Japanese’, *Journal of East Asian Linguistics 5*, pp.107-149

Mithun, Marianne（1984）‘The Evolution of Noun Incorporation’, *Language 60*, pp 847-93
Paul, Hermann（1880） *Prinzipien der Sprachgeschichte*, Tübingen: Niemeyer
（English trans.（1891）: *Principles of The History of Language*.(trans.) by H.A.Strong, London: Longmans, Green and co. archive.org）
Perlmutter, David M.（1978）‘Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis’, *BLS 4*, pp.157-89
Pustejovsky, James（1995） *The Generative Lexicon*, Cambridge: MIT press
Roeper, Thomas & Siegel, Muffy E.A.（1978）‘A Lexical Transformation for Verbal Compounds’, *Linguistic Inquiry 9*, pp.199-260
Selkirk, Elisabeth O.（1982） *The Syntax of Word*s, Cambridge: MIT press
Stern, Gustaf（1964, c1931） *Meaning and Change of Meaning: with special reference to the English language*, Bloomington: Indiana University Press
Sproat, Richard（1985） *On Deriving Lexion*, Doctoral dissertation, MIT
Sugioka, Yoko（2002）‘Incorporation vs.Modification in Deverbal Compounds’, *Japanese/Korean Linguistics（CSLI）10,* pp.496-509
Ullmann, Stephen（1957） *Principles of Semantics （2nd ed.）*, Oxford: Blackwell
Ullmann, Stephen（1962）, *Semantics: An Introduction to The Science of Meaning*, Oxford: Blackwell
Vendler, Zeno（1957）‘Verbs and Times’, *The Philosophical Review 66（2）*, pp.143-160
Vendler, Zeno（1967） *Linguistics in Philosophy*, New York: Cornell University Press
Williams, Edwin（1981）‘Argument Structure and Morphology’,*The Linguistic Review 1*, pp.81-114
Yumoto, Yoko（2010）‘Variation in N-V Compound Verbs in Japanese’, *Lingua 120*, pp.2388-2404

〈Web 資料〉

韓国海洋学会(編)（2005）『海洋科学用語辞典（해양과학용어사전）』
http://terms.naver.com（最終閲覧日：2016 年 10 月 28 日）
現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版（BCCWJ）https://chunagon.ninjal.ac.jp（最終閲覧日：2022 年 9 月 22 日）
国立国語院(編)（2007）『21 世紀世宗計画コーパス
（21 세기세종계획코퍼스）』韓国観光文化部 http://www.sejong.or.kr
（最終閲覧日: 2013 年 7 月 9 日）
国立国語院(編)（1999）『標準国語大辞典（표준국어대사전）』
https://stdict.korean.go.kr（最終閲覧日: 2022 年 9 月 5 日）
国立国語院(編)（2012）『韓国語基礎辞典（한국어기초사전）』
http://krdic.korean.go.kr（最終閲覧日: 2021 年 11 月 21 日）
国立国語院(編)（2016）『ウリマルセム（우리말샘）』https://opendict.korean.go.kr（最終閲覧日: 2022 年 9 月 30 日）
小学館国語辞典編集部(編)（2012）『大辞泉第二版』松村明監修，小学館〔goo 辞書/デジタル大辞泉〕https://dictionary.goo.ne.jp/jn（最終閲覧日: 2022 年 9 月 6 日）
松下達彦（2011）『日本語を読むための語彙データベース（VDRJ）ver.1.1（研究用）重要度順語彙リスト 60894 語』

http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/database.html（最終閲覧日: 2016 年 9 月 7 日）
松村明(編)（2006）『大辞林第三版』三省堂〔weblio 辞書〕
https://www.weblio.jp/cat/dictionary/ssdjj（最終閲覧日: 2016 年 12 月 30 日）

Google Japan　http://www.google.co.jp（最終閲覧日: 2022 年 9 月 5 日）
NAVER（韓国）http://www.naver.com（最終閲覧日: 2022 年 9 月 5 日）
Yahoo! Japan　http://www.yahoo.co.jp（最終閲覧日: 2022 年 9 月 5 日）

本論文の各章と既発表論文との関係

Ⅰ 序論

第1章　新規執筆

第2章　新規執筆

Ⅱ 本論

第3章　金恵珍（2016a）「日本語『V+N』型複合名詞の動作性に関する研究」『日本言語文化』34, pp.109-129, 韓国日本言語文化学会

第4章　金恵珍（2016b）「韓国語「N+V」型複合名詞の動作性に関する考察―構成要素間の文法的関係を中心に―」『朝鮮語教育―理論と実践―』11, pp.48-68, 朝鮮語教育学会

金恵珍（2016c）「日韓「N+V」型複合名詞の語構成に関する対照研究」第67回朝鮮学会大会（2016年10月2日 天理大学）発表資料

第5章　金恵珍（2016d）「日本語「N+V」型複合名詞における意味の転移について」日本語文法学会第17回大会（2016年12月11日 神戸学院大学）発表資料

金恵珍（2017）「韓国語「N+V」型複合名詞の動作性と意味の転移との関係について」『言語・地域文化研究』23, pp.127-145, 東京外国語大学院博士後期課程論叢

김혜진[キム・ヘジン](2019)'한국어 [N+V-이/음/기]형 복합명사의 의미 전이의 경향성에 대해서(韓国語[N+V-i/m/ki]型複合名詞の意味転移の傾向性について)', "언어（言語）" 44（4）, pp.785-806, 한국언어학회（韓国言語学会）

第6章　김혜진[キム・ヘジン]（2020）'한국어 동사유래복합명사의 형성 및 의미 해석의 원리(韓国語動詞由来複合名詞の語形成及び意味解釈のメカニズム)' 2020년 12월 21~23일 제1회 2020 세계한국어대회 포스터 발표자료（2020年12月21~23日 第1回2020世界韓国語大会ポスター発表資料）

Ⅲ 結論

第7章　新規執筆

（※本論文はすべての既発表論文をもとに加筆・修正を加えたものである）

【付録 1】 韓国語[V+N]型複合名詞の例

類型	韓国語[V+N]型複合名詞(計:89 例)
[V-이(i)+N]型 (9 例)	[[V-이(i)]$_N$+N]型[162](9 例): 나들이옷, 놀이동산, 놀이마당, 놀이방, 놀이터, 놀잇감, 먹이사슬, 먹이연쇄, 멋잇감
[V-음(um)+N]型 (80 例)	[V-음(um)+N]基本型[163](22 例): 갈림길, 거름종이, 걸림돌, 구름판, 내림세, 노림수, 따옴표, 마침표, 맺음말, 묶음표, 배움터, 버팀기둥, 버팀대, 버팀목, 속임수, 알림판, 오름세, 오름폭, 올림말, 줄임표, 지름길, 차림표
	[[V-음(um)]$_N$+N]型[164](58 例): 거스름돈, 곰국, 구김살, 그림문자, 그림물감, 그림엽서, 그림일기, 그림책, 꾸밈음, 꿈결, 꿈길, 꿈나라, 꿈나무, 꿈속, 꿈자리, 낮춤말, 놀림감, 높임말, 높임법, 느낌표, 도움말, 돌림노래, 돌림병, 돌림자, 디딤돌, 뛰틀, 맞춤법, 물음표, 받침대, 받침돌, 받침소리, 볶음밥, 비빔밥, 살림방, 살림집, 싸움터, 쌈밥, 쌈장, 얼음낚시, 얼음물, 얼음판, 울음바다, 울음소리, 웃음꽃, 웃음바다, 웃음소리, 이음매, 이음줄, 잠버릇, 잠옷, 잠자리, 잠투정, 춤곡, 춤바람, 춤사위, 춤판, 튀김옷

162 [[V-이(i)]N+N]型は、前項要素が自立的な名詞として現れる類型である.
163 [V-음(um)+N]基本型は、前項要素が自立的な名詞ではない類型である.
164 [[V-음(um)]$_N$+N]型は、前項要素が自立的な名詞として現れる類型である.

【付録 2】 日本語[V+N]型複合名詞の例と出典

出典	日本語[V+N]型複合名詞の例
金(2008) (62 例)	飽き性，空き缶，空き部屋，落ち足，構い手，変わり目，切れ味，凝り性，通り魔，似顔，濡れ髪，残り物，働き者，曲がり目，迷い箸，蒸れ肉，焼け色，痩せ山，割れなべ，連れ子，当て事，急ぎ足，入れ子，置き土産，折り目，飼い犬，借り物，切り餅，差し水，授かり物，捨て身，忍び足，尋ね人，立て膝，連れ涙，作り話，つり棚，抜き荷，拾い物，持ち味，忘れ物 ，上がり口，空き殻，言い値，帰り道，書き味，考え物，死に時，剃り跡，出来秋，通り道，亡き数，乗り心地，引き時，褒め者，負け腹，焼け跡，呼び声，寄り道，読み物，別れ話，忘れ形見
文化庁(1990) (46 例)	宛名，言い訳，生き物，急ぎ足，入り口，入り用，入れ物，売り場，贈り物，落とし穴，織物，買い物，駆け足，掛け声，数え年，変わり目，考え事，効き目，着物，切れ端，下り坂，透き間，刷り物，建物，食べ物，継ぎ目，出来事，出口，泣き顔，泣き声，逃げ道，盗人，寝床，飲み物，乗り物，曲がり角，見せ物，結び目，召し上がり物，持ち主，持ち物，行先，寄り道，忘れ物，笑い顔，笑い話
田中(1990) (18 例)	食べ物，飲み物，読み物，乗り物，売り物，履き物，塗り物，織り物，仕立て物，揚げ物，焼き物，書き物，縫い物，編み物，調べ物，炊き物，片付け物，忘れ物
筆者による 追加の例 (19 例)	着物，巻き物，食い物，食み物，建物，和え物，漬け物，煮物，炒め物，冷やし物，残り物，買い物，贈り物，頂き物，もらい物，落し物，探し物，拾い物，洗い物

【付録 3】 日本語[V+N]型のアンケート調査票

皆様への研究データの収集のお願い

皆様に記入して頂いたデータは、日本語の研究のために用い、その他の目的で使用されることはありません．ご協力ありがとうございます．

※文が成立する場合は○、成立しない場合は×、微妙な場合は△にしてください．

例）

書き方をする　○	書き方する　△	書き方を書く　×	書き方の際　○

1	入れ物をする	入れ物する	入れ物に入れる	入れ物の際
2	置き土産をする	置き土産する	置き土産を置く	置きお土産の際
3	織物をする	織物する	織物を織る	織物の際
4	飼い犬をする	飼い犬する	飼い犬を飼う	飼い犬の際
5	数え年をする	数え年する	数え年を数える	数え年の際
6	着物をする	着物する	着物を着る	着物の際
7	切り餅をする	切り餅する	切り餅を切る	切り餅の際
8	下り坂をする	下り坂する	下り坂を下る	下り坂の際
9	刷り物をする	刷り物する	刷り物を刷る	刷り物の際
10	建物をする	建物する	建物を建てる	建物の際
11	尋ね人をする	尋ね人する	尋ね人を尋ねる	尋ね人の際
12	食べ物をする	食べ物する	食べ物を食べる	食べ物の際
13	つり棚をする	つり棚する	つり棚を吊る	つり棚の際
14	連れ子をする	連れ子する	連れ子を連れる	連れ子の際
15	連れ涙をする	連れ涙する	連れ涙を連れる	連れ涙の際
16	飲み物をする	飲み物する	飲み物を飲む	飲み物の際
17	乗り物をする	乗り物する	乗り物に乗る	乗り物の際
18	曲がり角をする	曲がり角する	曲がり角を曲がる	曲がり角の際
19	見せ物をする	見せ物する	見せ物を見せる	見せ物の際
20	召し上がり物をする	召し上がり物する	召し上がり物を召し上がる	召し上がり物の際
21	持ち味をする	持ち味する	持ち味を持つ	持ち味の際
22	持ち物をする	持ち物する	持ち物を持つ	持ち物の際
23	読み物をする	読み物する	読み物を読む	読み物の際
24	笑い話をする	笑い話する	笑い話を笑う	笑い話の際
25	別れ話をする	別れ話する	別れ話を別れる	別れ話の際
26	言い訳をする	言い訳する	言い訳を言う	言い訳の際
27	急ぎ足をする	急ぎ足する	急ぎ足を急ぐ	急ぎ足の際
28	頂き物をする	頂き物する	頂き物を頂く	頂き物の際
29	入れ子をする	入れ子する	入れ子を入れる	入れ子の際
30	贈り物をする	贈り物する	贈り物を贈る	贈り物の際
31	買い物をする	買い物する	買い物を買う	買い物の際
32	駆け足をする	駆け足する	駆け足を駆ける	駆け足の際
33	掛け声をする	掛け声する	掛け声を掛ける	掛け声の際

34	借り物をする	借り物する	借り物を借りる	借り物の際
35	考え事をする	考え事する	考え事を考える	考え事の際
36	差し水をする	差し水する	差し水を差す	差し水の際
37	授かり物をする	授かり物する	授かり物を授かる	授かり物の際
38	忍び足をする	忍び足する	忍び足を忍ぶ	忍び足の際
39	捨て身をする	捨て身する	捨て身を捨てる	捨て身の際
40	立て膝をする	立て膝する	立て膝を立てる	立て膝の際
41	作り話をする	作り話する	作り話を作る	作り話の際
42	拾い物をする	拾い物する	拾い物を拾う	拾い物の際
43	抜き荷をする	抜き荷する	抜き荷を抜く	抜き荷の際
44	迷い箸をする	迷い箸する	迷い箸を迷う	迷い箸の際
45	忘れ物をする	忘れ物する	忘れ物を忘れる	忘れ物の際
46	寄り道をする	寄り道する	寄り道を寄る	寄り道の際
47	売り物をする	売り物する	売り物を売る	売り物の際
48	履き物をする	履き物する	履き物を履く	履き物の際
49	巻物をする	巻物する	巻物を巻く	巻物の際
50	食い物をする	食い物する	食い物を食う	食い物の際
51	塗り物をする	塗り物する	塗り物を塗る	塗り物の際
52	仕立て物をする	仕立て物する	仕立て物を仕立てる	仕立て物の際
53	揚げ物をする	揚げ物する	揚げ物を揚げる	揚げ物の際
54	焼き物をする	焼き物する	焼き物を焼く	焼き物の際
55	和え物をする	和え物する	和え物を和える	和え物の際
56	漬け物をする	漬け物する	漬け物を漬ける	漬け物の際
57	煮物をする	煮物する	煮物を煮る	煮物の際
58	炒め物をする	炒め物する	炒め物を炒める	炒め物の際
59	冷やし物をする	冷やし物する	冷やし物を冷やす	冷やし物の際
60	残り物をする	残り物する	残り物を残す	残り物の際
61	書き物をする	書き物する	書き物を書く	書き物の際
62	縫い物をする	縫い物する	縫い物を縫う	縫い物の際
63	編み物をする	編み物する	編み物を編む	編み物の際
64	調べ物をする	調べ物する	調べ物を調べる	調べ物の際
65	炊き物をする	炊き物する	炊き物を炊く	炊き物の際
66	片付け物をする	片付け物する	片付け物を片付ける	片付け物の際
67	もらい物をする	もらい物する	もらい物をもらう	もらい物の際
68	落し物をする	落し物する	落し物を落とす	落し物の際
69	探し物をする	探し物する	探し物を探す	探し物の際
70	洗い物をする	洗い物する	洗い物を洗う	洗い物の際

＜回答者情報＞

性別	年齢	出身

ご協力いただき、誠にありがとうございました.

【付録 4】 日本語[V+N]型のアンケート調査結果

VN	VN をする	VN する	VN を V	VN の際	テスト結果	判断
入れ物	○2,△4,×24	○1,△3,×26	○16,△10,×4	△2,△5,×23	××○×	非動作性
置き土産	○29,△1,×0	○9,△14,×7	○9,△11,×10	○7,△6,×17	○△△×	準動作性
織物	○27,△3,×0	○16,△8,×6	○25,△3,×2	○13,△6,×11	○○○○	準動作性
飼い犬	○2,△1,×27	○1,△2,×27	○15,△9,×6	○6,△2,×22	××○×	非動作性
数え年	○2,△3,×25	○0,△5,×25	○12,△9,×9	○9,△2,×19	××○×	非動作性
着物	○1,△3,×26	○1,△2,×27	○28,△0,×2	○9,△4,×17	××○×	非動作性
切り餅	○2,△5,×23	○1,△5,×24	○21,△4,×5	○4,△4,×22	××○×	非動作性
下り坂	○0,△2,×28	○0,△3,×27	○27,△0,×3	○10,△4,×16	××○×	非動作性
刷り物	○17,△4,×9	○4,△7,×19	○18,△8,×4	○9,△7,×14	○×○×	準動作性
建物	○1,△1,×28	○0,△2,×28	○29,△0,×1	○3,△3,×24	××○×	非動作性
尋ね人	○7,△7,×16	○2,△7,×21	○17,△5,×8	○4,△3,×23	××○×	非動作性
食べ物	○0,△3,×27	○0,△3,×27	○29,△0,×1	○6,△1,×23	××○×	非動作性
つり棚	○3,△2,×25	○2,△2,×26	○23,△3,×4	○3,△3,×24	××○×	非動作性
連れ子	○4,△8,×18	○4,△4,×22	○16,△6,×8	○5,△5,×20	××○×	非動作性
連れ涙	○7,△3,×20	○4,△5,×21	○1,△5,×24	○6,△4,×20	××××	準動作性
飲み物	○1,△3,×26	○0,△4,×26	○30,△0,×0	○8,△3,×19	××○×	非動作性
乗り物	○1,△5,×24	○0,△3,×27	○30,△0,×0	○8,△4,×18	××○×	非動作性
曲がり角	○0,△4,×26	○0,△3,×27	○30,△0,×0	○14,△4,×12	××○○	非動作性
見せ物	○24,△4,×2	○9,△7,×14	○21,△6,×3	○15,△5,×10	○×○○	準動作性
召し上がり物	○1,△4,×25	○0,△3,×27	○10,△10,×10	○5,△6,×19	××△×	非動作性
持ち味	○0,△3,×27	○0,△2,×28	○12,△7,×11	○2,△1,×27	××○×	非動作性
持ち物	○2,△4,×24	○0,△3,×27	○25,△3,×2	○8,△2,×20	××○×	非動作性
読み物	○18,△5,×7	○10,△9,×11	○28,△1,×1	○14,△4,×12	○×○○	準動作性
笑い話	○30,△0,×0	○11,△11,×8	○7,△9,×14	○19,△6,×5	○○×○	動作性
別れ話	○30,△0,×0	○13,△9,×8	○0,△0,×30	○23,△2,×5	○○×○	動作性
言い訳	○30,△0,×0	○23,△4,×3	○25,△3,×2	○20,△5,×5	○○○○	準動作性
急ぎ足	○17,△8,×5	○12,△8,×10	○1,△3,×26	○14,△6,×10	○○×○	動作性
頂き物	○15,△7,×8	○9,△7,×14	○18,△7,×5	○11,△7,×12	○×○×	準動作性
入れ子	○9,△8,×13	○7,△9,×14	○7,△9,×14	○2,△9,×19	××××	準動作性
贈り物	○30,△0,×0	○28,△1,×1	○28,△1,×1	○18,△5,×7	○○○○	準動作性
買い物	○30,△0,×0	○24,△1,×5	○3,△4,×23	○27,△2,×1	○○×○	動作性
駆け足	○28,△2,×0	○3,△2,×25	○3,△2,×25	○18,△5,×7	○××○	準動作性
掛け声	○13,△10,×7	○9,△6,×15	○26,△1,×3	○16,△8,×6	○×○○	準動作性
借り物	○25,△3,×2	○15,△8,×7	○9,△9,×12	○11,△9,×10	○○×○	動作性

考え事	○30,△0,×0	○18,△7,×5	○2,△6,×22	○18,△6,×6	○○×○	動作性
差し水	○24,△2,×4	○12,△10,×8	○16,△5,×9	○12,△7,×11	○○○○	準動作性
授かり物	○16,△4,×10	○8,△8,×14	○16,△8,×6	○11,△5,×14	○×○×	準動作性
忍び足	○27,△1,×2	○13,△9,×8	○1,△1,×28	○16,△5,×9	○○×○	動作性
捨て身	○14,△4,×12	○11,△6,×13	○1,△1,×28	○15,△4,×11	○××○	準動作性
立て膝	○25,△2,×3	○16,△7,×7	○13,△6,×11	○9,△9,×12	○○○×	準動作性
作り話	○30,△0,×0	○18,△6,×6	○16,△6,×8	○14,△6,×10	○○○○	準動作性
拾い物	○28,△0,×2	○15,△8,×7	○11,△8,×11	○13,△4,×13	○○△△	動作性
抜き荷	○17,△6,×7	○11,△7,×12	○2,△4,×24	○12,△6,×12	○××△	準動作性
迷い箸	○28,△2,×0	○11,△12,×7	○1,△3,×26	○9,△11,×10	○○×△	動作性
忘れ物	○30,△0,×0	○26,△1,×3	○6,△5,×19	○11,△8,×11	○○×△	動作性
寄り道	○30,△0,×0	○26,△1,×3	○2,△1,×27	○22,△5,×3	○○×○	動作性
売り物	○10,△4,×16	○3,△6,×21	○22,△6,×2	○8,△3,×19	××○×	非動作性
履き物	○4,△6,×20	○2,△2,×26	○26,△3,×1	○9,△2,×19	××○×	非動作性
巻物	○3,△6,×21	○4,△4,×22	○28,△1,×1	○7,△2,×21	××○×	非動作性
食い物	○0,△4,×26	○0,△4,×26	○25,△3,×2	○4,△2,×24	××○×	非動作性
塗り物	○17,△6,×7	○6,△9,×15	○15,△8,×7	○10,△9,×11	○×○×	準動作性
仕立て物	○18,△5,×7	○6,△5,×19	○15,△7,×8	○14,△4,×12	○×○○	準動作性
揚げ物	○25,△2,×3	○12,△8,×10	○24,△6,×0	○24,△2,×4	○○○○	準動作性
焼き物	○20,△4,×6	○8,△10,×12	○24,△4,×2	○16,△7,×7	○×○○	準動作性
和え物	○24,△4,×2	○6,△12,×12	○27,△3,×0	○15,△7,×8	○×○○	準動作性
漬け物	○21,△6,×3	○10,△7,×13	○28,△1,×1	○18,△6,×6	○×○○	準動作性
煮物	○26,△1,×3	○10,△9,×11	○23,△5,×2	○22,△2,×6	○○○○	準動作性
炒め物	○29,△1,×0	○13,△7,×10	○22,△6,×2	○21,△4,×5	○○○○	準動作性
冷やし物	○7,△8,×15	○3,△8,×19	○6,△11,×13	○7,△8,×15	××××	準動作性
残り物	○1,△3,×26	○2,△4,×24	○9,△7,×14	○9,△3,×18	××××	準動作性
書き物	○24,△4,×2	○12,△8,×10	○17,△8,×5	○19,△7,×4	○○○○	準動作性
縫い物	○27,△2,×1	○14,△7,×9	○20,△7,×3	○21,△5,×4	○○○○	準動作性
編み物	○28,△1,×1	○14,△7,×9	○25,△3,×2	○23,△4,×3	○○○○	準動作性
調べ物	○27,△2,×1	○16,△6,×8	○11,△10,×9	○23,△3,×4	○○○○	準動作性
炊き物	○15,△4,×11	○6,△11,×13	○9,△7,×14	○12,△7,×11	○××○	準動作性
片付け物	○12,△3,×15	○7,△4,×19	○9,△5,×16	○11,△6,×13	××××	準動作性
もらい物	○21,△3,×6	○11,△7,×12	○9,△10,×11	○13,△6,×11	○××○	準動作性
落し物	○25,△2,×3	○19,△2,×9	○7,△8,×15	○12,△7,×11	○○×○	動作性
探し物	○27,△2,×1	○18,△3,×9	○17,△9,×4	○17,△4,×9	○○○○	準動作性
洗い物	○28,△1,×1	○20,△4,×6	○21,△5,×4	○23,△3,×4	○○○○	準動作性

【付録 5】[N+V]型非動作性名詞の意味分類

① 日本語[N+V]型非動作性名詞の意味分類（計 43 例）

分類	例
動作主名詞 （12 例）	金持ち，嘘吐き，顔触れ，絵描き，気違い，物狂い，子持ち，船乗り，酒好き，跡取り，左利き，右利き
道具名詞 （6 例）	物差し，手拭い，剃刀，湯呑み，目覚まし，金切り
道具・場所名詞 （5 例）	物置，腰掛け，背もたれ，肘掛け，物干し
対象名詞 （9 例）	下着，手持ち，手取り，下敷き，手付け，肌着，首飾り，手提げ，目障り
結果名詞 （1 0 例）	缶詰め，後書き，梅干し，たこ焼き，紙切れ，前書き，石造り，卵焼き，紋付き，お好み焼き

② 韓国語[N+V]型非動作性名詞の意味分類（計 50 例）

分類	例
動作主名詞 （12 例）	겨우살이，말더듬이，오른손잡이，왼손잡이，응석받이，젖먹이，한해살이，안경잡이，총잡이，칼잡이，길잡이，해바라기
道具名詞 （11 例）	간막이/칸막이，등긁이，등받이，먼지떨이，물받이，손톱깎이，연필깎이，턱받이，책받침，쓰레받기
道具・場所名詞 （9 例）	바늘꽂이，발걸이，수건걸이，연필꽂이，옷걸이，재떨이/재털이，책꽂이，팔걸이
対象名詞 （6 例）	귀걸이，목걸이，반닫이，벽걸이，코걸이，손잡이
結果名詞 （12 例）	겉절이，계란말이，떡볶이，꼬치구이，감자튀김，김치볶음，병조림，새우튀김，장조림，제육볶음，초무침，통조림

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご指導やご支援を頂きました.

まず神様に栄光を捧げます. 私が恐れて心配するたびに、「恐れるな. 私はあなたと共にいる. 」(イザヤ書 41:10)とおっしゃり、「見よ. 私はあなたと共にあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう. 私は、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない. 」(創世記 28:15)という御言葉どおり、私の思いもよらなかった道を備えてくださいました. 私を日本の地に送って約束を果たすまで誠実に導いてくださった神様に一番先に感謝申し上げます.

次に長い留学生活の間、心の支えになって頂いた私の指導教員である南潤珍先生に感謝いたします. 私の師匠であり、人生の先輩として尊敬する先生に出会えたことは私にとって一番の幸運です. 時には厳しいご助言で私をさらに奮い立たせる一方、いつも暖かい慰めと激励の言葉をかけてくださいました. すべて先生のご指導のお陰で諦めずに最後まで博士論文を書き上げることができました. 誠にありがとうございます. 副指導教員であり、私の論文を常にご丁寧にチャックして頂いた五十嵐孔一先生にも感謝の意を表します. 最初の博士論文のアウトライン段階でも時間を作って一つ一つご指摘頂きまして感動いたしました. 私が見逃している部分まで丁寧にご指導頂き、心より感謝申し上げます. 同じく副指導教員である風間伸次郎先生にも感謝いたします. 常に楽しくて興味深いご講義を頂きまして、先生の授業が大好きでした. 先生のお陰で様々な言語研究に触れることができまして大変勉強になりました. 何より副指導教員として博士論文に関するご指導を賜りましたことを大変光栄に存じます. 細かいところまでご丁寧にお時間をかけてコメントをしてくださり、誠にありがとうございました.

そして、元副指導教員の早津恵美子先生にも感謝申し上げます. 先生のご講義を通じて日本語学について多くのことを学び、博士論文に関する多くのアイディアが得られました. さらに、副指導教員として私の博士論文について多くのご指導を賜り、論文執筆に大変参考になりました. 審査委員としてもご参加頂き、最後まで惜しみないご指導を賜りましたことを大変光栄に存じます. 研究生時代からお世話になった趙義成先生にも感謝いたします. 先生のお陰で東京外国語大学での生活にすぐ慣れることができ、博士課程まで無事終えることができました. 先生が以前、私の副指導教員だった際には、論文執筆の初期段階で多くのご助言を頂くことができました. 最後は審査委員としてもご参加頂き大変嬉しく感じました. 元副指導教員の伊藤英人先生にも感謝の意を表します. 博士論文の最初のアウトラインの段階で色々ご助言を

頂き、私の研究テーマに対して積極的に後押しし、応援してくださったお陰で、この研究に邁進することができました．心から感謝申し上げます．

他にも、東京外国語大学の朝鮮語共同ゼミを通じて多くの発表の機会が得られ、多くの学友の方々に私の論文に対するコメントを頂くことができました．この場を借りてお礼申し上げます．特に、心強い博士後期課程の同期に感謝いたします．一緒に勉強会もしながら、博士論文のテーマに対して多くのコメントや日本語に対する諮問を求めることができました．たくさんの質問で度々面倒をかけましたが、いつも快く関心を持って答えて頂いてとても助かりました．また、日本語について質問するたびに、常に快くご協力頂いた日本語母語話者の方々にも感謝の意を表します．手強い質問に一緒に悩んで、考えて頂いたので、博論の執筆にあたって大変助かりました．この他、学会発表での質疑応答や投稿論文への査読、日本語添削などを通して多くの方々から貴重なご助言を賜りました．個別にお名前を書くことはできませんが、ご支援を頂いたすべての方々に感謝申し上げます．

最後に、本論文に最大の貢献をした私の家族に感謝します．出産と育児、さらに 2 番目の子の妊娠で博士論文の執筆に集中することが難しかったのですが、私の父と母が全面的に 1 番目の子をケアしてくれたお陰で、何とか博論執筆に集中することができました．義父と義母も経済面や精神面から支えてくれて、常に寛大な心で応援してくれました．そして、夫と可愛い息子にも支えられ、協力してもらったお陰で、本論文を完成することができました．本当に家族のご支援がなければ、本論文を執筆することさえできなかったでしょう．そういう意味で私の家族が、私の博士論文における最大の貢献者と言えます．愛する家族に心から感謝しています．